宮城県文化財調査報告書第 162 集

山王遺跡八幡地区の調査

－県道泉塩釜線関連調査報告書Ⅰ－

平 成 6 年 3 月

宮 城 県 教 育 委 員 会
宮 城 県 土 木 部

序　　文

近年、各自治体が歴史と風土に根ざした地域の活性化を推進するために、郷土にある文化財を再認識し、それを地域つくりの拠点として整備し活用していこうといった考え方を持つところが多くなってきております。

宮城県としても本間知事の提唱により平成2年度から「われらみやぎの東北学おこし事業」を実施するなど、国際化の推進や産業経済の発展の基盤となる歴史と風土に根ざした東北の「地域らしさ」の確立に努め、21世紀に向けた新たな県土づくりに取り組んでいるところであります。

一方、近年の本県における各種開発事業の活発化には目を見張るものがあります。道路建設や圃場整備など生活関連事業をはじめ、ゴルフ場などの大規模なレジャー施設や工場団地・住宅団地の進出が著しく、これらの開発によって埋蔵文化財が破壊の危機にさらされる場合が多くなってきています。

改めて申すまでもなく、埋蔵文化財は文献などに記録されていない地域の歴史を即物的に解明することが出来る貴重な歴史資料であるばかりでなく、その地域に住んでいる人々にとって最も親しみやすく、精神的なよすとなるものであります。まさに「東北学」を考える上での最も基本となる資料と言えます。

しかし、埋蔵文化財は土地との関連で保存されてきたものであるため、各種開発事業によって絶えず破壊・消滅のおそれにさらされております。当教育委員会としては開発関係機関等との協議を通してこのような貴重な文化財を保存し、後世に伝えることに努めているところであります。

本書は開発関係機関等との協議・調整に基づき平成5年度に当教育委員会が行った発掘調査の成果を収録したものであります。これらの成果が地域の歴史的解明と文化財保護思想の高揚のため役立てていただければ幸いです。

最後に、協議にあたり各遺跡の保護調整に理解を示され、調査にあたっても多大なご協力・ご支援をいただきました関係機関各位、および発掘作業にあたられた皆様に深く感謝申し上げる次第です。

平成6年3月

宮城県教育委員会教育長　鈴　鴨　清　美

例　　言

1、本書は県道泉・塩釜線の道路改良事業に伴う山王遺跡の平成4・5年度の発掘調査報告書である。

2、調査は宮城県教育委員会が主体となり、宮城県教育庁文化財保護課が担当した。
　なお、本調査で検出したＳＤ2050河川跡については、来年度以降に報告書を刊行する予定である。

3、本書における土色についての記述には『新版標準土色帖』(小山・竹原：1973)を使用した。

4、本書の第1図は、多賀城市都市計画図(1：5000)を複製して使用した。

5、発掘調査の測量は、山王遺跡八幡地区内の国家座標X=－188、888.000、Y=－13、230.000を原点とした東西・南北基準線をもとに3m方眼を設定して行った。

6、発掘調査および整理・報告書の作成に際しては次の方々および機関から指導、助言を賜った(以下敬称略)。

今泉隆雄、太田昭夫、岡田茂弘、岡村道雄、黒崎直、工楽善通、酒井秀弥、佐川正敏、進藤秋輝、鈴木拓也、須藤隆、芹沢長助、高野芳宏、千葉孝弥、辻誠一郎、坪井清足、手塚均、楢崎彰一、西中川駿、丹羽茂、平川南、真由悟、柳沼賢治、山田晃弘、東北歴史資料館、宮城県多賀城跡調査研究所

7、河川跡出土の竹製品の取り上げは、東北歴史資料館保存科学科の手塚均氏の御協力を頂いた。

8、建物跡の柱間寸法で様痕跡が不明な場合は、柱位置を柱穴の中央に想定し、数値は概数で示すことにした。

9、竪穴住居跡の方向は、4隅あるいは2隅から中軸線を求めて算出した

10、本書の整理、遺物・遺構の実測・トレースは、後藤秀一・村田晃一・佐藤憲章・吾妻俊典・金子勇一・太田肇・吉野武・笠原俊哉・柬理浩明・佐久間広恵が行った。

10、本書の執筆は、調査担当者との協議の後に以下のような分担で行い、後藤秀一・村田晃が編集した。

第Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ章－1・第Ⅳ章……後藤秀一

第Ⅲ章－2・3……・柬理浩明

第Ⅲ章－3の⑦……菅原弘樹

　なお、漆紙文書については吉野武が担当した。

11、発掘調査の記録や整理した資料・出土遺物は宮城県教育委員会が保管している。

目　　次

第Ⅰ章：はじめに 1

1、遺跡の位置と環境 1
2、調査の経過 2

第Ⅱ章：基本層序 6

第Ⅲ章：発見された遺構と遺物 15

1、Ⅰ区で発見した遺構と遺物 15
2、Ⅱ区で発見した遺構と遺物 57
3、Ⅲ・Ⅳ区で発見した遺構と遺物 109

第Ⅳ章：考察 141

1、遺構期の設定と概要 141
2、道路跡と地割り、区画施設、漆紙文書ついて 155

調 査 要 項

遺 跡 名：山王遺跡（宮城県遺跡登録番号18013）
遺跡記号：ＦＩ
所 在 地：宮城県多賀城市南宮字八幡
発掘面積：約5000ｍ^2
調査期間：平成4年4月6日～12月24日、平成5年4月7日～12月24日
調査担当：宮城県教育庁文化財保護課
調 査 員：後藤秀一・高橋栄一・金子勇一・東理浩明（平成4年度）
後藤秀一・菊地逸夫・菅原弘樹・佐藤憲幸・三好秀樹・
金子勇一・窪田　忍・東理浩明（平成5年度）

挿　図　目　次

第1図　遺跡の位置と周辺の遺跡 .. 3・4
第2図　調査区配置図・基本層
　序柱状図 6
第3図　第4層出土の遺物 7
第4図　第6層出土遺物（1） 8
第5図　第6層出土遺物（2） 9
第6図　第6層出土遺物（3） 10
第7図　第6層出土遺物（4） 11
第8図　第6層出土遺物（5） 12
第9図　Ⅰ区遺構配置図 ..... 13・14
第10図　ＳＩ2210住居跡 16
第11図　ＳＩ2210住居跡出土遺物 ... 17
第12図　ＳＩ2211住居跡 18
第13図　ＳＩ2211住居跡出土遺物 ... 19
第14図　ＳＩ2216住居跡 20
第15図　ＳＩ2216住居跡出土遺物 21
第16図　ＳＩ2217住居跡 21
第17図　ＳＩ2217住居跡出土遺物 ... 22
第18図　ＳＩ2225住居跡 22
第19図　ＳＩ2225住居跡出土遺物 ... 23
第20図　ＳＩ2226住居跡 24
第21図　ＳＩ2226住居跡出土遺物 ... 25
第22図　ＳＩ2246住居跡 26
第23図　ＳＩ2246住居跡出土遺物（1）27
第24図　ＳＩ2246住居跡出土遺物（2）28
第25図　ＳＩ2247住居跡 29
第26図　ＳＩ2247住居跡出土遺物 ... 30
第27図　Ⅰ区東半部の検出遺物 . 31・32
第28図　ＳＩ2315住居跡 35
第29図　ＳＢ2280柱穴断面図 36
第30図　ＳＢ2281柱穴断面図 37
第31図　ＳＢ2355柱穴断面図 38
第32図　ＳＢ2356柱穴断面図 38
第33図　ＳＢ2358柱穴断面図 38
第34図　ＳＢ2360柱穴断面図 40
第35図　ＳＢ2361柱穴断面図 40
第36図　ＳＢ2280・2359・2364建物跡
　出土遺物 41
第37図　ＳＡ2290塀跡断面図 42
第38図　ＳＡ2369塀跡断面図 43
第39図　Ⅰ区土壙断面図（1） 44
第40図　ＳＫ2212土壙出土遺物 45
第41図　ＳＫ2214土壙出土遺物 47
第42図　ＳＫ2213・2218・2219・2248・
　　2250土壙出土遺物 49
第43図　ＳＫ2240・2260・2306土壙
　出土遺物 50
第44図　Ⅰ区土壙断面図（2） 51
第45図　ＳＫ2302・2330・2342・2368
　土壙出土遺物 52
第46図　Ⅰ区溝断面図 54
第47図　ＳＤ2206・2220・2230・2233
　　溝出土遺物 55
第48図　ＳＤ2206・2208・2229・2230
　溝出土遺物 56
第49図　ＳＩ2044住居跡 58
第50図　ＳＩ2044住居跡出土遺物 58
第51図　Ⅱ区遺構配置図 .....59・60
第52図　ＳＩ2049住居跡 61

第53図　ＳＩ2049住居跡出土遺物 ... 62
第54図　ＳＩ2023住居跡 63
第55図　ＳＩ2034住居跡出土遺物 ... 65
第56図　ＳＢ2071柱穴断面図 68
第57図　Ⅱ区東半部の検出遺構 ..69・70
第58図　ＳＢ2072柱穴断面図 71
第59図　ＳＢ2102柱穴断面図 71
第60図　ＳＢ2108柱穴断面図 72
第61図　ＳＢ2106柱穴断面図 72
第62図　ＳＢ2103・2107柱穴断面図
..... 73・74
第63図　ＳＢ2103・2107柱穴断面図 . 75
第64図　ＳＢ2111柱穴断面図 75
第65図　ＳＢ2109・2070柱穴断面図 ..76
第66図　Ⅱ区西半部の検出遺構 . 77・78
第67図　ＳＢ2112柱穴断面図 79
第68図　ＳＢ2036柱穴断面図 79
第69図　ＳＢ2037柱穴断面図 79
第70図　ＳＢ2056柱穴断面図 80
第71図　ＳＤ2124溝、ＳＡ2089・2092・
2096塀跡断面図 81
第72図　ＳＤ2124溝出土遺物（1） .. 82
第73図　ＳＤ2124溝出土遺物（2） ...83
第74図　ＳＤ2124溝出土遺物（3） ...84
第75図　ＳＸ750道路跡断面図 84
第76図　ＳＸ750道路跡側溝出土遺物　85
第77図　ＳＥ2017井戸跡 86
第78図　ＳＥ2017井戸跡出土遺物（1）87
第79図　ＳＥ2017井戸跡出土遺物（2）88
第80図　ＳＥ2043井戸跡 90
第81図　ＳＥ2043井戸跡出土遺物（1）90
第82図　ＳＥ2043井戸跡出土遺物（2）91
第83図　ＳＥ2008井戸跡 92
第84図　ＳＥ2009井戸跡 93
第85図　ＳＥ2009井戸跡出土遺物 93
第86図　Ⅱ区土壙断面図（1） 95
第87図　ＳＫ2010土壙出土遺物（1） . 96
第88図　ＳＫ2010土壙出土遺物（2） . 97
第89図　ＳＫ2058土壙出土遺物 99
第90図　Ⅱ区土壙断面図（2） 100
第91図　ＳＫ2042・2045・2116
土壙出土遺物 101
第92図　ＳＫ2038・2039・2047・2063・2120・
土壙出土遺物 102
第93図　ＳＫ2016・2048・2066・2073・2082
土壙出土遺物 103
第94図　Ⅱ区溝断面図 105
第95図　Ⅱ区溝出土遺物 105
第96図　Ⅲ・Ⅳ区東半部の検出遺構
..... 107・108
第97図　Ⅲ区東端部検出遺構 110
第98図　ＳＩ2523住居跡 111
第99図　ＳＢ2630柱穴断面図 112
第100図　ＳＢ2603建物跡・柱穴断面図113
第101図　ＳＢ2629建物跡・柱穴断面図114
第102図　ＳＡ2521塀跡断面図 115
第103図　ＳＤ2561溝・ＳＡ2564
塀跡断面図 ·····116
第104図　ＳＤ2524溝・ＳＡ2547
塀跡断面図 116
第105図　Ⅲ・Ⅳ区中央部の検出遺構
.....117・118
第106図　ＳＸ2650道路跡 120
第107図　ＳＸ2650・2651道路跡断面図121
第108図　ＳＸ2650・2651道路跡・
側溝出土遺物 122

第109図　ＳＸ2650・2651・2652
道路跡側溝出土遺物 123
第110図　ＳＸ2652道路跡断面図 ... 124
第111図　Ⅲ区土壙断面図 126
第112図　ＳＫ2502・2508・2530・2536・
2573土壙出土遺物 127
第113図　ＳＫ2581・2590土壙出土遺物 .
.....128
第114図　Ⅲ・Ⅳ西半部の検出遺構
..... 131・132
第115図　Ⅲ・Ⅳ区溝断面図..... 133
第116図　ＳＤ2525・2539・2541・2616
溝出土遺物 135
第117図　ＳＤ2563溝出土遺物..... 136
第118図　ＳＤ2534・2563・2634・2641溝出
土遺物 137
第119図　ＳＸ2565ウマ検出遺構.... 139
第120図　八幡地区検出遺構全体図
..... 153・154

表　目　次

第1表　ＳＸ2650南北道路跡・ＳＸ2651東西
道路跡計測表 121
第2表　ウマ計測表 139

写　真　図　版　目　次

図版1　遺跡遠景、Ⅰ区全景 169
図版2　Ⅱ区全景、Ⅲ区東半部全景 . 170
図版3　Ⅲ区・Ⅳ区全景、ＳＤ2050断面
..... 171
図版4　Ⅰ区ＳⅠ2210・2211・2216住居跡
..... 172
図版5　Ⅰ区ＳⅠ2226住居跡 173
図版6　Ⅰ区ＳⅠ2246住居跡 174
図版7　Ⅰ～Ⅲ区　建物跡 175
図版8　Ⅱ区ＳＥ2008・2009井戸など 176
図版9　Ⅱ区ＳＥ2017・2043井戸 ... 177
図版10　Ⅱ区ＳＸ750・Ⅲ区ＳＸ2650・
2652道路跡 178
図版11　Ⅳ区ＳＸ2650道路東側溝、Ⅰ区
ＳＡ2290塀跡断面 179
図版12　Ⅱ区ＳＡ2089・2092・2096塀跡
.....180
図版13　Ⅲ区ＳＡ2521・2564塀跡、ＳＡ
2521塀跡断面 181
図版14　Ⅰ～Ⅲ区ＳＤ2208・2124・2563区
画溝 182
図版15　Ⅰ～Ⅲ区ＳＤ2525、ＳＫ2214・
2058
遺物出土状況 183
図版16　Ⅰ区ＳＫ2212、Ⅲ区ＳＫ2530・
2581、ＳＸ2665遺物出土状況 184
図版17　出土遺物　Ⅰ区住居跡出土土器
.....185
図版18　出土遺物　Ⅰ区住居跡・
土壙出土土器 186

図版19　出土遺物　Ⅰ区土壙・溝、Ⅱ区住居跡出土土器 187
図版20　出土遺物　Ⅱ区井戸・土壙・溝出土土器 188
図版21　出土遺物　Ⅱ区土壙・溝、Ⅲ区道路側溝、Ⅲ区・Ⅳ区溝出土土器 .. 189
図版22　出土遺物　Ⅲ・Ⅳ区溝出土土器 190
図版23　出土遺物　Ⅲ・Ⅳ溝出土土器191
図版24　出土遺物　Ⅲ・Ⅳ区ＳＤ2563出土土器、Ⅱ区ＳＥ2009・2043・ＳＫ2073出土瓦 192
図版25　出土遺物　墨書土器・刻印瓦193
図版26　出土遺物　漆紙文書・土製品他 194
図版27　出土遺物　土製品・土製カマド 195
図版28　出土遺物　硯・鍵・古銭・鉄製品 196
図版29　出土遺物　木製品 197
図版30　出土遺物　木製品 198
図版31　出土遺物　第6層出土の弥生土器、第4層出土の土師器 199
図版32　出土遺物　第6層出土の弥生土器、石器、各層出土の石器 200

第Ⅰ章：はじめに

1、遺跡の位置と環境

山王遺跡は、宮城県多賀城市南宮･山王に所在し、弥生時代から近世までの長期間断続的に営まれた遺跡である。多賀城市は、仙台市街地から北東へ約10kmの仙台平野の北東端に位置し、北部を東の塩釜市方面から延びる標高50mほどの松島丘陵が占め、一方南半部は広大な仙台平野から続く沖積地である。この松島丘陵の西端部には、北から仙台平野を一望するかのように、国の特別史跡である多賀城跡が立地しており、本遺跡はこの多賀城跡の南西に隣接する沖積地に位置している(第1図)。

遺跡は、遺跡の南側を西から東に流れる七北田川や砂押川の形成した自然堤防上に立地していると考えられており、東西約2km、南北1kmほどの広大な範囲を占める。西半部は、東西に走る県道泉塩釜線およびその南側の東北本線に沿って展開している現在の南宮･山王の集落とほぼ重複するように広がり、また東半部は利府町に源を発し勿来川と遺跡の北東端で合流して南東に流れる砂押川に沿うかのように南側へ張り出している。

現在遺跡の周辺一帯は、標高4m前後の水田が広がり地形的に見て変化の乏しい景観を呈している。しかし、調査の結果、これまで地山と考えてた堆積層の下層で弥生時代と古墳時代の包含層を新たに確認し、またその後の古墳時代には本地区を南北に縦断し南側で西へ曲がる河川跡も発見するなど、本地区が弥生時代以降に複雑な微地形の変遷を経て、およそ現在の地形に近いものになったのが奈良･平安時代頃である事が判明した。

遺跡の周辺には、多賀城跡周辺ということで、本遺跡の北側の中谷地地区を除き遺跡が全面に広がっている。本遺跡の東側、すなわち多賀城の南前面の沖積地一帯には、市川橋遺跡と高崎遺跡が、また西側には新田遺跡がある。また沖積地の中の独立した低い丘陵上には、規模の大きな建物跡が発見されている館前遺跡・大臣宮遺跡があり、特に館前遺跡では四面痕を持つ建物跡を中心に6棟の建物跡が計画的に配置されているなど、両遺跡とも国司クラスの官人の館跡と推定されている。

最近の調査の結果、これらの遺跡の中で本遺跡を含めた新田･市川橋遺跡では、建物跡や竪穴住居跡といった多数の奈良･平安時代の遺構以外に、多賀城を中心にした南北･東西方向の道路跡が発見されている。特に本遺跡の多賀前･東町浦･千刈田地区では、路幅約12mの東西大路とそれに面した国司クラスの館跡が、また市川橋遺跡では多賀城の外郭南門から南に続く幅約23mの道路跡(南北大路)が確認されるなど、多賀城周辺の様子が次第に明らかになりつつある。

この他本遺跡の東約2kmの高崎の丘陵上には、多賀城跡とともに建立された多賀城廃

寺が立地している。この多賀城廃寺は、九州大宰府の観世音寺と同様な伽藍配置をとっており、また距離は離れるが、東西大路に面した山王遺跡東町浦地区から出土した土器に「観音寺」といった墨書が見られることから寺名を観音寺と推定されるようになってきている。また多賀城跡に関連するものとして、多賀城の外郭南門の位置する丘陵に、古来歌枕の壷の碑とみられている、日本三古碑の一つである「多賀城碑」がある。

これまで見てきたように、本遺跡周辺では多賀城に関連する遺跡が注目されてきたが、本遺跡をはじめとして、新田遺跡、市川橋遺跡では竪穴住居跡をはじめとして古墳時代の遺構も多く発見されている。また高崎遺跡と市川橋遺跡の間の沖積地の中の独立した低い丘陵上には高崎古墳群があり、さらに多賀城の外郭南門が位置する丘陵の南斜面には、田屋場横穴古墳群が構築されているなど、この地域一帯が多賀城以前の古墳時代から広範囲に利用されていたいたことが知れる。この他、本遺跡の西側の新田遺跡では古墳時代から中世にわたる遺構が発見されており、この中では特に中世の武家屋敷跡の発見が注目されている。

2、調査の経過

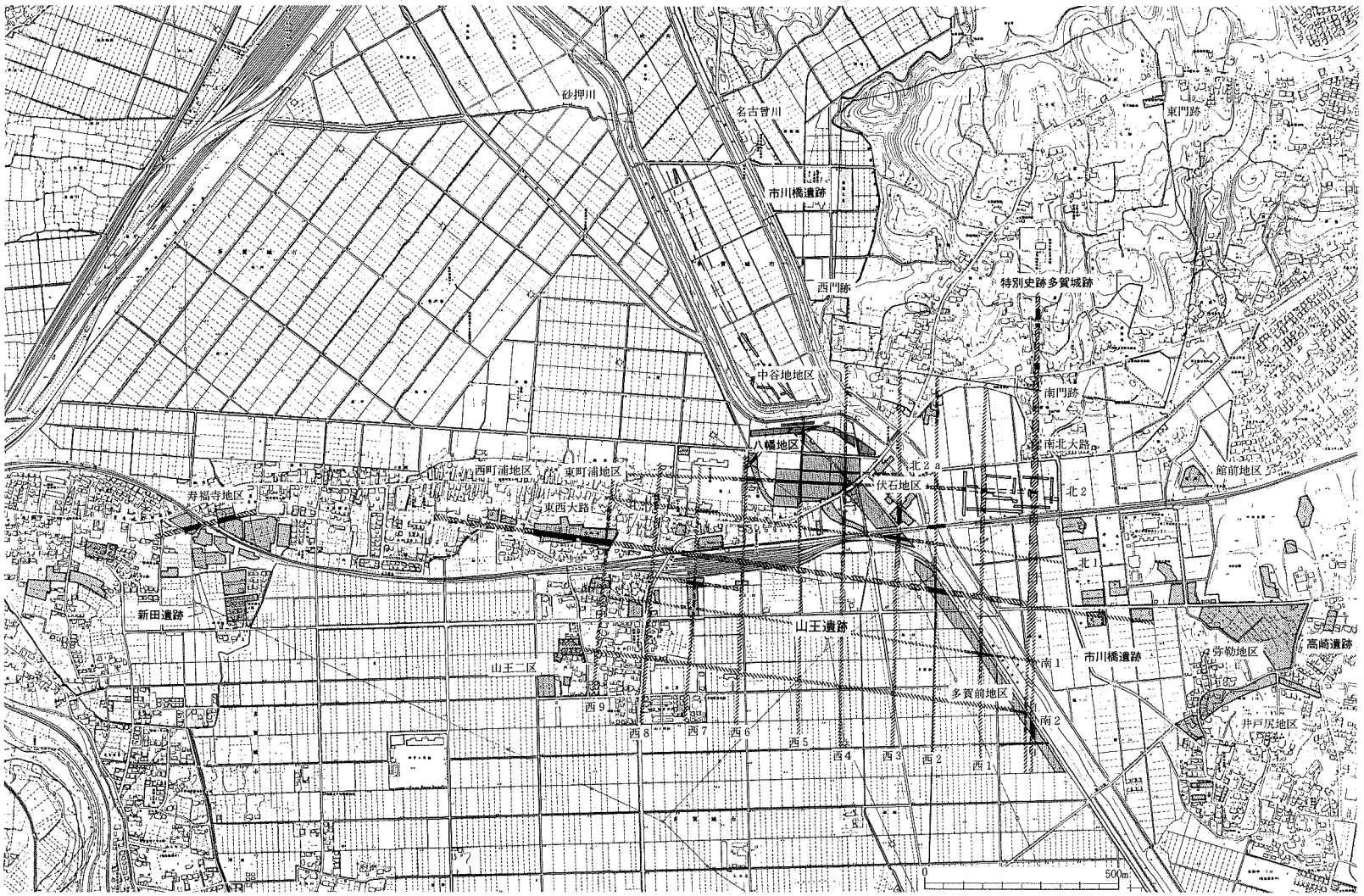
昭和47年～52年に検討・立案された仙台湾高槻規格幹線道路事業計画の中で、仙台市宮城野区中野から宮城郡利府町春日までの仙塩道路の建設計画が決定した。この計画では、仙台道路は多賀城跡の西側を北面から南西にかけて市川橋遺跡・本遺跡・六貫田遺跡を縦断することになり、さらに本遺跡の八幡地区には仮称「多賀城インター」も建設されることになった。

現在この「多賀城インター」のすぐ南を県道泉塩釜線が東西に横断している。またこの県道にバイパス的な機能を持たせた都市計画道路岩切・玉川線の建設も決定し、この岩切・玉川線は仙塩道路の「多賀城インター」にアクセスさせることになった。

今回の調査は、以上のような経過を踏まえて、平成4年・5年にかけて山王遺跡八幡地区を対象に実施した都市計画遺路県道泉塩釜線建設に伴うものである。都市計画道路は、盛土工法によるため路線敷全体の南北30m、東西約400mが事前調査の対象となったが、暫定2車線開通と変更されたことから、調査面積は約6、000m^{2}となった。

調査地が東西に長いことから、東側よりⅠ・Ⅱ・Ⅲ区と調査区を設定して調査を進めることにした。

ところで本遺跡の発掘調査は、昭和58年から多賀城市教育委員会によって住宅建築などの小規模な開発行為に対して断続的に実施されてきている。そして昭和63年度からは仙塩道路の「多賀城インター」の建設に伴う確認・事前調査を宮城県教育委員会と多賀城市教育委員会が協力して実施してきている。その結果、本遺跡は古墳時代から近世にわたる重



今回報告分　宮城県教委調査分　多賀城市教委・多賀城跡調査研究所調査分

第1図　遺跡の位置と周辺の遺跡

複した遺跡であり、その中で特に古墳時代から平安時代にかけては遺構の密度がかなり高いことが明らかになった。古墳時代には中期・後期に大規模な集落が営まれており、また古代では多数の掘立柱建物跡などが発見されており、特に平安時代には多賀城を中心とした南北・東西道路による地割の存在や、その区画の中には国の守の宅地の存在も捉えられている。

調査は、以上のようなこれまでの調査成果を踏まえて、道路跡の存在が想定されたⅡ区から開始し、確認調査の終了後Ⅰ区の表土の除去に取り掛かった。Ⅰ・Ⅱで検出した主な遺構には、掘立柱建物跡、竪穴住居跡、井戸、西4南北道路跡、材木塀跡、河川跡があり、この他多数の土壙・溝・ピットも検出している。

これらの遺構は、第2層直下の第3層面で検出されたが、出土遺物から見ると、概ね古墳時代～近世の長期間にわたるものと考えられた。また遺構の残存状況は全体的に悪く、特に竪穴住居跡では床面まで削平されているものが多かった。平成4年度は、Ⅰ・Ⅱ区の約4、000m^2の確認調査とⅠ区とⅡ区の一部の約1、200m^2の事前調査を実施した。

今年度は昨年度に引き続き、Ⅰ・Ⅱ区の未終了部分とⅢ区の事前調査を実施した。この中の昨年Ⅱ区で検出し未完掘であった河川（ＳＤ2050）は、今年度の調査の結果、古墳時代後期から奈良時代(ＳＤ2050Ｂ)とそれ以前（ＳＤ2050Ａ）の2時期にわけて捉えられることが判明した。ＳＤ2050Ｂからは、柄香炉をはじめとする多種多最の木製品や土器、骨鏃やト骨といった骨箱器、さらに様々な植物遺体および貝殻などが出土したが、ＳＤ2050Ａからは数点の土師器の破片が出土しただけである。

一方Ⅲ区の調査では、竪穴住居跡、掘立柱建物跡、区画溝・材木塀、西5南北道路跡・北3東西道路跡などを調査区東半部で検出したが、遺構はに西に行くにしたがって次第に少なくなり、西5道路跡以西では南西から北東にかけて続く道路跡の他には畝状遺構や少数の土壙、溝が見られるだけであった。

ところでⅢ区では、排水溝の掘り下げ中に遺構確認面(第3層上面)の下層から古墳時代の土師器が数個体出土した（第3図）。そこでⅠ区から断ち割り調査を実施した結果、古墳時代前期とさらにその下層で弥生時代中期枡形囲式期の包含層を確認した(第2・4～8図)。その後これらの包含層を掘り上げⅡ・Ⅲ区の調査を終了した。

この他に仙塩道路の建設に伴う橋脚によって今後の発掘調査が困難になるⅣ区の事前調査も併せて実施した。ここではⅢ区から続く道路跡や区画溝・材木塀などの他には、小数の土壙や畑の跡などを検出しただけであり、12月24日に今年度分の調査のすべてを終了した。なお、調査の成果がある程度まとまった10月30日に一般の人々を対象にした現地説明会を実施した。

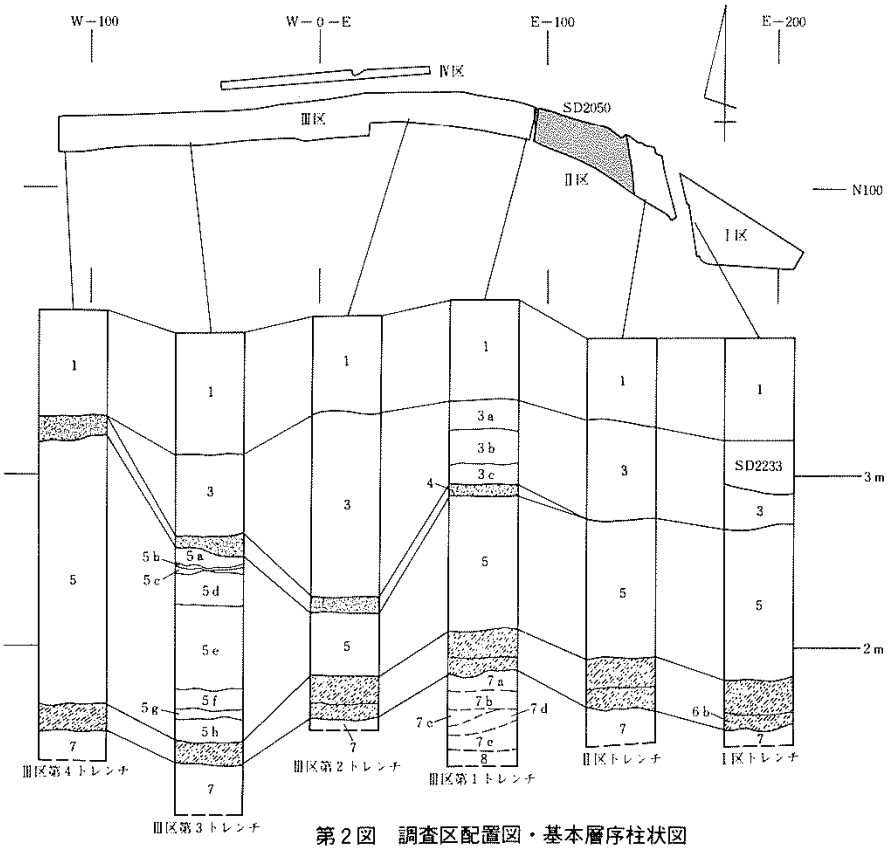
第Ⅱ章：基本層序

調査区は東西約300mとかなり長いため、層序は各地点の層序柱状図を模式的に示すことで表すことにした(第2図)。

第1層：表土、現在の水田耕作土と床土。厚さ約30cm。調査区全体に分布している。

第2層：第1層と第3層のあいだに部分的に認められた黒褐色(10ＹＲ3/2)シルト(2a層)と褐灰色(10ＹＲ4/1)シルト（2c層）で、あいだに灰白色火山灰層(2b層)がみられる。第2a層は、Ⅲ区中央部のＳＸ2650・2651道路跡付近から西半部にかけて、また第2b・2c層はⅢ区西半部のＳＸ2652道路跡付近に分布している。層の厚さは2a・2b・2c層とも最も残りの良い部分で5cm前後である。

第3層：第2層以下の層から古墳時代前期の塩釜式期の土器を含む第4層直上の層までを一括してまとめた。地点によって細分される層の数は違うが、Ⅱ区の第1地点で



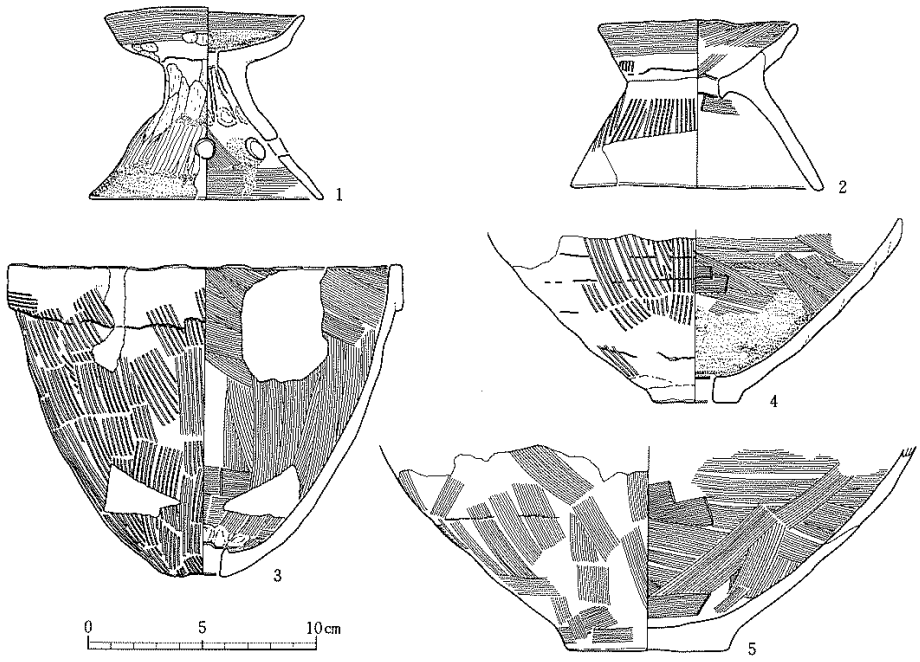
第２図　調査区配置図・基本層序柱状図

は、a；にぶい黄橙色(10ＹＲ眉6/3)砂質シルト、b；にぶい黄褐色（2.5ＹＲ6/3）シルト、ｃ；灰黄褐色(10ＹＲ5/2)粘土質シルトの3層に細分される。Ⅲ区西端部を除く調査区全面に分布し、厚さはaが約20㎝、bが約30㎝、ｃが10～30㎝。

ＳＤ2050河川跡を含め、遺構はすべてこの第3層上面で検出している。

第4層：褐灰色（7.5ＹＲ4/1）粘土質シルト～黒色(10ＹＲ1.7/1)粘土。Ⅲ区中央部から西半部にかにかけて分布し、厚さは最も残りの良い部分で約10㎝である。古墳時代前期塩釜式期土師器が出土している(第3図)。

出土した土師器は5個体前後と少ないが、種類には器台・甑・甕あるいは壺がある。器は受部に裏通孔がみられ、脚部に3ヶ所に同窓のあるもの(1)とないもの(2)がある。甑はいずれも単孔のものである。3は内湾気味に立ち上が



（単位：cm）

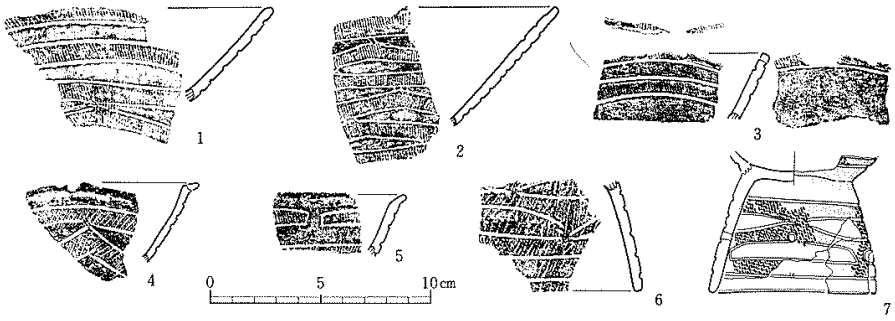
No.	種　類	特　徴	口　径	底　径	器　高	残存率	写真図版
1	土師器・器台	赤彩、円窓３単位　外面：ヨコナデ→ケズリ→ミガキ　内面：ヨコナデ、ナデ、シボリ目	8.8	10.2	8.5	ほぼ完形	31-2
2	土師器・器台	外面：ハケメ→ヨコナデ　内面：ヨコナデ、ヘラナデ、貫通孔	8.7	6.0	7.5	3/5	
3	土師器・甑	単孔、口縁部が肥厚　外面：ハケメ→ナデ　内面：ヘラナデ、指ナデ（部分的）	(19.6)	－	14.7	1/2	
4	土師器・甑	単孔　外面：ハケメ→ケズリ？　摩滅　内面：ヘラナデ、摩滅	－	3.8	－	1/2	
5	土師器甕or壺	内外面：ヘラナデ	－	7.4	－	一部	

第３図　第４層出土遺物

り、口縁部を折り返して肥厚させている。4は口縁部まで直線気味に立ち上がり、口縁端部が多少内湾するものである。外面は、両者ともハケメ調整である。5は甕あるいは壷の底部から胴部下半にかけてのもので、内外面ともヘラナデ調整が施されている。

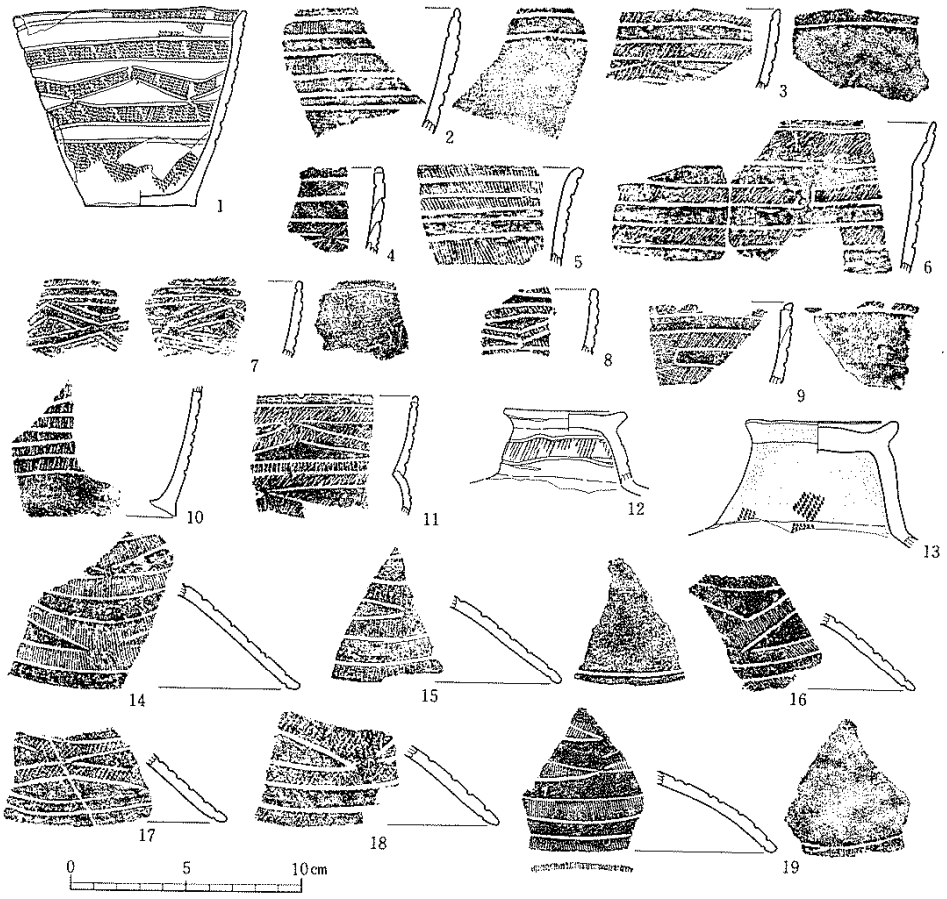
第5層：第4層直下から弥生時代の包含層の直上層までを一括してまとめた。第2層と同様に地点によって細分される層の数に違いがあるが、III区の第2地点ではa；灰黄褐色（10YR6/2）粘土質シルト、b；黒色(10YR1.7/1)粘土質シルト、c；黄褐色(10YR5/6)粗砂、d；明緑灰色(10G7/1)シルト、e；青灰色(5BG5/1)シルト、f；明緑灰色(5G7/1)粘土質シルト、g；オリーブ黒色(5Y3/2)スクモ、h；薄い泥炭層を数枚互層上に含む明緑灰色(10GY7/1)粘土質シルトの8層に細分される。各層はIII区西半分に分布する粗砂のc層を除けば概ね調査区全体に分布している。各層の厚さはaが約10㎝、bが約2㎝、cが約5㎝、dが約20㎝、eが約50㎝、fが約10㎝、gが6㎝、hが10～15㎝である。

第6層：2層に細分され、調査区全体に広がる。上部はa；黒色(N2/1)泥炭層で、厚さは約20㎝。下部はb；暗緑灰色(5G3/1)砂と第7層の泥炭が均質に混じる層で、厚さ15～30㎝である。a層を中心に、弥生時代中期の枡囲式期の遺物が比較的多く出土している遺物は調査区全体から出土するのではなく、Ⅰ区西半部～Ⅱ



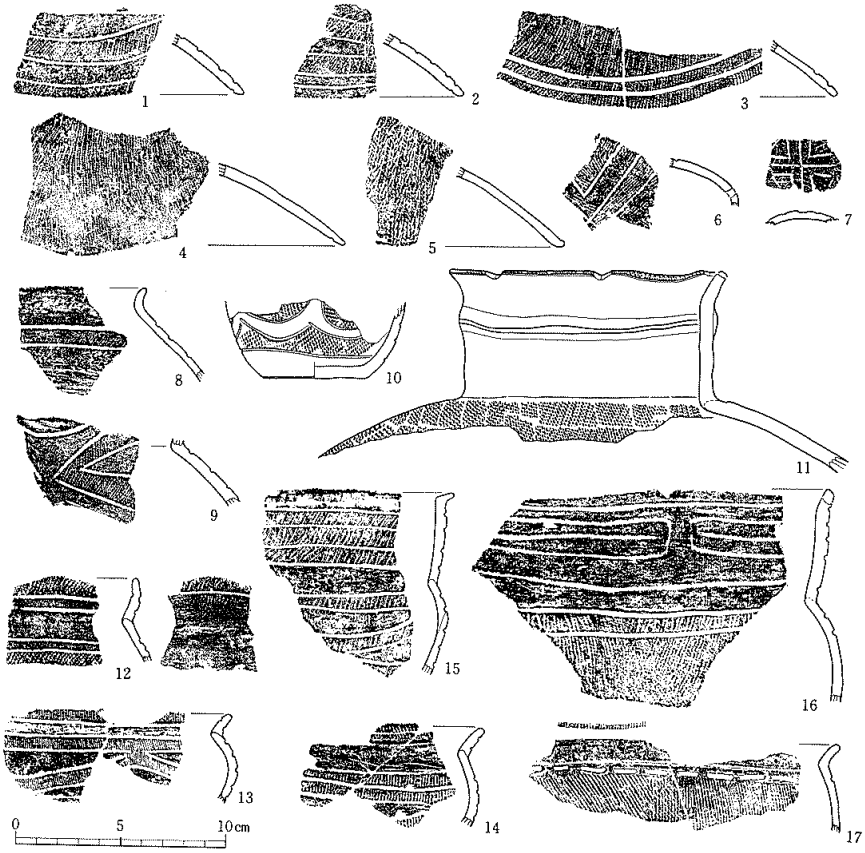
No.	種　類	特	徴	写真図版
1	弥生土器・高坏	外面：重層する連弧文→燃糸文（L）→ミガキ　内面：ミガキ		31-8
2	弥生土器・高坏	口縁部に突起　外面：重層する連弧文→植物茎回転文→ミガキ　口唇部：植物茎回転文　内面：平行沈線文→植物茎回転文→ミガキ		31-9
3	弥生土器・高坏	刻目をもつ波状口縁　外面：植物茎回転文→平行沈線文→ミガキ　口唇部：植物茎回転文　内面：植物茎回転文→沈線→ミガキ		
4	弥生土器・高坏	刻目をもつ波状口縁　外面：連弧文→縄文（LR）→ミガキ　口唇部：縄文（LR）　内面：ミガキ		31-10
5	弥生土器・高坏	外面：王字状文→植物茎回転文　口唇部：植物茎回転文　内面：摩滅		31-12
6	弥生土器・高坏	外面：重層する連弧文→附加条縄文（LR－L）→ミガキ（部分的）　内面：ミガキ		31-10
7	弥生土器・高坏	外面：重層する連弧文（3単位）→附加条縄文（LR－R）、ミガキ→貫通孔（2ヵ所）　内面：ミガキ		

第4図　第6層出土遺物（1）　―土器―



No.	種　類	特　　徴	写真図版
1	弥生土器・鉢	外面：附加条縄文（ＬＲ－Ｒ）→連続山形文、平行沈線文→ミガキ　口唇部：附加条縄文（ＬＲ－Ｒ）　内面：ミガキ	31-1
2	弥生土器・鉢	外面：植物茎回転文→平行沈線文→ミガキ　内面：平行沈線文　摩滅	31-13
3	弥生土器・鉢	刻目をもつ波状口縁　外面：重層する連弧文→附加条縄文（ＬＲ－Ｌ）→ミガキ　内面：附加条縄文（ＬＲ－Ｌ）→沈線→ミガキ	
4	弥生土器・鉢	小波状口縁　外面：連弧文→附加条縄文（ＬＲ－Ｌ）→ミガキ　内面：沈線→ミガキ	
5	弥生土器・鉢	外面：平行沈線文→植物茎回転文→ミガキ　口唇部：植物茎回転文　内面：ミガキ	31-18
6	弥生土器・鉢	外面：王字状文→縄文（Ｌ）→ミガキ　内面：沈線→ミガキ	
7	弥生土器・鉢	外面：重層する菱形文→附加条縄文？→ミガキ　内面：沈線→ミガキ	31-14・15
8	弥生土器・鉢	小波状口縁　外面：縄文（ＬＲ）→縦位の短沈線をもつ連続山形文　内面：沈線　摩滅	
9	弥生土器・鉢	小波状口縁　外面：王字状文→縄文（ＬＲ）→ミガキ	31-22
10	弥生土器・鉢	外面：縄文（？）→重層する連弧文→ミガキ　摩滅　内面：摩滅	
11	弥生土器・鉢	刻目をもつ平縁　外面：重層する連弧文→縄文（Ｌ）→ミガキ　口唇部：縄文（Ｌ）　内面：沈線→ミガキ	31-24
12	弥生土器・蓋	外面：縄文（Ｌ）→平行沈線文→ミガキ　内面：摩滅	
13	弥生土器・蓋	外面：縄文（ＬＲ）　摩滅　内面：ナデ？　摩滅	
14	弥生土器・蓋	外面：重層する連弧文→植物茎回転文、ミガキ　口唇部：植物茎回転文　内面：沈線→ミガキ	
15	弥生土器・蓋	外面：附加条縄文（ＬＲ－Ｌ）→重層する連弧文→ミガキ　内面：沈線→ミガキ	
16	弥生土器・蓋	外面：連続山形文→縄文（ＬＲ）→ミガキ　内面：沈線→ミガキ	
17	弥生土器・蓋	外面：重層する菱形文→縄文（ＬＲ）→ミガキ　内面：沈線→ミガキ	31-5
18	弥生土器・蓋	外面：連弧文→附加条縄文（ＬＲ－Ｒ）→ミガキ　内面：沈線→ミガキ	31-6
19	弥生土器・蓋	外面：重層する連弧文→植物茎回転文→ミガキ　口唇部：植物茎回転文　内面：沈線→ミガキ	31-4

第５図　第６層出土遺物（２）　―土器―



No.	種　類	特　徴	写真図版
1	弥生土器・蓋	外面：連弧文→縄文（ＬＲ）→ミガキ　内面：沈線→ミガキ	
2	弥生土器・蓋	外面：重層する連続山形文→附加条縄文（ＬＲ－Ｒ）　内面：沈線→ミガキ	
3	弥生土器・蓋	外面：縄文（ＬＲ）→平行沈線文　口唇部：縄文（ＬＲ）　内面：沈線→ミガキ	
4	弥生土器・蓋	外面：縄文（ＬＲ）　内面：沈線→ミガキ	
5	弥生土器・蓋	外面：附加条縄文（ＬＲ－Ｌ）　内面：ミガキ	
6	弥生土器・蓋	外面：重三角形文→植物茎回転文→ミガキ　貫通孔　内面：ミガキ	31-7
7	弥生土器・蓋	外面：十字文→附加条縄文（ＬＲ－Ｌ）→ミガキ　内面：ミガキ	31-11
8	弥生土器・壺	外面：平行沈線文→縄文（ＬＲ？）→ミガキ　口唇部：縄文（ＬＲ？）　内面：ミガキ	
9	弥生土器・壺	外面：連繋菱形文→縄文（ＬＲ）→ミガキ　内面：ミガキ	31-17
10	弥生土器・壺	外面：鎬形文→縄文（ＬＲ）→ミガキ　底面：木葉痕　内面：ミガキ　底径：4.8 cm	
11	弥生土器・壺	口唇部：刻目７単位　附加条縄文（ＬＲ－Ｒ）　頸部外面：隆帯→ミガキ　胴部外面：附加条縄文（ＬＲ－Ｒ）　内面：ミガキ　口径：13.2cm	
12	弥生土器・壺	波状口縁　外面：縄文（ＬＲ）→平行沈線文→ミガキ　内面：縄文（ＬＲ）→沈線→ミガキ	
13	弥生土器・鉢	外面：連弧文→植物茎回転文→ミガキ　口唇部：植物茎回転文　内面：沈線→植物茎回転文→ミガキ	31-23
14	弥生土器・鉢	外面：連弧文→撚糸文（Ｌ）→ミガキ　口唇部：撚糸文（Ｌ）　内面：ミガキ	
15	弥生土器・甕	外面：平行沈線文、重層する連弧文→附加条縄文（ＬＲ－Ｌ）→ミガキ　口唇部：附加条縄文（ＬＲ－Ｌ）　内面：ミガキ	31-25
16	弥生土器・甕	刻目をもつ緩やかな波状口縁　外面：縄文（ＬＲ）→平行沈線文、方形区画文　口唇部：縄文（ＬＲ）　内面：ミガキ	31-21
17	弥生土器・甕	外面：植物茎回転文→ヨコナデ→沈線＋押引き列点文　口唇部：植物茎回転文　内面：ミガキ	32-2

第６図　第６層出土遺物（３）　―土器―

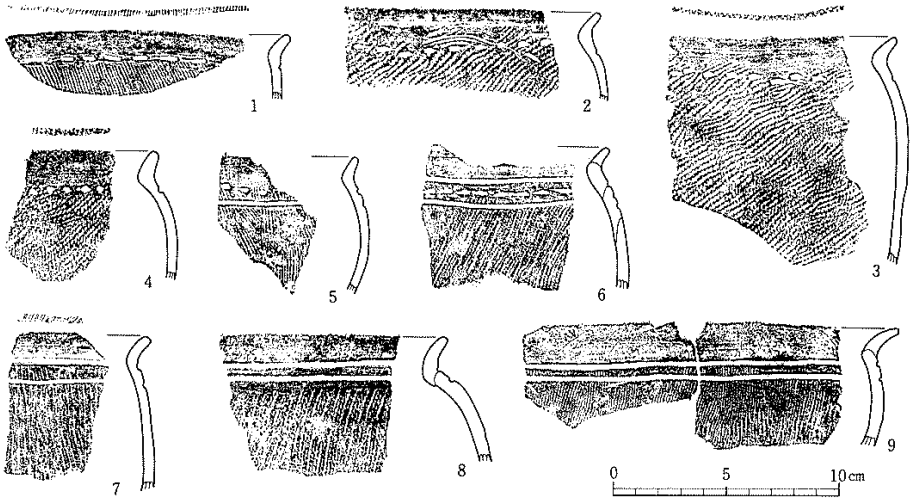
区東半分にかけて集中している。そして南側ほど多く出土する傾向がみられることから、遺物の分布は調査区のさらに南側へ広がると考えられる。

遺物に土器と石器がある。土器には高坏・鉢・壷・蓋・甕などがあるが、ほとんどが破片資料である（第4～7図）。文様には、平行沈線・連弧文・連続山形文・王字状文などといったものがみられる。地文としては縄文の他に撚糸文や植物茎回転文などが施されている。石器には石匙、尖頭器、石鏃、磨製石斧、磨石などがある(第8図)。この中の磨製石斧は、いわゆる太型蛤刃といわれるもので弥生時代に特徴的な石器である。6の磨石は長軸方向の両端に打ち欠きがみられることからハンマーとしても利用されたと考えられる。

第7層：暗緑灰色(5G4/1)～緑灰(5G・10G5/1)砂質シルト。調査区全面に分布し、Ⅱ区第1地点では色調と砂の混じり合いで5層に細分される。

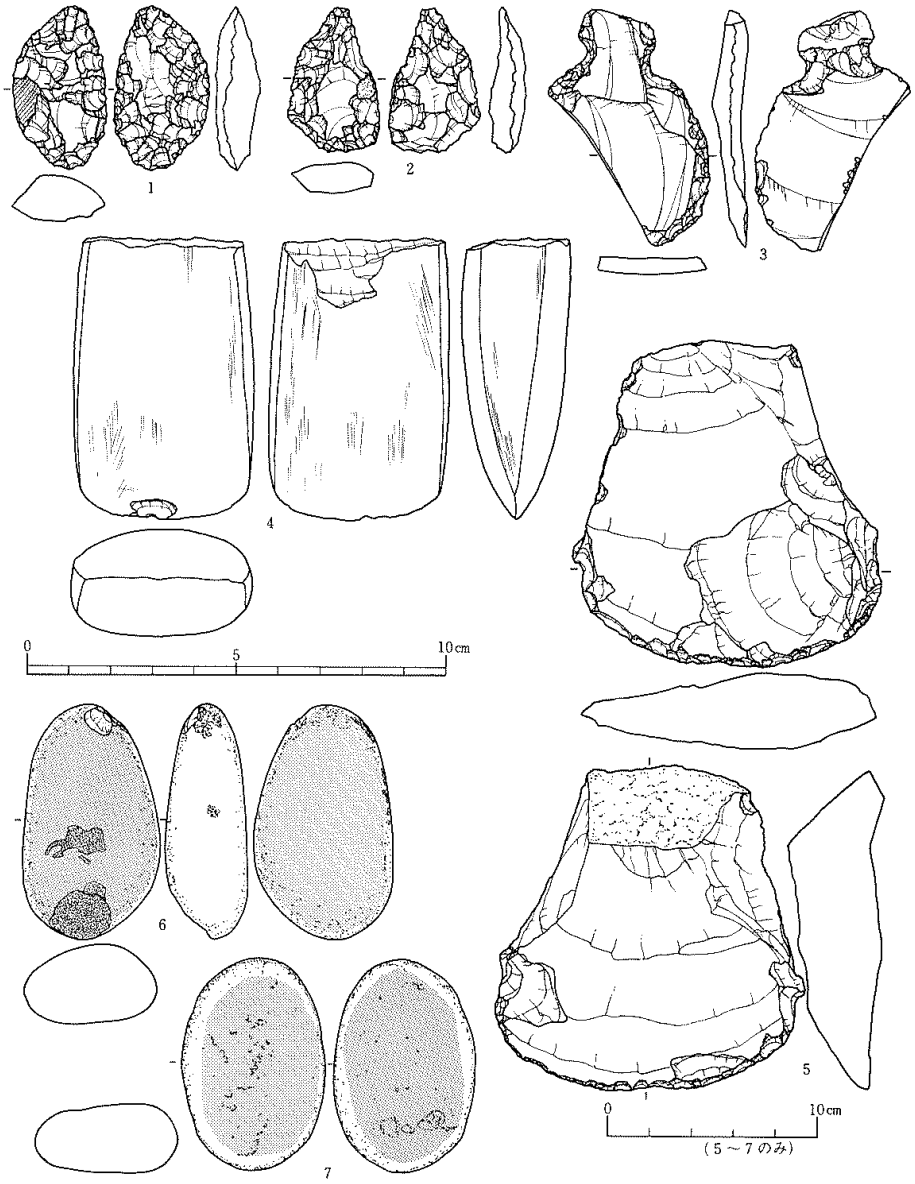
Ⅱ区第1地点では厚さ5～15㎝。今調査では遺物は出土していない。

第8層：緑灰色（5G5/1）細砂層。今調査では遺物は出土していない。



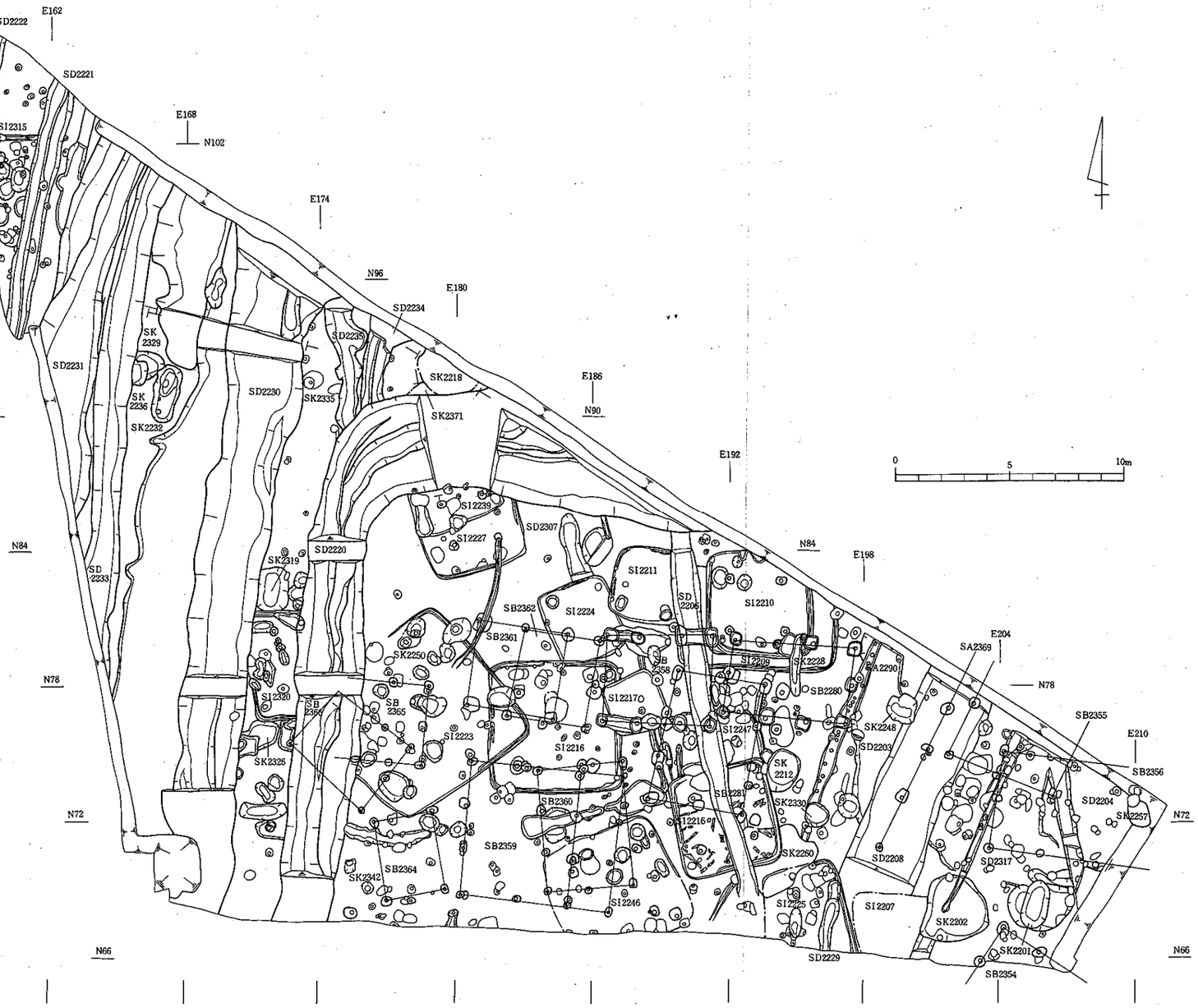
No.	種　類	特　徴	写真図版
1	弥生土器・甕	外面：植物茎回転文→ヨコナデ→押引き列点文　口唇部：植物茎回転文　内面：ミガキ	
2	弥生土器・甕	外面：縄文（ＬＲ）→ヨコナデ→列点文　内面：ミガキ	32-3
3	弥生土器・甕	外面：縄文（ＬＲ）→ヨコナデ→列点文　口唇部：縄文（ＬＲ）　内面：ミガキ	32-1
4	弥生土器・甕	外面：縄文（ＬＲ）→ヨコナデ→列点文　口唇部：縄文（ＬＲ）　内面：ミガキ	32-4
5	弥生土器・甕	外面：撚糸文（Ｌ）→ヨコナデ→沈線＋列点文　口唇部：撚糸文（Ｌ）　内面：ミガキ	31-20
6	弥生土器・甕	外面：縄文（ＬＲ）→ヨコナデ→平行沈線＋押引き列点文　口唇部：縄文（ＬＲ）　内面：ミガキ	32-5
7	弥生土器・甕	外面：縄文（ＬＲ）→ヨコナデ→平行沈線文　口唇部：縄文（ＬＲ）　内面：ミガキ	
8	弥生土器・甕	外面：撚糸文（Ｌ）→ヨコナデ→平行沈線文　口唇部：撚糸文（Ｌ）　内面：ミガキ	32-6
9	弥生土器・甕	外面：縄文（ＬＲ）→ヨコナデ→平行沈線文　口唇部：縄文（ＬＲ）　内面：ミガキ	

第７図　第６層出土遺物（４）　―土器―



No.	器　種	層　位	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	石　材	備　考	写真図版
1	尖頭器	第5層	3.9	2.3	1.1	碧　玉	左図がPosi面	32-12
2	尖頭器	第5層	3.5	2.2	0.8	珪　岩		32-13
3	石　匙	第5層	5.8	3.8	0.7	珪質頁岩	折断面を切る二次加工あり	32-8
4	磨製石斧	第5層	(6.8)	4.4	2.6	安山岩	重さ：145g	32-11
5	石　錘	第5層	15.6	14.8	4.5	安山岩	重さ：1120g	32-16
6	磨石・敲石	第5層	11.3	6.6	3.7	安山岩	ほぼ前面磨面　焼けハジケあり　重さ：410g	32-17
7	磨　石	第5層	10.2	6.8	3.8	安山岩	重さ：324g	32-18

第8図　第6層出土遺物（5）　―石器―



第９図　Ⅰ区検出遺構配置図

13・14

第Ⅲ章：発見された遺構と遺物

今回の調査では、弥生時代、古墳時代前期･後期、奈良･平安時代、中世にわたる遺構と遺物を発見している。このうち弥生時代と古墳時代前期の遺物については、前章で示したとおりである。古墳時代後期以降の主な遺構には、竪穴住居跡37軒、掘立柱建物跡30軒、道路跡4条、塀跡および区画施設7条、井戸4基があり、さらに多数の土壙･溝･ピットや河川跡も検出している。

ところで、遺構は全体的に遺存状況が悪く、特に竪穴住居跡では掘り方埋土しか検出できなかったものも多い。また遺物の全体壁は比較的多いが、個々の遺構でみるとまとまって遺物が出土しているものは少ない。竪穴住居跡で床面から遺物がまとまって出土しているのはＳＩ2246だけである。また、掘立柱建物跡でも出土遺物から年代を確実に特定できるものはきわめて少ない。以下では、遺物の出土した遺構を中心に、Ｉ区から順に概要を記述して行く。

なお、これらの遺構の検出面は他の遺構と完全に重複する場合を除けば、特に記述する以外はすべて第3層上面である。

1、Ｉ区で発見した遺構と遺物(第９図)

検出した主な遺構には竪穴住居跡16軒、掘立柱建物跡13棟、塀跡2条、区画溝1条の他、多数の土壙、溝などがある。

①：竪穴住居跡

ＳＩ2210(第10･11図)

Ｉ区東半部の調査区北壁際で検出した竪穴住居跡で、北東部は調査区外である。ＳＩ2209、ＳK2273～2275、ＳD2309、ＳB2280･2358、ＳK2368と重複し、ＳＩ2209、ＳK2273～2275、ＳD2309より新しいが、ＳB2280･2358、ＳK2368より古い。

規模･平面形は、西辺･南辺とも約4.5mの隅丸方形をなす。壁は10㎝ほどしか残っていない。

床面は黄褐色シルト小ブロックを斑状に、炭化物･焼土を少量含む黒褐色シルトの貼床で、全面に認められ、ほぼ平坦である。

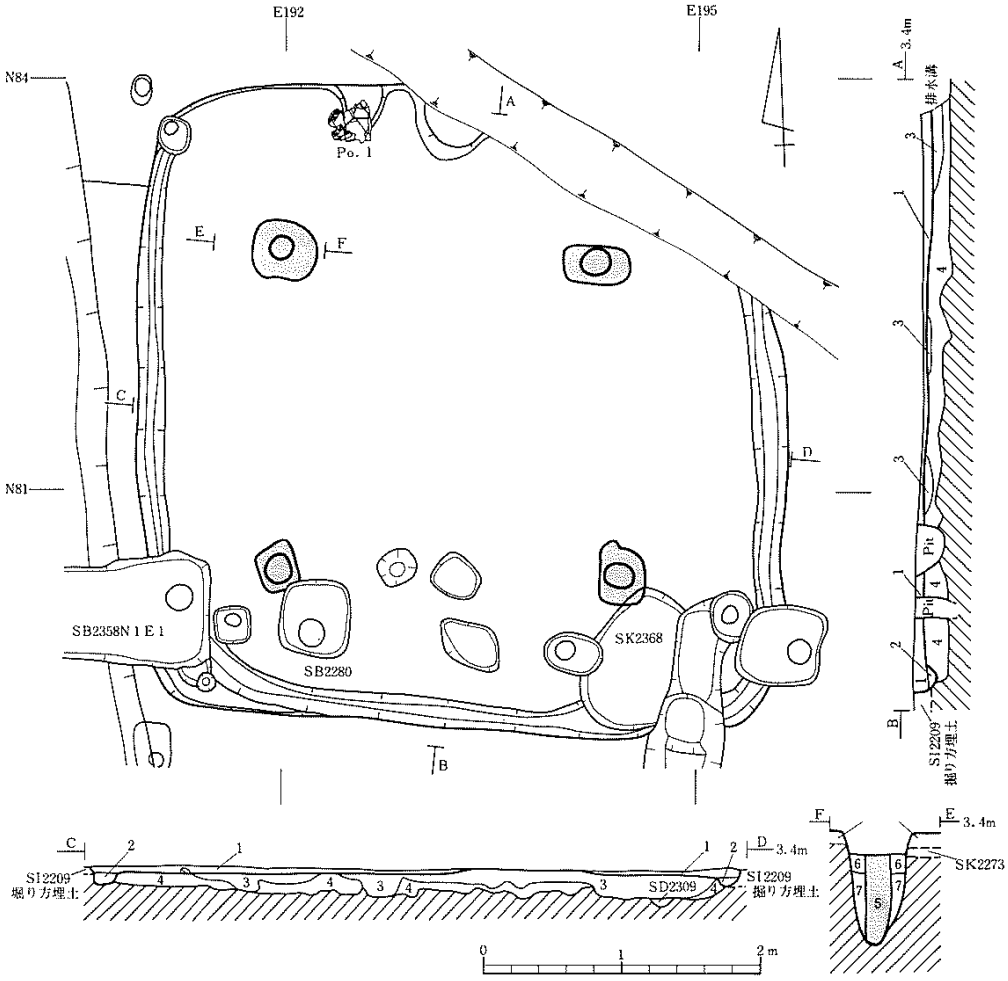
柱穴は主柱穴を対角線上の4箇所で検出しており、一辺30～50㎝ほどの方形をなし、深さは50～70㎝である。いずれの竪穴でも柱痕跡を確認しており、径約20㎝である。

周溝は東辺～南辺～西辺で確認しており、上端幅20～30㎝、底面幅5～15㎝、深さ4～13㎝で、断面は緩やかなU字形をなす。埋土は黄褐色シルト細粒を多く、炭化物を少量含む黒褐色シルトである。この他、貯蔵穴など住居に伴う施設は認められない。

カマドは北辺中央やや西よりに付設されている。カマド本体は、両側壁が3～4㎝残存しており、内幅約30㎝、奥行き約50㎝である。煙道は完全に削平されているため不明である。住居跡の方向は、西辺でみるとほぼ真北である。

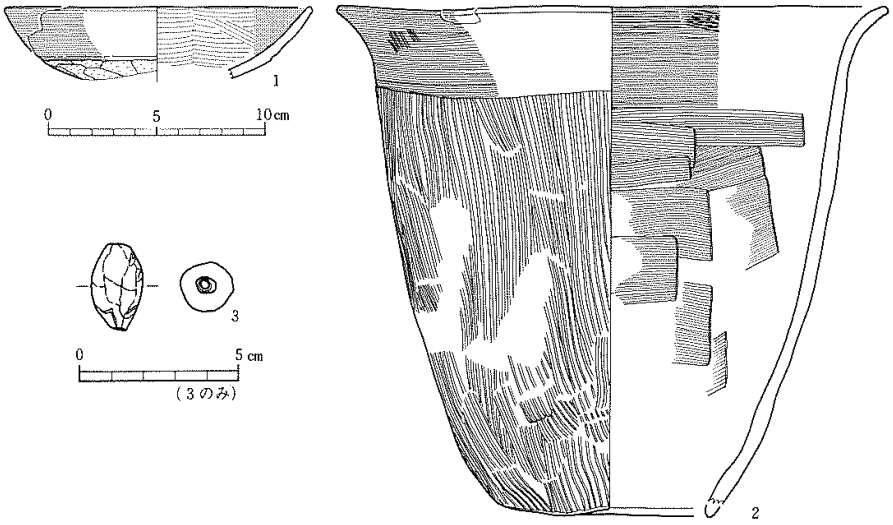
住居跡内の堆積土は1層だけ確認できた。

遺物は床面と堆積層から非ロクロ調整の土師器が少量と土錘が1点出土している。この



No.	土色	土性	備考	No.	土色	土性	備考
1	黒褐色(7.5YR3/1)	シルト	〈住居内堆積土〉炭化物・焼土・地山の土を含む。	5	黒褐色(10YR3/2)	粘土質シルト	〈主柱柱痕跡〉少量の炭化物と地山の土を含む。
2	黒褐色(7.5YR3/1)	シルト	〈隅溝内埋土〉少量の炭化物と、多量の粒状の地山の土を含む。	6	黒褐色(10YR3/1)	粘土質シルト	〈主柱穴埋土〉地山の土を霜降り状に多く含む。
3	黒褐色(7.5YR3/1)	シルト	〈貼床〉小さいブロック状の地山の土を若干含む。しまりあり。	7	黒褐色(10YR3/1)	粘土質シルト	〈主柱穴埋土〉地山の土を霜降り状に含む。
4	黒褐色(7.5YR3/1)	シルト	〈掘り方埋土〉大きいブロック状の地山の土を含む。しまりあり。				

第10図　SI 2210住居跡



（単位：cm）

No.	種　類	層位	特　　徴	口　径	底　径	器　高	残存率	分　類	写真図版
1	土師器・坏	Ⅰ層	外面：ヨコナデ→ヘラケズリ　内面：ヘラミガキ→黒色処理	(14.0)	—	—	一　部		
2	土師器・甕	床面	無底　外面：ハケメ→ヨコナデ　内面：ヘラナデ→ヨコナデ	25.3	9.3	28.7	3/5		17-2
3	土　錘	床面	外面：オサエ痕　大きさ：3.7×1.6 cm　孔の径：0.3 cm						

第11図　ＳＩ2210住居跡出土遺物

中で図示できるものとしては、床面から出土した甑(第11図2)と堆積土から出土した内面が黒色処理されている(以後内黒とする)坏(1)がある。またこの他に床面からは土錘が1点(3)出土している。

ＳＩ2211(第12・13図)

Ｉ区中央北半部で検出した竪穴住居跡で、ＳＩ2224、ＳＢ2358、ＳＤ2206と重複し、ＳＩ2224より新しいがＳＢ2358、ＳＤ2206より古い。

規模は、南北が西辺で約3.5m、東西はＳＤ2206によって東辺を壊されているが南東隅の状況から南辺で3.5mほどと推定され、平面形は隅丸方形をなす。壁は5cmほどしか残っていない。

床面は南半部に多量の黄褐色シルト細粒と微量の炭化物含む黒褐色シルト貼床が認められ、ほぼ平坦である。

柱穴は主柱穴・壁柱穴とも認められない。

周溝は北辺～西辺～南辺で部分的に認められ、上端幅15～20cm、底面幅約5cm、深さ5cmで、断面は浅い皿状をなす。埋土は黄褐色シルト粒を含む黒褐色シルトである。

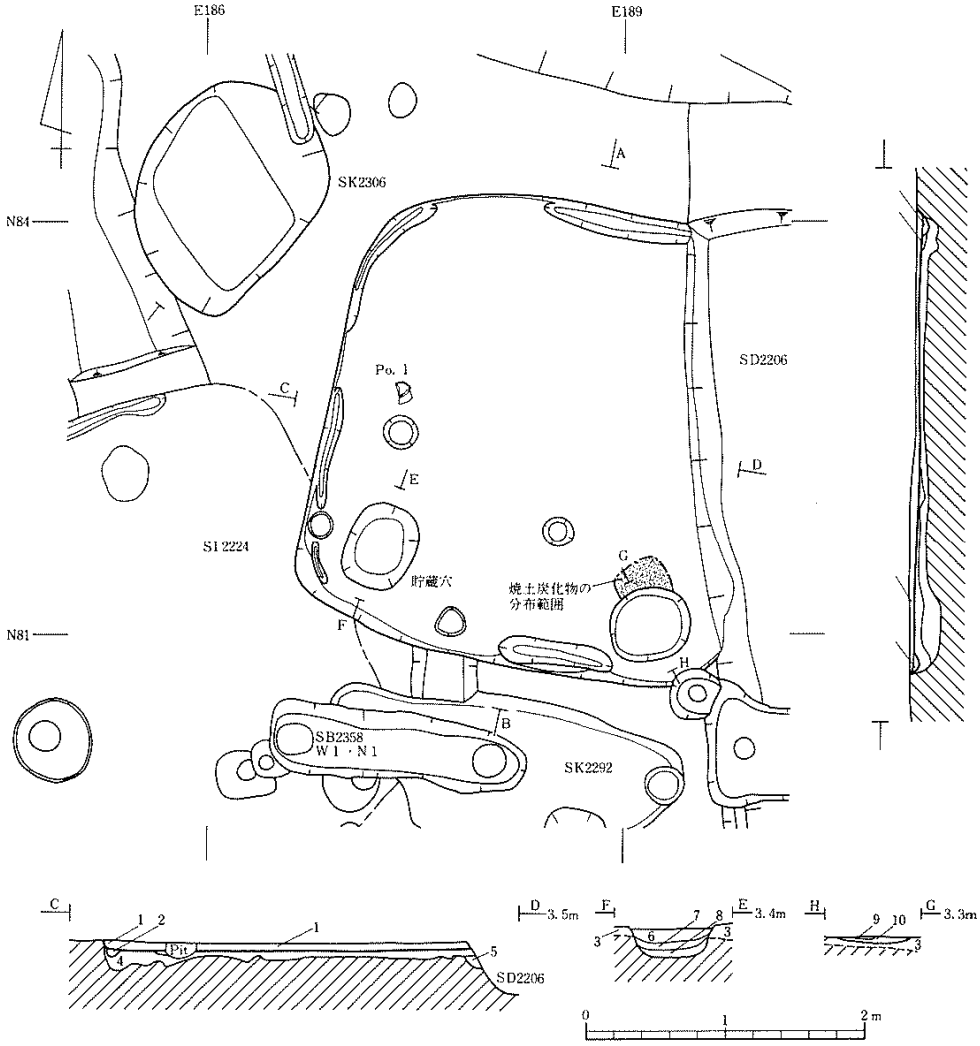
貯蔵穴は南西隅付近で確認しており、長径約60cm、短径約50cm、深さ約25cmである。

カマドは本体・煙道が完全に削平されていたが、南辺東端部付近で焼土・炭化物を多量に含む浅い落込みを検出しており、これがカマドの底面と考えられる。住居跡の方向は西

辺でみると、北で約10度東へ偏している。

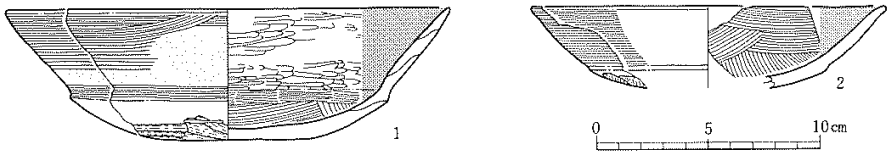
住居跡内は堆積土は１層だけ確認できた。

遺跡は、すべて破片であるが、床面と堆積層から非ロクロ調整の土師器が少量出土して



No.	土　色	土　性	備　考	No.	土　色	土　性	備　考
1	黒褐色(10YR3/2)	シルト	〈住居内堆積土〉若干の炭化物・焼土と地山の土を含む。	6	黒褐色(10YR3/2)	シルト質粘土	〈貯蔵穴内堆積土〉炭化物、焼土、地山の土を含む。
2	黒褐色(10YR3/2)	シルト	〈周溝内埋土〉小さいブロック状の地山の土を含む。	7	黄褐色(2.5Y5/3)	粘土	〈貯蔵穴内堆積土〉黒褐色土を含み、粘性が強い。
3	黒褐色(10YR3/1)	シルト	〈貼床〉炭化物と踏降り状の地山の土を含む。しまりあり。	8	黒褐色(10YR3/2)	シルト質粘土	〈貯蔵穴内堆積土〉若干の炭化物と、地山の土を含む。
4	暗灰黄色(2.5Y5/2)	シルト質粘土	〈掘り方埋土〉旧表土ブロックを含む。しまりあり。	9	褐灰色(10YR5/1)	粘土	〈カマド残滓〉炭化物、焼土を多く含み、粘性が強い。
5	暗灰黄色(2.5Y5/2)	シルト質粘土	〈掘り方埋土〉旧表土ブロックを少量含む。しまりあり。	10	褐灰色(10YR4/1)	シルト質粘土	〈カマド残滓〉炭化物、焼土をやや多く含む。

第12図　SI 2211住居跡



（単位：cm）

No.	種類	層位	特徴	口径	底径	器高	残存率	分類	写真図版
1	土師器・坏	床面(Po.1)	外面：ヨコナデ、ナデ→ヘラケズリ　内面：ヘラミガキ→黒色処理	(20.0)	—	5.9	2/5		
2	土師器・坏	貯蔵穴第2層	外面：ヨコナデ、ナデ→ヘラケズリ　内面：ヘラミガキ→黒色処理	(16.0)	—	—	一部		

第13図　ＳＩ2211住居跡出土遺物

いる。この中で図示できるものとしては、床面と貯蔵穴堆積土から出土した非ロクロ調整で内黒の土師器の坏(第13図1・2)がある。

ＳＩ2216(第14・15図)

Ｉ区中央部で検出した竪穴住居跡である。ＳＩ2217・2223・2224、ＳＢ2358～2362、ＳＫ2270と重複し、ＳＩ2224より新しいが、これ以外のものよりは古い。

規模・平面形は、東辺・南辺とも約5.9mの隅丸方形をなす。床面を北半部で一部残す以外完金に削平されており、掘り方埋土を検出できただけである。

柱穴は主柱穴を対角線上の4箇所で検出しているが、柱はすべて抜き取られている。柱穴の平面形は柱の抜取り穴によって壊されているが一辺50㎝前後の方形と推定され、深さは50～60㎝である。

周溝はカマドの付設された北辺中央ややよりを除いて見られ、上端幅10～5㎝、底面幅5～10㎝、深さ10～14㎝で、断面は緩やかなU字形をなす。埋土は黄褐色シルトブロック・炭化物を含む黒褐色粘土質シルトである。

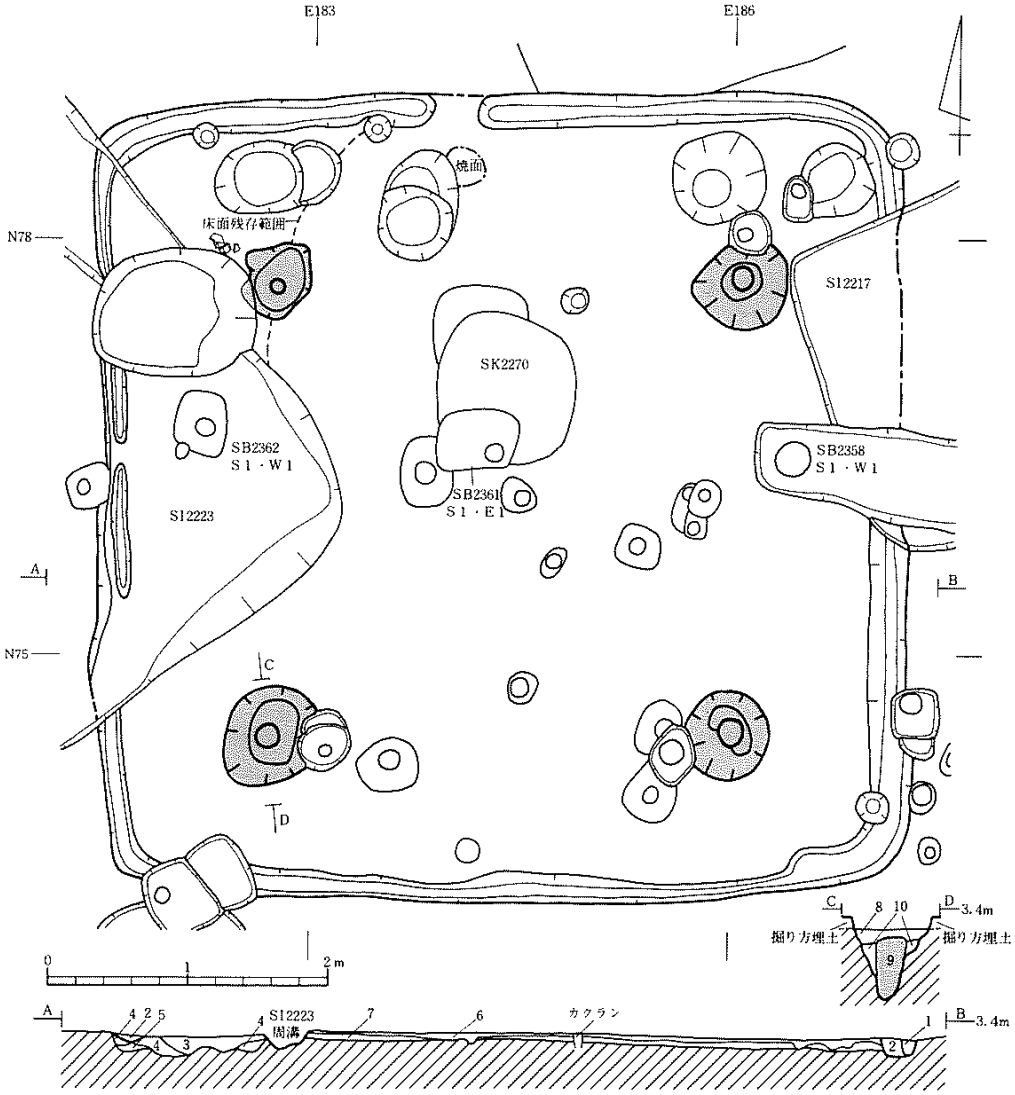
カマドは本体・煙道が完全に削平されているが、焼面の痕跡を検出したことより北辺中央やや西よりに付設されたと考えられる。住居跡の方向は東辺でみると北で約2度西へ偏している。

遺物はすべて破片であるが、掘り方埋土と堆積層から非ロクロ調整の土師器が出土している。この中で図示できるものとしては、掘り方埋土から出土した非ロクロ調整で内黒の土師器の坏(第15図1・3)と堆積土から出土した非ロクロ調整の内黒の坏（2）と高坏（4）がある。

ＳＩ2217(第16・17図)

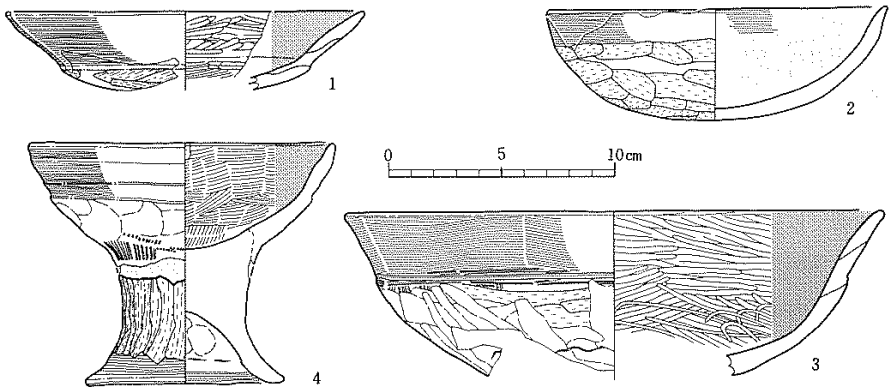
調査区のほぼ中央部で検出した竪穴住居跡である。ＳＩ2216、2247、ＳＢ2358、ＳＫ2322と重複し、ＳＩ2216より新しいが、その他のものよりは古い。

規模は西辺(南北)約2.3m、北辺(東西)約2.2mで、平面形は隅丸方形をなす。壁は3㎝ほどしか残っていない。



No.	土　色	土 性	備　　考	No.	土　色	土 性	備　　考
1	黒褐色(10YR3/2)	シルト	〈壁材痕〉少量の炭化物と微量の地山の土を含む。	6	黄灰色(2.5Y4/1)	シルト	〈掘り方埋土〉旧表土ブロックを多く含む。
2	黒褐色(10YR3/1)	粘土質ｼﾙﾄ	〈周溝埋土〉地山の土を小さいブロック状に少量含む。	7	にぶい黄色(2.5Y6/3)	シルト	〈掘り方埋土〉旧表土を若干含む。
3	黒色(10YR2/1)	シルト	〈掘り方埋土〉地山の土を小さいブロック状に若干含む。	8	黒褐色(10YR3/1)	シルト	〈主柱切り取り穴〉炭化物・地山の土を含む。
4	黒褐色(10YR3/1)	シルト	〈掘り方埋土〉地山の土をブロック状に多く含む。	9	黒褐色(10YR2/2)	粘土質ｼﾙﾄ	〈主柱抜痕〉乏不の炭化物と微量の地山の土を含む。
5	黒褐色(10YR3/1)	シルト	〈掘り方埋土〉地山の土を若干含む。	10	黒褐色(10YR3/1)	粘土質ｼﾙﾄ	〈主柱穴埋土〉落陽り伏の地山の土を多く含む。

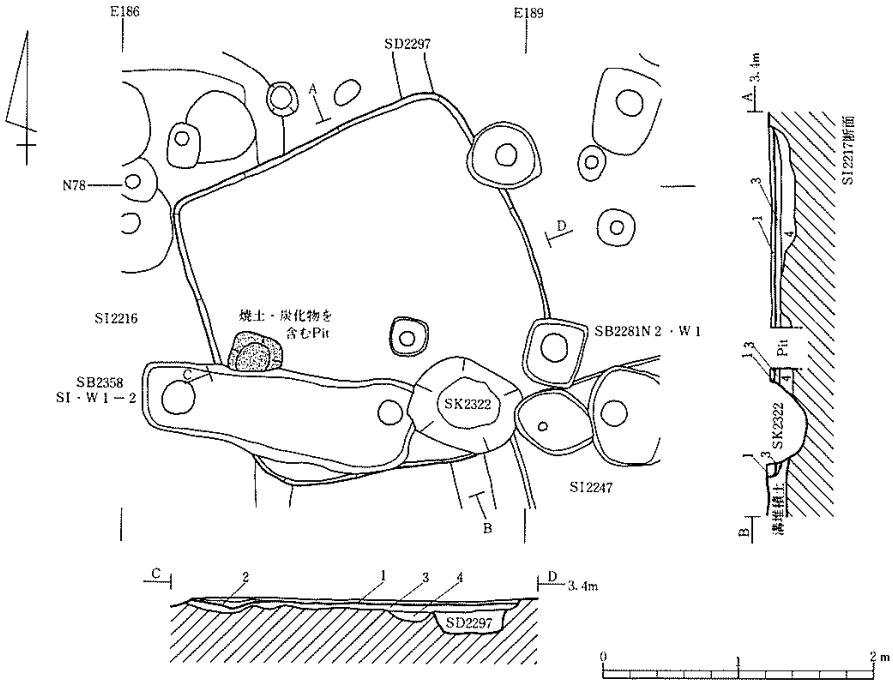
第14図　SI 2216住居跡



（単位：cm）

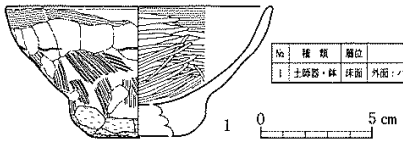
No.	種　類	層　位	特　徴	口　径	底　径	器　高	残存率	分　類	写真図版
1	土師器・坏	掘り方埋土	外面：ヨコナデ、ナデ→ヘラケズリ　内面：ヘラミガキ→黒色処理	(15.0)	6.2	4.3	2/5		
2	土師器・坏		外面：ヨコナデ、ヘラケズリ　内面：ヨコナデ	(15.1)	－	5.1	3/5		17-3
3	土師器・坏	掘り方埋土	外面：ハケメ→ヨコナデ、ハケメ→ヘラケズリ→ナデ　内面：ヘラミガキ→黒色処理	－	10.7	－	1/6		
4	土師器・高坏	確認面	坏部外面：ヨコナデ、ハケメ→ナデ　坏部内面：ヘラミガキ→黒色処理　脚部外面：ヨコナデ→ヘラケズリ	12.4	8.8	10.8	3/5		17-2

第15図　ＳＩ2216住居跡出土遺物



No.	土　色	土性	備　考	No.	土　色	土　性	備　考
1	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト	〈住居内堆積土〉	3	黒褐色(2.5Y3/1)	シルト	〈掘り方埋土〉ややしまりあり。地山の土を微量に含む。
2	灰色(5Y4/1)		〈カマド残滓〉炭化物・焼土を多く含む、灰の層。	4	黒褐色(2.5Y3/1)	粘土質シルト	〈掘り方埋土〉地山の土をブロック状に多く含む。

第16図　ＳＩ2217住居跡



(単位：cm)

No.	種類	層位	特徴	口径	底径	器高	残存率	分類	写真図版
1	土師器・鉢	床面	外面：ハケメ・ヨコナデ→ナデ、ハケメ→ヘラケズリ　内面：ヨコナデ→ヘラミガキ	(11.9)	(4.4)	5.9	1/3		

第17図　ＳＩ2217住居跡出土遺物

床面は黄褐色シルト小ブロック・細粒を微量斑状に、また炭化物を少量含む黒褐色シルの貼床が全面に認められ、ほぼ平坦である。

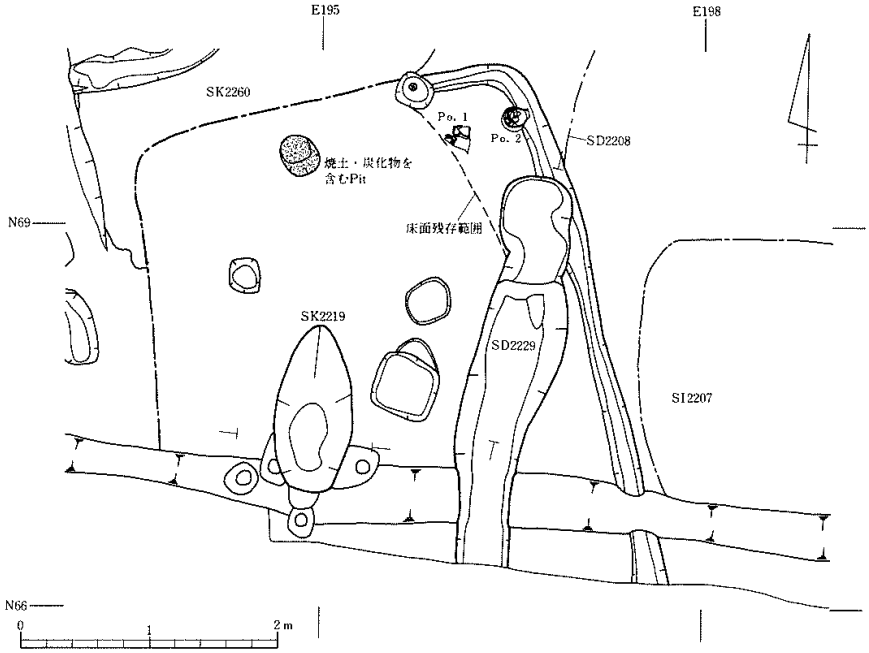
主柱穴および壁柱穴、周溝、貯蔵穴は認められない。

カマドは本体および煙道とも完全に削平されているが、西辺中央やや南寄りの壁際で本体の底面の痕跡と見られる焼土・炭化物を多量に含む浅い皿状のピットを検出したことより、この場所に付設されたと推定される。住居跡の方向は、西辺でみると北で約23度西へ偏している。

住居跡内の堆積土は1層確認している。

遺物は床面から非ロクロ調整で内黒の土師器の鉢(第17図1)が1点出土している。

ＳＩ2225(第18・19図)



第18図　SI 2225住居跡

調査区東半部の南壁際で検出した竪穴住居跡で、南半部は調査区外である。ＳＫ2260、ＳＤ2208と重複し、いずれよりも古い。

規模は、北辺(東西)約3.3m、東辺4m以上で、平面形は隅丸方形をなす。かろうじて床面を検出できただけである。

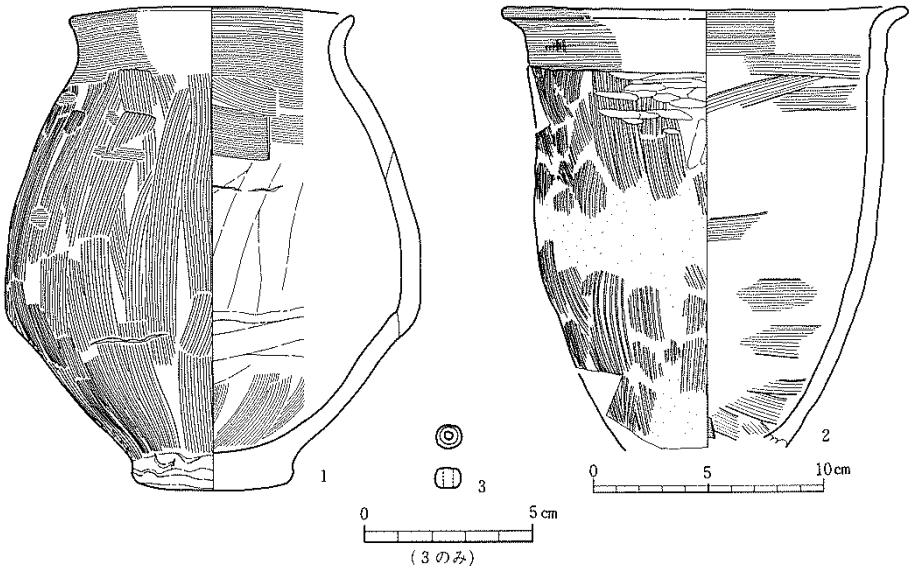
床面は、全面黄褐色土小ブロックを斑状に、炭化物を少量含む黄灰色粘土土質シルトの貼床で、ほぼ平坦である。

主柱穴、周溝、貯蔵穴は認められない。

カマドは本体および煙道とも完全に削平されているが、北辺中央やや西寄りの壁際で、本体の底面の痕跡と見られる焼土・炭化物を多量に含む浅い皿状のピットを検出したことより、この場所に増設されたと推定される。住居跡の方向は、東辺でみると北で約15度西へ偏している。

住居跡内の堆積土は部分的ではあるが1層だけ確認している。

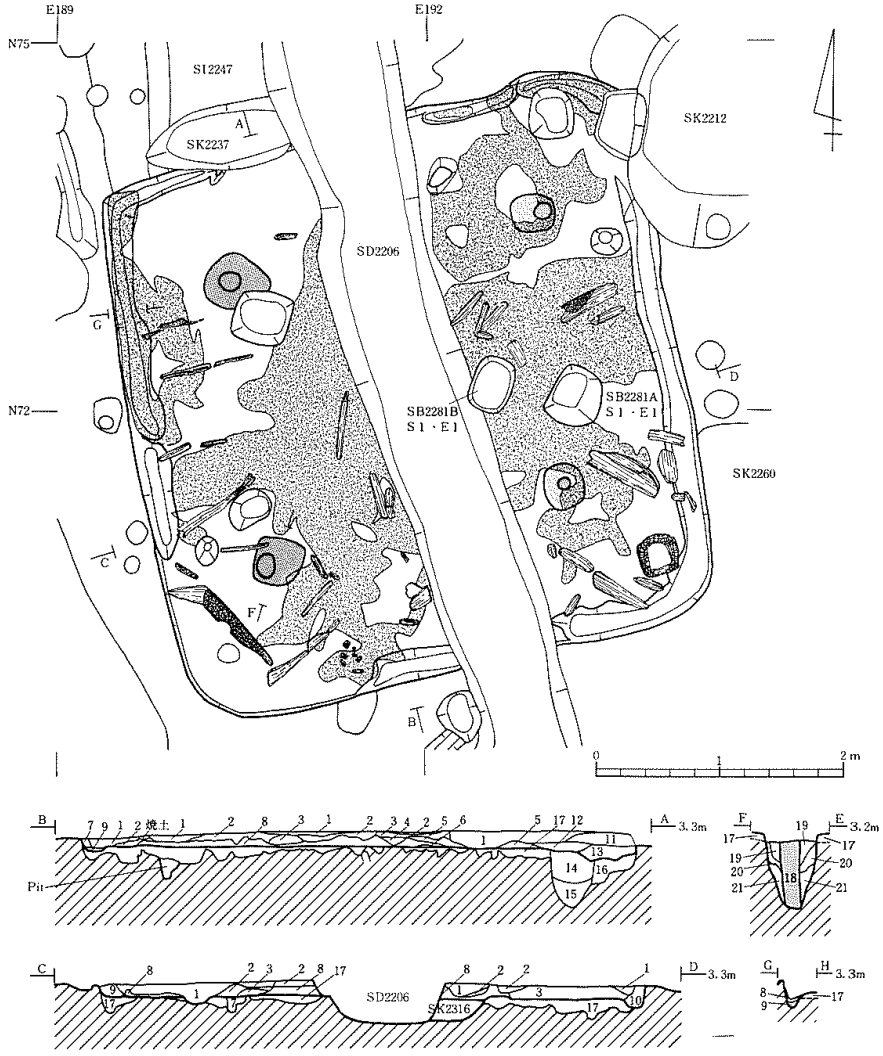
遺物は床面から非ロクロ調整の土師器の甕(第19図1・2)が2点と堆積土から土製の丸玉(3)が1点出土している。



(単位：cm)

No	種類	層位	特徴	口径	底径	器高	残存率	分類	図版番号
1	土師器・甕	床面(Po.2)	外面：ハケメ→ヨコナデ　内面：ヨコナデ、ヘラナデ→ナデ	12.2	6.4	21.0	4/5		17-4
2	土師器・甕	床面(Po.1)	外面：ハケメ→ヨコナデ・粗いミガキ　内面：ヘラナデ→ヨコナデ	17.7	—	—	4/5		
3	土製丸玉	堆積土	外面：ミガキ　径：0.8 cm　孔の径：0.3 cm						27-3

第19図　ＳＩ2225住居跡出土遺物



No.	土色	土性	備考	No.	土色	土性	備考
1	黒褐色(10YR3/1)	粘土質ｼﾙﾄ	〈住居内堆積土〉炭化物・焼土・地山の土を含む。	12	黒色(10YR2/1)	粘土質ｼﾙﾄ	〈カマド内堆積土〉多量の炭化物、焼土を含む。
2	黒褐色(10YR2/2)	粘土質ｼﾙﾄ	〈住居内堆積土〉少量の炭化物と多量の地山の土を含む。	13	黄灰色(2.5Y4/1)	粘土質ｼﾙﾄ	〈カマド内堆積土〉多量の炭化物、焼土を含む。
3	黒褐色(10YR2/2)	粘土質ｼﾙﾄ	〈住居内堆積土〉地山の土を多量に含む。	14	黄灰色(2.5Y4/1)	シルト	〈カマド掘り方埋土〉地山の土を多く含む。しまりあり。
4	黄灰色(2.5Y4/1)	粘土質ｼﾙﾄ	〈住居内堆積土〉炭化物・焼土・地山の土を含む。	15	褐灰色(10YR4/1)	粘土質ｼﾙﾄ	〈カマド掘り方埋土〉地山の土を粒状に多く含む。
5	灰褐色(5Y4/2)	粘土質ｼﾙﾄ	〈住居内堆積土〉炭化物、焼土を多量に含む。	16	にぶい黄色(2.5Y6/3)	粘土	〈カマド掘り方埋土〉地山の土が主体の層。しまりあり。
6	黄灰色(2.5Y4/1)	粘土質ｼﾙﾄ	〈住居内堆積土〉地山の土を少量含む。	17	黒褐色(10YR3/1)	シルト	〈掘り方埋土〉地山の土を多く含む。しまりあり。
7	黒褐色(10YR3/1)	粘土質ｼﾙﾄ	〈住居内堆積土〉多量の炭化物、焼土を含む。	18	黒褐色(10YR3/1)	粘土	〈主柱柱痕跡〉炭化物を少量含む。
8			炭化物のみの層。	19	灰黄色(2.5Y6/2)	粘土質ｼﾙﾄ	〈主柱穴埋土〉地山の土を粒状に多く含む。しまりあり。
9	にぶい黄色(10YR6/3)	粘土質ｼﾙﾄ	〈周溝内堆積土〉地山の土を多量に含む。	20	にぶい黄色(2.5Y6/3)	粘土	〈主柱穴埋土〉しまりあり。
10	黒褐色(10YR3/1)	粘土質ｼﾙﾄ	〈周溝内堆積土〉炭化物、焼土、地山の土を多く含む。	21	灰オリーブ(5Y6/2)	砂質シルト	〈主柱穴埋土〉地山の土を多く含む。しまりあり。
11	褐灰色(10YR4/1)	粘土質ｼﾙﾄ	〈カマド内堆積土〉若干の炭化物と多量の焼土を含む。				

第20図　SI 2226住居跡

ＳＩ2226（第20・21図）

調査区中央部南半で検出した竪穴住居跡である。ＳＩ2247、ＳＢ2281、ＳＫ2212、2237、2260、ＳＤ2206と重複し、ＳＩ2247、ＳＫ2260より新しいが、ＳＢ2281、ＳＫ2212、2237、ＳＤ2206より古い。

規模は、西辺（南北）・南辺(東西)とも約4.4mで、平面形は隅丸方形をなす。壁は10cmほどしか残っていない。

床面は南東隅を中心に部分的に貼床が見られる。

柱穴は主柱穴を対角線上の4箇所で検出しており、一辺30～50cmほどの不整方形、長径約35cm、短径約30cmの不整楕円形をなし、深さは40～55cmである。いずれの柱穴でも柱痕跡を確認しており、径15～20cmである。

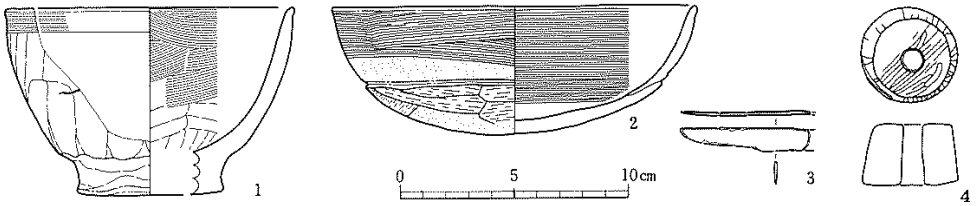
周溝は北辺西半部と南西隅を除く各辺で確認しており、上端幅10～30cm、底面幅5～24cm、深さ3～10cmで、断面は緩やかなU字形をなす。埋土は黄褐色シルト細粒・炭化物・焼土を多く含む黒色シルトである。

この他、貯蔵穴など住居に伴う施設は確認できなかった。

カマドは北辺西半部に付設されている。本体は、両側壁が3～4cm残存しているだけであるが、内幅約30cm、奥行き約50cmである。煙道は完全に削平されている。住居跡の方向は、西辺でみると北で約11度西へ偏している。

住居跡内の堆積土は8層に、カマド内の堆積層は3層に細分できる。この中の床面を直接覆う第8層が焼土層であることから、本住居は火災にあって廃絶したとみられる。

遺物は床面と堆積層から非ロクロ調整の土師器が少量出土している他、床面から土製の紡錘車(第21図4)が1点、堆積土から刀子(3)が1点出土している。土器で図示でき



（単位：cm）

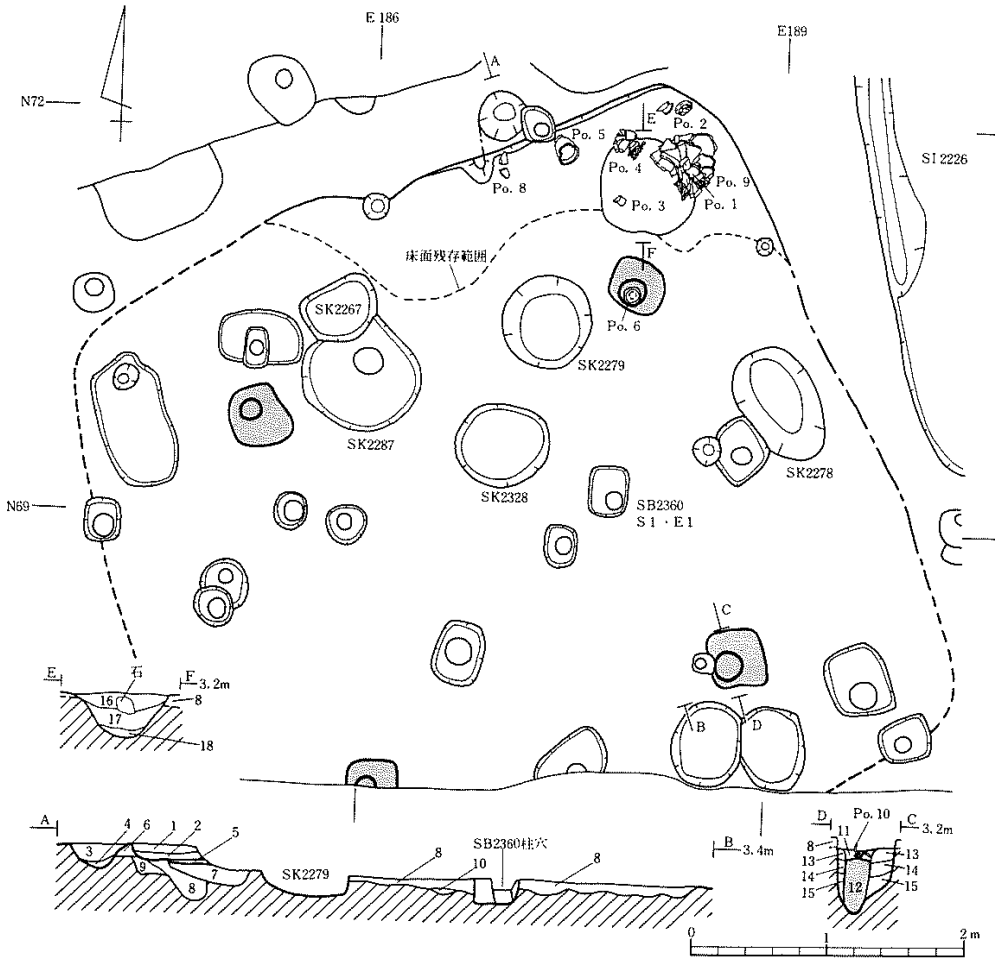
No.	種類	層位	特徴	口径	底径	器高	残存率	分類	写真図版
1	土師器・鉢	床面	外面：ナデ→ヨコナデ　内面：ナデ→ヘラナデ→ヨコナデ	(12.8)	(6.5)	(8.3)	1/4		
2	土師器・坏	3層	外面：ヨコナデ、ヘラケズリ　内面：ヘラナデ→ヨコナデ	15.9	－	5.6	1/2		17-5
3	刀子	2層	平造、平棟　残存長：5.7 cm						
4	土製紡錘車	床面	下端径：4.2 cm　上端径：3.4 cm　高さ：2.7 cm　貫通孔の径：0.9 cm　外面：ミガキ						21-4

第21図　ＳＩ2226住居跡出土遺物

るものとしては床面と堆積土から出土した土師器の鉢（1）と坏（2）がある。またこの他、床面には炭化材も多く見られた。

ＳＩ2246（第22～24図）

調査区中央南壁際で検出した竪穴住居跡で、南端部は調査区外である。ＳＢ2360と重複



No.	土　色	土 性	備　考	No.	土　色	土 性	備　考
1	黒褐色(10YR3/1)	シルト	〈住居内堆積土〉多量の炭化物と若干の地山の土を含む。	10	黒褐色(10YR3/2)	粘土質ｼﾙﾄ	〈掘り方埋土〉地山の土を霧降り状に多く含む。
2	黒褐色(7.5YR3/1)	シルト	〈住居内堆積土〉炭化物と、微量の地山の土を含む。	11	黒褐色(10YR3/1)	粘土質ｼﾙﾄ	〈主柱穴切取り穴〉炭化物を多く含む。
3	黒褐色(10YR3/1)	シルト	〈煙出しピット〉炭化物・地山の土を少量含む。	12	黒褐色(2.5Y3/1)	粘土質ｼﾙﾄ	〈主柱柱痕跡〉
4	黒褐色(10YR3/1)	シルト	〈煙出しピット〉若干の炭化物と地山の土を含む。	13	黒褐色(10YR3/2)	粘土質ｼﾙﾄ	〈主柱穴埋土〉地山の土を多く含む。
5	暗褐色(10YR3/3)	シルト	〈カマド内堆積土〉炭化物を若干含む。	14	黒褐色(10YR3/1)	粘土質ｼﾙﾄ	〈主柱穴埋土〉地山の土を霧降り状に含む。
6	黒褐色(10YR2/2)	シルト	〈カマド掘り方埋土〉地山の土を含む。しまりあり。	15	黒褐色(10YR3/1)	粘土質ｼﾙﾄ	〈主柱穴埋土〉地山の土を霧降り状に多く含む。
7	灰黄褐色(10YR4/2)	粘土質ｼﾙﾄ	〈カマド掘り方埋土〉霧降り状に地山の土を含む。	16	暗褐色(10YR3/3)	シルト	〈貯蔵穴埋土〉炭化物・焼土を多く含む。
8	黒褐色(10YR3/2)	粘土質ｼﾙﾄ	〈掘り方埋土〉霧降り状に地山の土を含む。	17	黒褐色(2.5Y3/2)	シルト	〈貯蔵穴埋土〉若干の炭化物と、多量の地山の土を含む。
9	黒褐色(2.5Y3/1)	粘土質ｼﾙﾄ	〈掘り方埋土〉地山の土を少量含む。	18	黒褐色(2.5Y3/2)	シルト	〈貯蔵穴埋土〉地山の土を多く含む。

第22図　SI 2246住居跡

し、これより古い。

遺構の残存状況は南側ほど悪く、南半部が掘り方埋土まで削平されているため全体形は捉えられないが、規模は北辺(東西)3.6m以上、東辺(南北)3.3m以上、平面形は北東隅の状況から隅丸方形と考えられる。壁は最も残りの良い北東隅で10cmほどである。

床面は北東部の一部でしか確認できなかったが、貼床は認められなかった。

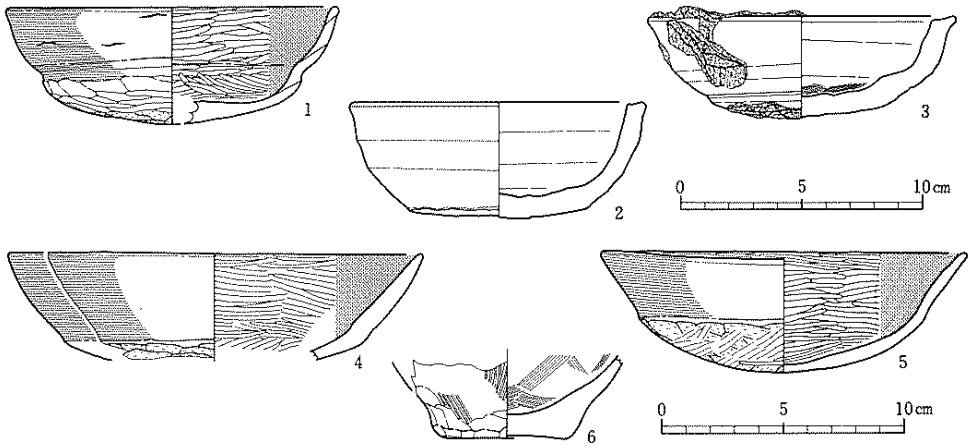
柱穴は主柱穴を4箇所で検出している。一辺30～50cmほどの方形をなし、深さは45～50cmである。いずれの柱穴でも柱痕跡を確認しており、径約20cmである。

周溝は認められないが、貯蔵穴を北東隅で確認している。長径約75cm、短径約65cmの楕円形をなし、深さは約43cmである。

カマドは北辺中央やや東寄りに付設されている。カマド本体では西側壁が約10cm残存しており、内幅約30cm、奥行き約20cmと推定され、奥壁は急角度で立ち上がり約35cmの煙出し孔へ続く。住居跡の方向は、東辺でみると北で約28度西へ偏している。

住居跡内の堆積土は2層、カマド内の堆積土は1層確認しており、いずれも自然堆積である。

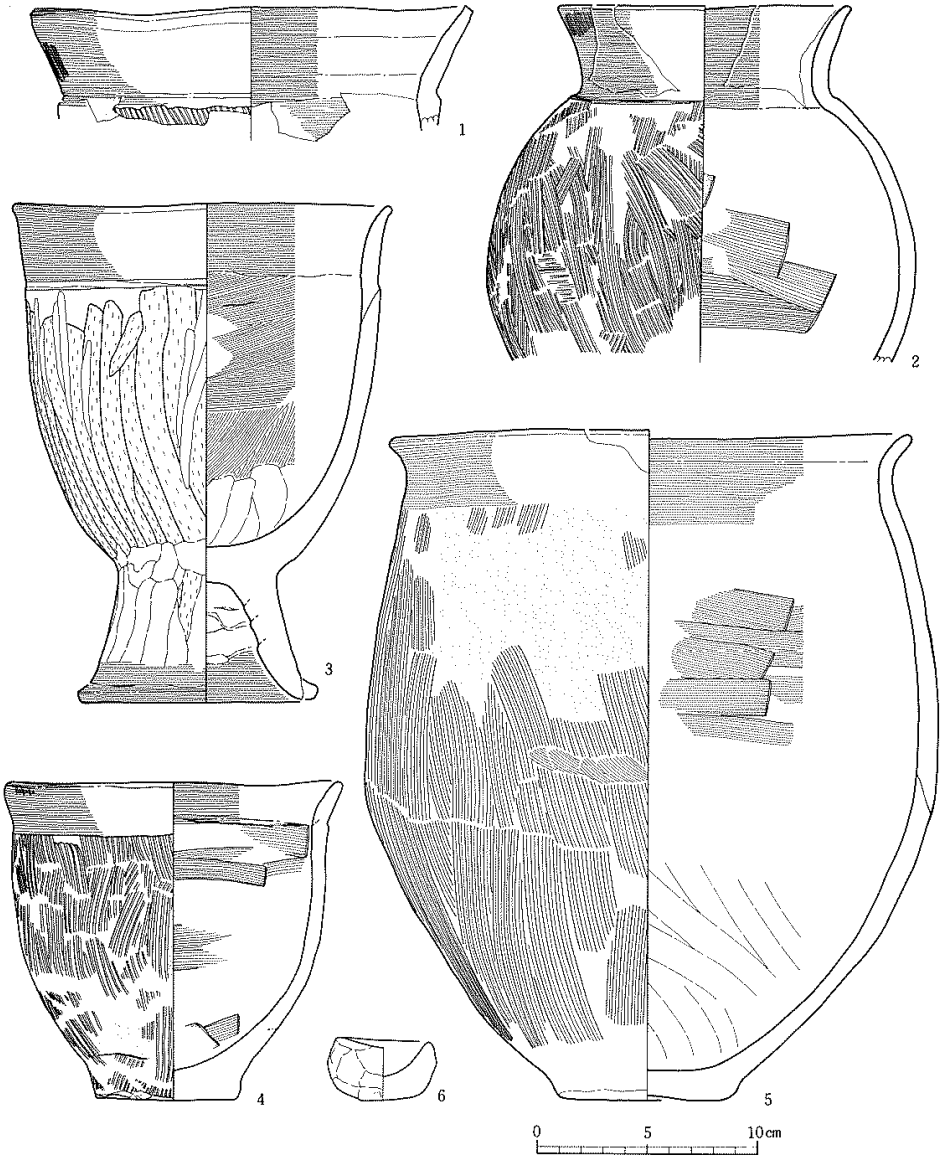
遺物は住居跡の北西部を中心に、床面や貯蔵穴の堆積土上面および柱の抜取り穴の堆積上中などから非ロクロ調整の土師器と須恵器が出土している。（第23図～25図）。床面からは



（単位：cm）

No	種類	層位	特徴	口径	底径	器高	残存率	分類	写真図版
1	土師器・坏	床面(Po.2)	外面：ヨコナデ→ナデ→ミガキ、ケズリ→ミガキ　内面：ミガキ→黒色処理	(13.6)	－	4.8	1/2		17-6
2	須恵器・坏	貯蔵穴上面	外面：ロクロナデ、ヘラ切り　内面：ロクロナデ→ナデ	12.1	(7.5)	4.9	完形		18-2
3	須恵器・坏	柱抜取穴(Po.6)	外面：ロクロナデ、ヘラ切り　内面：ロクロナデ→ナデ	12.6	－	4.3	ほぼ完形		18-1
4	土師器坏	カマド(Po.8)	外面：ヨコナデ、ナデ→ヘラケズリ　内面：ヘラミガキ→黒色処理	(16.9)	－	－	一部		
5	土師器坏	貯蔵穴上面(Po.4)	外面：ヨコナデ、ナデ→ヘラケズリ　内面：ヘラミガキ→黒色処理	15.0	－	5.0	ほぼ完形		17-8
6	土師器甕	貯蔵穴上面(Po.3)	外面：ハケメ→ナデ　内面：ナデ	－	4.9	－	一部		

第23図　SI2246住居跡出土遺物（1）



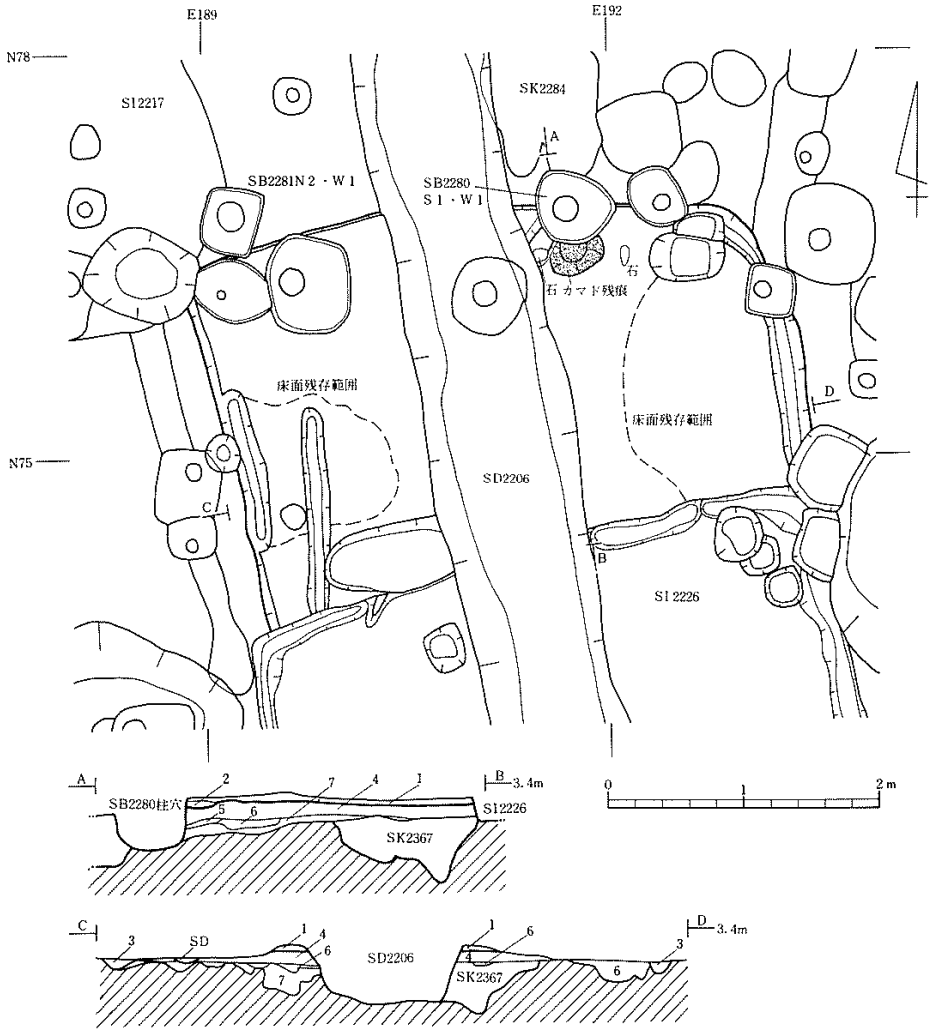
（単位：cm）

図	種　類	層　位	特　徴	口　径	底　径	器　高	残存率	分　類	写真図版
1	土師器・甕	床　面	頸部に段　外面：ハケメ→ヨコナデ　内面：ナデ→ヨコナデ	20.1	－	－	一部		
2	土師器・甕	柱抜取穴(Po.10)	頸部に段　外面：ハケメ→ヨコナデ　内面：ヘラナデ→ヨコナデ	13.4	－	－	3/5		
3	土師器台付甕	貯蔵穴上面(Po.1)	頸部に軽い段　外面：ヨコナデ、ヘラケズリ→粗いミガキ　内面：ナデ→ヨコナデ、ナデツケ	17.1	－	(22.8)	4/5		18-6
4	土師器・甕	カマド(Po.5)	頸部に段　外面：ハケメ→ヨコナデ、ナデ　内面：ヘラナデ→ヨコナデ	15.4	6.4	14.5	4/5		17-7
5	土師器・甕	貯蔵穴上面(Po.9)	外面：ハケメ→ヨコナデ、ナデ　内面：ヘラナデ→ヨコナデ	27.5	8.2	30.7	ほぼ完形		18-10
6	土製模造品	貯蔵穴	外面：ナデ　内面：ナデ	4.1	－	2.9	完形		17-9

第24図　ＳＩ2246住居跡出土遺物（２）

土師器の内黒の坏（第23図1）・甕（第24図1）が、また堆積土や柱の抜き取り穴の堆積土からは土師器では坏（第23図4・5）・甕（第23図6、第24図2・4・5）・台の付く甕・（3）・ミニチュア土器（6）、須恵器では坏（第23図2・3）が2点出土している。

Ｉ2247（第25・26図）



No.	土　色	土 性	備　　考	No.	土　色	土 性	備　　考
1	黒褐色(7.5YR3/1)	粘土質ｼﾙﾄ	〈住居内堆積土〉炭化物・焼土・少量の地山の土を含む。	5	褐灰色(7.5YR4/1)	粘土質ｼﾙﾄ	〈掘り方埋土〉ややしまりあり。
2	黒褐色(10YR3/1)	粘土質ｼﾙﾄ	〈カマド内堆積土〉多くの炭化物・焼土を含む。	6	褐灰色(10YR4/1)	粘土質ｼﾙﾄ	〈掘り方埋土〉地山の土を多く含む。しまりあり。
3	黒褐色(10YR3/1)	粘土質ｼﾙﾄ	〈周溝内埋土〉炭化物・地山の土を含む。	7	灰黄色(2.5Y6/2)	粘土質ｼﾙﾄ	〈掘り方埋土〉褐灰色土を少量含む。しまりあり。
4	黒褐色(10YR3/1)	粘土質ｼﾙﾄ	〈貼床〉少量のブロック状の地山の土を含む。				

第25図　ＳＩ2247住居跡

調査区中央部南半で検出した竪穴住居跡である。ＳＩ2226、ＳB2280・2281・2355、ＳK2237・2367、ＳD2206と重複し、ＳK2367より新しいが、それ以外よりは古い。

規模は、北辺(東西)約4.2m、南北方向が南半部をＳＩ2226によって壊されているため西辺で2.5m以上で、平面形は北半部の状況から隅丸方形をなすと見られる。壁は8cmほどしか残っていない。

床面は全面黄褐色シルト小ブロックと炭化物を少量含む黒褐色シルトの貼床で、ほぼ平坦である。主柱穴、壁柱穴は確認できない。

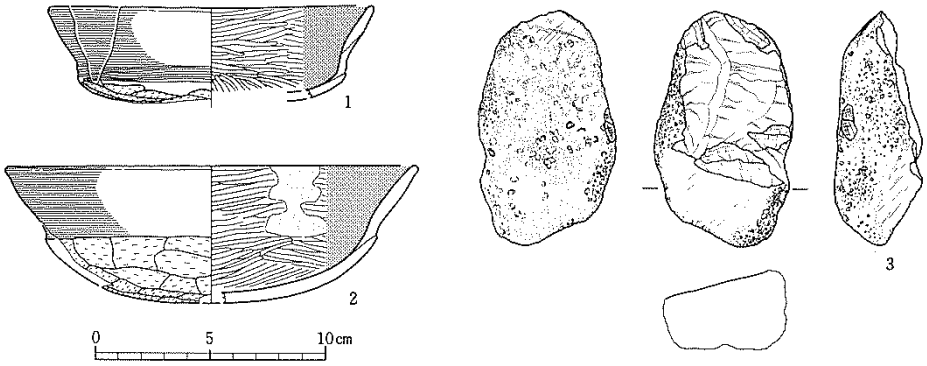
周溝は東辺と西辺の一部で確認しており、上端幅10～25cm、底面幅5～9cm、深さ4～13cmで、断面は緩やかなU字形をなす。埋土は黄褐色シルト細粒と炭化物を少量含む黒褐色粘土質シルトである。

この他、北東隅で長径約55cm、短径約30cmの平面形が楕円形で深さ約25cmの貯蔵穴を検出している。

カマドは、本体・煙道とも削平されているが、北辺中央やや東よりで焼土・炭化物が多量に含まれる浅い皿状の落込みと、その両側で炊き口の補強に使用されたとみられた石を検出していることから、この場所に付設されたと推定される。住居跡の方向は、西辺でみると北で約14度西へ偏している。

住居跡内の堆積土は1層確認している。

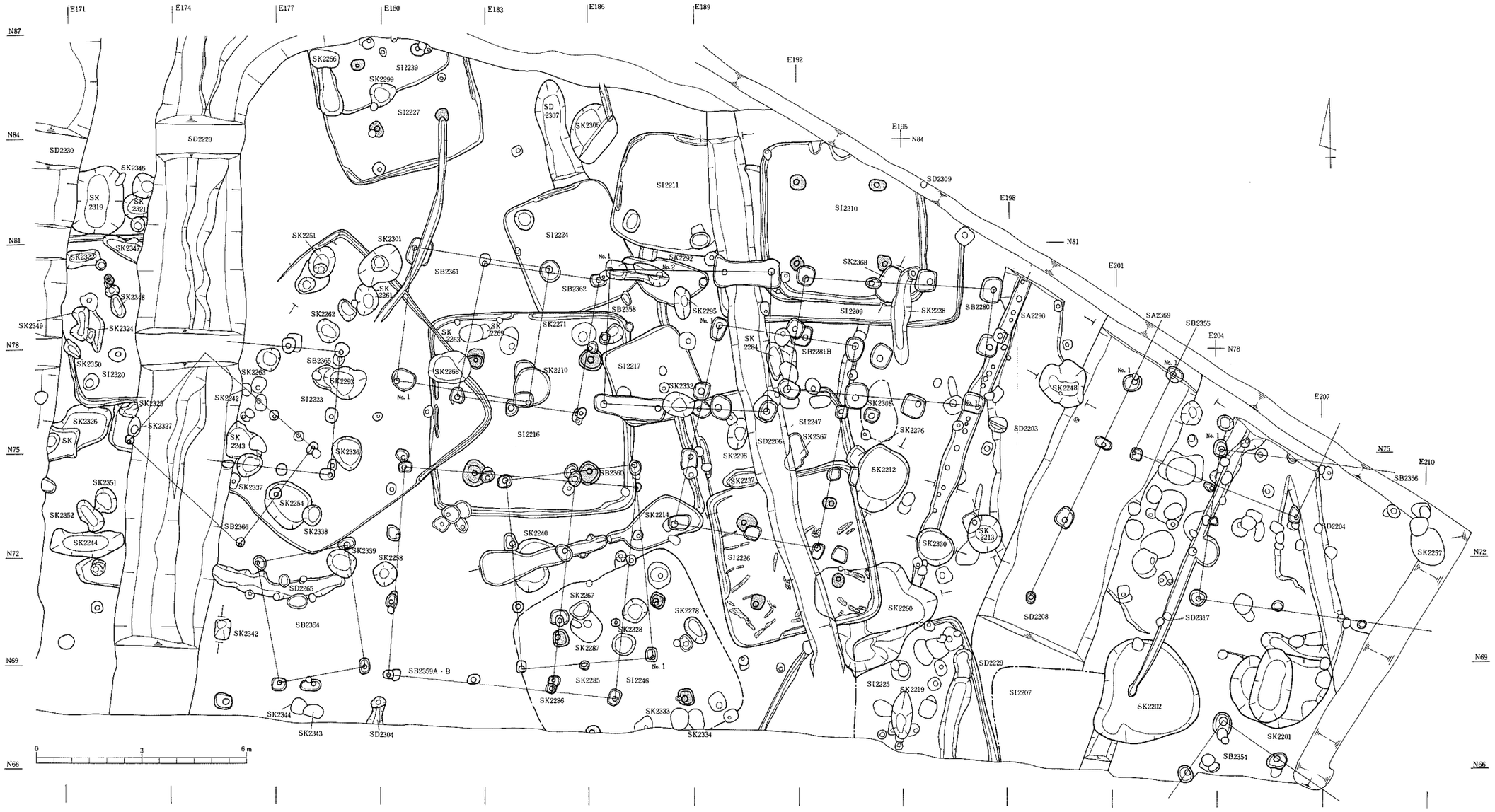
遺物は床面と貯蔵穴の堆積層から非ロクロ調整の土師器の坏(第26図1・2)・甕が少量と砥石1点が出土している。



（単位：cm）

No.	種　類	層位	特　　徴	口　径	底　径	器　高	残存率	分　類	写真図版
1	土師器・坏	床面	外面：ヨコナデ、ナデ→ヘラケズリ　内面：ヘラミガキ→黒色処理	(14.0)	－	－	1/3		
2	土師器・坏	床面	外面：ヨコナデ→ヘラケズリ　内面：ヘラミガキ→黒色処理	(17.8)	－	6.0	1/4		
3	砥　石	床面	石材：砂岩　大きさ：10.2×6.1 cm　厚さ：3.5 cm						

第26図　ＳＩ2247住居跡出土遺物



第27図　Ⅰ区東半部の検出遺構

以上の他に、床面まで完全に削平された住居跡を8軒検出しており、次にそれらの概要を簡単に記述してゆくことにする。

ＳＩ2207(第27図)

調査区東端部の南壁際で掘り方埋土の痕跡をかろうじて検出した竪穴住居跡で、南半部は調査区外である。ＳK2202、ＳD2208と重複しており、ＳD2208より新しいが、ＳK2202より古い。

南半部が調査区外、東端部がＳK2202によって壊されているため、規模は北辺(東西)3.2m以上、西辺(南北)2.1m以上となり、平面形は隅丸方形をなす。

床面は黄褐色シルト小ブロックを斑状に、炭化物・焼土を少量含む黒褐色シルトの貼床で、全面に認められ、ほぼ平坦である。

床面・柱穴・周溝・貯蔵穴・カマドはすべて削平されている。住居跡の方向は堀方の北辺でみると、東で約4度南へ偏している。

掘り方埋土は1層である。

遺物は掘り方埋土からロクロ調整で内黒の土師器の坏が1点出土している。ＳＩ2209(第27図)

調査区東半部の北側で検出した住居跡で、北東部は調査区外である。ＳＩ2210、ＳB2280・2358、ＳK2228・2368、ＳD2206と重複し、いずれよりも古い。

西辺をＳD2206によって壊されているため、規模は南辺(東西)5.5m以上、南北約4.5mとなり、平面形は東西に長い隅丸の長方形である。

床面、主柱穴、貯蔵穴は検出できなかったが、周溝の痕跡を東辺南半～南辺で確認している。上端幅15～20㎝、底面幅約5㎝、深さは約10㎝残っており、断面形は緩やかなU字形をなす。住居跡の方向は、掘り方の南辺でみると、東で約1度南へ偏している。

掘り方埋土は2層に細分される。

遺物は非ロクロ調整土師器の小破片が少量出土している。

ＳＩ2223(第9図)

調査区南西部中央よりで検出した住居跡で、北辺西半部～西辺北半部にかけてＳD2220によって壊されているが、北辺中央部が外側へ張り出すものと考えられる。ＳＩ2216、ＳB2359・2361・2362・2364・2365、ＳK2250、ＳD2260と重複し、ＳＩ2216、ＳK2250より新しいが、それ以外のものよりは古い。

規模は東辺約7.2m、南辺約7.1m、平面形は隅丸方形をなす。

主柱穴は確認されていないが、周溝の痕跡と貯蔵穴を検出している。周溝は北辺東半部～東辺～南辺東半部で見られ、上端部6～23㎝、底面幅3～12㎝である。深さは3～8

㎝残っており、断面は緩やかなU字形をなす。貯蔵穴は北東隅にあり、径約80㎝の多少歪んだ円形をなす。堆積土には焼土と炭化物が多く見られた。

カマドは、本体の痕跡はな何も残っていないが、北辺中央部が外側に張り出し、その内側に焼土を多量に含む小ピットが認められたことから、この場所に付設されたと考えられる。

住居跡の方向は、掘り方の東辺でみると、北で約40度西へ偏している。

掘り方埋土は1層である。

遺物は非ロクロ調整の土師器の小破片が少量出土している。

ＳＩ2224（第27図）

調査区中央北半部で検出した住居跡である。ＳＩ2211・2216、ＳＢ2358・2361・2362、ＳＫ2292、ＳＤ2307と重複し、ＳＤ2307より新しいが、この他のものよりは古い。

規模は北辺(東西)約3.1㎝、南北約3.5mで、平面形は隅丸方形をなす。

主柱穴は確認できないが、周溝と貯蔵穴を検出している。周溝は北辺中央部で見られ、上端幅約15㎝、底面幅約5㎝、深さ7㎝で、断面はU字形をなす。貯蔵穴は北西隅にあり、径約55㎝のほぼ円形をなし、深さは約18㎝残っている。

カマドは、本体の痕跡は残っていないが、北辺中央やや東寄りに焼け面の痕跡が認められたことからこの場所に付設されたと見られる。住居跡の方向は、掘り方の西辺でみると、北で約23度西へ偏している。

掘り方埋土は1層である。

遺物は出土していない。

ＳＩ2227(第27図)

調査区北西部で検出した住居跡である。ＳＩ2239ＳＤ2220と重複し、いずれよりも古い。規模は南辺(東西)で約4.1m、北半部がＳＩ2239に壊されているため東辺(南北)は2.4m以上となり、平面形は隅丸方形をなす。

主柱穴は4箇所で検出しており、一辺40～50㎝ほどの不整方形をなし、深さは11～35㎝残っていた。周溝は南辺西半部と東辺北半部で確認しており、上端幅9～19㎝、底面幅4～13㎝、深さは6～9㎝であり、断面は緩やかなU字形をなす。貯蔵穴・カマドは検出できなかった。住居跡の方向は、掘り方の南辺でみると東で約18度北へ偏している。

掘り方埋土は1層である。

遺物は出土していない。

ＳＩ2239(第9図)

調査区北西部で検出した住居跡である。ＳＩ2227、ＳＤ2220と重複し、ＳＩ2227より新しくＳＤ2220より古い。

規模は、北半部をＳＤ2220に大きく壊されているため、西辺が(南北)2.1m以上、南辺(東西)約4.1mで、平面形は隅丸方形をなす。

主柱穴、カマド、周溝、貯蔵穴はいづれも検出されていない。住居跡の方向は、掘り方の南辺でみると、東で約25度北へ偏している。

掘り方埋土は1層である。

遺物は出土していない。

ＳＩ2315(第28図)

調査区北西隅で検出した住居跡で、一度建て替えられている。東半部をＳＤ2221に壊されている。

規模は、北辺（東西）1.8m以上、南北が主柱穴を参考にすると4.5m以上で、平面形は隅丸方形をなす。

主柱穴は西半部の2箇所で検出しており、2時期の重複が見られる。新しい方の柱穴は長径約60cm、短径約50cmの不整楕円形をなし、深さは45～50cm残っていた。古い方の柱穴は新しい柱穴によって大きく壊されているため判然としないが、一辺40cm程度の不整方形をなすと推定される。

周溝の痕跡を北辺から西辺にかけて検出しており、上端幅10～15cm、底面幅10～15cm深さ約5cmで、断面は緩やかなU字形をなす。

貯蔵穴は北西隅で検出しており、長径約50cm、短径約40cm、の楕円形をなし、堆積土は焼土・炭化物、黄褐色シルト細粒を含む黒色シルトである。

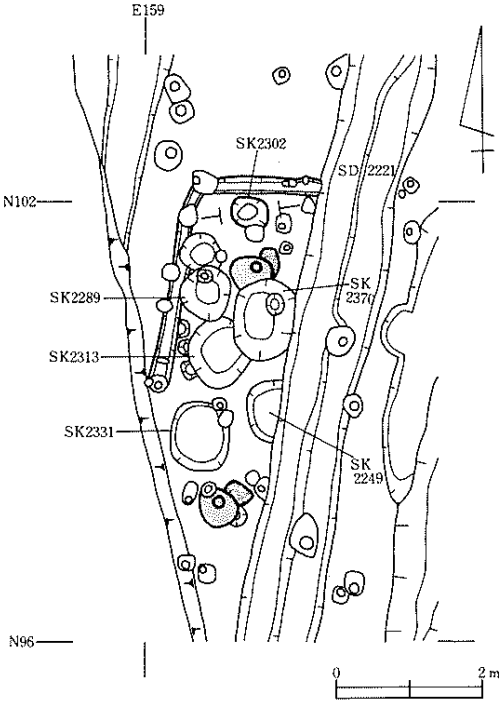
カマドは検出されていない。住居跡の方向は、掘り方の西辺でみると、北で約11度東へ偏している。

遺物は出土していない。

ＳＩ2320(第27図)

調査区西岸部中央で検出した住居跡で、東半部をＳＤ2220、北西部をＤＳ2230によって壊されている。

規模は、南北約4.8mで、北辺（東



第28図　SI2315住居跡

西）2.5m以上、平面形は隅丸方形をなす。

主柱穴は西側の2箇所で検出しており、径30㎝～40㎝ほどの不整円形をなし、深さは約50㎝残っていた。

周溝は痕跡を西辺南半部から南辺と北辺で検出しており、上端幅10～25㎝、底面幅10～15㎝、深さ3～5㎝で、断面は浅い皿状をなし、堆積土は黄褐色シルト細粒を少量含む黒褐色シルトである。

貯蔵穴、カマドは検出されていない。住居跡の方向は、掘り方の北辺でみると、東で約1度北へ偏している。

遺物は出土していない。

②；建物跡

建物跡はいずれも掘立柱建物跡で、小規模なものが多い。遺物は柱穴埋土と柱抜取り穴から土師器が少量出土している。しかしいずれも小破片で特徴を把握できるものではないが、竪穴住居跡や河川跡などとの重複関係から、ほとんどのものが奈良時代以降のものと考えられる。

ＳＢ2280(第27･29･36図)

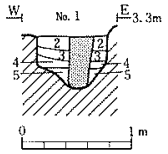
調査区中央部北半で全形を検出した東西3間、南北2間の東西棟建物跡である。ＳＩ2209･2210･2247、ＳＢ2281、ＳＫ2368と重複しており、ＳＢ2281より古いが、その他のものよりは新しい。

柱穴は10箇所すべてで検出しており、柱痕跡もすべての柱穴で確認している。規模は一辺50～70㎝ほどの隅丸方形のものと長径45㎝､短径30㎝ほどの楕円形のものの2種類がみられる。壁はほぼ垂直に掘り込まれ、深さは約60㎝残っていた。埋土は炭化物を含む黒褐色シルトが主体で､霜降り状に含まれる黄褐色シルト細粒･ブロックの量で細分される。柱痕跡はすべての柱穴で確認しており、径15～20㎝ほどの円形である。なお、柱板取り穴は認められない。

柱間寸法は、桁行が北側柱列でみると、西から1.84m、1.70m、1.87mで、総長は5.41m、南側柱列で西から1.92m、1.79m、1.75mで総長は5.46mである。梁行は西妻でみると北から1.66m、1.66mで、総長は3.28m、東妻でみると北から1.67m、1.75mで、総長が3.41mである。

建物の方向は、北側柱列では、約3度、南側柱列で約5度それぞれ南へ偏している。

遺物は、すべて小破片で明確に特徴を把握できるものはほとんどないが、柱穴埋土から土師器が少量と･土錘が1点出土している。



第29図　SB2280
柱穴断面図

ＳＢ2281（第27・30図）

調査区中央部で全形を検出した南北3間、東西2間の南北棟建物跡である。東側柱列をやや西側に移動して建て替られている(Ａ→Ｂ)。ＳＩ2217･2226･2247、ＳＢ2280、ＳＫ2212･2214と重複し、いずれよりも新しい。

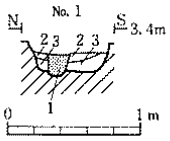
古いＳＢ2281Ａでは、柱欠を東側柱列で4箇所、北妻の棟通り下と西側柱列南端部の各1箇所の合計6箇所で検出している。規模は一辺35～70㎝ほどの不整方形で、壁はほぼ垂直に掘り込まれ、深さは15～50㎝残っている。埋土は炭化物を含む黒褐色シルトが主体で、含まれる黄褐色シルト細粒･ブロックの量で細分される。柱痕跡は3箇所で確認しており、径約20㎝の円形である。

柱間寸法は、桁行が東側柱列で北から1.63m、約1.8m、約2.3mで、総長は約5.7mである。梁行は北妻で東1間分判明しており2.11m、南妻で総長が約5mである。

建物の方向は、東側柱列でみると、北で約11度東へ偏している。

新しいＳＢ2281Ｂでは、柱穴を10箇所すべてで検出している。柱穴は、一辺30～40㎝ほどの方形のものから一辺40～70㎝ほどの方形のものまであり、規模にはバラツキが認められる。深さは25～50㎝残っていた。埋土は炭化物を小量含む黒褐色シルトを主体にし、含まれる黄褐色シルト細粒の量で細分される。柱痕跡は、前妻棟通り下の柱穴以外で確認しており、径15㎝前後の円形である。

柱間寸法は、桁行が東側柱列で北から1.90m、1.78m、1.85mで、総長が5.88m、また西側柱列では北から1.82m、2.01m、1.98mで、総長が5.80mである。梁行きは、北妻で東から2.08m、1.83mで、総長が3.91mである。建物の方向は、東側柱列でみると、北で約11度東へ偏している。



第30図　SB2281
柱穴断面図

遺物は柱穴埋土から土師器が少量出土しているが、いずれも小破片で特徴を把握できるものはない。

ＳＢ2354(第27図)

調査区南東隅で検出した3個の柱穴から想定した建物跡である。柱穴は径50㎝ほどの円形、長径約60㎝、短径約50㎝の楕円形をなし、深さは40㎝～50㎝ほど残っていた。

埋土は黄褐色シルト細粒を少量含む黒褐色シルトである。柱痕跡はすべての柱穴で確認しており、径20㎝ほどの円形である。

柱間寸法は、東西が1.86m、南北が1.83mである。建物の方向は、西側柱列でみると、北で約36度東へ偏している。遺物は出土していない。

ＳＢ2355（第27・31図）

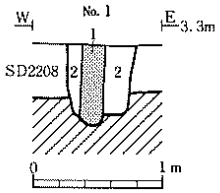
調査区東端部壁際で検出した建物跡で、南北2間以上、東西2間の南北棟建物跡と推定される。ＳＤ2203･2204と重複し、いずれよりも新しい。

柱穴は4箇所で検出しており、一辺約30㎝の方形、長径約30～50㎝、短径約20～40㎝の楕円形というように規模･平面形にバラツキがある。深さは、18～60㎝残っている。埋土は炭化物を少量含む黒褐色シルトを主体にし、含まれる黄褐色シルト細粒の量で細分される。柱痕跡はすべての柱穴で確認しており径10～17㎝ほどの円形である。

柱間寸法は桁行が西側柱列で、南から1間分判明しており2.57m、梁行が南妻で東から2.61mで約2.5mで、総長は約5.1mである。

建物の方向は西側柱列でみると、北で約27度東へ偏している。

遺物は出土していない。



第31図　ＳＢ2355
柱穴断面図

ＳＢ2356（第27・32図）

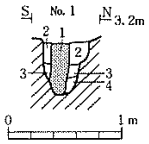
調査区北東隅で検出した東西3間以上、南北2間の東西棟建物跡である。ＳＢ2255、ＳＤ2203･2204･2317と重複し、ＳＤ2203･2204･2317よりも新しいが、ＳＢ2255とは直接柱穴が重複していないため、新旧関係は不明である。

柱穴は6箇所で検出しており、一辺25～50㎝ほどの多少歪んだ方形をなす。深さは10～65㎝残っており、埋土は炭化物を少量含む黒褐色シルトを主体し、含まれる灰黄褐色シルト･黄褐色シルト細粒の量で細分される。柱痕跡は径15㎝前後の円形である。

柱間寸法は桁行が南側柱列で、西より約2.5m、約2.4m、梁行が西妻で南より約2.2m、約2.0mで、総長4.26mである。

建物の方向は、西妻でみると北で約9度東へ偏している。

遺物は出土していない。

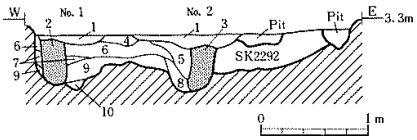


第32図　ＳＢ2356
柱穴断面図

ＳＢ2358（第27・33図）

調査区中央部で全形を検出した東西3間、南北2間の東西棟建物跡である。ＳＩ2209･2210･2216･2217･2223･2247、ＳＢ2281、ＳＤ2206と重複し、ＳＩ2209･2210･2216･2217･2223･2247より新しく、ＳＤ2206より古い。またＳＢ2281とも重複するが、新旧関係は不明である。

柱穴は、東妻棟通り下の柱穴を除いてすべて検出している。この中の南北両側柱列の2箇所の柱穴は、平面形が東西2m前後、南北0.6～1mほどの長方形をなし、東西両端の2箇所をさらに一段深



第33図　SB2358柱穴断面図

く掘り込んで柱をそれぞれ据えている。深さは柱を捉えた部分で約70㎝、柱の間の浅い部分で約20㎝残っている。また西妻棟通り下の柱穴は一辺30㎝前後の方形で、深さは20㎝残っている。埋土は黄褐色シルト細粒・炭化物を少量含む黒褐シルトを主体にし、含まれる黄褐色シルトの量で細分される。柱痕跡は9箇所で確認しており、径15～25㎝の円形である。

柱間寸法は、桁行が北側柱列で東から1.38m、1.83m、1.42mで総長が4.62m、南側柱列で東から1.57m、1.67m、1.42mで総長4.66mとなる。梁行は西妻で南から1.95m、1.88mで総長は3.83m、また東妻では総長が4.01mとなる。

建物の方向は北側柱列で見るとほぼ真東であるが、南側柱列では東で約2度南へ偏している。また西妻で見ると北で約2度東へ偏している。以上のように柱間寸法・建物の方向からみると、本建物跡は平面形が多少歪んでいることが知れる。

遺物は柱穴埋土から多量の土師器の他、須恵器が少量と赤焼土器の坏が数点出土している。須恵器の坏の中には底部の切り離しが回転糸切りで、調整の無いものがみられる。

ＳＢ2359（第27・36図）

調査区中央部南半で全形を検出した南北3間、東西3間の東に廂を持つ南北棟建物跡で、身舎ほぼ同位置で一度建て替えられている(A→B)。廂は柱穴に重複が見られないが、梁行の柱筋からみて新しいB建物に付く可能性が高い。S12216・2223・2246、ＳＢ2346、ＳＫ2240と重複し、いずれよりも新しい。

古いＳＢ2359Ａでは、柱穴を6箇所で検出しており、この中の3箇所で柱痕跡を確認している。柱穴は一辺30～50㎝ほどの方形・不整方形をし、深さは20㎝前後残っており、埋土は黄褐色シルト小ブロック・細粒を含む黒色シルトである。

柱間寸法は桁行が東側柱列で南から約1.8m、約3.7m(2間分)で総長5.46m、梁行が北妻で東より約2.4m、約2.5mで総長4.87mとなる。

建物の方向は東側柱列で見ると、北で約5度東へ偏している。

新しいＳＢ2359では身舎で10箇所、廂で4箇所のすべての柱穴を検出しており、柱痕跡は廂の柱穴の1箇所を除くすべてで確認している。身舎の柱穴は一辺30～60㎝ほどの方形・不整方形で、深さは約50㎝残っている。埋土は炭化物、黄褐色シルト細粒を含む黒色シルトである。廂の柱穴は身舎より一回り小さく、一辺20～40㎝ほどの方形・不整方形である。柱痕跡は15㎝前後で、廂のものは身舎のものより一回り小さい。

柱間寸法は身舎の桁行が東入側柱列で南より1.92m、2.00m、2.09mで総長6.01m、西側柱列で南より2.09m、1.91m、2.22mで総長6.21mである。梁行は南妻で東から2.32m、2.37mで総長4.69m、北妻で東より2.49m、2.52mで総長4.98mである。廂

は桁行が東側柱列で南より2.13m、1.79m、約2.1mで総長約6.0mで、出は南妻で1.81m、北妻で約1.8mである。

建物の方向は、西側柱列では北で約4度、東入側柱列では北で約6度東へ偏している。

遺物は柱穴埋土からロクロ調整土師器と須恵器の他に土錘が1点出土している。

ＳＢ2360(第27･34図)

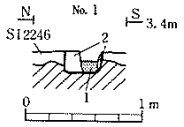
調査区の南半部で全形を検出した南北3間、東西2間の南北棟建物跡である。ＳＩ2216･2246、ＳＢ2359、ＳＫ2214･2240と重複し、ＳＩ2216･2246、ＳＫ2214より新しく、ＳＢ2359、ＳＫ2240より古い。

柱穴は9箇所で検出しており、一辺25～50㎝ほどの不整方形、径約30㎝の円形である。深さは10～30㎝ほど残っており、埋土は黄褐色シルト細粒、炭化物を少量含む黒褐色シルトである。柱痕跡は検出した柱穴すべてで確認しており、径20㎝前後である。

柱間寸法は桁行が西側柱列で南より1.77m、1.80m、1.84mで総長5.38mである。梁行は北妻で西より2.00m、1.76mで、総長3.76mである。

建物の方向は西側柱列で見ると北で約5度西へ偏している。

遺物は柱穴埋土から土師器と須恵器が少量出土している。この中の土師器にはロクロ調整の甕の小破片が数点みられる。



第34図　SB2360
柱穴断面図

ＳＢ2361（第27・35図）

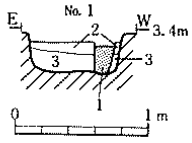
調査区中央部で検出した東西･南北1間の建物跡である。ＳＩ2216・2223･2224、ＳＢ2362と重複し、いずれよりも新しい。

柱穴は4個すべてを検出しており、一辺40～80㎝ほどの方形と径約50㎝の円形である。深さは最も残りのよいもので約40㎝､埋土は黄褐色シルト粒･炭化物を含む黒褐色シルトである。柱痕跡はすべての柱穴で確認しており、径約20㎝である。

柱間寸法は北側柱列で3.90m、南側柱列で3.86m、西側柱列で3.79m、東側柱列で3.85mである。

建物跡の方向は東側柱列でみると、北で約9度東へ偏している。

遺物は柱穴埋土から比較的多量のロクロ調整の土師器と少量の須恵器の他に丸瓦と平瓦が各1点出土している。



第35図　SB2361
柱穴断面図

ＳＢ2362(第27図)

調査区中央部付近で検出した南北2間、東西2間と考えられる南北棟建物跡である。ＳＩ2216･2223･2224、ＳＢ2361と重複しており、ＳＩ2216･2223･2224より新しく、ＳＢ2261より古い。

柱穴6箇所で検出しており、一辺30～50㎝の方形である。深さは最も残りの良いも

柱穴は6箇所で検出しており、一辺30～50㎝の方形である。深さは最も残りの良いもので約50㎝、埋土は黄褐色シルト粒、炭化物を少量含む黒褐色シルトである。柱痕跡は径15㎝前後である。

柱間寸法は、桁行が東側柱列で南より1.90m、1.97mで総長3.87m、梁行が南側柱列で東より1.93m、1.59mで総長3.51mである。

建物跡の方向は東側柱列でみると、北で約9度東へ偏している。

遺物は柱穴埋土から砂盤の非ロクロ調整の土師器と須恵器が数点出土している。

ＳＢ2364(第9･36図)

調査区西半南端部で検出した南北1間、東西1間の建物跡である。ＳＩ2223と重複しこれより新しい。

柱穴は4個すべてを検出しており、一辺20～50㎝ほどの方形である。深さは最も残りの良いもので約60㎝、埋土は焼土を微量、黄褐色シルト小ブロック･炭化物を少量含む黒褐色シルトである。柱痕跡はすべての柱穴で確認しており、径10～20㎝である。

柱間寸法は、西側柱列で3.52m、東側柱列で3.47m、北側柱列で2.60m、南側柱列で2.51mである。

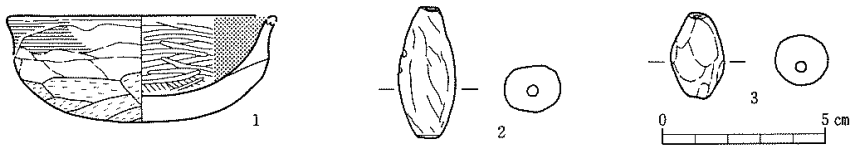
建物跡の方向は西側柱列でみると北で約10度西へ偏している。

遺物は堅穴埋土から非ロクロ調整で内黒の土師器の坏が1点出土している。ＳＢ2365(第9図)

調査区西半部中央で検出した東西3間、南北2間の東側棟建物跡である。ＳＩ2223、ＳＤ2220と重複し、ＳＩ2223より新しく、ＳＤ2220には西妻部分を大きく壊されている。

柱穴は6箇所で検出しており、一辺30～50㎝ほどの方形である。深さは最も残りのよいもので約50㎝、埋土は黄褐色シルトブロック･炭化物を小量含む黒色シルトである。柱痕跡は4箇所の柱穴で確認しており、径15㎝前後である。

柱間寸法は、柱痕跡が不明な柱穴では在位置を中央に想定すると、桁行が総長は不明であるが、南側柱列で東より約1.5m、約1.6m、不明、北側柱列では東から1間分だけ判明



（単位：cm）

No.	種　類	出土遺構・層位	特　徴	口　径	底　径	器　高	残存率	分　類	写真図版
1	土師器坏	ＳＢ2364・掘方埋土	外面：ヨコナデ、ヘラケズリ→ナデ　内面：ヘラミガキ→黒色処理	(8.2)	--	(3.2)	1/2		
2	土　錘	ＳＢ2359	外面：オサエ痕　大きさ：4.0×1.8 cm　孔の径：0.4 cm						
3	土　錘	ＳＢ2280	外面：オサエ痕　大きさ：2.6×1.7 cm　孔の径：0.3 cm						

第36図　ＳＢ2280･2359･2364建物跡出土遺物

しており1.53mである。梁行は東妻で南より1.67m、1.88mで総長が3.52mである。

建物跡の方向は南妻でみると北で約5度東へ偏している。

遺物は柱穴埋土から多量の非ロクロ調整の土師器と少量の須恵器が出土している。

ＳＢ2366(第9図)

調査区の南西部で検出した東西3間、南北2間の東西棟建物跡である。ＳＩ2223、ＳＤ2220と重複し、ＳＩ2223より新しいが、ＳＤ2220には西半部を大きく壊されている。

柱穴は5箇所で検出しており、一辺20～40㎝ほどの方形である。深さは最も残りの良いもので約50㎝、埋土は炭化物を少量、黄褐色シルト細粒を霜降り状に含む黒褐色シルトである。柱痕跡は検出した柱穴すべてで確認しており、径10～15㎝である。

柱間寸法は桁行が北側柱列で東から1間分だけ判明しており1.42m、総長が南側柱列で4.37mである。梁行は東妻で南より1.55m、1.66mで総長3.46mである。建物跡の方向は東妻でみると、北で約38度東へ偏している。

遺物は柱穴埋土から少量の非ロクロ調整と数点のロクロ調整の土師器が出土している。

③；塀跡

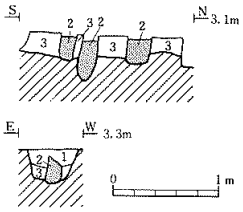
塀跡には溝状の掘り方に丸太材を密接して立て並べた材木塀と、掘立柱を一定の間隔をあけて立て並べた塀のいわゆる一本柱列がある。

ＳＡ2290（第27･37図）

調査区中央部やや東よりで検出した南北方向の材木塀跡である。調査区内では北壁から約10m続き南端部が途切れている。これは後世の削平のためであり、本来の材木塀は北側と同様に南側も調査区外へさらに続くと考えられる。ＳＢ2280、ＳＫ2330、ＳＤ2203と重複し、いずれよりも古い。

本材木塀は、廃絶時に材が抜き取られている。材の抜き取りは上端幅40～60㎝ほど、深さ15～30㎝ほどの不規則な溝を掘り込んでおこなわれている。堆積土は黄色シルト小粒･細粒を全体的に均質に含む暗褐色シルトである。

塀の掘り方(布掘)は、材の抜き取りのため上半部を壊されているが、上端幅50㎝ほどと推定される。底面は比較的平坦で、幅35㎝前後である。側壁は比較的急角度で立ち上がり、深さは最も残りの良好な部分で約30㎝で、オリーブ褐色シルトブロックを斑状に含む黄色粘土質シルトで埋め戻されている。



第37図　SA2290塀跡断面図

材の痕跡は認められなかったが、底面に5㎝～50㎝ほどの間隔で、径10～20㎝ほどの円形の材のあたり痕跡が断続的に認められた。塀の方向は材のあたり、痕跡を参考にす

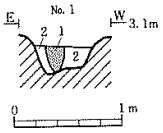
ると、北で約22度東へ偏している。

遺物は抜取り溝の堆積土と掘り方埋土から少量の土師器が出土している。

ＳＡ2369（第27･38図）

調査区東半部で検出した南北方向に並ぶ4個の柱穴から想定した塀跡である。調査区内では北壁際から南へ3間分検出したが、さらに調査区の北側へ続く可能性がある。ＳＤ2208と重複してこれよりも新しい。

柱間は一辺の30～60㎝ほどの方形、径60㎝ほどの円形と規模・形状にバラツキがみられる。深さは30～40㎝ほど残っており、埋土は黄褐色シルト細粒を含む黒褐色シルトである。柱痕跡はいずれの柱穴でも確認しており径15～20㎝である。



第38図　ＳＡ2369
塀跡断面図

柱間寸法は北から2.00m、2.42m、2.41mで総長は6.83mである。塀跡の方向は北で約26度東へ偏している。遺物は出土していない。

以上の他に、遺存状況が悪く注意せず掘り下げてしまったため調査時に塀跡と確認できないが、塀跡の可能性のある溝についてここでふれておきたい。

ＳＤ2317(第27図)

調査区東半部で長さ約9m検出した南北方向の溝である。さらに調査区の北側に続いているが、南端部は調査区内で確認できている。ＳＢ2355･2356、ＳＫ2202と重複し、ＳＫ2202より新しく、ＳＢ2355･2356より古い。

上端幅約0.5m、底面幅0.2～0.3mで、深さは最も残りの良い北壁で約15㎝残っている。堆積土は3層に細分され、断面は逆台形をなす。底面には径0.2～0.3mほどのピットが1～2m間隔で認められた。方向は心心でみると北で約22度東へ偏している。

なお、本溝は、方向がほぼＳＤ2208と一致しており、またＳＤ2208の東側1.5～1.7mほどに平行して位置していることから、ＳＤ2208と一連の塀跡である可能性も想定される。

遺物は出土していない。

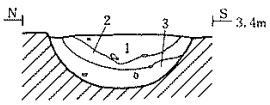
④；土壙

土壙は1区で108基検出している。この中で遺物が出土したり、他の遺構との切り合い関係などからある程度年代の把握が可能なものは14基である。

ＳＫ2212(第27･39･40図)

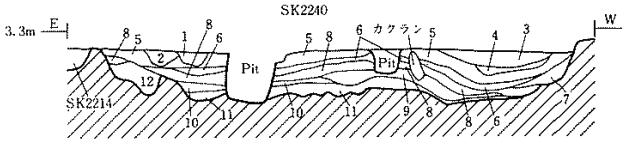
調査区中央やや東寄りで検出した土壙で、ＳＩ2226、ＳＢ2281と重複し、いずれよりも新しい。平面形･規模は南北(長径)約1.8m、東西(短径)約1.4mの楕円形をなし、側壁はオーヴァハングし、深さは約35㎝残っていた。堆積土は3層に細分され、最上層には灰白色火山灰が粒状に含まれる。

SK2213



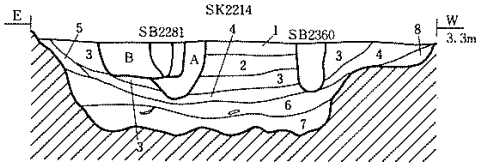
No.	土　色	土　性	備　考
1	黒褐色(10YR3/1)	粘土質シルト	炭化物、焼土、土器片を含む。
2	黒褐色(10YR3/1)	粘土質シルト	炭化物、焼土、土器片、暗灰黄色土を含む。
3	暗灰黄色(2.5Y4/2)	シルト質粘土	炭化物、焼土、土器片を含む。

SK2240



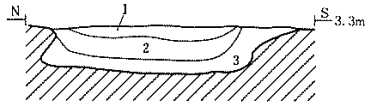
No.	土　色	土 性	備　考
1	黒色(10YR2/1)	粘土	〈遺物取上げ1層〉炭化物・微量の灰・地山の土を含む。
2	黒褐色(7.5YR3/1)	粘土質シルト	〈遺物取上げ1層〉炭化物・灰を微量と、土器片を含む。
3	黒褐色(10YR3/2)	粘土質シルト	〈遺物取上げ1層〉炭化物・地山の土を含む。
4	黒褐色(10YR3/2)	粘土質シルト	〈遺物取上げ1層〉粘性強い。炭化物を若干含む。
5	灰色(5Y6/1)	粘土質シルト	〈遺物取上げ1層〉多量の灰と炭化物の塊を含む。
7	黒褐色(10YR3/2)	粘土質シルト	〈遺物取上げ2層〉炭化物・土器片・地山の土を含む。
7	黒褐色(10YR3/1)	粘土質シルト	〈遺物取上げ2層〉炭化物・地山の土を若干含む。
8	黒色(10YR2/1)	粘土質シルト	〈遺物取上げ2層〉炭化物・地山の土を含む。
9	灰黄褐色(10YR4/2)	粘土質シルト	〈遺物取上げ3層〉若干の黒色土との互層。
10	黒褐色(10YR3/2)	粘土質シルト	〈遺物取上げ3層〉若干の炭化物と多量の地山の土を含む。
11	黒色(10YR2/1)	粘土質シルト	〈遺物取上げ3層〉炭化物・地山の土を含む。
12	黒褐色(10YR2/2)	粘土質シルト	〈遺物取上げ3層〉炭化物・地山の土を含む。

SK2214



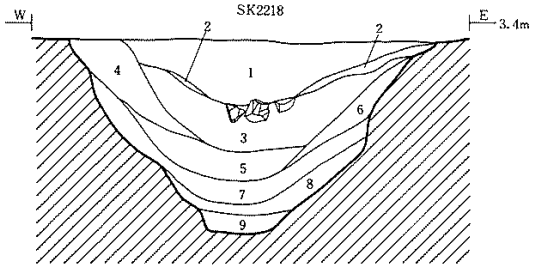
No.	土　色	土 性	備　考
1	黒褐色(10YR3/2)	粘土質シルト	〈遺物取上げ1層〉炭化物・地山の土を若干含む。
2	黒褐色(10YR3/2)	粘土質シルト	〈遺物取上げ1層〉炭化物・灰・地山の土を若干含む。
3	褐灰色(10YR4/1)	粘土	〈遺物取上げ2層〉若干の炭化物と、灰を含む。
4	赤灰色(7.5R5/1)	粘土	〈遺物取上げ2層〉若干の炭化物と、灰を含む。
5	黒褐色(10YR3/2)	粘土	〈遺物取上げ3層〉炭化物を少量含む。
6	黒褐色(10YR3/1)	粘土	〈遺物取上げ3層〉炭化物・地山の土を少量含む。
7	黒色(10YR2/1)	粘土	〈遺物取上げ3層〉地山の土と土器片を含む。
8	黒褐色(10YR3/2)	粘土	〈遺物取上げ3層〉地山の土を若干含む。

SK2212



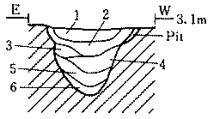
No.	土　色	土性	備　考
1	黒褐色(10YR2/2)	シルト	少量の灰白色火山灰粒と、多量の炭化物を含む。
2	黒色(10YR2/1)	粘土	少量の地山の土と、多量の炭化物・土器片を含む。
3	黒色(2.5YR2/1)	粘土	地山の土をブロック状に多く含む。ややしまりあり。

SK2218



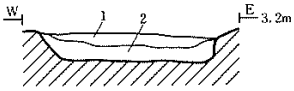
No.	土　色	土 性	備　考
1	灰黄褐色(10YR4/2)	シルト	〈遺物取上げ1層〉
2	褐灰色(10YR4/1)	シルト	〈遺物取上げ1層〉微量の炭化物と多量の地山の土を含む。
3	黒褐色(10YR3/2)	シルト	〈遺物取上げ1層〉微量の炭化物と石を含む。
4	暗灰黄色(2.5Y4/2)	シルト	〈遺物取上げ2層〉炭化物を微量含む。
5	暗青灰色(5GB4/1)	粘土質シルト	〈遺物取上げ2層〉地山の土を若干含む。グライ化している。
6	黒褐色(2.5Y3/1)	シルト	〈遺物取上げ2層〉微量の炭化物と多量の地山の土を含む。
7	暗青灰色(5B3/1)	粘土	〈遺物取上げ2層〉グライ化した地山の土を多量に含む。
8	灰色(N4/1)	粘土	〈遺物取上げ2層〉グライ化した地山の土を多量に含む。
9	暗灰色(N3/1)	粘土	〈遺物取上げ2層〉粘性が強い。

SK2219



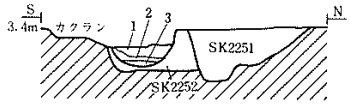
No.	土　色	土 性	備　考
1	褐灰色(10YR4/1)	粘土	粘性強い。炭化物を粒状に多く含む。
2	褐灰色(2.5Y4/1)	粘土質シルト	炭化物を若干含む。
3	黒褐色(2.5Y3/1)	粘土	
4	黒色(7.5YR2/1)	粘土	粘性強い。炭化物を微量含む。
5	青黒色(5BG2/1)	粘土	粘性強い。炭化物・地山の土を若干含む。
6	青黒色(5BG2/1)	粘土	粘性強い。グライ化した地山の土を多量に含む。

SK2248



No.	土　色	土 性	備　考
1	黒褐色(2.5Y3/1)	シルト	炭化物を含む。
2	黒褐色(2.5Y3/2)	シルト	地山の土を多く含む。

SK2250



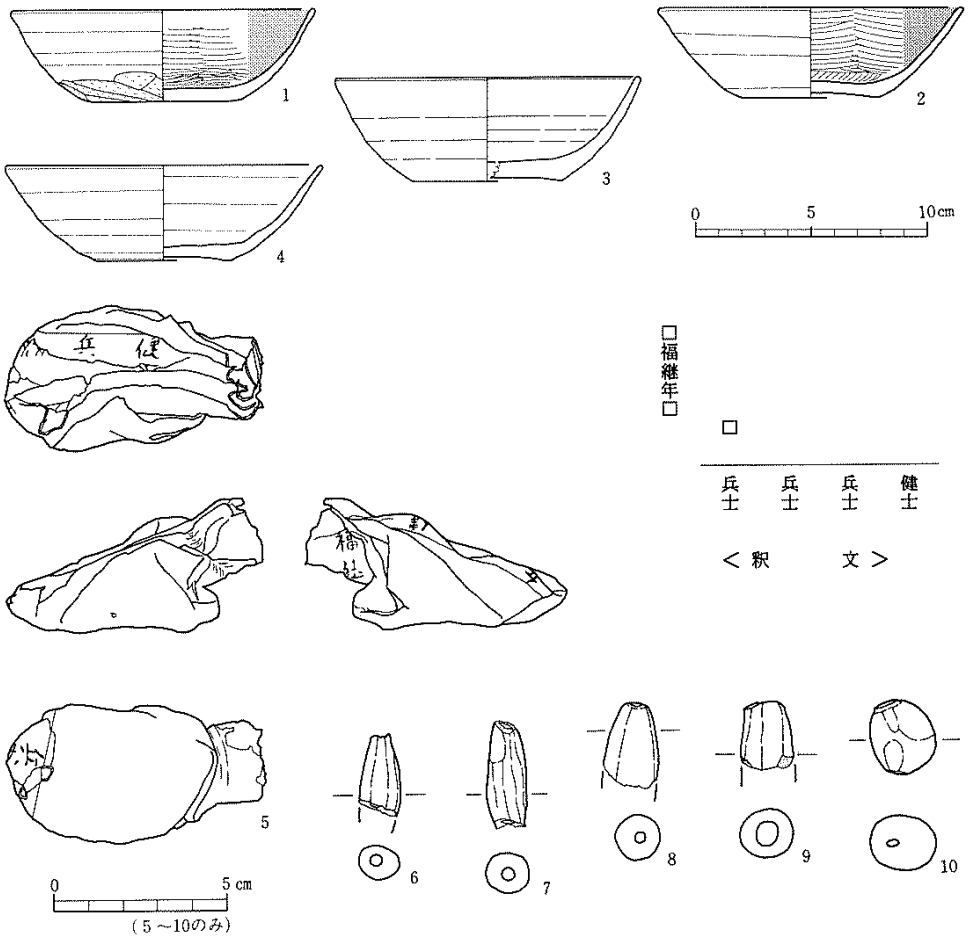
No.	土　色	土性	備　考
1	暗褐色(10YR3/3)	シルト	炭化物と多量の焼土を含む。
2	黒褐色(10YR3/2)	シルト	炭化物を多く含む。
3	暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)	シルト	地山の土を多く含む。

第39図　Ⅰ区土壙断面図(1)

0　1m

遺物は底面から漆紙文書、1～3層から少量のロクロ調整の土師器、土器7点が出土している。（第40図）

漆紙文書は、長さ7.6㎝、幅5.3㎝、高さ3.9㎝ほどの、漆の付着した内面を内側とした袋状の形をしており、上部には紐状のもので縛ったような痕跡が認められる。このよう



（単位：cm）

No.	種類	層位	特徴	口径	底径	器高	残存率	分類	写真図版
1	土師器・坏	2層	外面：ロクロナデ→手持ちヘラケズリ　底面：ヘラ記号「#」　内面：ミガキ→黒色処理	13.0	5.6	4.0	4/5		18-4
2	土師器・坏	1層	外面：ロクロナデ　底面：回転糸切り　内面：ヘラミガキ→黒色処理	13.1	5.8	3.9	1/2		
3	須恵器・坏	1層	内外面：ロクロナデ　底面：回転糸切り　色調：明赤褐色	(13.3)	(6.5)	4.5	2/5		
4	須恵器・坏	1層	内外面：ロクロナデ　底面：回転糸切り	(13.7)	5.8	4.2	1/4		
5	漆紙文書	底面	形：袋状　長さ：7.6 cm　幅：5.3 cm　高さ：3.9 cm　行・文字数：4行・9文字						26-1a～f
6	土錘	2層	外面：オサエ痕→ナデ　大きさ：2.4以上×1.2 cm　孔の径：0.4 cm						27-2
7	土錘	2層	外面：オサエ痕→ナデ　大きさ：3.1以上×1.2 cm　孔の径：0.4 cm						27-2
8	土錘	2層	外面：ナデ　大きさ：2.5以上×1.6 cm　孔の径：0.3 cm						27-2
9	土錘	2層	外面：ナデ　大きさ：1.5以上×1.5 cm　孔の径：0.7 cm						27-2
10	土製丸玉	3層	外面：ミガキ　大きさ：2.2×1.7 cm　孔の径：0.4 cm						27-2

第40図　ＳＫ2212土壙出土遺物

な形態の漆紙文書は非常に珍しく、漆の蓋紙として使用された後、直ちに廃棄されたとは考えにくい具体的な作業は特定できないが、再利用された可能性が考えられる。

文字は一部肉眼でも確認できるが、赤外線テレビカメラによる観察で5行14文字が確認された。その他には横押界線も1本認められた。

文字は、横押界線の上下にみられる。大きさは、0.7〜0.9㎝ほど、また行間は心心で2.0〜2.1㎝である。

横押界線の下段には、上端を揃えて「健士」、「兵士」が4行分列記されている。なお「健士」の「士」は紙の折れ目のため全体を確認できないが、紙の折れ具合いと文字の残画から「健児」ではなく、「健士」と判読できた。

横押界線の上段では4行目で1文字、5行目で5文字それぞれみられる。「口」、5行目の「口福継年口」は1文字と5文字目が判読不明である。これらの上段の文字は、紙の続き具合いから4行目の「兵士」の上と、1行後の上部にくることが確認された。ＳＫ2213（第27・39・42図）

調査区中央部やや東寄りで検出した土壙である。ＳＤ2203と重複し、これより古い。

平面形は円形で、径は約1.1mである。深さは約40㎝残っており、断面は緩やかなU字形をなす。堆穫土は3層に細分され、いずれも自然堆積とみられる。

遺物は土器が少量と土錘・砥石が底面および堆積土から出土している(第42図)。土器にはロクロ調整で内黒の土師器の坏・甕と須恵器の坏がある。

ＳＫ2214(第27・39・41図)

調査区中央部南半で検出した土壙である。ＳＢ2281・2360・ＳＫ2240と重複し、ＳＫ2240より新しいが、ＳＢ2281・2360よりは古い。

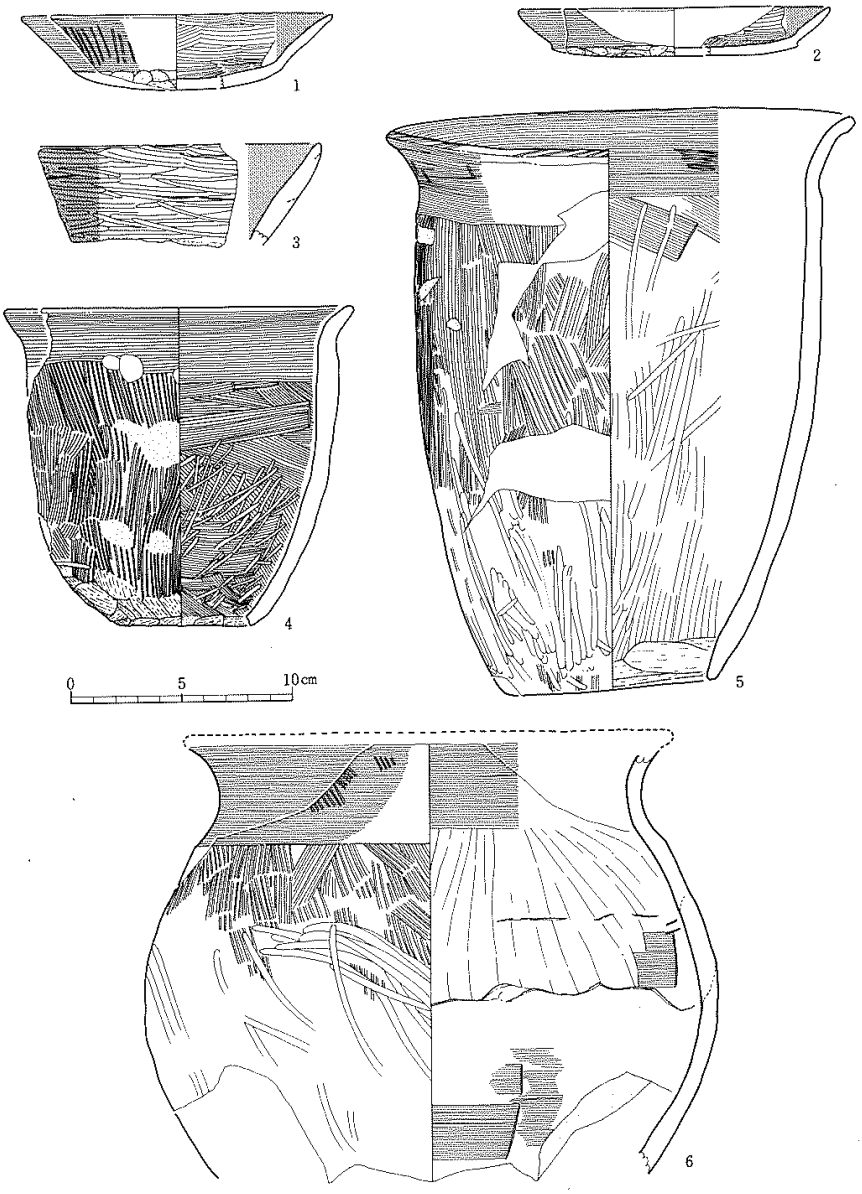
平面形は東西に長い歪んだ楕円形をなし、長径約2.3m、短径約1.2mである。深さは約80㎝で、底面には多少凹凸が見られるが、断面はほぼ逆台形をなす。堆積土は8層に細分され、いずれも自然堆積とみられる。

遺物は非ロクロ調整の土師器が比較的多く出土している。図示できるものとしては内黒の坏（第41図1〜3）の他、甑（4・5）、甕(6)がある。

ＳＫ2218(第9・39・42図)

調査区西半部北壁際で検出した土壙で、北半部は調査区外である。ＳＤ2220と重複しこれより古い。北半部は未検出であるが、平面形はほぼ円形をなし、規模はおよそ径2.7mとみられる。深さは約1.1m残っており、断面は壁が緩やかに立ち上がる擂鉢状をなす。堆積立は9層に細分され、いずれも自然堆積である。

遺物は土師器、須恵器、赤焼土器が少量出土している。いずれも破片資料であるが、こ



（単位：cm）

No.	種類	層位	特徴	口径	底径	器高	残存率	分類	写真図版
1	土師器・坏	3層	外面：ハケメ→ヨコナデ　ナデ→ヘラケズリ　内面：ヘラミガキ→黒色処理	(13.1)	－	(3.5)	一部		
2	土師器・坏	2層	外面：ハケメ→ヘラケズリ　内面：ヘラミガキ→黒色処理	(14.2)	－	2.2	一部		
3	土師器・坏	3層	有段　内外面：ヘラミガキ→黒色処理	－	－	－	一部		
4	土師器・甕	3層	無底　外面：ハケメ→ヨコナデ、ケズリ　内面：ヘラナデ→ヨコナデ、ミガキ、ケズリ	(16.0)	(6.1)	14.6	1/4		
5	土師器・甕	3層	無底　外面：ハケメ→ヨコナデ、ミガキ　内面：ヘラナデ→ヨコナデ、ミガキ、ケズリ	29.4	9.6	26.4	ほぼ完形		19-1
6	土師器・壺	3層	外面：ハケメ→ヨコナデ、ミガキ　内面：ヘラナデ→ヨコナデ	－	－	－	一部		

第41図　ＳＫ2214土壙出土遺物

の中で図示できるものとしては須恵器の甕の口縁部資料がある(第42図8)。

ＳＫ2219(第27・39・42図)

調査区東半部の南壁付近で検出した土壙である。ＳＩ2225と重複しこれより新しい。平面形は、南北方向の楕円形をなし、規模は長径約1.3m、短径約0.6mである。深さは約0.5m残っており、断面は緩やかなU字形をなす。堆積土は7層に細分され、いずれも自然堆積である。

遺物は土師器と須恵器が少量出土している。図示できるもとしては、土師器にはロクロ調整で内黒の坏(第42図5・6)が、また須恵器には蓋(7)がある。

ＳＫ2240(第27・39・43図)

調査区中央部南寄りで検出した土壙である。ＳＢ2360と重複しこれより古い。東西約1.1m、南北約0.9mほどの不整方形をなす。深さは約50㎝残っており、断面は浅い皿状をなす。堆積土は12層に細分され、いずれも自然堆積とみられる。

遺物は非ロクロ調整の土師器の坏(第43図1～4)や高坏(5)などが各層から比較的多量出土している。この他に土製の紡錘車も1点出土している（11）。

ＳＫ2248(第27・39・42図)

調査区東半部の北寄りで検出した土壙である。ＳＤ2203・2208と重複し、ＳＤ2208より新しく、ＳＤ2203より古い。平面形は隅丸方形をなし、規模は長辺約1.3m、短辺約1.0mである。深さは約20㎝残っており、断面は東側が急角度で立ち上がっているが西側は緩やかで、底面はほぼ平坦である。堆積土は2層に細分でき、いずれも自然堆積である。

遺物は須恵器に坏(第42図9)の他、特徴の把握できない土師器の甕などの小破片が少量出土している。

ＳＫ2250(第9・39・42図)

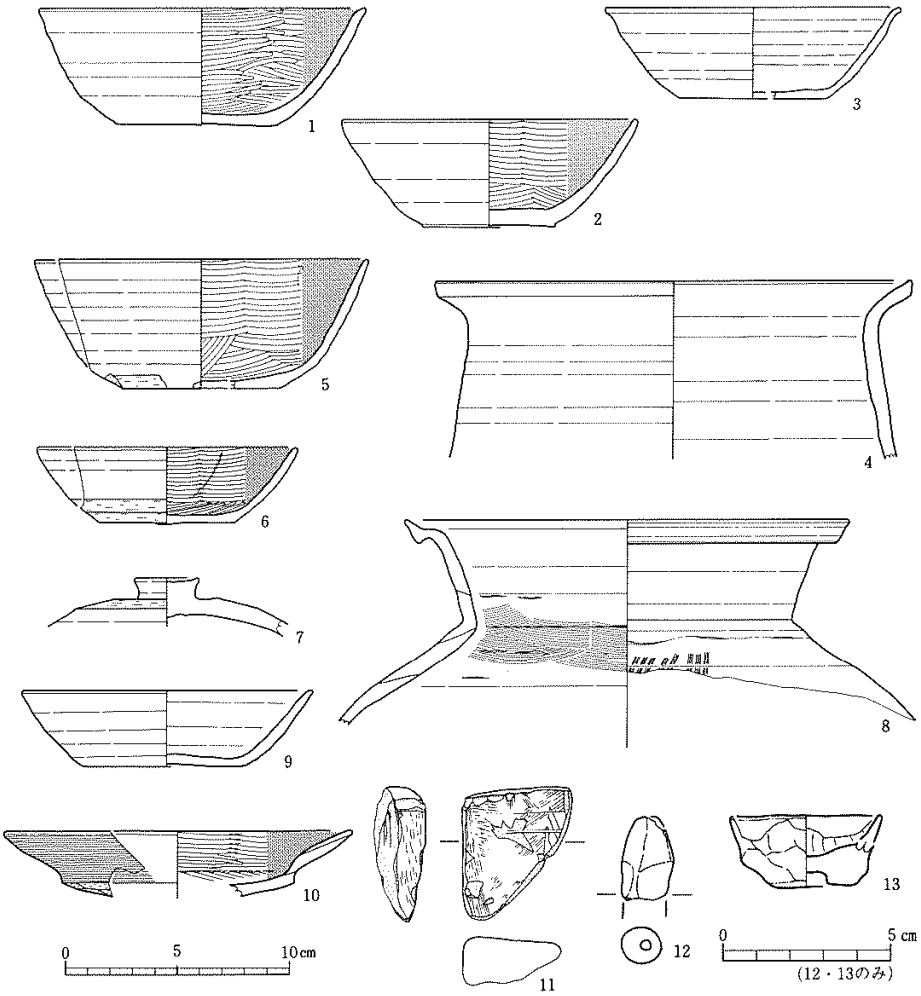
調査区中央部の南西で検出した土壙である。ＳＩ2223、ＳＫ2252と重複し、いずれよりも新しい。平面形はほぼ円形をなし、規模は径約50㎝である。深さは約16㎝残っており、断面はU字形をなす。堆積土は3層に細分でき、いずれも自然堆積とみられる。

遺物は、非ロクロ調整で内黒の土師器坏(第42図10)の他、ミニチュア土器(13)が1点出土している。

ＳＫ2260(第27・43・44図)

調査区南東部で検出した土壙である。ＳＩ2225・2226、ＳＡ2290、ＳＤ2206と重複し、いずれよりも古い。

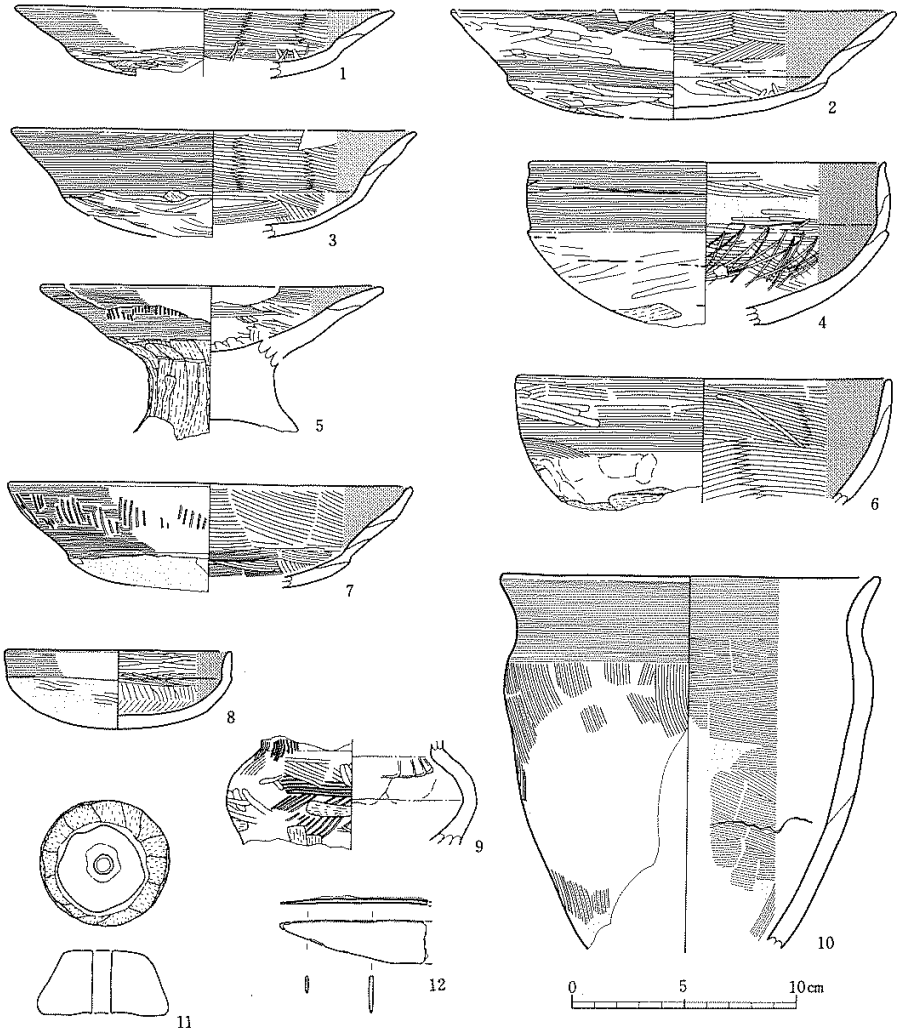
西半部をＳＤ2206によって壊されているが、平面形は長径(東西)3m以上、短径(南北)約2.8mの不整な楕円形と推定される。深さは約40㎝残っており、断面は緩やかな



（単位：cm）

No.	種　類	出土遺構・層位	特　　徴	口　径	底　径	器　高	残存率	分　類	写真図版
1	土師器・坏	ＳＫ2213・底面	外面：ロクロナデ　底面：手持ちヘラケズリ　内面：ヘラミガキ→黒色処理	14.5	7.2	5.3	3/5		19-2
2	土師器・坏	ＳＫ2213・堆積土	外面：ロクロナデ　底面：回転糸切り　内面：ヘラミガキ→黒色処理	(13.2)	(6.0)	4.9	一　部		
3	須恵器・坏	ＳＫ2213・ベルト２層	内外面：ロクロナデ　底面：回転糸切り	(13.2)	(6.6)	4.1	1/4		
4	土師器・甕	ＳＫ2213・ベルト２層	内外面：ロクロナデ	(21.4)	－	－	一　部		
5	土師器・坏	ＳＫ2219・堆積土	外面：ロクロナデ→手持ちヘラケズリ　内面：ヘラミガキ→黒色処理	(15.0)	(7.0)	5.8	一　部		
6	土師器・坏	ＳＫ2219・堆積土	外面：ロクロナデ→回転ヘラケズリ　内面：ヘラミガキ→黒色処理	(11.7)	6.1	3.5	2/5		
7	須恵器・蓋	ＳＫ2219・堆積土	外面：ロクロナデ→回転ヘラケズリ　内面：ロクロナデ	－	－	－	一　部		
8	須恵器・甕	ＳＫ2218・１～３層	外面：ロクロナデ、平行タタキ→ロクロナデ　内面：ロクロナデ→ナデ	(19.4)	－	－	一　部		
9	須恵器・坏	ＳＫ2248・堆積土	内外面：ロクロナデ　底面：ヘラ切り→ナデ	12.8	7.2	3.4	4/5		18-7
10	土師器・坏	ＳＫ2250・堆積土	外面：ヨコナデ→ヘラケズリ　内面：ヘラミガキ→黒色処理	(15.6)	－	－	一　部		
11	砥　石	ＳＫ2213・ベルト３層	石材：砂岩　大きさ：5.8以上×4.4 cm　厚さ：2.2cm以上						
12	土　錘	ＳＫ2213・ベルト２層	外面：ナデ　大きさ：2.5以上×1.5 cm　孔の径：0.3cm						
13	土製模造品	ＳＫ2250・堆積土	上げ底　内外面：ナデ	(4.4)	2.4	(2.1)	2/3		

第42図　ＳＫ2213・2218・2219・2248・2250土壙出土遺物



（単位：cm）

No.	種　類	出土遺構・層位	特　徴	口　径	底　径	器　高	残存率	分　類	写真図版
1	土師器・坏	ＳＫ2240・3層	外面：ヨコナデ、ヘラケズリ→ヘラミガキ　内面：ヘラミガキ→黒色処理	(17.0)	－	－	2/5		31-2
2	土師器・坏	ＳＫ2240・3層	外面：ヨコナデ、ヘラケズリ→ヘラミガキ　内面：ヘラミガキ→黒色処理	(20.0)	－	(4.9)	1/3		
3	土師器・坏	ＳＫ2240・3層	外面：ヨコナデ、ヘラケズリ→ヘラミガキ　内面：ヘラミガキ→黒色処理	(18.2)	－	－	1/4		
4	土師器・坏	ＳＫ2240・1層	外面：ヨコナデ、ヘラケズリ→ヘラミガキ　内面：ヘラミガキ→黒色処理	(16.0)	－	－	1/4		
5	土師器・高坏	ＳＫ2240・1層	坏部外面：ハケメ→ヨコナデ→ヘラケズリ　坏部内面：ヘラミガキ→黒色処理　脚部内面：ナデ	(15.4)	－	－	一　部		
6	土師器・壺	ＳＫ2260・1層	外面：ヨコナデ→ヘラミガキ　ナデ→ヘラケズリ　内面：ヘラミガキ→黒色処理	(16.6)	－	－	1/4		
7	土師器・坏	ＳＫ2260・堆積土	外面：ハケメ→ヨコナデ、ナデ→ケズリ→ミガキ　内面：ヘラミガキ→黒色処理	(18.0)	－	－	1/4		
8	土師器・坏	ＳＫ2260・堆積土	外面：ヨコナデ、ヘラケズリ→ミガキ　摩滅　内面：ヘラミガキ→黒色処理	10.2	－	3.6	4/5		18-3
9	土師器・壺	ＳＫ2260・1層	外面：ハケメ→ケズリ→ミガキ　内面：ナデ	－	－	－	1/4		
10	土師器・甕	ＳＫ2306・1層	外面：ハケメ→ヨコナデ、ナデ　内面：ヘラナデ→ヨコナデ	(16.8)	－	－	一　部		
11	土製紡錘車	ＳＫ2240・3層	外面：ケズリ　下端径：5.9cm　上端径：3.5cm　高さ：2.9cm　貫通孔の径：0.8cm						26-8
12	直　刀	ＳＫ2306・堆積土	平造、平棟　残存長：5.6cm　幅：1.9cm						28-4

第43図　ＳＫ2240・2260・2306土壙出土遺物

U字形をなす。堆積土は11層に細分され、いずれも自然堆積とみられる。

遺物は、非ロクロ調整の土師器が出土している。この中には内黒の坏(13図7・8)、椀(6)、壷(9)がある。この他黒燿石のチップが1層から1点出土している。

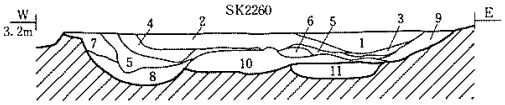
ＳK2302(第9・44・45図)

調査区北西部で検出した小土壙である。ＳＩ23I5と重複するが、ＳＩ2315の掘り方埋土が残っていないため新旧関係は不明である。平面形は隅丸方形をなし、規模は長辺約50㎝、短辺約40㎝である。深さは約15㎝残っており、断面はU字形をなす。堆積土は1層で自然堆積とみられる。

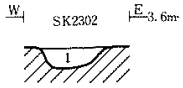
遺物は須恵器の坏(第45図3)が1点で出土している。

ＳK2306(第27・43・44図)

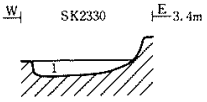
調査区中央部北寄りで検出した土壙である。ＳD2307と重複しこれより新しい。平面形は不整な楕円形をなし、長径(南北)約1.6m、短径(東西)約1.2mである。深さは約22㎝残っており、断面は緩やかなU字形をなす。堆積土は3層に細分され、いずれも自然堆



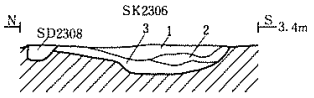
No.	土　色	土　性	備　考
1	灰色(5Y4/1)	シルト	〈遺物取上げ1層〉炭化物・地山の土を少量含む。
2	黄灰色(2.5Y4/1)	粘土質ｼﾙﾄ	〈遺物取上げ1層〉炭化物・地山の土を少量含む。
3	褐灰色(7.5YR4/1)	粘土	〈遺物取上げ1層〉炭化物を微量含む。
4	黄灰色(2.5Y4/1)	粘土質ｼﾙﾄ	〈遺物取上げ1層〉炭化物・地山の土を少量含む。
5	黒褐色(10YR2/1)	粘土	〈遺物取上げ1層〉多量の炭化物を含む。
6	暗灰黄色(2.5Y5/2)	粘土質ｼﾙﾄ	〈遺物取上げ2層〉地山の土と黒褐色土を若干含む。
7	灰色(5Y4/1)	シルト	〈遺物取上げ2層〉炭化物・灰・地山の土を少量含む。
8	灰オリーブ色(5Y6/2)	粘土	〈遺物取上げ2層〉炭化物・灰・地山の土を少量含む。
9	灰色(5Y4/1)	シルト	〈遺物取上げ2層〉炭化物・灰・地山の土を少量含む。
10	暗灰黄色(2.5Y5/2)	粘土質ｼﾙﾄ	〈遺物取上げ2層〉炭化物・灰色土を若干含む。
11	灰オリーブ色(5Y6/2)	粘土質ｼﾙﾄ	〈遺物取上げ2層〉



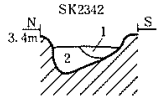
No.	土　色	土　性	備　考
1	黒色(2.5Y2/1)	ｼﾙﾄ質粘土	炭化物・焼土・地山の土を若干含む。



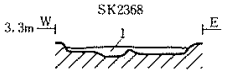
No.	土　色	土　性	備　考
1	褐灰色(10YR4/1)	粘土質シルト	地山の土を多く含む。



No.	土　色	土　性	備　考
1	黒褐色(10YR2/2)	シルト	炭化物・地山の土を若干含む。
2	黒褐色(2.5Y3/1)	シルト	大きいブロック状の炭化物と多量の地山の土を含む。
3	暗灰黄色(2.5Y4/2)	シルト	若干の炭化物・黒褐色土と多量の地山の土を含む。



No.	土　色	土　性	備　考
1	黒褐色(10YR3/1)	シルト	炭化物と少量の地山の土を含む。
2	黒褐色(10YR3/2)	シルト	炭化物と多量の地山の土を含む。



No.	土　色	土　性	備　考
1	黄灰色(2.5Y4/1)	シルト	若干の炭化物と多量の地山の土を含む。

第44図　Ｉ区土壙断面図 (2)

0　1m

積である。

遺物は少量の非ロクロ調整の土師器と鉄製品が出土している。図示できるものとしては土師器の甕(第43図10)と鉄製品の直刀(12)がある。

ＳＫ2330(第27･44･45図)

調査区中央部やや南東寄りで検出した土壙である。ＳＡ2290と重複しこれより新しい。平面形はほぼ円形をなし、径約1.1mである。深さは約26㎝残っており、断面は逆台形をなす。堆積上は1層で、自然堆積とみられる。

遺物は非ロクロ調整の土師器の坏(第45図1)・甕(2)などが少量出土している。

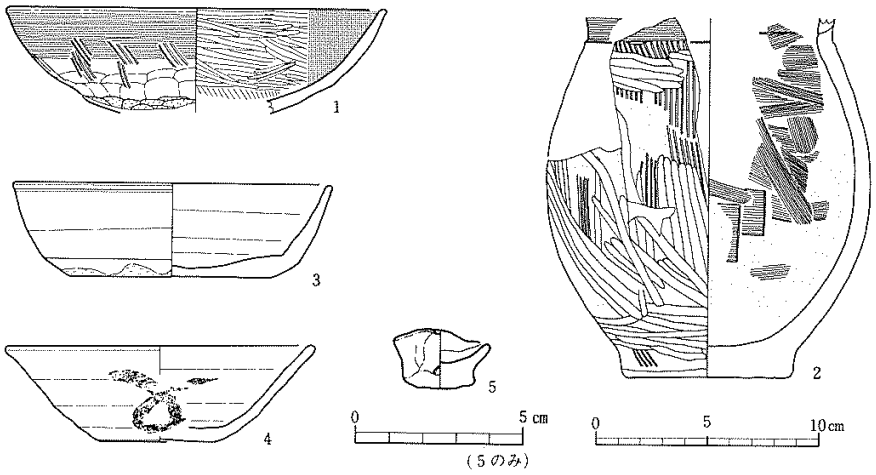
ＳＫ2342（第9･44･45図）

調査区中央部やや南西寄りで検出した小土壙で、他の遺構とは重複していない。平面形は隅丸方形をなし、規模は長辺約60㎝、短辺約50㎝である。深さは約30㎝残っている。堆積土は2層に細分でき、いずれも自然堆積とみられる。

遺物は特徴の把握できない少量の土師器の他、ミニチュア土器(第45図5)が1点出土している。

ＳＫ2368（第27･44･45図）

調査区中央部の北東寄りで検出した土壙である。ＳＩ2209･2210、ＳＢ2280と重複し、



（単位：cm）

No.	種　類	出土遺構・層位	特　　徴	口　径	底　径	器　高	残存率	分　類	写真図版
1	土師器・坏	ＳＫ2330・１層	外面：ハケメ→ヨコナデ　ハケメ→ナデ→ケズリ　内面：ミガキ→黒色処理	(16.8)	－	－	1/4		
2	土師器・甕	ＳＫ2330・１層	頸部に軽い段　外面：ハケメ→ヨコナデ、ミガキ　内面：ヘラナデ→ヨコナデ	－	7.1	－	一部		
3	須恵器・坏	ＳＫ2302・１層	外面：ロクロナデ→回転ヘラケズリ→ナデ　内面：ロクロ	14.2	9.0	4.2	ほぼ完形		18-8
4	須恵器・坏	ＳＫ2368・１層	外面：ロクロナデ→墨書「ℓ」　底面：回転糸切り　内面：ロクロナデ	16.6	5.2	4.3	完形		18-5・25-1
5	土製模造品	ＳＫ2342・１層	内外面：ナデ	(2.9)	(2.2)	(1.6)	完形		18-9

第45図　ＳＫ2302・2330・2342・2368土壙出土遺物

ＳＩ2209・2210より新しく、ＳＢ2280より古い。平面形は隅丸方形をなし、規模は長辺約1m、短辺約0.6mである。深さは約7㎝残っており、断面は逆台形をなす。堆積土は1層で自然堆積とみられる。

遺物は墨書された須恵器の坏(第45図4)と少量の特徴の把握できない土師器が出土している。

⑤；溝

溝は一区で50条検出しているが、この中で他の遺構との重複関係や出土遺物から時代をある程度特定できるものは以下の6条である。

ＳＤ2206(第27・46～48図)

調査区東半部で検出した南北方向の溝である。南端部は後世の削平のため調査区内で途切れているが、本来は北端部と同様に調査区外へ続くと考えられる。ＳＩ2209・2211・2226・2247、ＳＢ2358、ＳＫ2237・2260、ＳＤ2220と重複し、ＳＤ2220より古く、その他のものよりは新しい。

上端幅0.8～1.2m、底面幅0.5～0.8mで、底面は平坦である。深さは最も残りの良い北端部で約40㎝で、断面はほぼ逆台形である。堆積土は6層に細分され、いずれも自然堆積である。溝の方向は心心でみると北で約11度西へ偏している。

遺物は非ロクロ調整の高坏(第48図1)1点を含む少量の土師器の他に、平瓦(第47図1)、黒曜石製の石器、土錘(第48図11)が出土している。平瓦には「物」の刻印がみられ、これは多賀城政庁跡遺構期第Ⅱ期の平瓦にみられるものである。

ＳＤ2208(第27図・46・48図)

調査区東半部で検出した南北溝で、南北両方向ともさらに調査区外へ続く。ＳＩ2207・2225、ＳＢ2355、ＳＡ2369、ＳＫ2248、ＳＤ2203と重複し、いずれより古い。

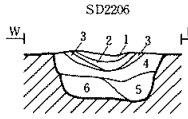
上端幅3.1～3.7m、底面幅2.5～2.7mで、壁は緩やかに立ち上り、底面はほぼ平坦である。深さは25～48㎝ほどしか残っておらず、後世かなり削平されたと考えられる。

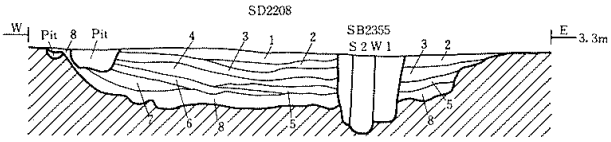
堆積土は8層に細分され、いずれも自然堆積である。溝の方向は心心で北で約24度東へ偏している。

遺物は土師器が比較的多量に出土している。ロクロ調整のものはみられず、非ロクロ調整のもの内黒の坏(第48図2・3)、甑(4)、甕（5）やミニチュア土器(8)がある。

ＳＤ2220(第9・46・47図)

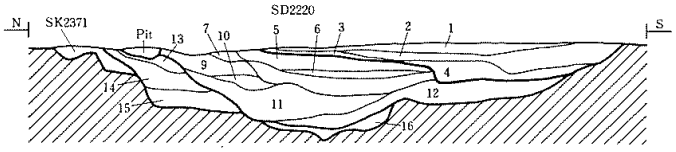
調査区西半部で検出した「状の溝で、3時期(A→B→C)の重複が認められる。調査区内で検出した部分は、本来方形に巡る区画溝の北西部にあたると考えられる。東側・南側ともさらに調査区外へ続く。ＳＩ2223・2227・2239・2320、ＳＢ2365・2366、ＳＤ2206・2234

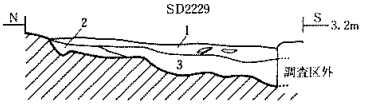




No.	土　色	土　性	備　考
1	黒褐色(10YR3/1)	シルト	〈遺物取上げ1層〉炭化物を若干含む。
2	黒色(2.5Y2/1)	粘土	〈遺物取上げ1層〉炭化物を多く含む。粘性強い。
3	暗灰色(2.5Y5/2)	砂質ｼﾙﾄ	〈遺物取上げ1層〉
4	黒褐色(10YR3/1)	粘土質ｼﾙﾄ	〈遺物取上げ1層〉炭化物・焼土を粒状に若干含む。
5	褐灰色(10YR4/1)	粘土	〈遺物取上げ2層〉地山の土を含む。
6	にぶい黄色(2.5YR6/3)	粘土	〈遺物取上げ2層〉褐灰色土を含む。

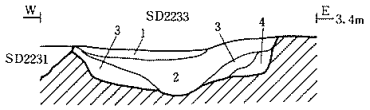
No.	土　色	土　性	備　考
1	黒褐色(10YR3/2)	シルト	〈遺物取上げ1層〉炭化物・地山の土を若干含む。
2	黒褐色(10YR3/2)	シルト	〈遺物取上げ1層〉地山の土を含む。
3	黒褐色(10YR3/2)	シルト	〈遺物取上げ1層〉炭化物と若干の地山の土を含む。
4	黒褐色(2.5Y3/1)	シルト	〈遺物取上げ1層〉地山の土をやや多く含む。
5	黒褐色(2.5Y3/1)	シルト	〈遺物取上げ2層〉炭化物と微量の地山の土を含む。
6	黒褐色(2.5Y3/1)	シルト	〈遺物取上げ2層〉若干の炭化物と多量の地山の土を含む。
7	黒褐色(10YR3/1)	粘土質ｼﾙﾄ	〈遺物取上げ2層〉若干の炭化物と多量の地山の土を含む。
8	黒褐色(2.5Y3/1)	粘土質ｼﾙﾄ	〈遺物取上げ3層〉若干の炭化物と地山の土を含む。



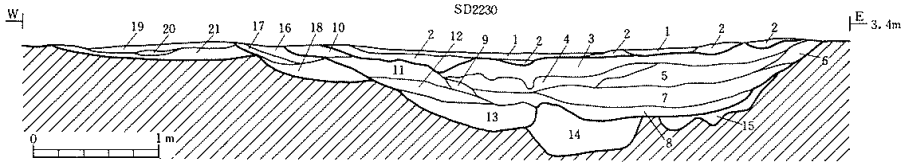


No.	土　色	土　性	備　考
1	黒色(10YR2/1)	粘土質ｼﾙﾄ	若干の炭化物・地山の土と、土器片・瓦を含む。
2	ｵﾘｰﾌﾞ黄色(7.5Y6/3)	粘土	地山の土を多く含む。
3	灰色(7.5Y4/1)	粘土質ｼﾙﾄ	地山の土を含む。
4	灰ｵﾘｰﾌﾞ色(5Y6/2)	粘土	地山の土を多く含む。

No.	土　色	土　性	備　考
1	灰オリーブ色(5Y5/2)	砂質ｼﾙﾄ	〈C期堆積土〉
2	黒褐色(10YR3/1)	ｼﾙﾄ質粘土	〈C期堆積土〉砂質土との互層。
3	灰黄色(2.5Y7/2)	ｼﾙﾄ質砂	〈C期堆積土〉
4	灰黄色(2.5Y7/2)	粘土質砂	〈C期堆積土〉
5	黄灰色(2.5Y4/1)	粘土質ｼﾙﾄ	〈C期堆積土〉砂質土を含む。
6	暗灰黄色(2.5Y5/2)	砂質粘土	〈B期堆積土〉
7	暗灰黄色(2.5Y4/1)	粘土	〈B期堆積土〉
8	黄灰色(2.5Y4/1)	ｼﾙﾄ質粘土	〈B期堆積土〉砂質土を若干含む。
9	黄灰色(2.5Y4/1)	ｼﾙﾄ質粘土	〈B期堆積土〉砂質土との互層。
10	黒褐色(2.5Y3/1)	粘土質ｼﾙﾄ	〈B期堆積土〉砂質土を微量含む。
11	暗オリーブ褐色(2/5Y3/3)	ｼﾙﾄ質粘土	〈B期堆積土〉砂質土を多く含み、互層をなす。
12	黒褐色(10YR3/1)	ｼﾙﾄ質粘土	〈B期堆積土〉砂質土と地山の土を若干含む。
13	浅黄色(2.5Y7/3)	砂	〈A期堆積土〉黒褐色土を若干含む。
14	黒褐色(2.5Y3/2)	シルト	〈A期堆積土〉砂質土との互層。
15	黒褐色(2.5Y3/1)	粘土質ｼﾙﾄ	〈A期堆積土〉砂質土と地山の土を含む。
16	黒褐色(10YR3/1)	砂質ｼﾙﾄ	〈A期堆積土〉地山の土を含む。



No.	土　色	土　性	備　考
1	褐灰色(10YR4/1)	シルト	炭化物を若干含む。
2	黄灰色(2.5Y4/1)	粘土	砂を若干含む。
3	灰色(5Y4/1)	粘土	地山の土を少量含む。
4	灰黄色(2.5Y7/2)	粘土質ｼﾙﾄ	灰色粘土を若干含む。



No.	土　色	土　性	備　考
1	黒褐色(10YR2/2)	シルト	〈F期堆積土〉微量の灰褐色の砂質土を含む。
2	黒褐色(10YR3/1	粘土	〈F期堆積土〉炭化物と小さいブロック状の砂を微量含む。
3	灰色(5Y4/1)	シルト	〈E期堆積土〉炭化物を微量含む。砂との互層。
4	黒褐色(2.5Y3/1)	粘土質ｼﾙﾄ	〈E期堆積土〉炭化物を微量に含む。少量の砂との互層。
5	ｵﾘｰﾌﾞ黒色(5Y3/1)	粘土質ｼﾙﾄ	〈E期堆積土〉微量の砂と炭化物を含む。
6	黒褐色(10YR3/1)	シルト	〈E期堆積土〉炭化物・砂を少量含む。
7	黒色(7.5Y3/1)	粘土質ｼﾙﾄ	〈E期堆積土〉炭化物を微量に含む。少量の砂との互層。
8	黒褐色(2.5Y3/1)	シルト	〈E期堆積土〉炭化物を微量に含む。多量の砂との互層。
9	黒褐色(10YR3/1)	粘土質ｼﾙﾄ	〈E期堆積土〉微量の炭化物と多量の砂を含む。
10	黒褐色(2.5Y3/1)	シルト	〈E期堆積土〉炭化物・砂を若干含む。
11	黒褐色(2.5Y3/2)	粘土質ｼﾙﾄ	〈E期堆積土〉霜降り状に砂を含む。

No.	土　色	土　性	備　考
12	ｵﾘｰﾌﾞ黒色(5Y3/1)	粘土	〈E期堆積土〉微量の炭化物と砂を含む。
13	ｵﾘｰﾌﾞ黒色(7.5Y3/1)	粘土	〈E期堆積土〉炭化物・砂・地山の土を若干含む。
14	ｵﾘｰﾌﾞ黒色(5Y3/1)	粘土	〈C期堆積土〉若干の炭化物と地山の土を含む。
15	黒褐色(2.5Y3/1)	粘土	〈D期堆積土〉地山の土を含む。
16	黒褐色(10YR3/1)	粘土質ｼﾙﾄ	〈B期堆積土〉微量の砂を含む。
17	ｵﾘｰﾌﾞ褐色(2.5Y4/3)	粘土質ｼﾙﾄ	〈B期堆積土〉砂質土との互層。
18	ｵﾘｰﾌﾞ黒色(5Y3/1)	粘土質ｼﾙﾄ	〈B期堆積土〉微量の炭化物と地山の土を含む。
19	灰色(5Y4/1)	シルト	〈A期堆積土〉炭化物を微量に含む。
20	黄褐色(2.5Y4/1)	シルト	〈A期堆積土〉炭化物・地山の土を微量に含む。
21	暗灰黄色(2.5Y4/2)	砂質ｼﾙﾄ	〈A期堆積土〉土器片を含む。

第46図　Ⅰ区溝跡断面図

と重複し、いずれよりも新しい。

最も新しいＳＤ2220Cは、上端幅2.3～4.6m、底面幅約3.2mで、底面はほぼ平坦である。深さは最も残りの良い部分で約0.9m、断面は多少歪んでいるが概ね逆台形をなす。堆積土は13層に細分され、いずれも自然堆積である。溝の方向は南北方向の溝の心心でみるとほぼ真北方向である。

なおＳＤ2220Ａ・Ｂについては、Ｃによって大きく壊されているため、規模・形状などは捉えられないが、いずれもＡとさほど違っているとは考えられない。

遺物はAから土器と瓦が少量出土している他、第1層からは永楽通寶（第47図3）が1点出土している。

ＳＤ2229(第27・46・48図)

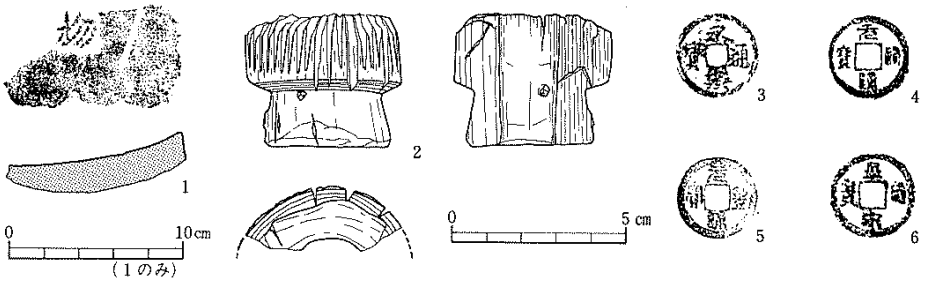
調査区東半部の南壁付近で長さ約3.2m検出した南北溝である。北端部は調査区内で確認しているが、南端部はさらに調査区外の南へ続いている。ＳＩ2225と重複し、これより新しい。

上端幅0.4～0.7m、底面幅0.3～0.4mで、底面はほぼ平坦であるが南側ほど深くなっている。深さは最も残りの良い南壁部分で約30㎝で、断面はU字形をなす。堆積土は3層に細分され、いずれも自然堆積とみられる。溝の方向は心心でみると、北で約21度東へ偏している。

遺物は須恵器の坏が出土している(第48図6・7)。

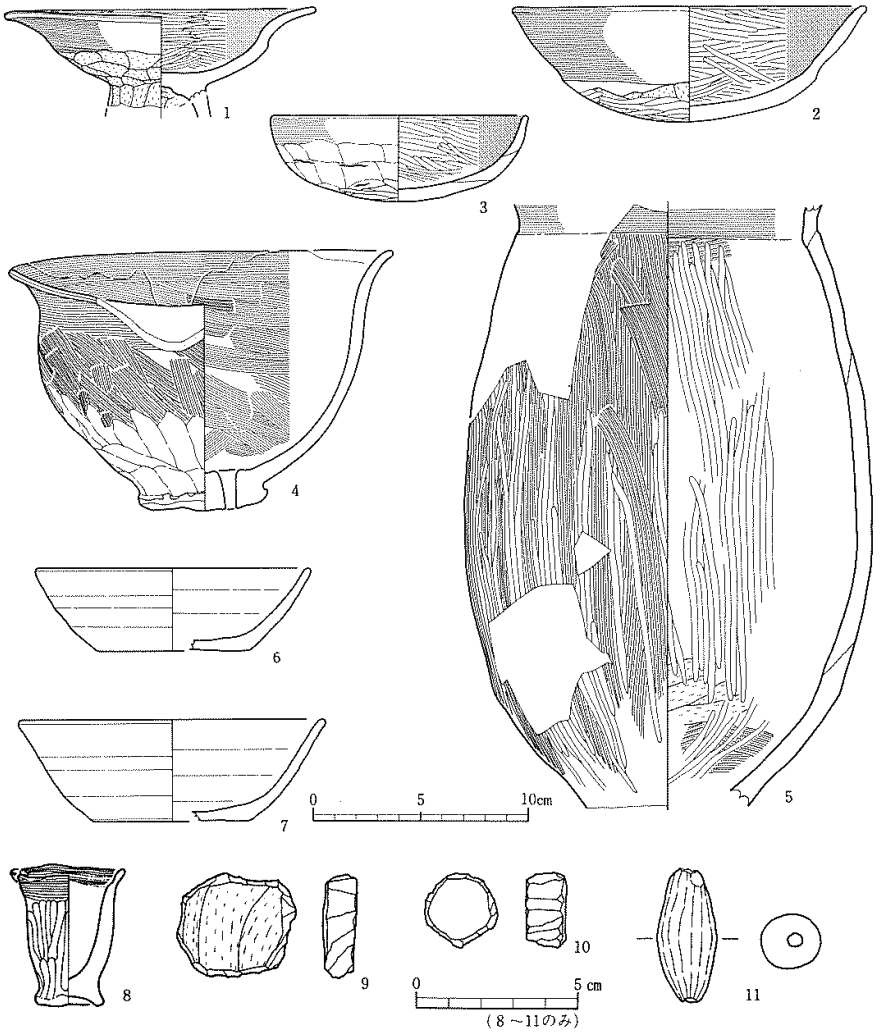
ＳＤ2230(第9・46～48図)

調査区西半部で検出した南北溝で、南北両側ともさらに調査区外へ続いており、6時期(Ａ→Ｂ→Ｃ→Ｄ→Ｅ→Ｆ)の重複がみられる。ＳＩ2320、ＳＫ2312・2319・2326と重複し、



No.	種　類	出土遺構・層位	特　　徴	写真図版
1	平　瓦	ＳＤ2206・１層	凸面：剝落　凹面：布目→刻印「物」　【多賀城分類：ⅡＢ類（物Ｃ）】	25-12
2	不明木製品	ＳＤ2233	上半部に刻み　中空　長さ：3.9cm　幅：4.5cm以上	30-8
3	永楽通寶	ＳＤ2220・１層	初鋳：永楽元年(1403)【明】	28-1
4	元祐通寶	ＳＤ2230・底面	初鋳：元祐元年(1086)【北宋】	28-1
5	元豐通寶	ＳＤ2230・底面	初鋳：元豐元年(1078)【北宋】	28-1
6	皇宋通寶	ＳＤ2230・１層	初鋳：寶元２年(1039)【北宋】	28-1

第47図　ＳＤ2206・2220・2230・2233溝出土遺物



（単位：cm）

No.	種　類	出土遺構・層位	特　　徴	口　径	底　径	器　高	残存率	分　類	写真図版
1	土師器・高坏	ＳＤ2206・1層	坏部外面：ヨコナデ→ヘラケズリ　坏部内面：ヘラミガキ→黒色処理　脚部内面：ヘラケズリ	14.4	－	－	1/2		
2	土師器・坏	ＳＤ2208・1層	外面：ヨコナデ、ナデ→ヘラケズリ　内面：ヘラケズリ→黒色処理	16.2	－	5.4	3/4		19-3
3	土師器・坏	ＳＤ2208・3層	外面：ヨコナデ、ナデ→ヘラケズリ　内面：ヘラケズリ→黒色処理	(12.0)	－	4.0	2/5		19-6
4	土師器・甕	ＳＤ2208・2層	多孔　外面：ハケメ→ヨコナデ、ナデ　内面：ハケメ→ヨコナデ、ナデ	18.0	5.7	12.1	2/3		19-4
5	土師器・甕	ＳＤ2208・3層	頸部に段　外面：ハケメ→ヨコナデ、ミガキ　内面：ハケメ→ヨコナデ、ミガキ	－	－	－	1/3		
6	須恵器・坏	ＳＤ2229・1層	内外面：ロクロナデ　底面：ヘラ切り→ナデ	(13.2)	(7.0)	3.8	一部		
7	須恵器・坏	ＳＤ2229・1層	内外面：ロクロナデ　底面：回転糸切り	(14.2)	(7.0)	4.7	一部		
8	土製模造品	ＳＤ2208・3層	上げ底　外面：ヨコナデ→ミガキ　内面：ヨコナデ、ナデ	3.6	2.2	4.4	ほぼ完形		19-5
9	土製円板	ＳＤ2230・2層	須恵器・甕の転用品　大きさ：3.7×3.2 cm　厚さ：1.0cm						
10	土製円板	ＳＤ2230・2層	瓦の転用品　径：2.3cm　厚さ：1.2cm						
11	土　錘	ＳＤ2206・1層	外面：ナデ　大きさ：4.2×1.9 cm　孔の径：0.5cm						

第48図　ＳＤ2206・2208・2229・2230溝出土遺物

いずれよりも新しい。

規模・形状などが判明している最も新しいＥは、上端幅約4.3m、底面幅約2.1mで底面は概ね平坦である。深さは最も残りの良い部分で約50㎝残っており、断面は緩やかなU字形をなす。堆積土は11層に細分され、すべて自然堆積である。溝の方向は心心でほぼ真北方向である。

なおＳＤ2220Ａ～Ｄについては、新しい溝によって大きく壊されているため規模・形状堆積土の状況は捉えられないが、いずれもＥと大きく異なることはないとみられる。

遺物はＦから土器と瓦が少量と土製円板(第48図9・10)が出土している。またＦの第1層からは皇宋来通寳（第47図6）が1点ｷﾞﾛ第2層から土錘が3点、Ｃの最下層から元裕通寳(4)・元豊通寳(5)がそれぞれ出土している。

ＳＤ2233(第9・46・47図)

調査区北西隅で検出した南北溝で、南北両側ともさらに調査区外へ続く。ＳＤ2231と重複してこれより古い。

上端幅1.2～1.7m、底面幅0.3～0.9m、深さは最も残りの良い部分で約50㎝である。底面はほぼ平坦で、断面は緩やかなU字形をなす。堆積土はいずれも自然堆積で4層に細分される。溝の方向は心心でほぼ真北方向である。

遺物は2層から黒曜石の石器、堆積層から用途不明の木製品(第47図2)が出土している。

2、Ⅱ区で発見した遺構と遺物

検出した主な遺構には竪穴住居跡16軒、掘立柱建物跡14棟、区画施設1条、道路跡1条、井戸跡4基、河川1条の他多数の土壙・溝などがある。

①；竪穴住居跡

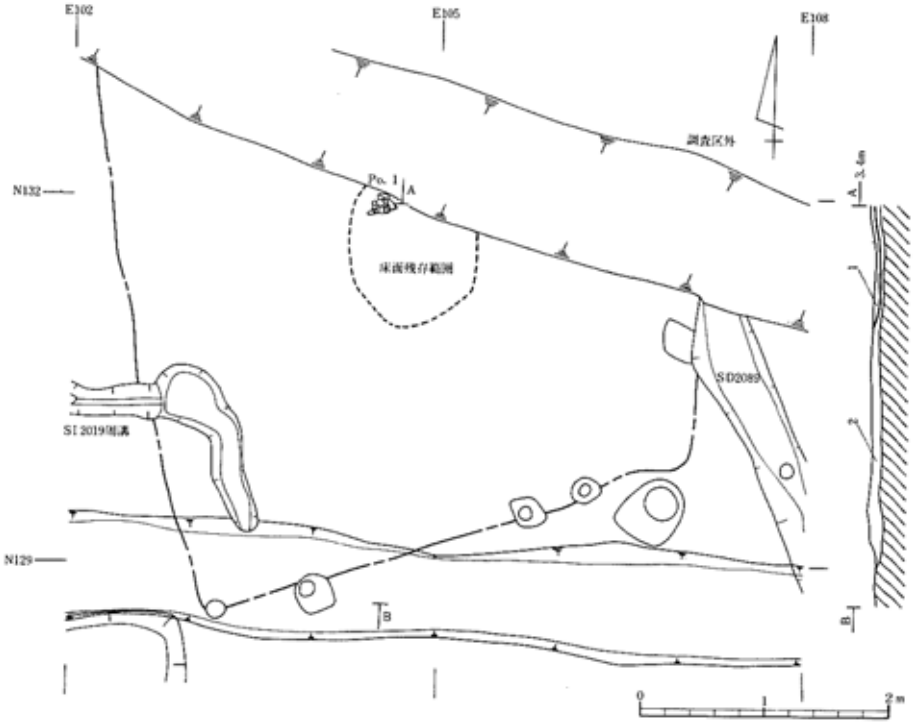
竪穴住居跡は全般的に遺構の残存況が良くなく、遺物がまとまって出土しているものもほとんどない。以下では比較的遺存状況の良好なものから概要を記述してゆく。

ＳＩ2044（第49～51図）

調査区西半部の北壁際で検出した竪穴住居跡で、北半部は調査区外である。ＳＩ2019、ＳＡ2089と重複しいずれよりも古い。本住居跡は、堆積土の一部と掘り方埋土を確認しただけである。

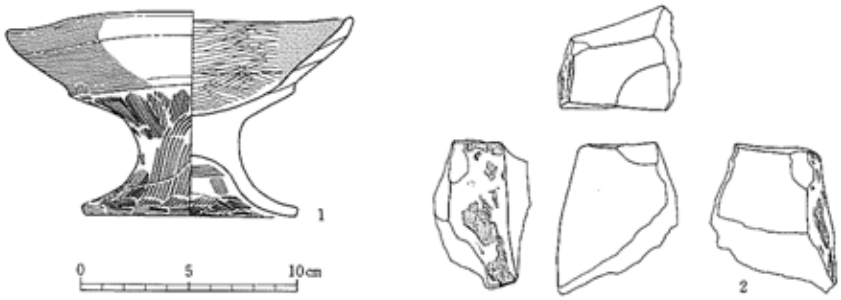
規模は、北辺を検出していないため不明であるが、東西約4.5m、南北4.4m以上で、平面形は隅丸方形と思われる。

床面は北半部の一部で確認できただけであるが、主柱穴・周溝はないと考えられる。貯蔵穴・カマドは検出できなかった。住居跡の方向は、掘り方の西辺でみると、北で約14度



No.	土色	土性	備考	No.	土色	土性	備考
1	黒褐色(10YR3/1)	(4)	〈住居内埋積土〉多くの炭化物を含む。	2	暗灰黄色(2.5Y4/2)	(4)	〈貼り方埋土〉地山の土をブロック状に若干含む。しまりあり。

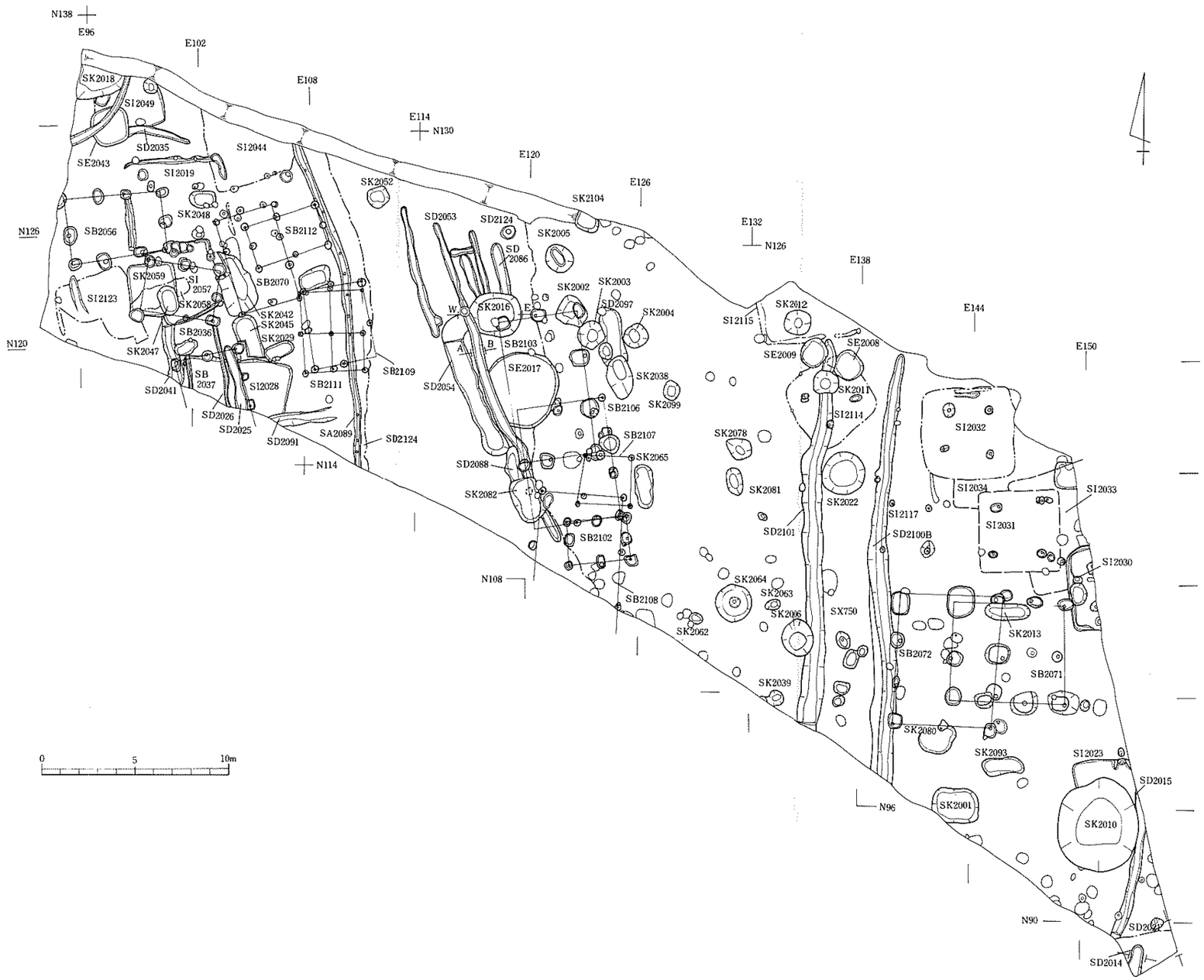
第49図　SI 2044住居跡



(単位：cm)

No.	種類	種位	特徴	口径	底径	器高	残存率	分類	写真図版
1	土師器・高杯	床面(Po. 1)	坏部内面：ヨコナデ→ハケメ　坏部内面：ヘラミガキ→黒色処理　脚部外面：ハケメ　脚部内面：ハケメ、ナデ	(15.9)	(15.0)	(9.1)	3/5		19-7
2	砥石	覆土中	大きさ：7.1cm以上×5.6 cm以上　厚さ：4.5cm						

第50図　ＳＩ2044住居跡出土遺物



第51図　Ⅱ区遺構配置図

西へ偏している。

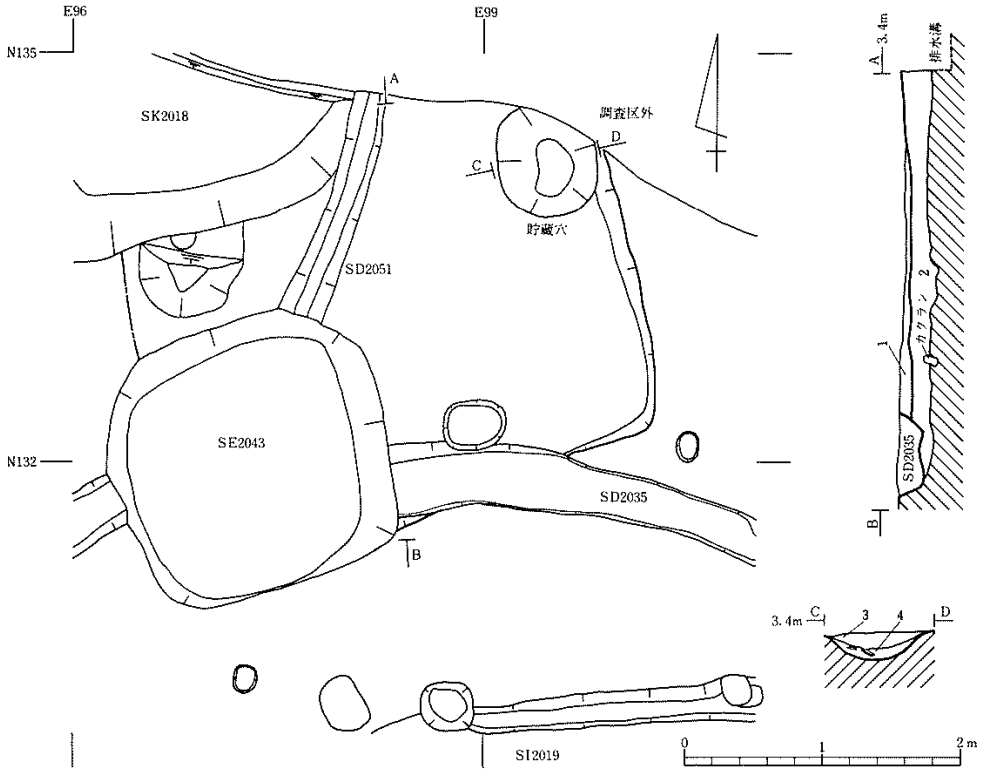
住居内の堆積土は1層だけ確認している。

遺物は、床面から非ロクロ調整の土師器の高坏と砥石が各1点(第51図1)、また掘り方埋土からは非ロクロ調整の土師器の破片が数点それぞれ出土している。堆積層からは、非ロクロ調整の土師器の破片が少量出土しているが、この中には内黒で体部外面に段のみられる坏がある。

ＳＩ2049(第51～53図)

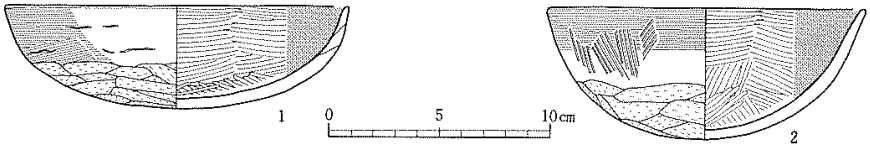
調査区北西隅で検出した竪穴住居跡で、北半部は調査区外である。ＳＥ2043、ＳＫ2018、ＳＤ2035・2051と重複し、いずれよりも古い。

全体的に削平されており、西半部では掘り方埋土を確認できただけである。また北辺を



No.	土色	土性	備考	No.	土色	土性	備考
1	黄灰色(2.5Y5/1)	粘土質ｼﾙﾄ	〈住居内堆積土〉炭化物・地山の土を若干含む。	3	暗黄灰色(2.5Y5/2)	ｼﾙﾄ	〈掘り方埋土〉地山の土を多く含む。しまりあり。
2	暗黄灰色(2.5Y5/2)	砂質ｼﾙﾄ	〈掘り方埋土〉地山の土を帯状に多く含む。しまりあり				

第52図　ＳＩ2049住居跡



（単位：cm）

No.	種類	層位	特徴	口径	底径	器高	残存率	分類	写真図版
1	土師器・坏	貯蔵穴	外面：ヨコナデ→ヘラケズリ　内面：ヘラミガキ→黒色処理	15.8	－	4.7	2/3		19-9
2	土師器・坏	貯蔵穴	第118図14とは同器形・同法量　外面：ハケメ→ヨコナデ、ヘラケズリ　内面：ヘラミガキ→黒色処理	14.6	－	6.0	3/4		

第53図　ＳＩ2049住居跡出土遺物

検出していないため正確な規模は不明であるが、東西約3.6m、南北3.0m以上で、平面形は隅丸方形をなすと思われる。

床面は東半部で確認しておりほぼ平垣である。主柱穴・周溝・カマドは検出されていない。また、北東隅付近では貯蔵穴を確認しており、長径80cm以上、短径約70cm、深さ22cmである。住居跡の方向は、東辺でみると北で約10度西へ偏している。

住居内の堆積土は東半部で1層確認している。

遺物は、貯蔵穴から非ロクロ調整の土師器の坏が2点(第53図1・2)出土したほか、床面および貯蔵穴から、非ロクロ調整の土師器の破片が少量、また堆積土中から鉄滓が出土している。

ＳＩ2023(第54図)

調査区東壁際の南半部で検出した住居跡で、東半部は調査区外である。ＳＫ2010、ＳＤ2015と重複し、いずれよりも古い。

南半部をＳＫ2010土壙によって大きく壊されているため正確な規模は不明であるが、東西3.4m以上、南北4.7m以上、平面形は隅丸方形をなすと思われる。残存状況は悪く、北壁で5cmほどしか残っていない。

床面は黄褐色土を多く含む灰黄褐色土の貼床で、ほぼ平坦である。

主柱穴は、ＳＫ2010に壊されているため断定できないが、ないとみられる。周溝・貯蔵穴は検出できなかった。

カマドは北辺の調査区東壁付近に付設されている。カマド本体は両側壁が5cm残存しており、ハの字形に開く。内幅は30～50cm、奥行き50cmほどで、最奥部が5cmほどくぼみ、焼土や灰・崩落土が堆積している。煙道は削平されているが、煙出しピットの底部を確認している。住居跡の方向は、北辺でみると、東で約6度北へ偏している。

住居内の堆積土は北半部の一部で、1層のみ確認した。

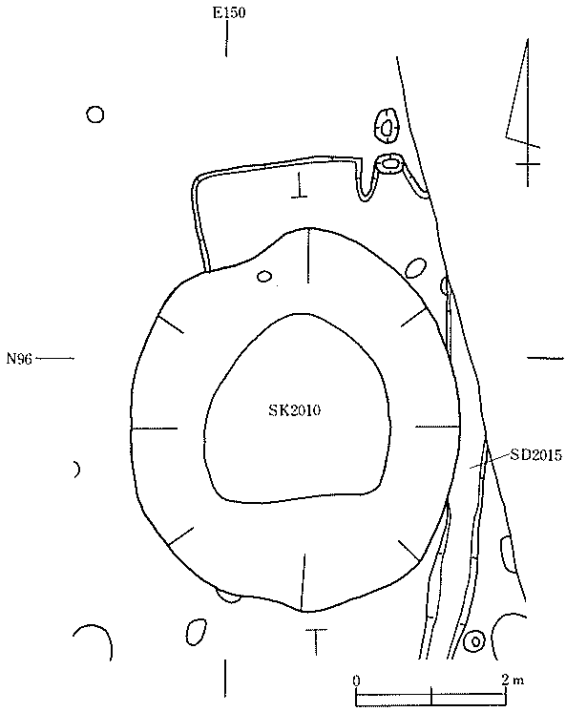
遺物は、堆積土・カマド内堆積土・掘り方埋土から多量の非ロクロ調整の土師器と、若

干の須恵器が出土している。土師器には内黒で体部外面に段のみ坏がある。須恵器には、口縁が肥厚し外面に波状紋を有する小型の甕の口縁部がある。

ＳＩ2030(第57図)

調査区東壁際の中央で掘り方埋土だけを検出した住居跡で東半部は調査区外である。ＳＩ2033、ＳＢ2071、ＳＫ2077と重複し、ＳＩ2033より新しいが、それ以外のものよりは古い。

規模は、南北約4.6m、東西1.5m以上で、平面形は隅丸方形をなすと思われる。



第54図　ＳＩ2023住居跡

柱穴は、調査区壁際で、北西・南西の主柱穴を検出している。主柱はすべて柱穴で抜き取られているため、主柱穴の規模などは捉えられない。また、抜取り穴の平面形は不整形で、深さは50cmほどである。

周溝は北辺～西辺～南辺に認められ、上端幅25cm、底面幅20cm、深さ15cmほどで、断面形はU字形をなす。埋土は黄褐色シルトを若干含む灰黄褐色シルトである。この他、西辺中央やや北よりで堀り方埋土を切る浅い土壙を検出しており、貯蔵穴の可能性がある。

カマドは、北辺西寄りでカマド内堆積土の残痕をかろうじて確認しているだけで詳細は不明である。住居跡の方向は、堀り方の西辺でみると北で約7度西へ偏している。

遺物は、掘り方埋土、周溝と柱抜取り穴から非ロクロ調整の土師器と数点の須恵器が出土している。土師器の中には内黒で体部外面に段のある坏がみられる。

ＳＩ2031(第57図)

調査区北東隅で検出した住居跡で、1992年度の確認調査でかろうじて掘り方埋土を検出していたが、今年度の調査時には主柱穴だけが確認できた。ＳＩ2033・2034と重複しており、1992年度の調査でいずれよりも新しいことを確認している。

規模は不明であるが、4箇所で確認された主柱穴の間隔は、東西・南北とも約2.8m前後である。

主柱穴は一辺40㎝～55㎝の隅丸方形で、深さは17㎝ほど残っている。柱痕跡はすべての柱穴で確認しており、径約15㎝である。周溝・貯蔵穴・カマドは確認できない。住居跡の方向は、東半部の2箇所の主柱穴の柱痕跡でみると北で約2度西へ偏している。

遺物は、すべて破片であるが、堆積層から比較的少量の非ロクロ調整の土師器と数点の須恵器から出土している。この中の土師器には内黒で外面に段をもつ坏がみられる。

ＳＩ2032(第57図)

調査区北東隅で掘り方埋土と主柱穴を検出した住居跡である。ＳＩ2034・2126と重複し、いずれよりも新しい。

規模は南北・東西とも約4.9mで、平面形は隅丸方形をなす。

床面は、北東部で一部確認でき、ほぼ平坦である。

柱穴は、主柱穴を対角線上の4箇所を検出している。北東の主柱穴では柱が抜き取られ、それ以外では柱が切り取られている。主柱穴は、抜取り穴、切取り穴によって壊されているが、深さは40～50㎝ほど残っている。北東の主柱穴で柱あたり痕跡、それ以外で柱痕跡を確認しており、径18㎝ほどである。切取り穴、抜取り穴は長径40～50㎝、短径30～40㎝ほどの楕円形である。

周溝は北辺中央で2条確認しているが、いずれも一部を検出しただけである。外側のものは上端幅約12㎝、底面幅約6㎝、深さ13㎝ほどで、断面は緩やかなU字形をなす。内側のものは上端幅約12㎝、底面幅約7㎝、深さ11㎝ほどで、断面はU字形をなす。埋土はともに焼土をごくわずかに含む黄褐色シルトである。貯蔵穴、カマドは確認できない。住居跡の方向は、西半部の主柱穴の柱痕跡によると北で約5度西へ偏している。

堆積土は北東隅付近で1層のみ確認している。

遺物は、すべて破片であるが、堆積土・床面・周溝・掘り方埋土から多量の非ロクロ調整の土師器の坏・甕などが出土している。また、掘り方埋土からは種類は不明であるが、須恵器が数点出土している。

ＳＩ2126(第57図)

調査区東北隅のＳＩ2032堀り方埋土で検出した4箇所の柱穴から想定した竪穴住居跡である。規模は不明であるが、4箇所で確認された主柱穴の間隔は、南北約3.0m、東西約2.8mである。

主柱穴は径20～30㎝の不整円形をなし、もっとも深い北東のもので15㎝ほどしか残っていない。いずれも柱痕跡は確認されていないことから、抜取り穴のみが残存しているとも考えられる。周溝・貯蔵穴・カマドなども確認できなかった。

住居跡の方向は、西半部の2箇所の主柱穴でみると、北で約13度西へ偏している。

遺物は、南西主柱穴の堆積土から非ロクロ調整の土師器の坏・甕が数点出土したのみである。

ＳＩ2033（第57図）

調査区東北隅で検出した住居跡で、東半部は調査区外である。1992年度の確認調査時に検出していたが、今年度の調査では西半部の主柱穴のみ確認できた。ＳＩ2030・2031・2034、ＳＫ2073と重複し、ＳＩ2034より新しくそれ以外のものより古い。主柱穴でそれぞれ2時期の重複を確認していることから、本住居跡は一度建て替えられていることがわかる(Ａ→Ｂ)。

規模・平面形は南北約6.3m、3、2m.以上の隅丸方形とみられる。なお、主柱穴の間の距離はＡが約3.4m、Ｂが約2.9mである。主注穴は西半部の2箇所で確認しており、いずれも一辺30～40cmほどの隅丸方形ないし楕円形で、深さはＡが40cm、Ｂが25cmほど残っていた。

周溝・貯蔵穴・カマドは確認できなかった。住居跡の方向は、南北の主柱穴間でみるとＡ・Ｂとも北で約15度西へ偏している。

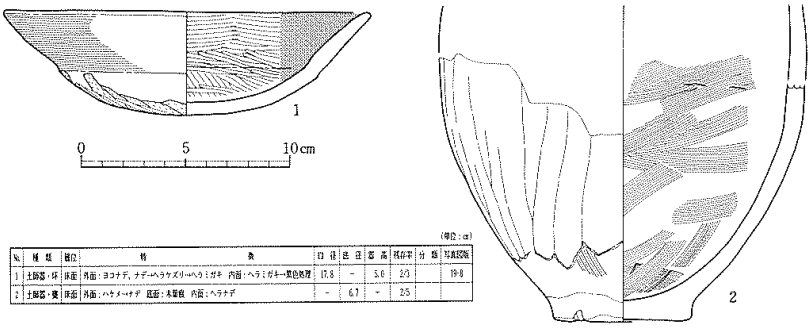
遺物は、調査区壁で確認した掘り方埋土およびＡの南西主柱穴から、非ロクロ調整の土師器の破片が若干出土している。

ＳＩ2034(第55・57図)

調査区東北隅で検出した住居跡で、北東部は調査区外である。1992年度の確認調査時にかろうじて床面を検出していたが、今年度の調査では一部掘り方埋土を確認できただけである。ＳＩ2031・2032・2033、ＳＫ2073と重複し、いずれよりも古い。

平面形は隅丸方形とみられるが、規模・方向は不明である。また柱穴・周溝・貯蔵穴・カマドは確認できなかった。

遺物は、1992年度の確認調査時に床面から非ロクロ調整の坏(第55図1)・甕(2)が各1点出土している。



(単位：cm)

No.	種類	器位	特徴	口径	底径	器高	残存率	分類	写真図版
1	土師器・坏	床面	外面：ヨコナデ、ナデ→ヘラケズリ→ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ→黒色処理	17.8	－	5.0	2/3		19-8
2	土師器・甕	床面	外面：ハケメ→ナデ 底部：木葉痕 内面：ヘラナデ	－	6.7	－	2/5		

第55図　ＳＩ2034住居跡出土遺物

ＳＩ2114（第57図）

調査区東半部の北寄りで掘り方埋土と主柱穴を検出した住居跡である。ＳＸ750南北道路の西側溝(ＳＤ2101)、ＳＥ2008･2009、ＳＫ2011と重複し、いずれよりも古い。

規模は南北･東西とも約4.2mで、平面形は隅丸方形をなす。

柱穴は、主柱穴を対角線上4箇所で確認しているが、北東の主柱穴はＳＥ2008、ＳＫ2011に大きく壊されている。柱はいずれの柱穴でも抜き取られている。このため柱穴の正確な平面形は捉えられないが、径50㎝前後の円形とみられ、深さは約50㎝残っていた、抜取穴は一辺40～70㎝の不整方形をなす。

周溝･カマドは確認できなかったが、北東隅でＳＤ2101･ＳＥ2008にきられる土壙を確認しており、貯蔵穴の可能性がある。住居跡の方向は掘り方の南辺でみると東で約37度北に偏している。

遺物は、掘り方埋土から非ロクロ調整の土師器の破片が数点出土している。

ＳＩ2117(第57図)

調査区東半部の中央やや北寄りで検出した4個の柱穴から想定した住居跡である。ＳＸ750東西道路の東側溝(ＳＤ2100)と重複し、これよりも古い。

規模は不明であるが、4箇所で確認された主柱穴の間隔は南北方向が東側で2.4m、西側で約2.5m、東西方向が北側で約2.1、南側で約2.3mである。

それぞれの主柱穴は、平面形は一辺30～50㎝の不整方形をなし、深さは50㎝ほど残っていた。南東の主柱穴では柱が切り取られているが、いずれの主柱穴でも径15～20㎝ほどの柱痕跡を確認している。周溝･貯蔵穴･カマドは確認できなかった。住居跡の方向は東側の主柱穴の柱痕跡でみるとほぼ真北である。遺物は出土していない。

ＳＩ2019(第66図)

調査区西半部の北寄りで検出した住居跡である。南辺は不明で、周溝と主柱穴･壁柱穴を確認したのみである。ＳＩ2044･2057、ＳＢ2056と重複し、ＳＩ2044より新しく、ＳＩ2057、ＳＢ2056より古い。

規模は、東西約5.5m、南北が現状で4.7mほど確認しているが、主柱穴の位置からみて5.8m前後と推測される。平面形は隅兎方形をなすと思われる。

主柱穴は南西を除く3箇所で検出している。一辺30～50㎝の隅丸方形ないし円形で、深さは約20㎝残っている。柱痕跡はいずれの主柱穴で確認しており、径15～20㎝である。壁柱穴は東･北･西辺の4箇所で確認しており、径20㎝ほどである。

周溝は南辺を除く3辺で検出しており、上端幅が最も広い部分で46㎝、底面幅約12㎝、深さは約15㎝ほど残っており、断面形は緩やかなU字形をなす。住居内堆積土･堀

り方埋土は残存しておらず、貯蔵穴・カマドなども確認できなかった。
住居跡の方向は、東半部の主柱穴の柱痕跡でみると、北で約8度西へ偏している。
遺物は、すべて破片であるが、周溝埋土から少量の非ロクロ調整の土師器の坏などと須恵器が皮土している。
ＳＩ2028(第66図)
調査区西半部の南壁付近で検出した竪穴住居跡で、南半部は調査区外である。ＳＢ2037、ＳＫ2045、ＳＤ2025～27・2091と重複しており、ＳＫ2045より新しく、それ以外のものよりは古い。
規模は、東西約5.8m、南北3.2m以上で、平面形は隅丸方形と思われる。壁は18㎝ほど残っている。
床面は掘り方埋土上面で、ほぼ平坦である。主柱穴・周溝・カマドは検出できなかった。住居跡の方向は、北辺でみると東で約2度南へ偏している。
堆積土は3層に細分され、最下層である3層は黄褐色シルトを特に多く含む。
遺物は、すべて破片であるが、堆積土・床面・掘り方埋土から、やや多量の非ロクロ調整の土師器の坏・甕と須恵器の破片が数点出土している。
この中の土師器には、内黒で体部に段をもつ坏がみられる。
ＳＩ2057（第66図）
調査区西半部中央のやや南寄りで検出した竪穴住居跡である。ＳＩ2019、ＳＢ2036・2056、ＳＫ2045・2047・2058・2059、ＳＤ2041と重複し、ＳＩ2019、ＳＤ2041より新しく、それ以外のものより古い。また、ＳＫ2042とも重複するが新旧関係は捉えられなかった。
規模は東西約3.5m.南北約3.9mで、平面形は隅丸方形をなす。壁は12㎝ほど残っている。
床面は地山で、ほぼ平坦である。主柱穴・カマド・貯蔵穴は確認できなかった。
周溝は東辺および南辺東側で確認している。上端幅約20㎝、底面幅約10㎝、深さは約3㎝残っている。断面形は浅い皿状をなし、埋土は黄灰色シルトである。
住居跡の方向は、北辺でみると東で約18度北へ偏している。堆積土は1層である。
遺物は、堆積土からほとんど小破片であるが、非ロクロ調整の土師器の坏・甕が比較的多量出土している。
ＳＩ2123(第66図)
調査区南西隅で検出した竪穴住居跡で、南半部は完全に地山(第3層)まで削平されている。ＳＢ2036、ＳＫ2059と重複し、いずれよりも古い。
規模は東西約4.3m、南北約4.1m以上で、平面形は隅丸方形をなすと思われる。主柱

穴・カマド・貯蔵穴は確認できなかった。なお、西辺では溝状に堆積土が残存しており周溝の可能性も考えられるが、これと掘り方埋土との違いが識別できないことより、西辺の堆積土も掘り方埋土と考えられる。住居跡の方向は、東辺でみると北で約22度西へ偏している。遺物は出土していない。

ＳＩ2115(第62図)

調査区中央部の北壁際で検出したＬ字形の小溝を竪穴住居跡の周溝とみて想定した住居跡である。北半部は調査区外である。住居内堆積土・掘り方埋土は残存しておらず、また主柱穴・貯蔵穴・カマドなども確認できない。ＳＥ2009と重複しこれよりも古い。

規模は不明であるが、平面形は隅丸方形をなすと思われる。

周溝は、西辺を約2.4m、南辺は東端が削平されているが、約5m確認している。上端幅約32㎝、底面幅約18㎝で、深さは約11㎝ほど残っている。断面は外側に開く歪んだU字形をなす。

住居跡の方向は、南辺でみると東で約7度北へ偏している。遺物は出土していない。

②；建物跡

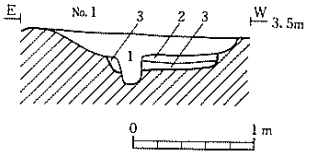
建物跡は調査区の東端部で2棟検出しているが、中央部から西側にかけて集中している。いずれも掘立柱建物跡で、小規模なものが多く、廂を持つものもみられない。

ＳＢ2071(第56・57図)

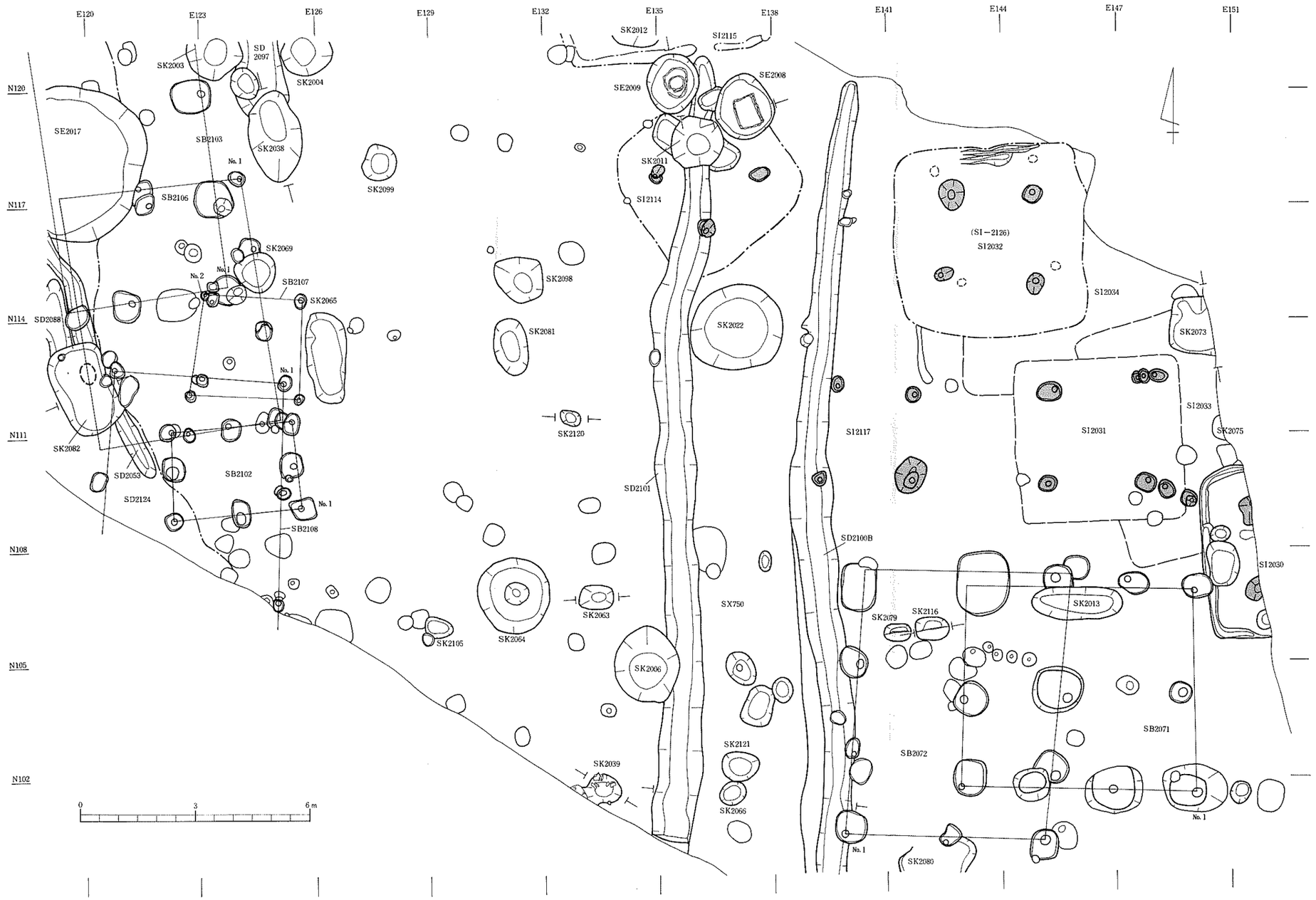
調査区東端部の中央やや南寄りで全形を検出した東西3間、南北2間の東西棟建物跡である。ＳＩ2030、ＳＢ2072、ＳＫ2013と重複し、ＳＫ2013より古く、ＳＩ2030・ＳＢ2072より新しい。

柱穴は10箇所すべてで検出しており、一辺が0.6～1.0mの隅丸方形・不整方形で、深さは0.3～0.5m残っていた。埋土は暗黄灰色砂質シルトを主体とし、含まれる黄褐色などの地山ブロックの量で細分される。5箇所で柱痕跡を確認しており、径15～20㎝である。また、5箇所で柱が抜き取られているが、このうちの3箇所では径15㎝ほどの柱のあたり痕跡を確認している。

柱間寸法は、柱位置が不明なものは柱穴の中央に想定すると、桁行が南側柱列で東から2.16m、約2.2m、約1.8mで、総長が6.22m、北側柱列で東より1.65m、1.97m、約1.9mで、総長が約5.5m、梁行が東妻で北から2.71m、2.63mで、総長が5.30mである。以上のように本建物跡は、柱間寸法にバラツキがみられ、また東妻棟通下の柱が建物の内側に入り込むなど、平面形に歪みがみられる。建物の方向は南傾柱列でみると、東で約1度南へ偏している。



第56図　ＳＢ2071柱穴断面図



第57図　Ⅱ区東半部の検出遺構

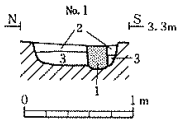
遺物は、柱穴埋土と柱抜取穴から、非ロクロ調整やロクロ調整の土師器、須恵器がそれぞれ出土している。なお、須恵器には底部が回転糸切り無調整で、口径に比して底径の小さい坏や広口壺が含まれる。

ＳＢ2072(第57・58図)

調査区東端部の中央やや南寄りで全形を検出した南北3間、東西2間の南北棟建物跡である。ＳＢ2071、ＳＸ750道路跡の東側溝(ＳＤ2100)、ＳＫ2080と重複し、ＳＫ2080より新しく、ＳＢ2071、ＳＤ2100Ｂより古い。

柱穴は北妻棟通下の柱穴を除く9箇所で検出している。残存状況の悪い南妻棟通下の柱穴を除けば、一辺が0.6～0.8mの隅丸方形をなし、深さは0.3mほど残っていた。埋土は炭化物を含む黄灰色砂質シルトを主体としており、含まれる地山ブロックの量で細分される。柱痕跡は5箇所で確認しており、径15～20㎝である。

柱間寸法は、桁行が南から1.74m、2.02m、約3.3mで、総長が約7.2m、西側柱列で南から約1.7m、約3.0m、2.51mで、総長が約6.5m、梁行が南妻で東から2.62m、2.67mで、総長が5.30m、また北妻の総長が約5.7mである。以上のように本建物跡は、柱間寸法や総長にバラツキがみられることから平面形に歪みがみられる。建物の方向は南妻でみると、東で約5度南へ偏している。



第58図　ＳＢ2072
柱穴断面図

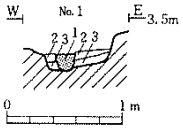
遺物は、南妻棟通下の柱穴埋土から臼玉状の土製品が出土した他、柱穴埋土と柱抜取穴からいずれも非ロクロ調整やロクロ調整の土師器、須恵器、赤焼土器が出土している。なお、須恵器には福島県会津若松市の大戸窯産の壺がみられる。

ＳＢ2102(第57・59図)

調査区中央部南半で全形を検出した南北2間、東西2間の東西棟建物跡である。ＳＢ2106、ＳＤ2124と重複しいずれよりも新しい。またＳＢ2018とも重複しているが、新旧関係は不明である。

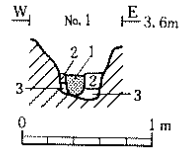
柱穴は8箇所すべてで検出している。一辺が0.4～0.6mの隅丸方形をなし、深さは0.3～0.5mほど残っていた。埋土は炭化物を含む暗黄灰色砂質シルトを主体としており、含まれる地山ブロックの量で細分される。柱痕跡は6箇所で確認しており、径14㎝ほどである。また、2箇所で柱が抜き取られている。

柱間寸法は、桁行が南側柱列で東から約1.5m、約1・7mで総長が3.24m、北側柱列で東から1.64m、1.47mで、総長が3.11m、梁行が東妻で北から1.16m、1.12mで、総長が2.28m、西妻で北から約1.1m、約1.2mで総長が2.31mである。建物の



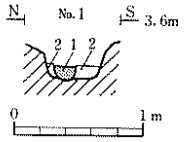
第59図　ＳＢ2102
柱穴断面図

方向は南側柱列でみると、東で約5北へ偏している。
遺物はいずれも小破片であるが、柱穴埋土と柱抜取穴から非ロクロ調整の土師器や須恵器が出土している。
ＳＢ2108(第57･60図)
調査区中央部の南壁際で検出した南北2間以上、東西2間の南北棟建物跡である。ＳＤ2124と重複してこれより新しい。
柱穴は6箇所で検出している。一辺が0.3～0.5mの隅丸方形をなし、深さは0.4～0.5m残っていた。埋土は炭化物を含む黄灰色砂質シルトを主体としており、含まれる地山ブロックの量で細分される。柱痕跡は4箇所で確認しており、径14㎝ほどである。1箇所で柱が抜き取られている。
柱間寸法は、桁行が東側柱列で北から2.9m、2.8mで、総長は不明である。梁行は北妻で東から2.11m、2.25mで、総長は4.36mである。建物の方向は北妻でみると、東で約5度南へ偏している。
遺物は、いずれも少破片であるが柱穴埋土と柱抜取り穴から少量の非ロクロ調整とロクロ調整の土師器と須恵器および赤焼土器の他、丸瓦が1点出土している。



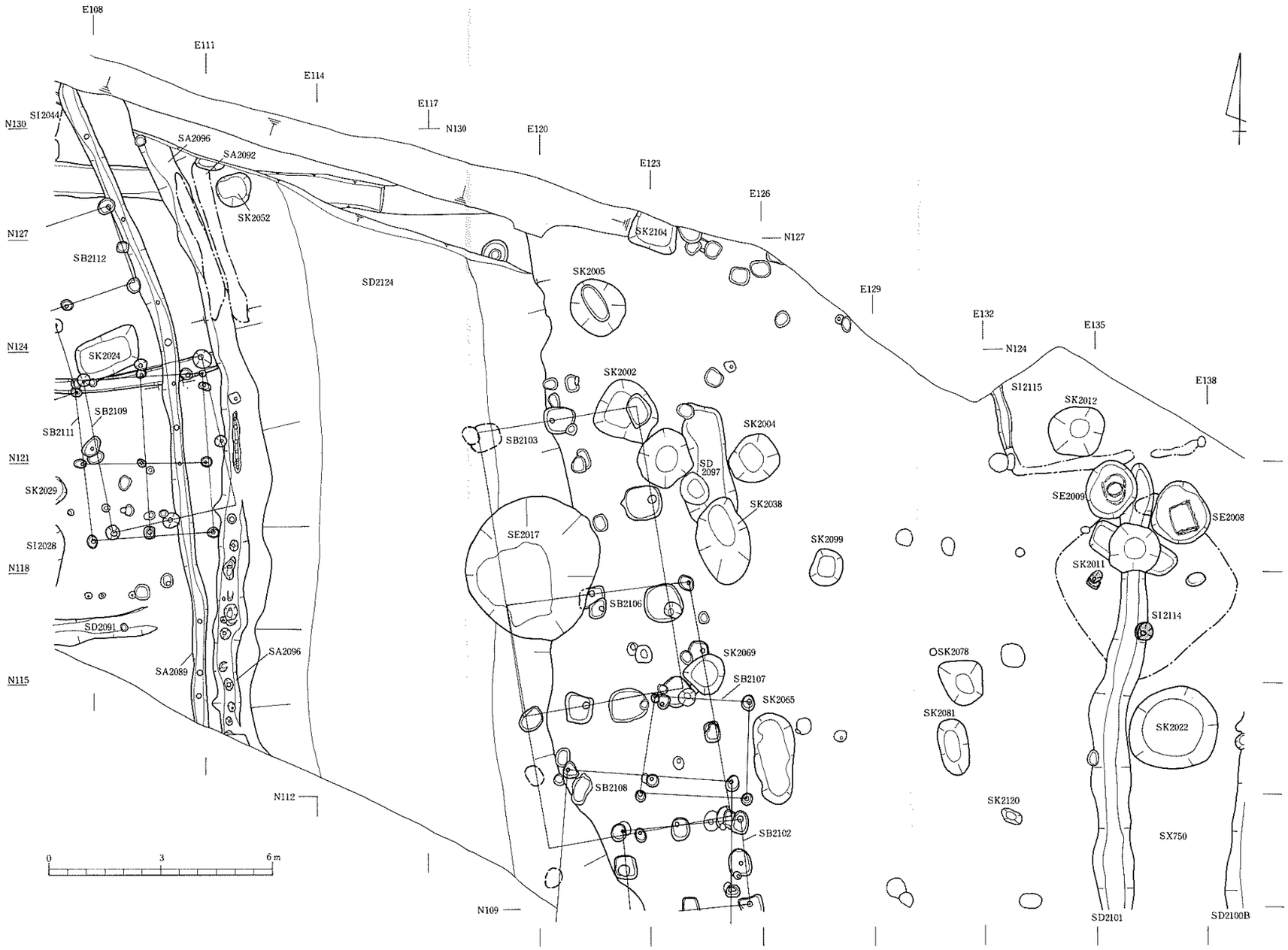
第60図　ＳＢ2108
柱穴断面図

ＳＢ2106（第61・62図）
調査区中央部南寄りで検出した南北3間、東西2間とみられる南北棟建物跡である。
ＳＢ2102、ＳＥ2107、ＳＫ2069、ＳＤ2124と重複し、ＳＤ2124より新しくそれ以外のものより古い。
柱穴は6箇所で検出している。一辺が0.4～0.6mの隅丸方形をなし、深さは0.4mほどで、埋土は灰オリーブ色砂質シルト炭化物や地山ブロックを含んでいる。柱痕跡は4箇所で確認しており、径15～20㎝である。また、2箇所で柱が抜き取れている。
柱間寸法は、桁行が東側柱列で北から1.87m、約2.2m、約2.3mで、総長が約6.4mである。梁行は北妻で東から1間分が2.71m、総長は南妻から北へ1間目で約5mである。建物の方向は東側柱列でみると、北で約9度西へ偏している。
遺物はすべて少破片であるが、柱穴埋土から非ロクロ調整とロクロ調整の土師器が少量出土している。



第61図　ＳＢ2106
柱穴断面図

ＳＢ2107（第62・63図）
調査区中央部のやや南寄りで全形を検出した南北1間、東西1間の建物跡である。
ＳＢ2103と重複してこれより新しい。また、ＳＢ2106・2108とも重複しているが新旧関係は不

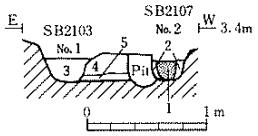


第62図　Ⅱ区中央部の検出遺構

明である。

柱穴は4箇所ですべて検出している。径0.3～0.4mの円形で、深さは0.4mほど残っていた。埋土は地山の小ブロックを含む黄灰色砂質シルトである。柱痕跡はすべての柱穴で確認しており、径12cmほどである。

柱間寸法は・南側柱列が2・80m・北側柱列が2・51m、東側柱列が2.55m、西側柱列が2.65mである。建物の方向は、東側柱列でみると北で約4度、西側柱列では北で約10度東へそれぞれ偏している。



第63図　ＳＢ2103・2107
柱穴断面図

遺物はすべて少破片であるが、柱穴埋土から非ロクロ調整とロクロ調整の土師器が少量出土している。

ＳＢ12103(第62・63図)

調査区中央部で全形を検出した南北3間、東西が北妻で2間、前妻で3間の南北棟建物跡である。ＳＤ2124、ＳＢ2107、ＳＥ2017、ＳＫ2016・2062と重複し、ＳＤ2124より新しく、ＳＢ2107、ＳＥ2017、ＳＫ2016・2062より古い。

柱穴は9箇所で検出している。一辺が0.7～1.0mほどの隅丸方形をなし、深さは0.5mほど残っていた。埋土は炭化物を含む黄褐色砂質シルトを主体としており、含まれる地山ブロックの量で細分される。柱痕跡は3箇所で確認しており、径15～20cmである。また、6箇所の柱穴で柱が抜き取られているが、このうち2箇所で径約15cmの柱のあたり痕跡を確認している。

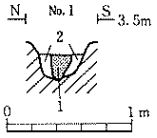
柱間寸法は、桁行が東側柱列で南から2.28m、約3.0m、約2.5mで総長約7.8mである。梁行は南妻で東から2間分が2.79mであることから1.4m等間と考えられ、総長は4.2mとなる。北妻は2.1m等間と考えられる。建物の方向は東側柱列でみると、北で約6度西へ偏している。

遺物はすべて破片であるが、柱穴埋土と柱穴取穴からともに非ロクロ調整の土師器と須恵器が少量出土している。

ＳＢ2111(第62・64図)

調査区西半部の中央で全形を検出した南北2間、東西2間の南北棟総柱建物跡である。ＳＢ2109と重複しこれより古い。

柱間は9箇所すべてで検出している。径が0.3mほどの円形で深さは0.4～0.5mである。埋土は地山ブロックを含む黄色色砂質シルトである。柱痕跡は6箇所で確認しており、径15cmほどである。



第64図　ＳＢ2111
柱穴断面図

柱間寸法は、桁行が西側柱列で南から2.14m、約2.2m、総長が

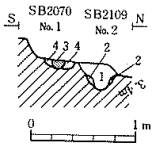
約4.3mである。梁行は前妻で東から1.69m、1.57m、総長が3.25mである。建物の方向は南妻でみると、東で約4度北へ偏している。

遺物は、柱穴埋土から非ロクロ調整の土師器が数点出土している。

ＳＢ2109(第62･65図)

調査区西半部の中央で全形を検出した南北2間、東西2間の南北棟建物跡である。ＳＢ2111、ＳＡ2089･2096、ＳＫ2024と重複し、ＳＢ2111、ＳＡ2089･2096より新しく、ＳＫ2024より古い。

柱穴は前妻東端の柱穴を除く7箇所で検出しており、径0.3～0.4mの円形で、深さは0.2～0.5m残っていた。埋土は地山フロックを含む黄褐色砂質シルトである。6箇所で柱が抜き取られているが、径15㎝ほどの柱のあたり痕跡を確認している。



第65図　ＳＢ2109･2070
柱穴断面図

柱間寸法は、桁行が西側柱列で南から約2.2m、約2.1m、総長が約4.2mである。梁行が北妻でみると、東から1.65m、1.57m、総長が3･21mである。建物の方向は西側柱列でみると、北で約11度西へ偏している。

ＳＢ2070（第65・66図）

調査区西半部の中央で全形を検出した南北3間、東西2間の南北棟建物跡である。ＳＫ2042・2045・2046と重複し、いずれよりも新しい。またＳＢ2112とも重複しているが、新旧関係は不明である。

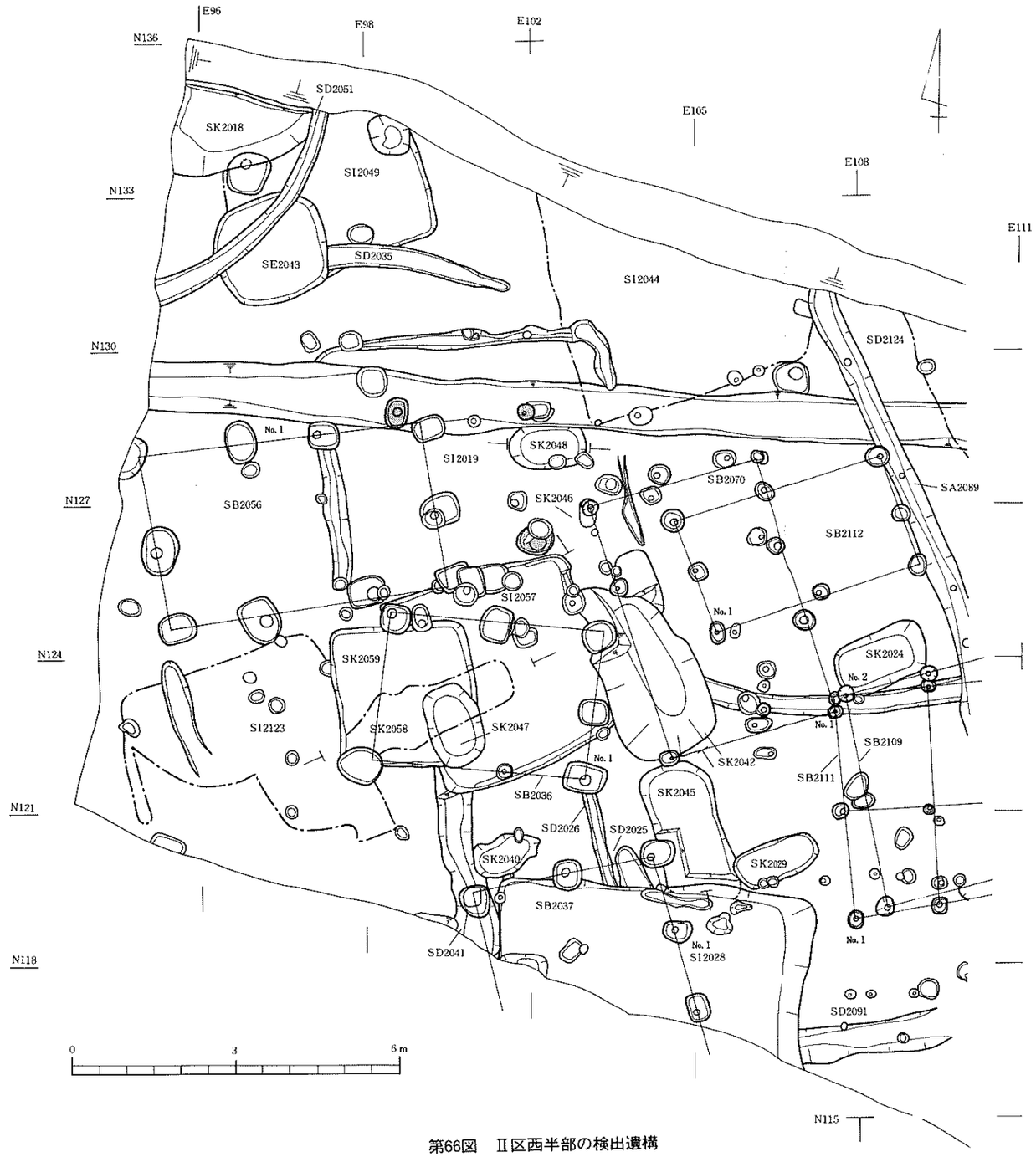
柱穴は西側柱列南端から1間目の柱穴を除くの9箇所で検出している。一辺が0.3～0.4mの隅丸方形で、深さは0.4m残っていた。埋土は炭化物や地山ブロックを含む黄灰色砂質シルトである。柱痕跡は、1箇所で柱が抜き取られているが、8箇所で確認しており径10～15㎝である。

柱間寸法は、桁行が東側柱列で南から1.88m、1.55m、1.74m、総長が5.16mである。梁行は北妻で東から1.89m、1.34m、総長が3.20mである。建物の方向は東側柱列でみると、北で約16度西へ偏している。

遺物は、柱穴埋土と柱抜取穴から少量の非ロクロ調整とロクロ調整の土師器および須恵器･赤焼土器の他、瓦がそれぞれ出土している。

ＳＢ2112（第61・67図）

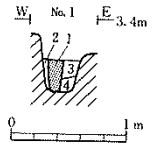
調査区西半部の中央で全形を検出した南北2間、東西2間の東西棟建物跡である。



第66図　Ⅱ区西半部の検出遺構

ＳＡ2089と重複しており、これより新しい。また、ＳＢ2070とも重複しているが、新旧関係は不明である。

柱穴は8箇所すべてで検出している。一辺が0.3～0.4mの隅丸方形で、深さは0.4～0.5m残っていた。埋土は黄灰色砂質シルトを主体としており、含まれる地山ブロックの量で細分される。柱痕跡は6箇所で確認しており、径15㎝ほどである。



第67図　ＳＢ2112
柱穴断面図

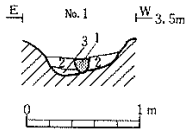
柱間寸法は、桁行が北側柱列で東から2.21m、1.77m、総長が3.98mである。梁行は西妻でみると北から1.03m、1.24m、総長が2.27mである。建物の方向は西妻でみると、北で約20度西へ偏している。

遺物はいずれも破片であるが、柱穴埋土から非ロクロ調整とロクロ調整の土師器と瓦が少量出土している。

ＳＢ2036(第66・68図)

調査区西半部の中央で全形を検出した南北2間、東西2間の東西棟建物跡である。ＳＩ2057、ＳＫ2042･2058･2059、ＳＤ2026と重複し、いずれよりも新しい。

柱穴は南側柱列の1箇所と西妻の棟通下の柱穴を除く6箇所で検出している。一辺が0.5～0.7mの隅丸方形で、深さは0.3mほど残っていた。埋土は黄灰色砂質シルトを主体としており、含まれる地山のブロックの量で細分される。柱痕跡は2箇所で確認しており、径20㎝ほどである。また2箇所で柱が抜き取られている。



第68図　ＳＢ2036
柱穴断面図

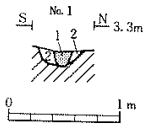
柱間寸法は、桁行が北側柱列で西から約2.0m、約1.8m、総長が約3.8mである。梁行は東妻で南から約1.3m、約1.4m、総長が約2.7mである。建物の方向は北側柱列でみると、東で約8度南へ偏している。

遺物は、柱穴埋立と柱抜取穴から非ロクロ整とロクロ調整の土師器および須恵器がそれぞれ少量出土している。

ＳＢ2037（第66･69図）

調査区西半部の南壁際で検出した南北2間以上、東西2間の南北棟建物跡である。ＳＩ2028、ＳＤ2041、ＳＤ2025と重複し、ＳＩ2028、ＳＤ2041より古い。

柱穴は5箇所で検出している。一辺が0.4～0.6mほどの隅丸方形で、深さは0.5mほど残っていた。埋土は炭化物や地山ブロックを含む黄灰色砂質シルトである。柱痕跡は、1箇所で柱が抜き取られているが、4箇所で確認しており、径15～20㎝である。



第69図　ＳＢ2037
柱穴断面図

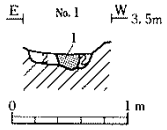
柱間寸法は東側柱列で北から1.48m、1.64mである。梁行

は北妻で東から1.49m、約1.8m、総長が約3.3mとみられる。建物の方向は東側柱列でみると、北で約13度西へ偏している。

遺物はすべて破片であるが、柱穴埋土から非ロクロ調整の土師器と瓦が少量出土している。

ＳＢ2056(第66・70図)

調査区西端部の中央で全形を検出した南北2間、東西3間の東西棟建物跡である。ＳＩ2019・2057と重複し、いずれよりも新しい。



第70図 ＳＢ2056
柱穴断面図

柱穴は10箇所すべてで検出している。一辺が0.5m～0.9mの隅丸方形で、深さは0.3mほど残っていた。埋土は灰白火山灰粒や炭化物を含む暗灰黄色砂質シルトを主体としており、含まれる地山ブロックの量で細分される。柱痕跡は4箇所で確認しており、径20～25㎝である。

柱間寸法は、桁行が南側柱列で西から約1.6m、2.08m、約1.6m、総長が約5.3mである。梁行は東妻で北から約1.7m、約1.3m、総長が約3.1mである。建物の方向は南側柱列でみると、東で約10度北へ偏している。

遺物は柱穴埋土から少量の非ロクロ調整の土師器とともに土製品(写真図判27－3右下)が出土している。

③；区画施設としては、ＳＤ2124溝とＳＡ2089・2092・2096材木塀を検出している。これらの材木塀と溝は、近接して南側方向に平行して続いていることから、両者が一体となって1つの区画施設を構成していると考えられる。

なお、ＳＡ2089・2092・2096材木塀とＳＤ2124溝は、後述するⅢ・Ⅳ区で検出したＳＤ2561溝とＳＡ2554材木塀、また1992年度の他塩道路関係の発掘調査で検出しているＳＤ461溝(宮城県教育委員会:1992)と一連の区画施設と考えられるものである(第120図)。

ＳＤ2124(第62・71～74図)

調査区中央部やや西寄りで検出した南北方向の溝跡である。調査区内では長さ約20m確認しているが、南北両側はさらに調査区外へ続く。ＳＤ2050、ＳＢ2103、ＳＥ2017、ＳＫ2016・2052・2082、ＳＤ2053・2054・2086・2088と重複しＳＤ2050より新しく、それ以外のものより古い。

上端幅約8m、底面幅4.5～4.9mで、深さは1.0mほど残っている。底面はほぼ平坦であるが、西に緩やかに傾斜している。壁は西側が比較的急角度で立ち上がるが、東壁は緩やかである。堆積土は黒色ないしは黒褐色シルトおよび粘土で5層に細分され、いずれも

自然堆積である。溝の方向は、心心で測ると北で約2度西へ偏している。

遺物は堆積土から多量の土師器、須恵器などの他、灰釉陶器、木製品、石製品も出土している(第72～74図)。

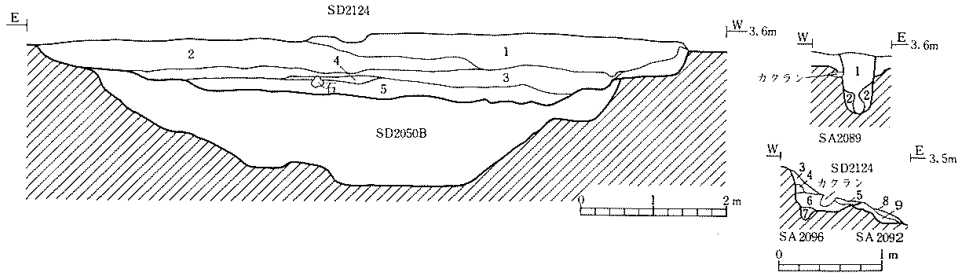
最下層の5層からは土師器と須恵器が出土しており、この中の土師器では非ロクロ調整のものとロクロ調整のものがみられ、前者が主体を占めている。非ロクロ調整の土師器には坏・椀・甕（第72図1～9、第73図9・10）が、またロクロ調整のものでは坏・椀・高台坏(第72図10・11～13)出土している。

須恵器には坏・高台坏・甕（第73図1～8）などがあり、坏では口径に対する底径の割合が0.55～0.59と大きいものが多い。底部の切り離し技法とその後の調整についてみると、ヘラ切りでナデ調整が施されるもの(3・5・6)が最も多く、次いで底部全面を手持ちヘラケズリされるもの（1・2）が多い。この他、破片ではあるが三足壺の獣脚部分が出土している(第74図1)。

1～4層からは多量の非ロクロ調整とロクロ調整の土師器、須恵器の他に、木製品としての斎串、曲物の蓋板、石製の巡方(第74図2)などが出土している。

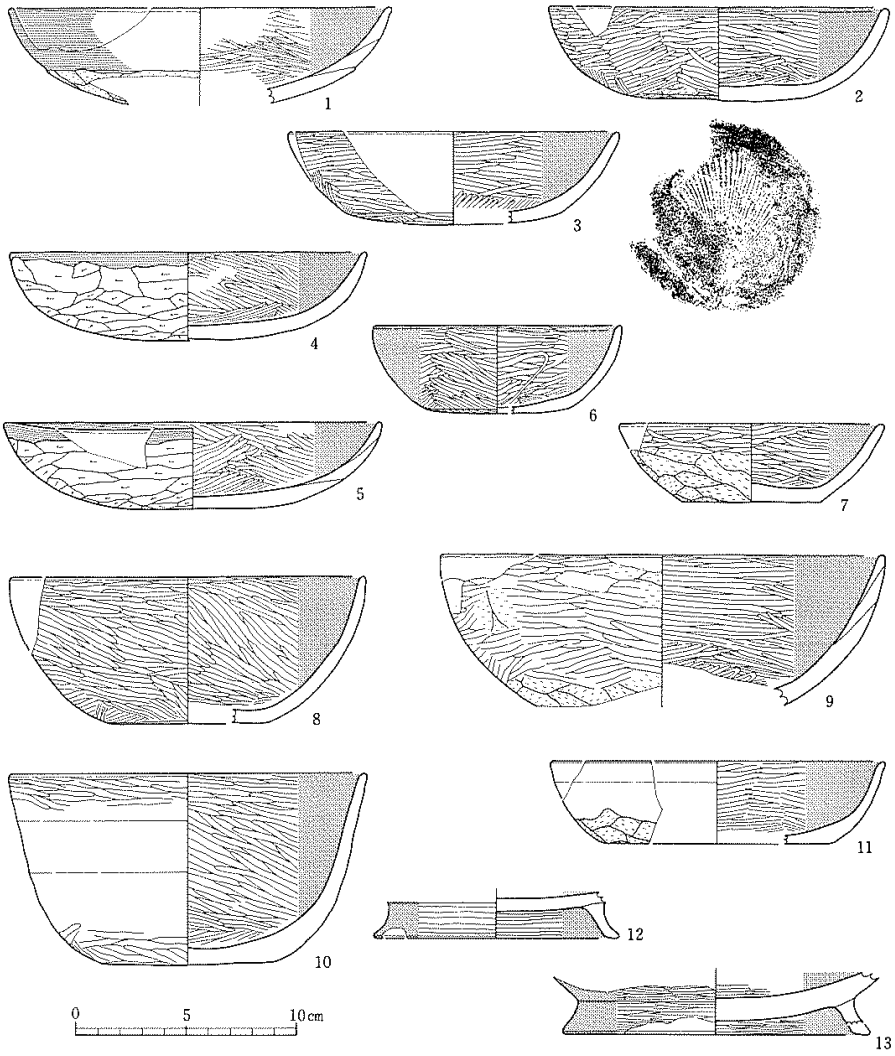
ＳＡ2092・2096・2089(第62・71図)

前述のＳＤ2124溝の西側で、これにほぼ平行して南北方向に続く3条の材木塀跡である。ＳＡ2092は長さ約4.5m、ＳＡ2096・2089は長さ約20mそれぞれ確認しているが、いずれも調査区の北と南へさらに続いている。これら材木塀の新旧関係をみると、ＳＡ2092とＳＡ2096が重複しており、ＳＡ2092が古い。またＳＡ2096とＳＡ2089は重複していないが、ＳＡ2092とＳＡ2096の場合、新しいＳＡ2096が西に位置していることを参考にすると、西端に位置するＳＡ2089が最も新しいと考えられる。なお、ＳＡ2092はＳＤ2124の堆積層(1層)に覆われている。他の遺構との重複関係をみると、ＳＡ2089がＳＢ2044、ＳＢ2109・2112と重



No.	土色	土性	備考	No.	土色	土性	備考
1	黒褐色(10YR3/1)	シルト	炭化物・焼土を多く含む。	4	黒褐色(10YR2/2)	ｼﾙﾄ質粘土	多量の炭化物と極少量の焼土を含む。
2	黒色(2.5Y2/1)	粘土質ｼﾙﾄ	炭化物・焼土をやや多く含む。	5	黒褐色(2.5Y3/1)	粘土	炭化物・焼土・しま状の地山の土を多く含む。
3	黒色(2.5Y2/1)	粘土	炭化物・焼土を少量含む。				

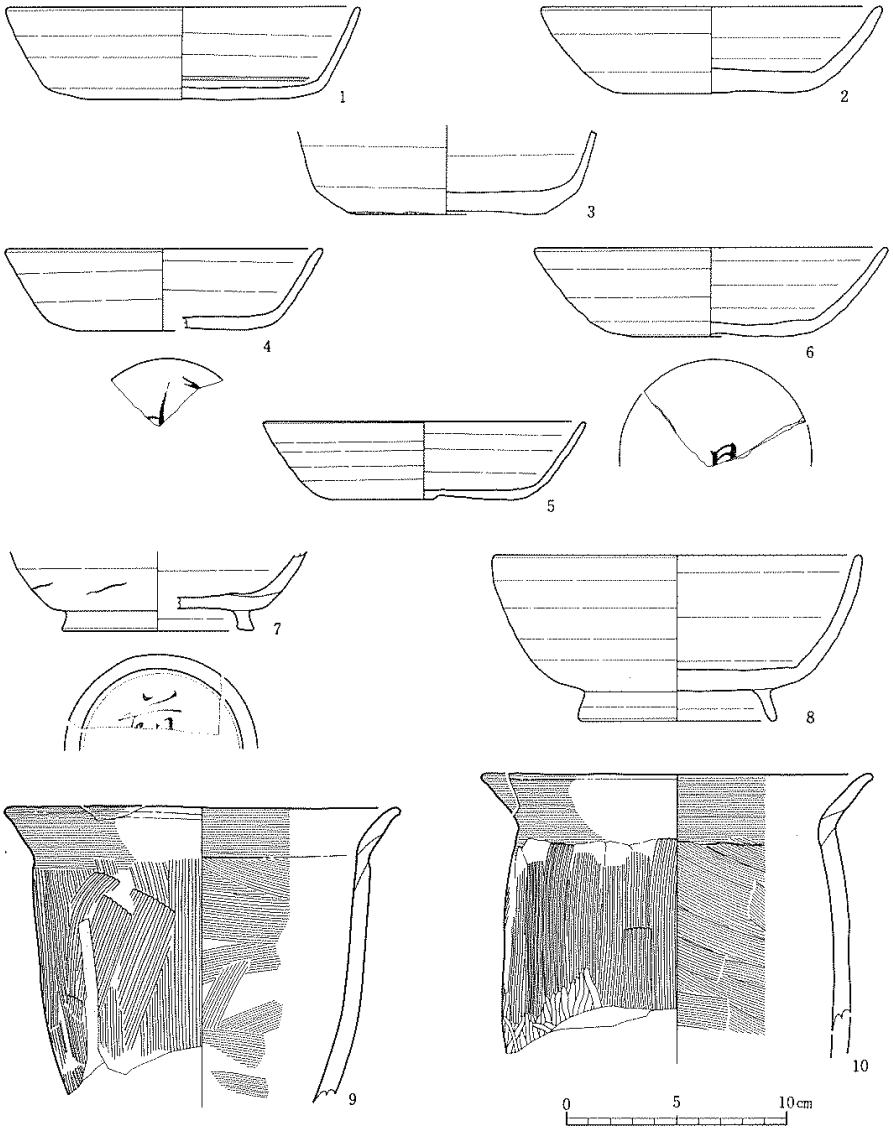
第71図　ＳＤ2124溝、ＳＡ2089・2092・2096塀跡断面図



（単位：cm）

No.	種　類	層位	特　徴	口　径	底　径	器　高	残存率	分　類	写真図版
1	土師器・坏	5層	外面：ヨコナデ→ヘラケズリ　内面：ヘラミガキ→黒色処理	(17.2)	—	—	1/3		
2	土師器・坏	5層	外面：ヨコナデ、ヘラケズリ→ヘラミガキ　底面：静止糸切り→ヘラケズリ　内面：内黒	15.2	(8.2)	4.3	3/5		20-2
3	土師器・坏	5層	外面：ヨコナデ、ヘラケズリ→ヘラミガキ　内面：ヘラミガキ→黒色処理	(14.8)	—	4.3	1/4		
4	土師器・坏	5層	外面：ヨコナデ→軽いヘラケズリ　内面：ヨコナデ→ヘラミガキ→黒色処理	(16.0)	—	4.0	2/5		
5	土師器・坏	5層	外面：ヨコナデ→軽いヘラケズリ　内面：ヘラミガキ→黒色処理	17.0	—	4.0	4/5		20-1
6	土師器・坏	5層	外面：ヨコナデ、ヘラケズリ→ヘラミガキ→黒色処理　内面：ヘラミガキ→黒色処理	11.2	(6.6)	4.0	1/2		
7	土師器・坏	5層	外面：ロクロ→手持ちヘラケズリ→ヘラミガキ（口縁部）　内面：ヘラミガキ→黒色処理	(11.8)	6.2	3.6	1/3		
8	土師器・埦	5層	外面：ヨコナデ、ヘラケズリ→ヘラミガキ　内面：ヘラミガキ→黒色処理	(16.0)	(7.4)	(6.7)	1/5		
9	土師器・埦	5層	外面：ヘラケズリ→ヘラミガキ　内面：ヘラミガキ→黒色処理	(20.0)	—	—	2/5		
10	土師器・埦	5層	外面：ロクロナデ→ヘラミガキ（口縁部・体部下端）　内面：ヘラミガキ→黒色処理	(16.0)	(8.0)	8.7	2/5		
11	土師器・坏	5層	外面：ロクロナデ→手持ちヘラケズリ　内面：ヘラミガキ→黒色処理	(15.0)	(10.0)	3.8	1/5		
12	土師器・高台坏？	5層	台部内外面：回転ミガキ→黒色処理　坏部内面：ヘラミガキ→黒色処理	—	—	—	一　部		
13	土師器・盤？	5層	外面：ヘラミガキ→黒色処理　内面：ヘラミガキ→黒色処理	—	—	—	一　部		

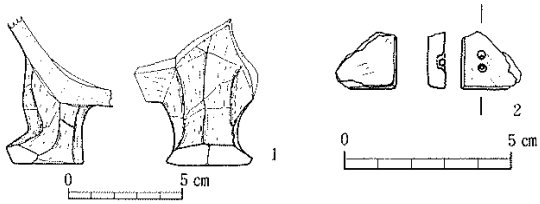
第72図　ＳＤ2124溝出土遺物（１）



（単位：cm）

No.	種　類	層位	特　徴	口　径	底　径	器　高	残存率	分　類	写真図版
1	須恵器・坏	5層	内外面：ロクロナデ　底面：手持ちヘラケズリ	15.9	(9.5)	4.2	3/5		
2	須恵器・坏	5層	内外面：ロクロナデ　底面：手持ちヘラケズリ	－	(9.0)	－	3/5		
3	須恵器・坏	5層	内外面：ロクロナデ　底面：ヘラ切り→ナデ	(15.3)	(8.8)	4.0	1/3		
4	須恵器・坏	5層	内外面：ロクロナデ　底面：回転糸切り？→手持ちヘラケズリ→墨書「□」	(14.2)	(7.8)	3.7	1/4		
5	須恵器・坏	5層	内外面：ロクロナデ　底面：ヘラ切り→ナデ→ヘラ描き「1」	(14.7)	8.2	3.6	3/5		
6	須恵器・坏	5層	内外面：ロクロナデ　底面：ヘラ切り→墨書「□」（目ヵ）	(15.8)	(8.8)	4.0	1/4		
7	須恵器・高台坏	5層	内外面：ロクロナデ　底面：ヘラ切り？→ロクロナデ→墨書「□」（前ヵ）	－	(8.7)	－	1/5		25-2
8	須恵器・高台坏	5層	内外面：ロクロナデ　底面：ヘラ切り→ロクロナデ	(16.4)	9.0	7.6	2/5		
9	土師器・甕	5層	外面：ハケメ→ヨコナデ　内面：ナデ→ヨコナデ	(17.8)	－	－	一部		
10	土師器・甕	5層	外面：ヨコナデ→ナデ→ハケメ→ミガキ　内面：ヨコナデ→ナデ	17.6	－	－	2/5		

第73図　ＳＤ2124溝出土遺物（２）



No.	種　類	層位	特　徴	残存率	図版番号
1	須恵器・三足壺	5層	脚部分のみ	一　部	17-4
2	石製巡方	1層		1/5	

第74図　ＳＤ2124溝出土遺物（３）

復し、ＳＩ2044より新しくＳＢ2109･2112より古い。

各材木塀の掘り方（布掘）は、廃絶時に材が抜き取られているか切り取られているため上半部を壊されているが､遺存状況の良好な部分から推定すると､いずれも上端幅30～40cmほどと推定される。底面は比較的平坦で、幅20cm前後である。壁は急角度で立ち上がり、深さは残りの良いところで約40～60cmである。

材の痕跡はＳＡ2089･2096で確認しており、径10～20cmほどで、密接せずに30～50cmほどの間隔をおいて断続的に続いている。

埋土は各材木塀ともほぼ共通しており、黒褐色シルト・地山(暗灰黄色砂質シルト)ブロックを含む黄灰色粘土質シルトである。

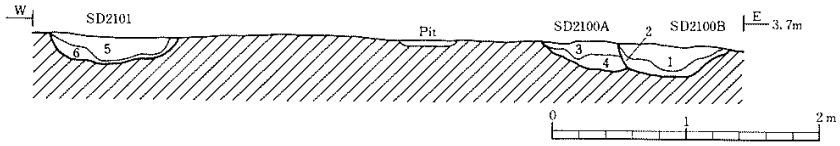
なお廃絶時の材の抜取りは、上端幅30～70cm、深さ20～30cm前後の溝を掘り込んでおこなっている。

方向は、ＳＡ2089･2096が調査区の中央付近で東側に張りだしているため北半部と南半部で大きく異なり、材痕跡をもとにみるとＳＡ2089で南半部が北で約5度、北半部が北で約21度､またＳＡ2096で北半部がほぼ真北方向､南半部が北で約14度西へそれぞれ偏している。ＳＡ2092は抜取り溝の方向でみると北で約18度西へ偏している。

遺物はＳＡ2089とＳＡ2092から出土している。ＳＡ2089では、掘り方埋土から非ロクロ調整の土師器と須恵器が少量、また抜取り溝から非ロクロ調整の土師器が少量それぞれ出土している。ＳＡ2092では、抜取り溝から非ロクロ調整の土師器が比較的多く出土している。

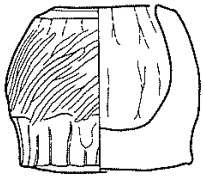
④；道路跡

ＳＸ750（第51・75・76図）



No.	土　色	土 性	備　考	No.	土　色	土 性	備　考
1	黒褐色(10YR3/2)	シルト	〈SD2100B･1層〉炭化物と若干の地山の土を含む。	4	にぶい黄褐色(10YR5/3)	砂質ｼﾙﾄ	〈SD2100A･1層〉地山の土に３層の土が若干混ざる。
2	にぶい黄褐色(10YR5/3)	砂質ｼﾙﾄ	〈SD2100B･1層〉地山の土に１層の土が若干混ざる。	5	黒褐色(10YR3/2)	シルト	〈SD2101A-B期･1層〉炭化物と地山の土を含む。
3	黒褐色(10YR3/3)	シルト	〈SD2100A･1層〉少量の炭化物と多量の地山を含む。	6	褐色(10YR4/4)	砂質ｼﾙﾄ	〈SD2101A-B期･1層〉地山の土に５層の土が少量混ざる。

第75図　ＳＸ750道路跡断面図



（単位：cm）

No.	種　類	出土遺構・層位	特　　徴	口　径	底　径	器　高	残存率	写真図版
1	土製模造品	ＳＤ2101・１層	外面：ナデ→ヘラミガキ　内面：ナデ	3.0	5.6	5.1	ほぼ完形	20-5

第76図　ＳＸ750道路跡側溝出土遺物

調査区東半部で検出した南北道路跡である。調査区内では約25m確認しているが、調査区外の南北両側へさらに続いている。なお、本道路跡は仙塩道路関係の調査時(宮城県教青委員会：1992)で検出したＳＸ750南北道路跡の北延長線上に位置することからそのままの遺構番号を付してある。ＳＩ2114・2117、ＳＢ2072、ＳＥ2008・2009、ＳＫ2006・2011・2022・2066、2121と重複しており、ＳＩ2114・2117、ＳＢ2072より新しく、ＳＥ2009、ＳＫ2006・2011より古いが、ＳＥ2008、ＳＫ2022・2066・2121との新旧関係は不明である。

道路跡は、東にＳＤ2100、西にＳＤ2101といった素掘りの側溝を伴っており、このうちの東側溝でＡ→Ｂの２時時の変遷を確認している。なお、道路跡北端部および路面と路面堆積土は後世の削平のため残っていない。

側溝の規模はＢ期で上端幅0.8～1.0m、底面幅0.5～0.7mで、深さは0.3mほど残っていた。底面はほぼ平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。堆積土は、Ａ、Ｂいずれの場合も下層が褐色の粘土質シルトで、土層が黒褐色シルトである。道路の方向は東側溝でみると北で1度東に偏している。

路幅は、路面が既に削平されているため正確には捉えられないが、Ｂ期が側溝心心間の距離で3～4mになる。Ａ期の路幅については、Ｂ期とほぼ同程度と考えられる。

遺物は、いずれも破片資料であるが、ＳＤ2100Ｂから多量のロクロ調整の土師器、須恵器、少量の赤焼土器の他に灰釉陶器の椀の破片1点と少量の鉄滓が出土している。

⑤；井戸跡

井戸跡は4基検出している。

ＳＥ2017(第77～79図)

調査区中央部のやや西寄りで検出した井戸跡である。廃絶時に上部の井戸枠が抜き取られ、その後に埋め戻されている。ＳＢ2103･2106・ＳＤ2053･2124と重複し、ＳＢ2103･2106、ＳＤ2124より新しく、ＳＤ2053より古い。

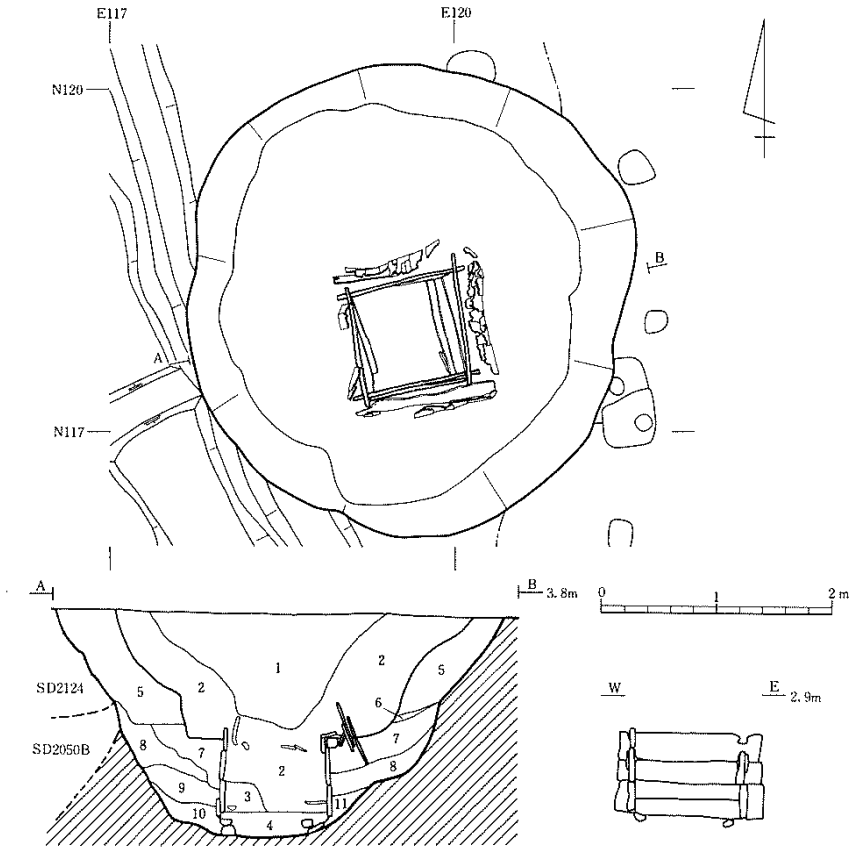
井戸枠の掘り方は円形で、上端の径が4mほどである。深さは約2m残っており、断面は摺鉢状をなす。

井戸枠は、下部と上部で構造が異なっている。下部の井戸枠は3段（高さ約0.8m）で、長方形の板材(長さ120～130㎝、幅20～40㎝、厚さ4～6㎝)の両端の上下に扶りを

入れ、内法が一辺0.9mの正方形に組み上げている。上部の井戸枠は、廃絶時に壊されているため一部しか残存していなかったが、これから推定すると幅20cm前後、長さ70cm以上、厚さ1cm弱の板材を下部の井戸粋のやや外側に立て並べて構築されている。

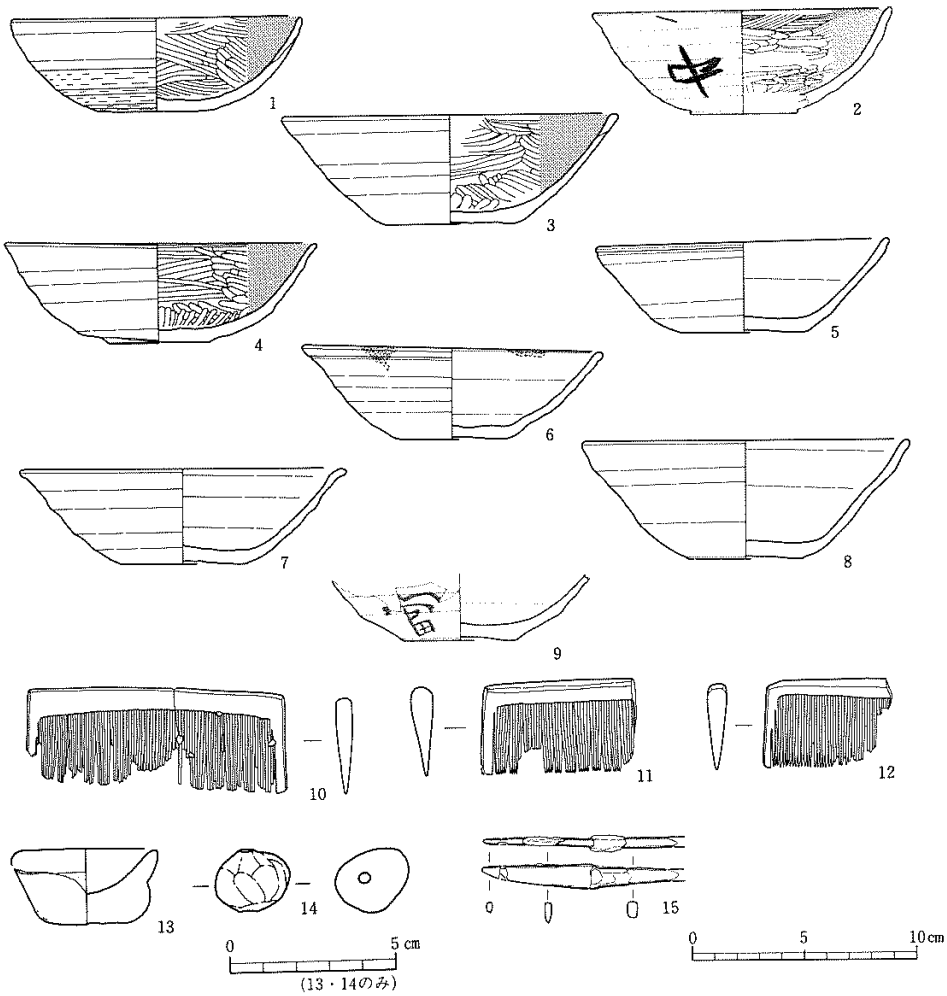
掘り方埋土(裏込め)には地山ブロックを含む灰褐色～黒褐色の粘土質シルトが詰めこまれている。また井戸枠内の堆積土は、井戸の機能時の井戸粋内の自然堆積層(3・4層)と廃絶時に埋め戻された人為的な層(1･2層)に分けられる。なお、3層には灰白色火山灰のブロックが少量みられるが、これは混入したものと考えられる。

遺物は掘り方埋土と井戸枠内部の堆積土、および抜取穴から多量の土器の他に木製品、



No.	土色	土性	備考	No.	土色	土性	備考
1	褐灰色(7.5YR4/1)	砂質粘土	〈抜取り穴堆積土〉炭化物を少量含む。	7	ｵﾘｰﾌﾞ黒色	粘土質ｼﾙﾄ	〈掘り方埋土〉地山の土を多く含む。
2	褐灰色(7.5YR5/1)	砂質土	〈抜取り穴堆積土〉灰白色火山灰ﾌﾞﾛｯｸを多く含む。	8	ｵﾘｰﾌﾞ黒色	粘土質ｼﾙﾄ	〈掘り方埋土〉大きいﾌﾞﾛｯｸ状の地山の土をやや多く含む
3	黒褐色(10YR2/2)	ｼﾙﾄ質粘土	〈井戸枠内堆積土〉灰白色火山灰ﾌﾞﾛｯｸを含む。	9	黒褐色(2.5Y3/1)	ｼﾙﾄ質粘土	〈掘り方埋土〉小さいﾌﾞﾛｯｸ状の地山の土を少量含む。
4	ｵﾘｰﾌﾞ灰色(5GY5/1)	砂	〈井戸枠内堆積土〉上面にﾓﾐｶﾞが検出されている。	10	暗ｵﾘｰﾌﾞ褐色(5GY4/1)	粘土質ｼﾙﾄ	〈掘り方埋土〉ﾌﾞﾛｯｸ状の地山の土を多く含む。
5	灰褐色(7.5YR4/2)	シルト	〈掘り方埋土〉小さいﾌﾞﾛｯｸ状の地山の土を多量に含む	11	黒褐色(2.5Y3/1)	粘土質ｼﾙﾄ	〈掘り方埋土〉大きいﾌﾞﾛｯｸ状の地山の土を多く含む。
6	にぶい黄褐色(10YR5/4)	砂質ｼﾙﾄ	〈掘り方埋土〉地山の土が主体の層。				

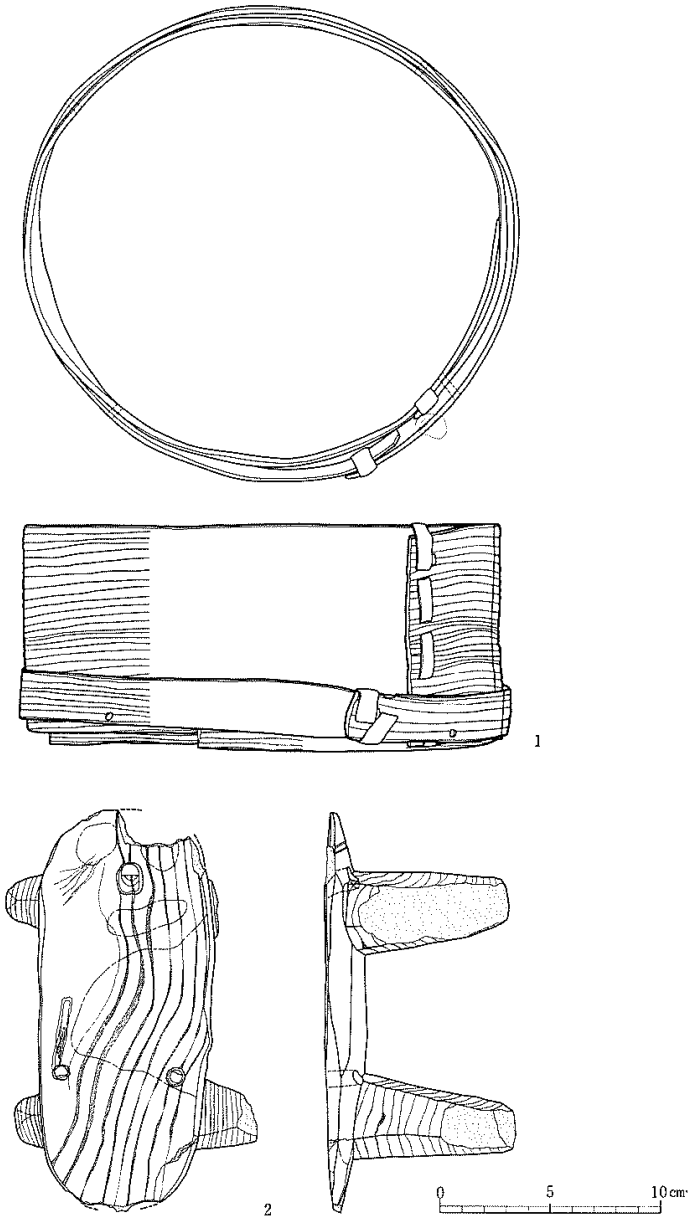
第77図　ＳＥ2017井戸跡



（単位：cm）

No.	種　類	層位	特　徴	口　径	底　径	器　高	残存率	分　類	写真図版
1	土師器・坏	7層	外面：ロクロナデ→回転ヘラケズリ　底面：回転ヘラケズリ　内面：ミガキ→黒色処理	(13.0)	5.5	4.2	3/5		
2	土師器・坏	7層	外面：ロクロナデ→墨書「中」　底面：回転糸切り　内面：ヘラミガキ→黒色処理	13.4	(4.8)	4.7	1/2		20-3・25-3
3	土師器・坏	2層	外面：ロクロナデ　底面：回転糸切り　内面：ヘラミガキ→黒色処理	(15.0)	5.6	4.9	2/5		
4	土師器・坏	4層	外面：ロクロナデ　底面：回転糸切り（雑し）　内面：ヘラミガキ→黒色処理	14.0	4.5	4.7	ほぼ完形		20-4
5	赤焼土器・坏	4層	内外面：ロクロナデ（内面のロクロ目が不明瞭）→油煙状付着物　底面：回転糸切り	12.9	5.6	4.0	3/4		20-7
6	赤焼土器・坏		内外面：ロクロナデ（内面のロクロ目が不明瞭）　底面：回転糸切り	13.4	4.6	4.1	ほぼ完形		20-8
7	赤焼土器・坏	4層	内外面：ロクロナデ（内面のロクロ目が不明瞭）　底面：回転糸切り	(15.3)	(5.6)	(4.2)	1/4		
8	赤焼土器・坏	2層	内外面：ロクロナデ（内面のロクロ目が不明瞭）　底面：回転糸切り	(14.3)	(5.1)	5.3	1/4		
9	赤焼土器・坏	2層	内外面：ロクロナデ（外面：墨書「□高」）　底面：回転糸切り	－	5.0	－	1/2		25-7
10	横　櫛	4層	肩が角張る　断面形は柳葉形　挽歯：歯数38本/4cm　高さ：4.8cm　幅：11.6cm　厚さ：0.7cm						30-1
11	横　櫛	4層	肩が角張る　断面形は柳葉形　挽歯：歯数42本/4cm　高さ：4.1cm　残存幅：6.9cm　厚さ：1.0cm						30-2
12	横　櫛	4層	肩は隅丸状　断面形は柳葉形　挽歯：歯数42本/4cm　高さ：4.0cm　残存幅：5.8cm　厚さ：0.9cm						30-3
13	土製模造品		内外面：ナデ→赤彩　口径：4.4cm　底径：(2.9)cm　器高：2.3cm						
14	土製丸玉	7層	外面：ナデ　大きさ：2.3×1.9cm　穴の径：0.4cm						
15	刀　子	4層	平造　平棟　棟区　残存長：8.7cm						28-3

第78図　ＳＥ2017井戸跡出土遺物（１）



No.	種類	層位	特	徴	写真図版
1	曲物	2層	箍つき釘結合曲物　側板：柾目　内面に縦方向の刻目（ケビキ）　結合釘孔：4　径：約21.0cm　高さ：10.5cm　厚さ：0.3cm		29-3
2	下駄	3層	連歯下駄　台の平面：楕円形　前壺は台の中央で後壺は後歯の前　残存長：18.5cm　幅：8.0cm　残存高：8.6cm		29-7

第79図　ＳＥ2017井戸跡出土遺物（２）

鉄製品、土製品、石器、瓦、硯などカ出土している(第78・79図)。

掘り方埋土からは、すべて破片資料であるが、非ロクロ調整やロクロ調整の多量の土師器をはじめとして、須恵器・少量の赤焼き土器や用途不明の木製品・鉄製品の他、土製の丸玉、平瓦片、円面硯、砥石、漆の付着した布などが出土している。このうち図示できたものにはロクロ調整で糸切り無調整の土師器の坏(第78図2)、ロクロ調整で底部に回転ヘラケズリ調整が施される土師器の坏（1）、土製丸玉(第78図14)がある。また、ロクロ調整の土師器の坏の中は墨書のみられるもの(2)も2点ある。

井戸枠内の3・4層からは非ロクロ調整とロクロ調整の土師器が多量に出土している他、須恵器、少量の赤焼土器、木製品の横櫛・下駄、鉄製品の刀子が出土している。これらのうち図示できたものにはロクロ調整で糸切り無調整の土師器の坏(第78図4)、赤焼土器の坏(5・7)、横櫛(10〜12)・下駄(第79図2)、刀子(第79図15)がある。この他、ロクロ調整の土師器の坏の中には、墨痕のみられるものが3点ある。

抜取穴(1・2層)からはロクロ調整の土師器と須恵器が多量に出土している。この他には非ロクロ調整の土師器、赤焼土器、灰釉陶器と縁釉陶器の椀（各1点）、木製品の曲物、鉄滓、砥石も出土している。このうち図示できたものにはロクロ調整で糸切り無調整の土師器の坏(第78図3)、赤焼土器の坏(8・9)、木製品の曲物（第79図1）などがある。また、いずれも小破片であるが、墨書のみられるロクロ調整の土師器と赤焼土器の坏(第78図9)が6点ある。

ＳＥ2043(第80〜82図)

調査区北西隅で検出した井戸跡である。ＳＩ2049、ＳＤ2035・2051と重複し、ＳＩ2049、ＳＤ2035より新しくＳＤ2051より古い。

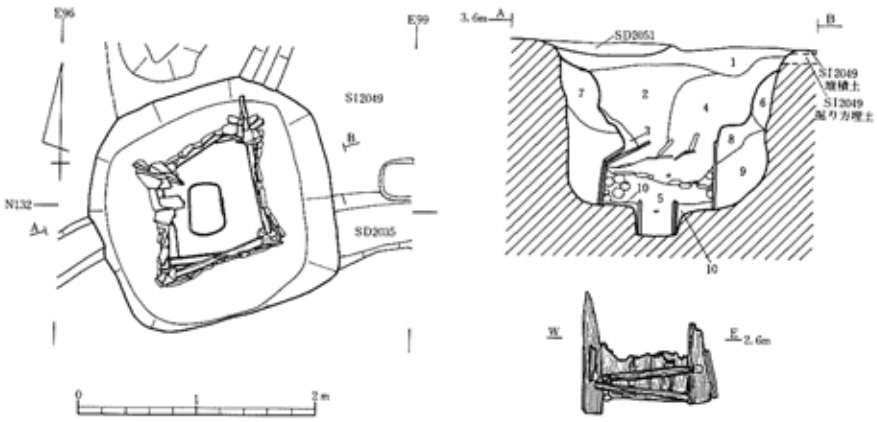
井戸の掘り方は一辺約2.0mの隅丸方形で、深さは1.4mほど残っている。そして掘り方の底面のほぼ中央部には、南北0.5m、東西0.3mほどの範囲を約0.2m掘り下げて、側板のみの曲物(第82図2)を据えている。

井戸枠は四隅に一辺が15cmほどの角柱を立て、隅柱に設けたほぞ穴に横木を差し込んで固定し、その外周りに幅10〜15cmの縦板を立て並べて緩み上げている。内法は、一辺約0.9mの正方形である。

掘り方埋土(裏込め)には、地山ブロック(暗黄褐色シルト・砂)を含む黒褐色粘土や緑灰色砂が詰められている。

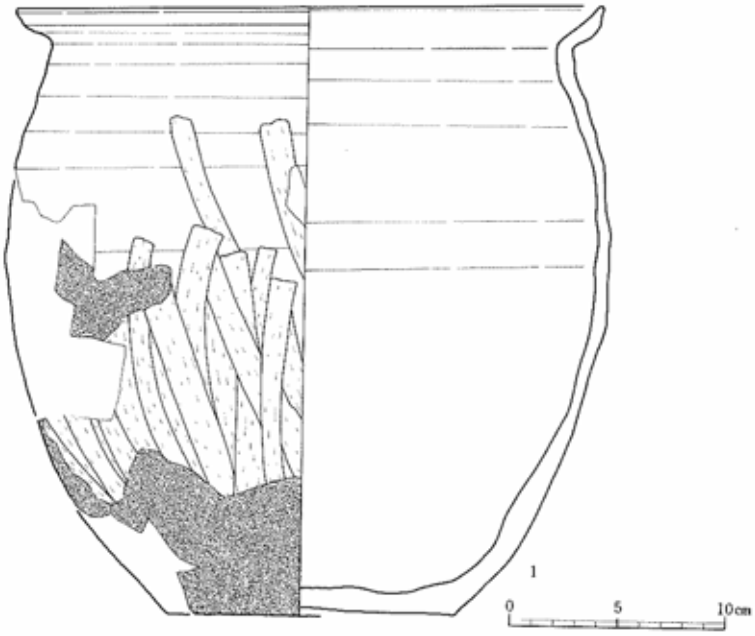
井戸枠内の堆積土は、自然堆積上(5層)と井戸枠材の抜取り後埋め戻された人為的な層(2〜4層)に分けられる。

遺物は、掘り方埋土と井戸枠内部の堆積土および枠材の抜取り穴堆積土から、土器をは



No.	土色	土質	備考	No.	土色	土質	備考
1	黒褐色(10YR3/2)	粘	(抜取り穴埋土) 粒状の灰白色火山灰を微量含む。	6	褐灰色(2.5Y3/1)	粘	(掘り方埋土) 地山の土を多量に含む。
2	黒褐色(10YR2/2)	粘土	(抜取り穴埋土) 粒状の灰白色火山灰を微量含む。	7	黒褐色(2.5Y3/2)	粘	(掘り方埋土) 7b-1状の地山の土を大量に含む。
3	黒褐色(10YR3/2)	粘土	(抜取り穴埋土) 多量の地山の土と灰白色火山灰7b-1を含む。	8	暗オリーブ色(2.5Y3/3)	砂	(掘り方埋土)
4	黒色(10YR2/1)	粘	(抜取り穴埋土) 地山の土と灰白色火山灰を多量に含む。	9	緑灰色(7.5GY5/1)	砂	(掘り方埋土) 岩盤土を少量含む。ややしまりあり。
5	黒褐色(10YR2/2)	粘土	(井戸枠内堆積土) 多量の地山の土と少量の灰白色火山灰を含む。	10	緑灰色(7.5Y5/1)	砂	ややしまりあり。

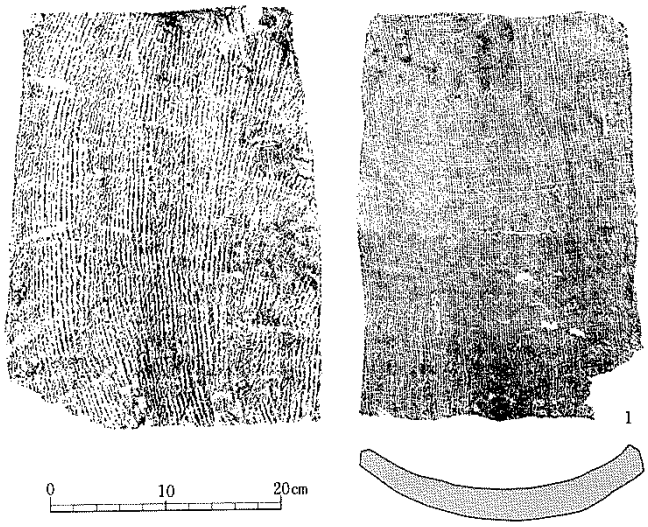
第80図　ＳＥ2043井戸跡

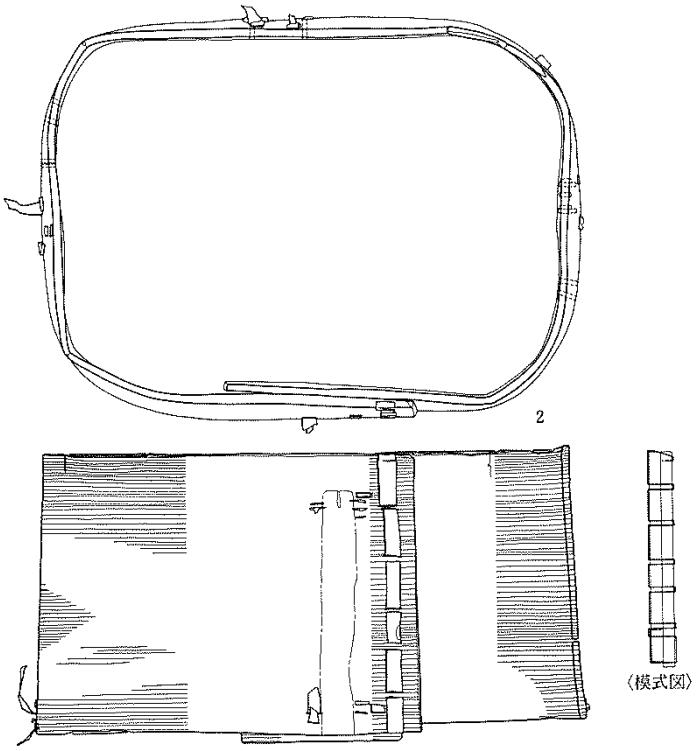


(単位：cm)

No.	種類	層位	特徴	色調	口径	底径	器高	残存率	分類	写真図版
1	土師器・甕	2～3層	外面：ロクロナデ→手持ちヘラケズリ→ススイ付着　底面：ナデ　内面：ロクロナデ、ナデ		27.4	13.4	28.6	4/5		20-10

第81図　ＳＥ2043井戸跡出土遺物（1）





No.	種類	層位	特	徴	写真図版
1	平瓦	2～3層	一枚作り　凸面：縄タタキ　凹面：布目　広端幅：25.0cm　狭端幅：22.0cm　長さ：36.5cm　【多賀城分類：ⅡC類】		24-4
2	曲物	底面	樺皮結合長方形曲物　側板：柾目　内面に縦方向の刻目（ケビキ）　各辺の中央部に幅6cmほどの縦板の痕跡　長さ：90.0cm　高さ：48.0cm　厚さ：1.4cm		29-4

第82図　ＳＥ2043井戸跡出土遺物（２）

じめ灰釉陶器、木製品の曲物、平瓦などが出土している(第81・82図)。

5層からはロクロ調整の土師器が少量出土している。抜取り穴からは比較的多量のロクロ調整の土師器、須恵器、少量の赤焼土器が出土している他に、非ロクロ調整の土師器、灰釉陶器の椀とみられるもの2点、ほぼ完形の平瓦2点が出土している。このうち図示できたものには、ロクロ調整の土師器の甕(第81図1)、平瓦（第82図1）がある。このうち、平瓦は多賀城政所跡遺構期Ⅳ期のものとみられる。掘り方埋土からは少量の非ロクロ調整とロクロ調整の土師器と須恵器が数点出土している。

ＳＥ2008(第83図)

調査区東半部の北壁付近で検出した井戸跡である。ＳＩ2114、ＳＸ750と重複し、いずれよりも新しい。

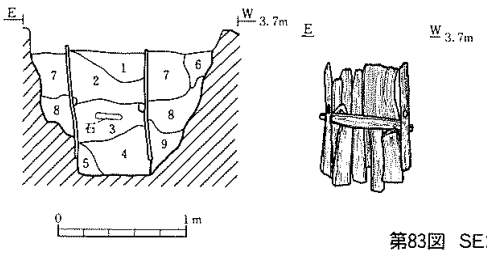
掘り方は径1.6mほどの歪んだ円形で、深さは1.1m残っており、断面は摺鉢状をなす。井戸枠は内法一辺約0.7mの正方形をなし、掘り方の中央からやや南寄りに設置されている。四隅に一辺10㎝、厚さ1～2㎝ほどの角柱を立て、それに設けたほぞ穴に横木を差し込んで固定し、周りに幅10～20㎝の縦板を立て並べて組み上げている。縦板は約1m遺存していた。

掘り方埋土(裏込め)には黄亀シルト・黄灰色シルトブロックを含む黒褐色・褐灰色粘土質シルトが詰められている。

井戸枠内の堆積土は、井戸の機能時の自然堆積土(4・5層)と井戸廃絶後の堆積土(1～3層)に分けられる。

遺物は図示できるものはないが、掘り方埋土と枠内部の堆積土から出土している。掘り方埋土からは、非ロクロ調整とロクロ調整の土師器、須恵器が小壁と若干の赤焼土器および灰釉陶器が1点出立している。4・5層からは非ロクロ調整の土師器と須恵器が、1～3層からは少量の非ロクロ調整とロクロ調整の土師器、須恵器、赤焼土器と瓦片が3点出土している。

この他、井戸枠の側板の倒壊したものとみられる部材が底面や堆積層からそれぞれ少量出土している。



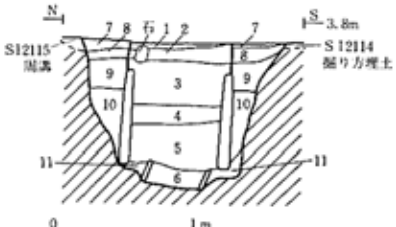
No.	土　色	土 性	備　考
1	黒色(10YR2/1)	シルト	〈井戸枠内堆積土〉
2	黒褐色(10YR3/2)	シルト	〈井戸枠内堆積土〉地山の土をしま状に含む。
3	黒色(10YR2/1)	シルト	〈井戸枠内堆積土〉
4	オリーブ黒色(7.5Y3/1)	砂質シルト	〈井戸枠内堆積土〉砂を多く含む。
5	オリーブ黒色(7.5Y3/2)	砂	〈井戸枠内堆積土〉粘質土を若干含む。
6	褐灰色(10YR4/1)	粘土質シルト	〈掘り方埋土〉しまりあり。
7	にぶい黄色(2.5Y6/3)	シルト	〈掘り方埋土〉旧表土をブロック状に含む。しまりあり。
8	褐灰色(10YR5/1)	粘土質シルト	〈掘り方埋土〉地山の土を含む。しまりややあり。
9	黒褐色(10YR3/1)	粘土質シルト	〈掘り方埋土〉地山の土を含む。しまりややあり。

第83図　SE2008井戸跡

ＳＥ2009（第84・85図）

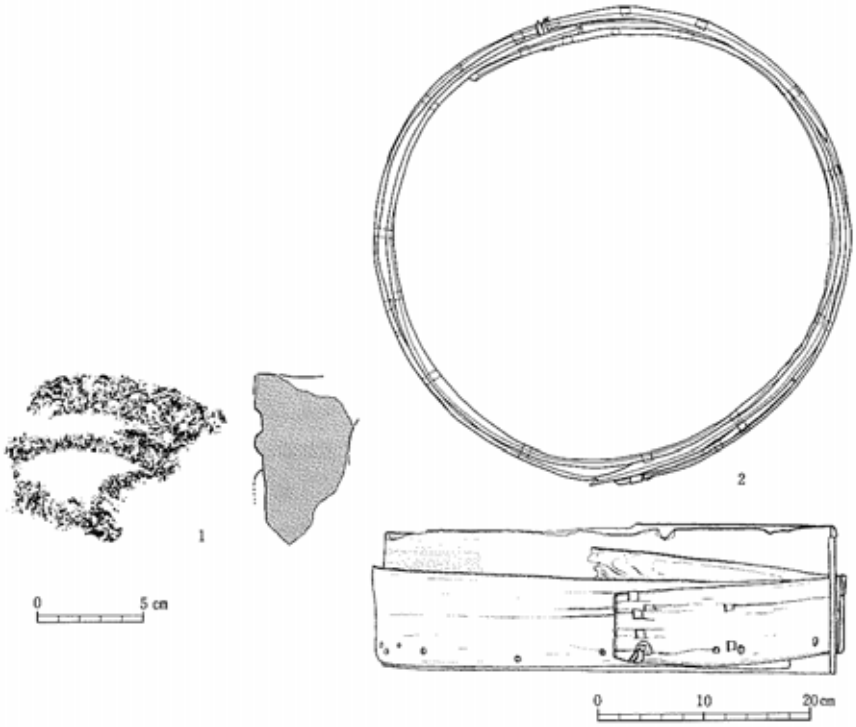
調査区東半部の北壁付近で検出した井戸跡である。ＳＩ2114・2115、ＳＸ750と重複し、いずれよりも新しい。

掘り方は平面形が長径（南北）約1.6mの楕円形で、深さは約



No.	土色	土性	備考
1	黒褐色(10YR3/2)	シルト	〈枠内堆積土〉炭化物を若干含む。
2	黒褐色(10YR2/2)	粘土質シルト	〈枠内堆積土〉炭化物・地山の土を若干含む。
3	黒色(10YR2/1)	粘土質シルト	〈枠内堆積土〉炭化物を若干含む。
4	黒色(10YR2/1)	シルト	〈枠内堆積土〉炭化物を若干含む。
5	黒褐色(10YR3/2)	砂質シルト	〈枠内堆積土〉地山の土を少量含む。
6	黒色(2.5Y2/1)	砂質シルト	〈枠内堆積土〉
7	黒褐色(10YR2/2)	シルト	〈掘り方埋土〉粒状の地山の土を若干含む。
8	黒褐色(10YR2/2)	シルト	〈掘り方埋土〉
9	黒色(10YR2/1)	粘土質シルト	〈掘り方埋土〉地山の土を含む。ややしまりあり。
10	黒色(2.5Y2/1)	粘土質シルト	〈掘り方埋土〉土器片・瓦・地山の土を含む。
11	黒褐色(2.5Y3/1)	粘土質シルト	〈掘り方埋土〉ブロック状の地山の土を多く含む。

第84図　ＳＥ2009井戸跡



No.	種類	層位	特徴	写真図版
1	軒丸瓦	1～6層	瓦当面：巴唐草状文、大い圏線　瓦当裏面：ナデ　瓦当の厚さ：4.5cm　【多賀城分類：巴唐草状文軒丸瓦 427】	24-2
2	曲物	底面	縦つき釘結合曲物　側板：柾目　内面に縦方向の刷目（ケビキ）　結合釘孔：14　径：約43.0cm　高さ：14.0cm　厚さ：0.6cm	25-2

第85図　ＳＥ2009井戸跡出土遺物

1.1m残っており、断面は摺鉢状をなす。底面の中央には、周囲より10㎝ほど掘り下げて側板のみの曲物(第85図2)を据えている。

井戸枠は、掘り方のほぼ中央に設置され、高さ約0.7m遺存していた。半載した木をくり抜いた材を軽み合わせて構築しており、隙間には板材を充填している。内法は長径約0.7m、短径0.5mほどの楕円形になる。掘り方埋土(裏込め)には黄褐色・浅黄色地山ブロックを少量含む黒色～黒褐色粘土質シルトが詰められている。

井戸枠内の堆積土は、井戸の機能時の自然堆積上(5・6層)と井戸廃絶後の堆積土(1～3層)に分けられる。

遺物は掘り方埋土と枠内部の堆積土から出土している(第85図)。掘り方埋土からはいずれも破片であるが、少量の非ロクロ調整の土師器が出土している。1～3層からは比較的多量の非ロクロ調整とロクロ調整の土師器、須恵器、赤焼土器の他、瓦が少量出土している。このうち図示できたものには、多賀城政庁跡の第Ⅳ期の瓦である歯車状文軒丸瓦(第85図1)がある。

⑥；土壙

土壙は61基検出しているが、この中で出土遺物や他の遺構との重複関係などからある程度年代の把握が可能なものは以下の16基である。

ＳＫ2010（第51･86～88図）

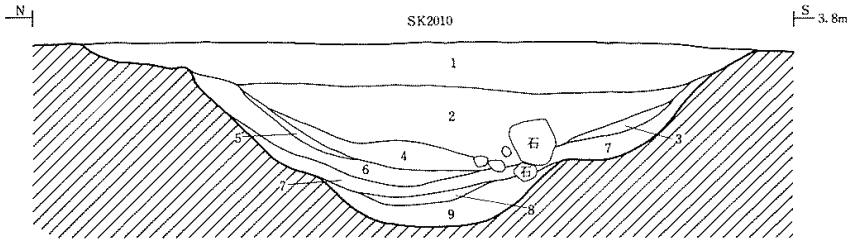
調査区東端部の南寄りで検出した土壙である。ＳＩ2023、ＳＤ2015と重複し、いずれよりも新しい。

径5m前後の歪んだ円形をなし、深さは約1.4m残っている。断面は壁が緩やかに立ち上がり擢鉢状である。堆積土は9層に分けられ、いずれも自然堆積土とみられる。

遺物は堆積土から多量の土器類をはじめとして、木製品、土製品、鉄製品などが出土している(第87･88図)。3～9層からはロクロ調整の土師器、須恵器、赤焼土器の他、木製品としては曲物（第88図1）、桧扇(第87図11～13)、刀子か小刀の柄(第87図14･15)土製品しては羽口(写真図判28－7)や鉄滓、炉壁片などが少量出土している。このうち、土器で図示できるものには土師器と赤焼土器の高台椀(第87図1･4)がある。

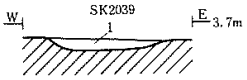
1・2層からは多量のロクロ調整の土師器、須恵器、赤焼土器の他、灰釉陶器の椀･皿の破片(各1点)、洛北産とみられる緑釉陶器の椀の破片(1点)、土鈴(第87図10)、羽口(第87図9)、鉄滓などが出土している。このうち土器で図示できるものには土師器と赤焼土器の高台椀(第87図2･3)、赤焼土器の坏(5･6)、土師器の両面を黒色処理した高台坏(7)、赤焼土器の高台小皿（8）がある。

ＳＫ2016（第51・86・93図）

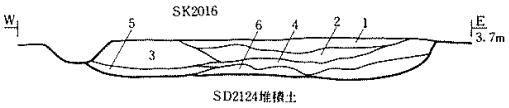


No.	土　色	土性	備　考
1	灰黄褐色(10YR4/2)	シルト	〈自然堆積〉炭化物・焼土・地山粒を若干含む。
2	黒褐色(10YR2/2)	シルト	〈自然堆積〉炭化物・焼土を若干含む。
3	灰黄褐色(10YR5/2)	シルト	〈人為埋土〉地山の土を多く含む。
4	黒褐色(10YR2/3)	シルト	〈人為埋土〉若干の炭化物と大量の木材を含む。
5	にぶい黄褐色(10YR5/4)	シルト	〈人為埋土〉旧表土ブロックを大量に含む。
6	暗褐色(10YR3/3)	シルト	〈人為埋土〉地山の土を若干含む。
7	にぶい黄色(2.5Y6/4)	シルト	〈人為埋土〉黒褐土を若干含む。
8	オリーブ黒色(5Y3/1)	粘土	〈人為埋土〉木片を多く含む。
9	灰色(5Y4/1)	粘土	〈人為埋土〉粗砂との互層。

No.	土　色	土 性	備　考
1	黄灰色(2.5Y4/1)	シルト	若干の炭化物・焼土と、多量の土器片を含む。
2	暗灰黄色(2.5Y5/2)	砂質シルト	地山の土を多く含む。ややしまりあり。

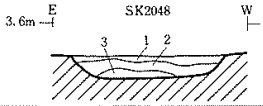


No.	土　色	土 性	備　考
1	黒褐色(10YR3/2)	シルト	炭・焼土・地山の土を若干含む。

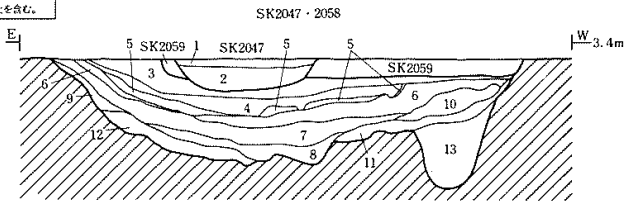


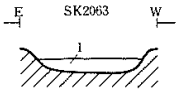
SD2124堆積土

No.	土　色	土 性	備　考
1	黒褐色(10YR2/2)	シルト	炭化物・土器片を含む。
2	黒色(10YR2/1)	粘土質シルト	灰白色火山灰を多く含む。炭化物を多く含む。
3	黒褐色(2.5Y3/1)	シルト	炭化物と若干の土器片を含む。
4	黒色(2.5Y2/1)	粘土質シルト	炭化物を多く含む。
5	黒褐色(2.5Y3/1)	シルト	炭化物と若干の土器片を含む。
6	オリーブ褐色(2.5Y4/3)	シルト	多量の炭化物と土器片を含む。

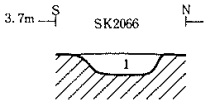


No.	土　色	土 性	備　考
1	褐灰色(10YR6/2)	シルト	炭化物・焼土・地山の土を含む。
2	黒色(10YR2/1)	シルト	炭化物・焼土・地山の土を含む。
3	灰黄褐色(10YR6/2)	シルト	微量の炭化物と多量の地山の土を含む。





No.	土　色	土 性	備　考
1	暗灰黄色(2.5Y4/2)	シルト	多量の土器片と少量の地山の土を含む。

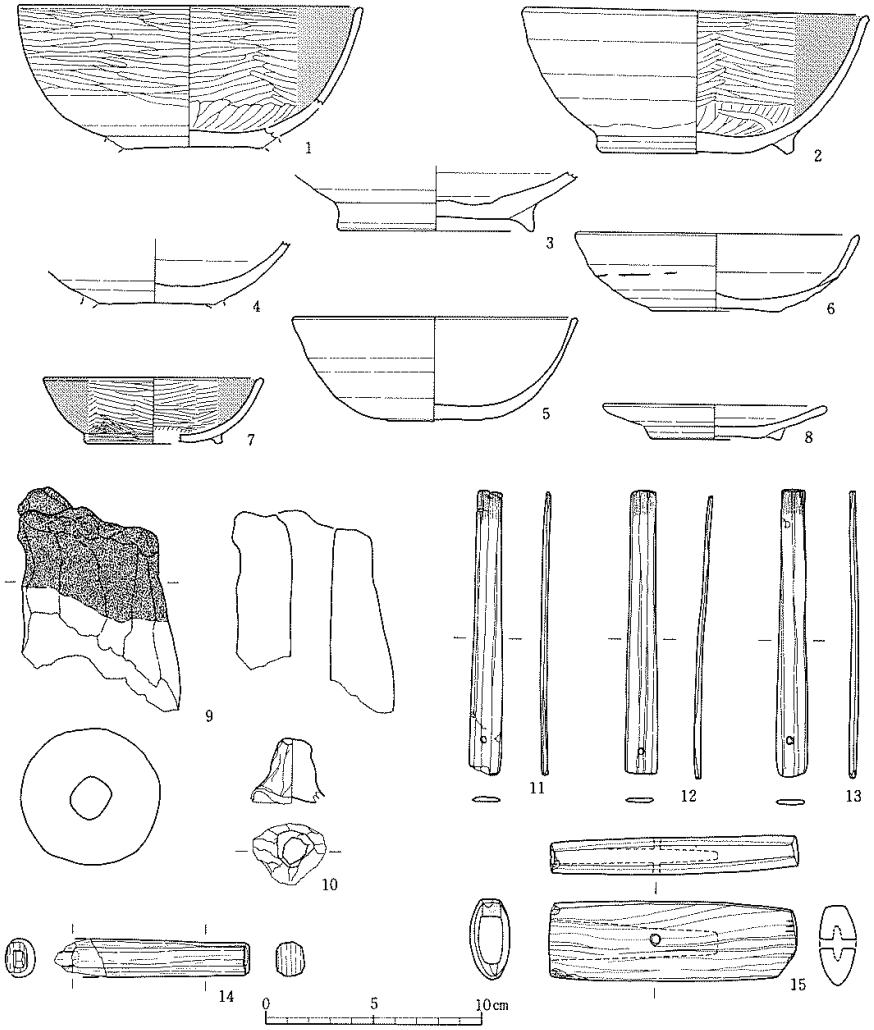


No.	土　色	土 性	備　考
1	黒褐色(2.5Y3/1)	砂質シルト	炭化物・地山の土を含む。

No.	土　色	土 性	備　考
1	黄灰色(2.5Y5/1)	シルト	〈SK2047堆積土〉炭化物・地山の土を微量含む。
2	黒褐色(2.5Y3/2)	粘土質シルト	〈SK2047堆積土〉炭化物・地山の土を若干含む。
3	黄灰色(2.5Y4/1)	シルト	〈SK2058堆積土〉ブロック状の地山の土を大量に含む。
4	黄灰色(2.5Y5/1)	粘土質シルト	〈SK2058堆積土〉炭化物・地山の土を微量含む。
5	褐灰色(7.5YR5/1)	粘土	〈SK2058堆積土〉
6	灰色(5Y4/1)	粘土質シルト	〈SK2058堆積土〉炭化物を微量含む。
7	オリーブ黒色(5Y3/1)	シルト	〈SK2058堆積土〉炭化物を微量含む。
8	黒褐色(7.5YR3/2)	粘土	〈SK2058堆積土〉ブラック化した地山の土を多量に含む。
9	暗灰黄色(2.5Y5/2)	砂	〈SK2058堆積土〉地山の土を粒状に多量に含む。
10	暗灰黄色(2.5YR2/1)	砂	〈SK2058堆積土〉ブロック状の地山の土を含む。
11	黄灰色(2.5YR4/1)	粘土	〈SK2058堆積土〉
12	緑灰色(5G5/1)	砂	〈SK2058堆積土〉灰色粘土を斑状に多量に含む。
13	緑灰色(5G5/1)	砂	〈SK2058堆積土〉

0　1m

第86図　Ⅱ区土壙断面図（1）



（単位：cm）

No.	種　類	層位	特　徴	口　径	底　径	器　高	残存率	分　類	写真図版
1	土師器・高台埦	4層	外面：ロクロナデ→ミガキ　底面：回転糸切り→ロクロナデ　内面：ミガキ→黒色処理	15.8	6.5	－	9/10		20-6
2	土師器・高台埦	2層	外面：ロクロナデ　底面：回転糸切り→ロクロナデ　内面：ミガキ→黒色処理	15.8	－	6.6	1/2		
3	赤焼土器・高台埦		内外面：ロクロナデ　底面：回転糸切り→ロクロナデ	－	－	－	－ 部		
4	赤焼土器・高台埦	6層	内外面：ロクロナデ　底面：回転糸切り→ロクロナデ	－	－	－	－ 部		
5	赤焼土器・坏		内外面：ロクロナデ（内面のロクロ目が不明瞭）　底面：回転糸切り	13.2	4.4	4.8	2/5		20-9
6	赤焼土器・坏	2層	内外面：ロクロナデ（内面のロクロ目が不明瞭）　底面：回転糸切り	(13.2)	4.9	3.0	1/3		
7	土師器・高台坏	1層	内外面：（ロクロナデ）→ヘラミガキ→黒色処理　底面：？→ロクロナデ	(10.0)	－	3.1	1/5		
8	赤焼土器・高台小皿		内外面：ロクロナデ（内面のロクロ目が不明瞭）　底面：回転糸切り	(10.4)	－	1.6	2/5		
9	羽　口	2層	外面：ナデ　ノロ付着						
10	土　鈴	1層	外面：ナデ						
11	櫛　扇	4層	同一個体　要の孔が1孔　長さ：13.3cm　基幅：1.5cm　先幅：1.2cm　厚さ：0.3cm						30-5
12	櫛　扇	4層							
13	櫛　扇	4層							
14	刀子の柄	4層	断面：楕円形　残存長：9.1cm　幅：1.8cm　厚さ：1.4cm　茎孔の規模：0.8×0.5 cm						30-9
15	小刀の柄	4層	断面：卵形　中央に目釘穴　長さ：11.5cm　幅：3.7cm　厚さ：1.7 cm　茎孔長：7.8cm　茎孔の規模（基部）：2.2×1.1 cm						30-10

第87図　ＳＫ2010土壙出土遺物（１）

調査区中央部の西寄りで検出した土壙である。ＳＢ2103、ＳＤ2053・2086・2124と重複し、ＳＢ2103、ＳＤ2124より新しく、ＳＤ2053・2096より古い。

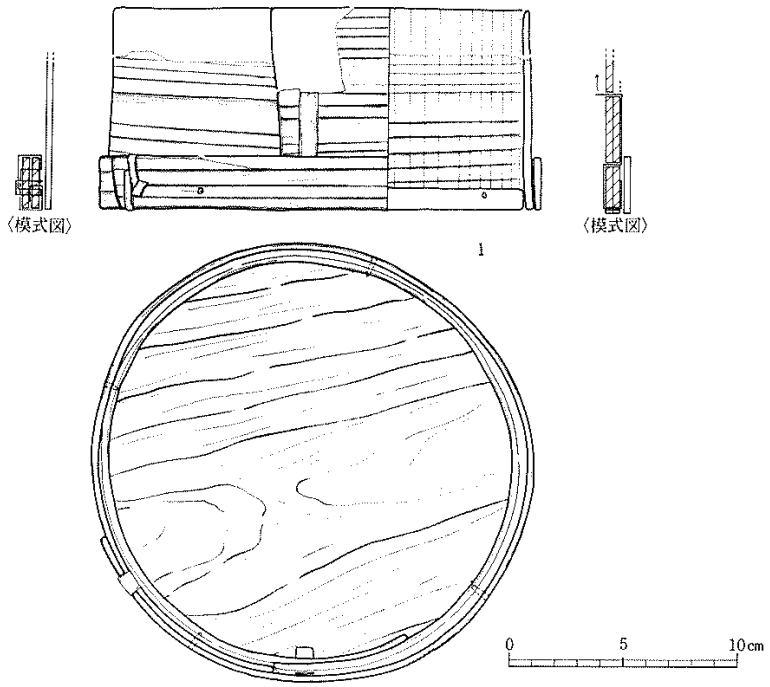
長径約2.7m、短径約2.3mの楕円形をなし、深さは約0.3m残っている。底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。堆積土は6層に細分され、いずれも自然堆積である。第2層には灰白色火山灰がブロック状に認められる。

遺物は堆積土からロクロ調整の土師器、須恵器、赤焼土器などが出土している。このうち、図示できるものには赤焼土器の坏がある（第93図1）。

ＳＫ2038(第62・86・92図)

調査区中央部で検出した土壙である。ＳＫ2097と重複しこれより新しい。長径約2.3m、短径約1.3mの歪んだ楕円形をなし、深さは約0.4m残っている。底面は平坦で、壁は東から北にかけては比較的急立ち上がるが、南から西にかけては緩やかに立ち上がる。堆積土は2層に分けられ、いずれも自然堆積である。

遺物は堆積土から非ロクロ調整の土師器、須恵器などが出土している。このうち、図示



No.	種類	層位	特	徴	写真図版
1	曲物	9層	綴つき釘結合曲物　底板：柾目　側板：柾目　内面に縦方向の刷目（ケビキ）　結合釘孔：4　径：約18.3cm　高さ：8.8cm　厚さ：0.3cm		29-1

第88図　ＳＫ2010土壙出土遺物（２）

できるものには土師器で平底の坏2点（第92図1・2）と須恵器の短頸壷(3)がある。

ＳＫ2039(第57･86･92図)

調査区中央部の南壁際で検出した土壙である。南端部は調査区外であるが、平面形は歪んだ楕円形と思われ、長径1.5m以上、短径約0.9mである。深さは0.1m残っており、底面は平坦で、壁が緩やかに立ち上がる。堆積土は1層で、自然堆積と考えられる。

遺物は堆積土から非ロクロ調整の土師器、須恵器が少量出土している。このうち、図示できるものには土師器の鉢(第92図4)、甑(5)がある。

ＳＫ2042(第66･90･91図)

調査区西半部の中央で検出した土壙である。ＳＢ2036・2070と重複し、いずれよりも古い。また、ＳＩ2057とも重複しているが新旧関係は捉えられなかった。

平面形は隅丸方形で、南北約3.6m、東西は約1.8mある。深さは0.5～0.7mほど残っており、断面は壁が緩やかに立ち上がる擂鉢状をなす。堆積土は6層に分けられる。

遺物は堆積土から土器が多量に出土している。3～6層からは比較的多量の非ロクロ調整の土師器の他に、須恵器の甕が出土している。このうち図示できるものには土師器の坏(第91図1～5)、甑(6)がある。

ＳＫ2045（第66･90･91図）

調査区西半部の南壁際で検出した土壙である。ＳＩ2028、ＳＢ2037・2070、ＳＫ2029と重複しいずれよりも古い。南半部がＳＩ2028に完全に壊されているが、全体形は隅丸方形と思われる。南北2.7m以上、東西約1.3mで、深さは0.6mほど残っている。断面は逆台形で、堆積土は8層に分けられる。

遺物は堆積土から非ロクロ調整の土師器の坏(第91図7)と甑(8)などがある。

ＳＫ2047(第66･86･92図)

調査区西半部の南寄りで検出した土壙である。ＳＩ2057、ＳＫ2058・2059と重複しいずれよりも新しい。平面形は隅丸方形で、南北約1.6m、東西約1.0mである。深さは0.3mほど残っており、断面は逆台形である。堆積土は2層に分けられ、いずれも自然堆積である。

遺物は堆積土から非ロクロ調整の土師器の両面を黒色処理した小椀（第92図6）などと須恵器が出土している。

ＳＫ2048(第66・86・93図)

調査区西半部の北寄りで検出した土壙である。ＳＩ2019と重複しこれより新しい。東西1.3m、南北0.4mほどの隅丸方形をなす。深さは0.2mほど残っており、断面は皿状をなす。堆穫土は3層に分けられ、いずれも自然堆積と考えられる。

遺物は底面と堆積土からロクロ調整と非ロクロ調整の土師器の坏･甕と須恵器の坏･高

台坏が少量出土している。このうち図示できるものにはロクロ調整の土師器の坏(第93図2)がある。

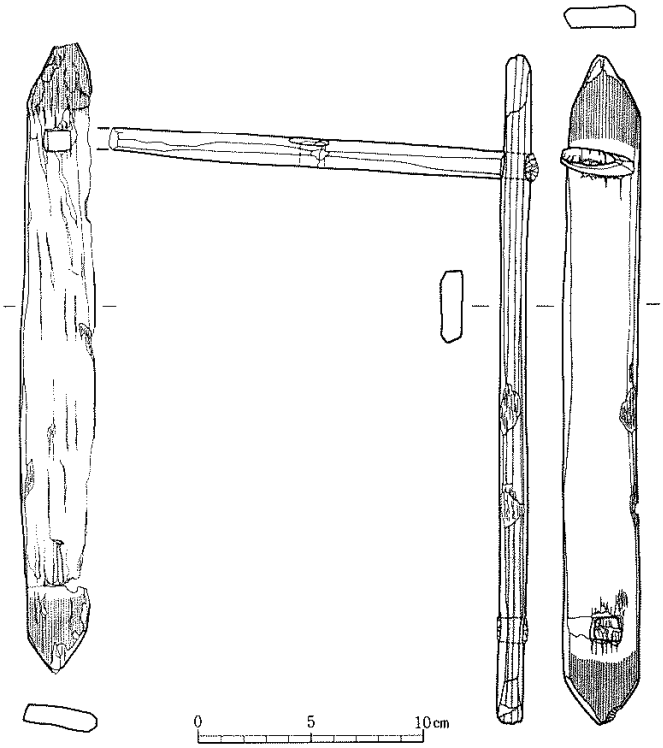
ＳＫ2058（第66・86・89図）

調査区西半部の中央付近で検出した土壙である。ＳＩ2057、ＳＢ2036、ＳＫ2047、2059と重複し、ＳＩ2057より新しく、ＳＢ2036、ＳＫ2047・2059より古い。平面形は楕円形とみられ、長径約3.5m、短径1.1mほどである。深さは0.9～1.0m残っており、底面には凹凸がみられ、特に西端部が深くなっている。壁は比較的緩やかに立ち上がる。堆積土は11層に細分され、いずれも自然堆積とみられる。

遺物は堆積土から非ロクロ調整の土師器の甕の胴部破片2点と木製品の糸巻(第89図)が出土している。

ＳＫ2063(第57・86・92図)

調査区東半部の南寄りで検出した土壙である。平面形は隅丸方形で、東西0.9m、南北



No.	種類	層位	特徴	写真図版
1	糸巻	13層	構造：枠木・横木とも４本　＜枠木＞長：29.9cm　幅：3.3cm　厚さ：1.0cm　＜横木＞長：19.1cm以上　幅：2.8cm　厚さ：1.0cm　軸孔径：1.1cm	30-7

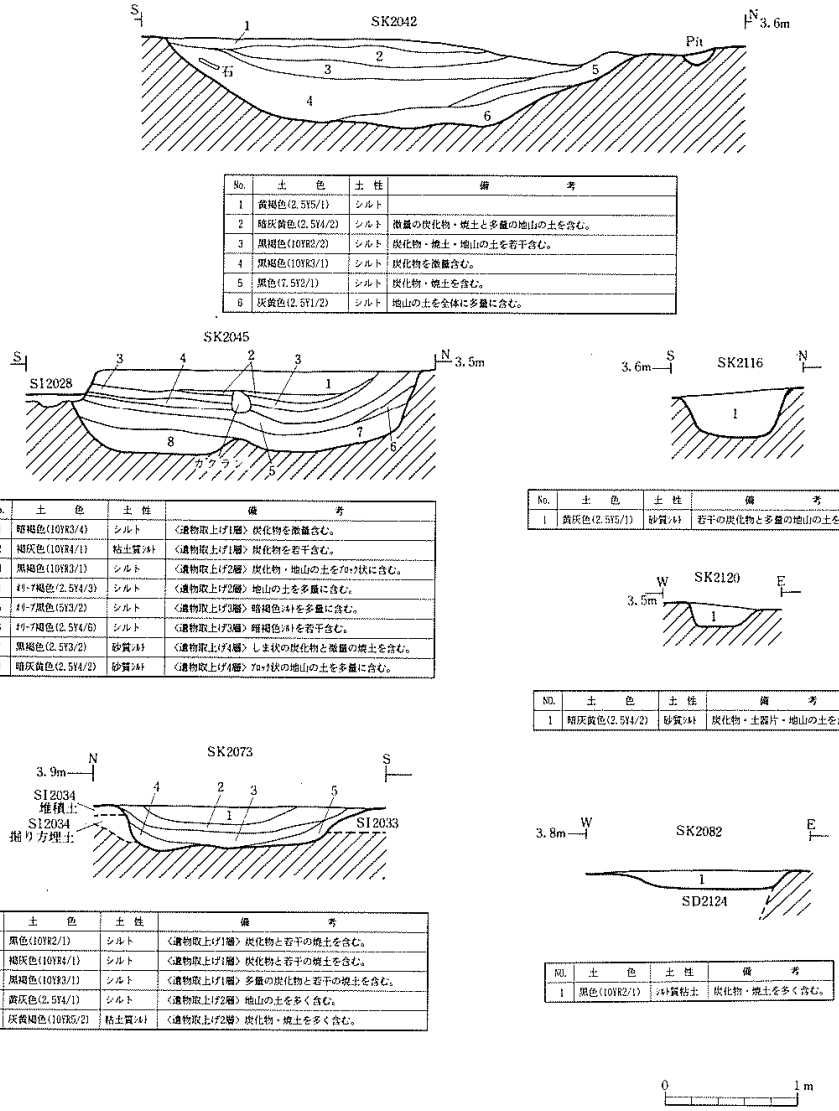
第89図　ＳＫ2058土壙出土遺物

0.6mほどである。深さは0.2m残っており、断面は皿状を呈する。堆積土は1層で自然堆積とみられる。

遺物は堆積土から非ロクロ調整の土師器の坏・甕が少量とミニチュア土器が1点（第92図7）出土している。

ＳＫ2066（第57・86・93図）

調査区東半部の中央で検出した土壙である。ＳＸ750道路跡と重複するが、新旧関係は不



No.	土　色	土 性	備　考
1	黄褐色(2.5Y5/1)	シルト	
2	暗灰黄色(2.5Y4/2)	シルト	微量の炭化物・焼土と多量の地山の土を含む。
3	黒褐色(10YR2/2)	シルト	炭化物・焼土・地山の土を若干含む。
4	黒褐色(10YR3/1)	シルト	炭化物を微量含む。
5	黒色(7.5Y2/1)	シルト	炭化物・焼土を含む。
6	灰黄色(2.5Y1/2)	シルト	地山の土を全体に多量に含む。

No.	土　色	土 性	備　考
1	暗褐色(10YR3/4)	シルト	〈遺物取上げ1層〉炭化物を微量含む。
2	褐灰色(10YR4/1)	粘土質ｼﾙﾄ	〈遺物取上げ1層〉炭化物を若干含む。
3	黒褐色(10YR3/1)	シルト	〈遺物取上げ2層〉炭化物・地山の土をﾌﾛｯｸ状に含む。
4	ｵﾘｰﾌ褐色(2.5Y4/3)	シルト	〈遺物取上げ2層〉地山の土を多量に含む。
5	ｵﾘｰﾌ黒色(5Y3/2)	シルト	〈遺物取上げ3層〉暗褐色ｼﾙﾄを多量に含む。
6	ｵﾘｰﾌ褐色(2.5Y4/6)	シルト	〈遺物取上げ3層〉暗褐色ｼﾙﾄを若干含む。
7	黒褐色(2.5Y3/2)	砂質ｼﾙﾄ	〈遺物取上げ4層〉しま状の炭化物と微量の焼土を含む。
8	暗灰黄色(2.5Y4/2)	砂質ｼﾙﾄ	〈遺物取上げ4層〉ﾌﾛｯｸ状の地山の土を多量に含む。

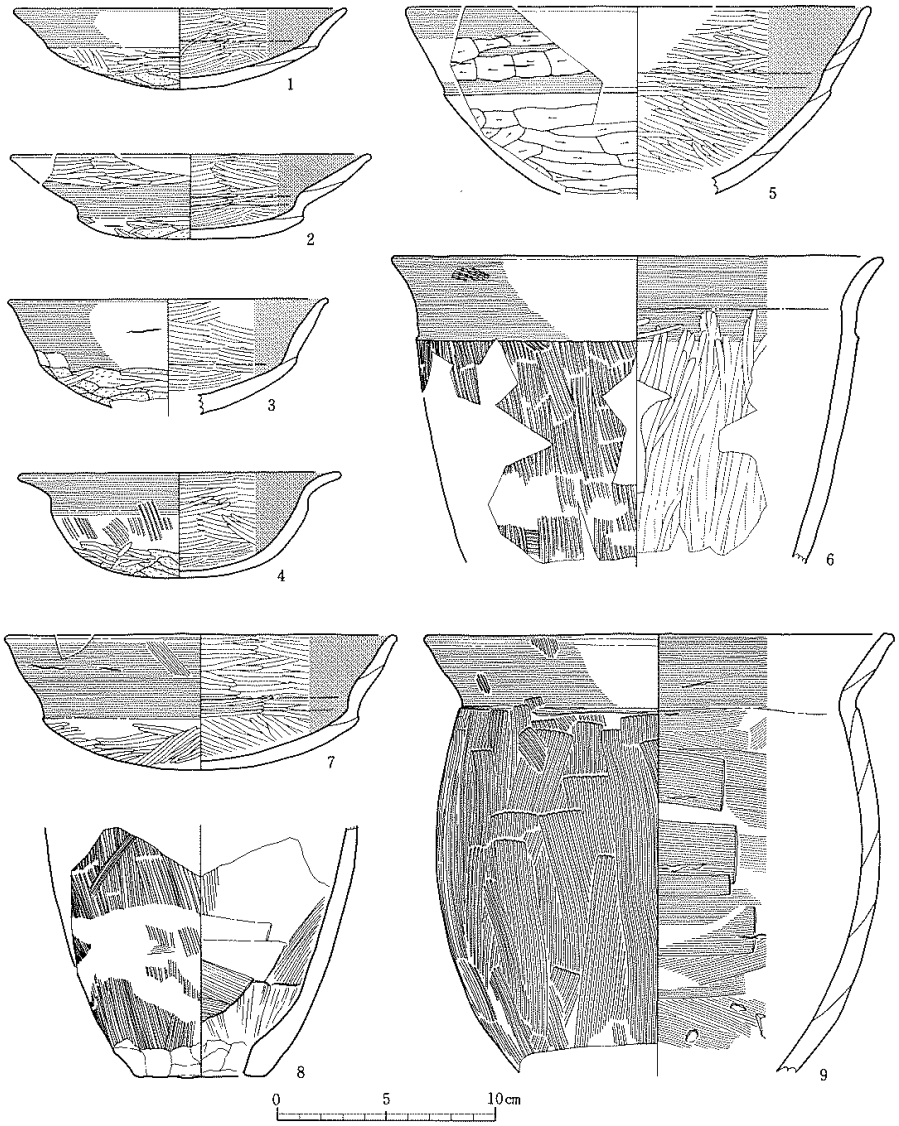
No.	土　色	土 性	備　考
1	黄灰色(2.5Y5/1)	砂質ｼﾙﾄ	若干の炭化物と多量の地山の土を含む。

NO.	土　色	土 性	備　考
1	暗灰黄色(2.5Y4/2)	砂質ｼﾙﾄ	炭化物・土器片・地山の土を含む。

No.	土　色	土 性	備　考
1	黒色(10YR2/1)	シルト	〈遺物取上げ1層〉炭化物と若干の焼土を含む。
2	褐灰色(10YR4/1)	シルト	〈遺物取上げ1層〉炭化物と若干の焼土を含む。
3	黒褐色(10YR3/1)	シルト	〈遺物取上げ1層〉多量の炭化物と若干の焼土を含む。
4	黄灰色(2.5Y4/1)	シルト	〈遺物取上げ2層〉地山の土を多く含む。
5	灰黄褐色(10YR5/2)	粘土質ｼﾙﾄ	〈遺物取上げ2層〉炭化物・焼土を多く含む。

NO.	土　色	土 性	備　考
1	黒色(10YR2/1)	ｼﾙﾄ質粘土	炭化物・焼土を多く含む。

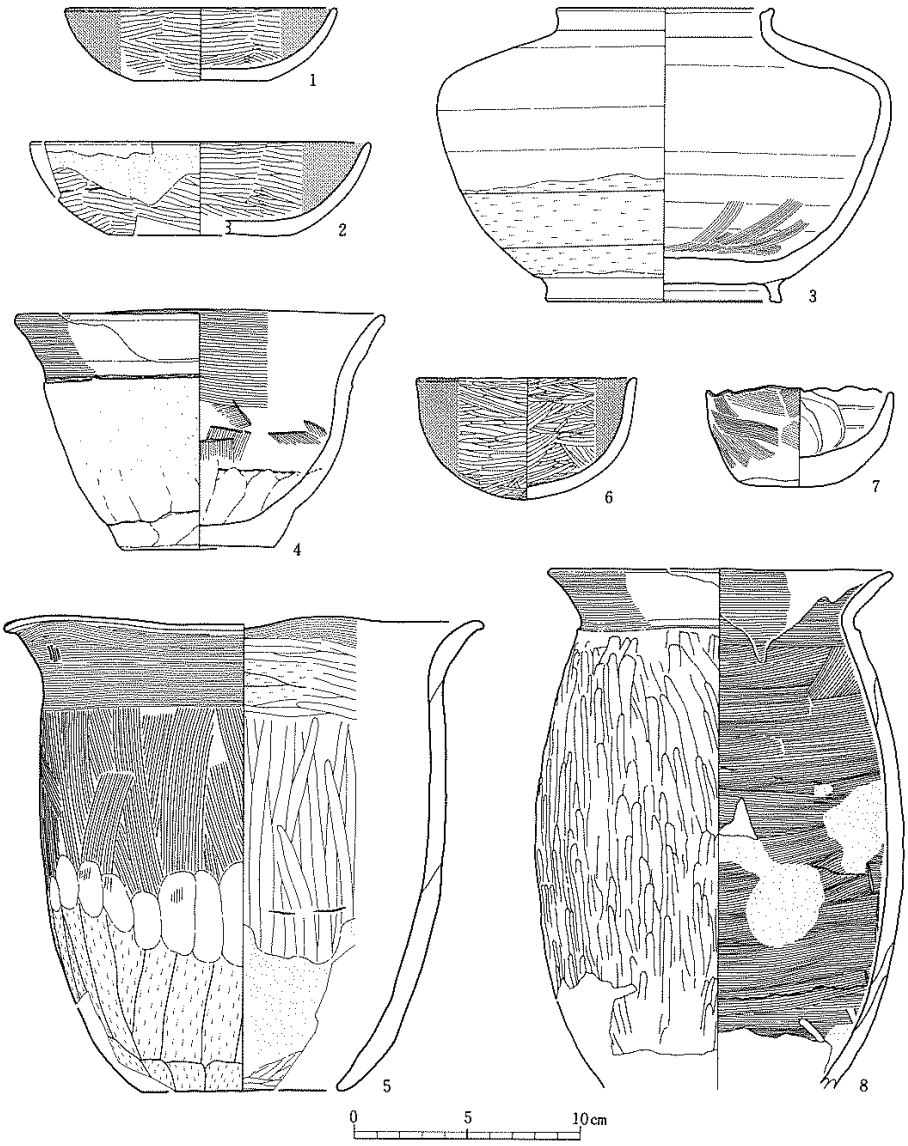
第90図　Ⅱ区検出土壙断面図（2）



（単位：cm）

No.	種　類	出土遺構・層位	特　　徴	口　径	底　径	器　高	残存率	分　類	写真図版
1	土師器・坏	ＳＫ2042・４～６層	外面：ヨコナデ　ナデ→ヘラケズリ→ヘラミガキ　内面：ヘラミガキ→黒色処理	(15.3)	－	3.8	1/3		21-6
2	土師器・坏	ＳＫ2042・４～６層	外面：ヨコナデ→ミガキ、ナデ→ヘラケズリ→ミガキ　内面：ミガキ→黒色処理	(16.6)	－	3.9	1/4		
3	土師器・坏	ＳＫ2042・４～６層	外面：ヨコナデ→ナデ→ヘラケズリ→ヘラミガキ　内面：ヘラミガキ→黒色処理	(14.8)	－	－	1/3		
4	土師器・坏	ＳＫ2042・４～６層	外面：ナデ→ハケメ→ヘラケズリ→ヘラミガキ　内面：ヘラミガキ→黒色処理	(14.8)	－	4.9	1/4		21-5
5	土師器・坏	ＳＫ2042・４～６層	外面：ヨコナデ、ナデ→軽いヘラケズリ　内面：ヘラミガキ→黒色処理	(21.4)	－	－	一　部		
6	土師器・甕	ＳＫ2042・４～６層	外面：ハケメ→ヨコナデ　内面：ヨコナデ　ヘラナデ→ヘラミガキ	(22.6)	－	－	一　部		
7	土師器・坏	ＳＫ2045・２層	外面：ヨコナデ、ナデ→ヘラケズリ→ヘラミガキ　内面：ヘラミガキ→黒色処理	(18.0)	－	7.4	1/2		
8	土師器・甕	ＳＫ2045	無底　外面：ハケメ→ナデ　内面：ナデ→ヘラナデ	－	6.0	－	1/3		
9	土師器・甕	ＳＫ2116・１層	頸部に段　外面：ハケメ→ヨコナデ→ハケメ（一部）　内面：ナデ→ヨコナデ	21.4	－	－	2/5		

第91図　ＳＫ2042・2045・2116土壙出土遺物



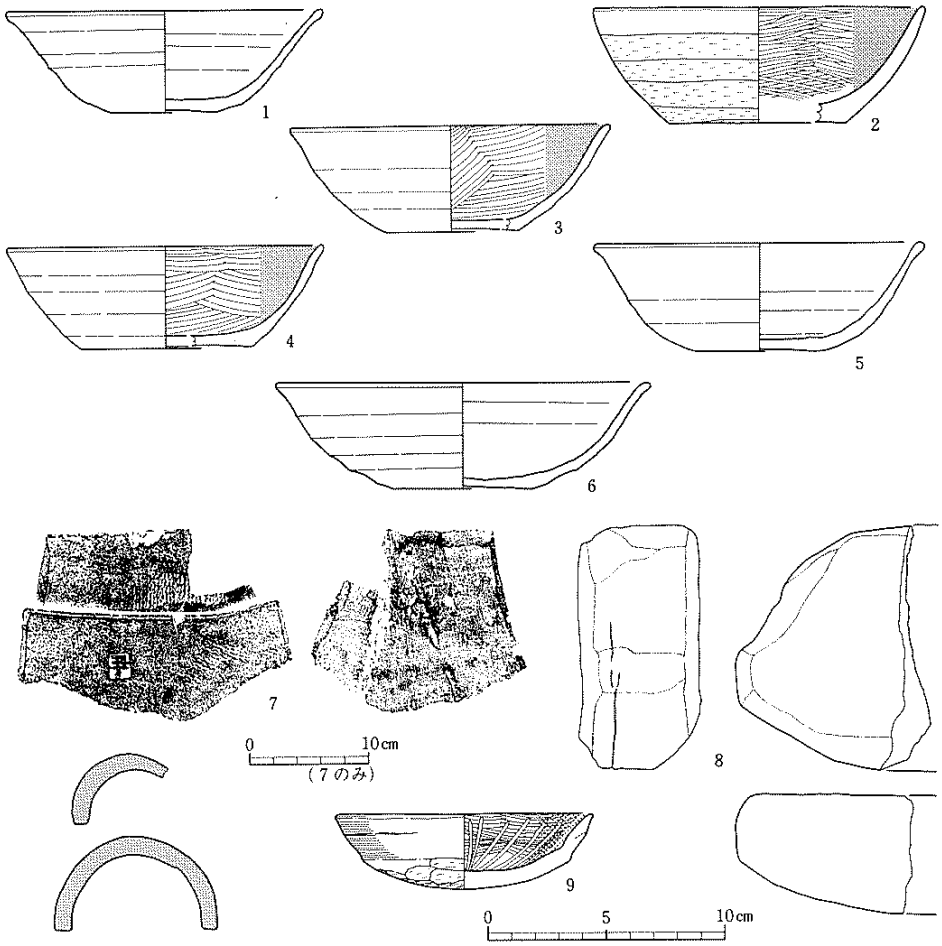
（単位：cm）

No.	種　類	出土遺構・層位	特　徴	口　径	底　径	器　高	残存率	分　類	写真図版
1	土師器・坏	ＳＫ2038・堆積土	内外面：ロクロナデ→ヘラミガキ→黒色処理	(11.8)	6.0	3.2	1/2		21-2
2	土師器・坏	ＳＫ2038・堆積土	外面：ヘラケズリ→ヘラミガキ　底面：静止糸切り→ヘラケズリ→ヘラミガキ　内面：ヘラミガキ→黒色処理	(14.8)	(8.0)	4.1	1/4		
3	須恵器・壺	ＳＫ2038・堆積土	外面：ロクロナデ→回転ヘラケズリ　内面：ロクロナデ→ナデ	(9.6)	(10.2)	13.1	1/4		21-3
4	土師器・鉢	ＳＫ2039・堆積土	外面：ヨコナデ　ナデ　底面：木葉痕　内面：ヘラナデ→ヨコナデ、ナデ	16.4	6.6	10.7	完形		21-4
5	土師器・甑	ＳＫ2039・堆積土	無底　外面：ハケメ→ヨコナデ　ハケメ、ヘラケズリ→ナデ　内面：ヨコナデ、ヘラケズリ→ヘラミガキ	(21.2)	(8.8)	21.2	1/4		
6	土師器・椀	ＳＫ2047・堆積土	丸底　内外面：ヘラミガキ→黒色処理	9.8	—	5.4	完形		21-7
7	土製模造品	ＳＫ2063・堆積土	外面：ユビナデ　内面：ナデツケ	8.3	—	4.5	ほぼ完形		21-8
8	土師器・甕	ＳＫ2120・堆積土	頸部に段　外面：ヨコナデ　ヘラミガキ　内面：ヘラナデ→ヨコナデ	15.0	—	—	4/5		

第92図　ＳＫ2038・2039・2047・2063・2120土壙出土遺物

明である。平面形は歪んだ円形で、径0.5～0.6mである。深さは約0.2m残っており、断面は皿状をなす。堆積土は1層で自然堆積とみられる。

遺物は堆積土から非ロクロ調整の土師器の坏･鉢･甕と須恵器の甕が少量出土している。このうち、図示できるのは土師器の小型坏（第93図9）がある



（単位：cm）

No.	種　類	出土遺構・層位	特　徴	口　径	底　径	器　高	残存率	分　類	写真図版
1	赤焼土器・坏	ＳＫ2016・１～３層	内外面：ロクロナデ　底面：回転糸切り	13.4	5.0	4.4	1/2		21-1
2	土師器・坏	ＳＫ2048・１層	外面：ロクロナデ→回転ヘラケズリ（ロクロ目が不明瞭）　底面：回転糸切り　内面：ヘラミガキ→黒色処理	(13.8)	(7.4)	4.9	1/4		
3	土師器・坏	ＳＫ2082・堆積土	外面：ロクロナデ　底面：回転糸切り　内面：ヘラミガキ→黒色処理	(13.6)	(5.7)	4.5	1/4		
4	土師器・坏	ＳＫ2073・１層	外面：ロクロナデ　底面：回転糸切り　内面：ヘラミガキ→黒色処理	(13.4)	(7.4)	4.3	1/4		
5	須恵器・坏	ＳＫ2073・堆積土	内外面：ロクロナデ　底面：回転糸切り	(14.0)	(5.4)	4.5	1/4		
6	須恵器・坏	ＳＫ2073・堆積土	内外面：ロクロナデ　底面：回転糸切り	(15.6)	(5.8)	4.5	2/5		
7	丸　瓦	ＳＫ2073・２層	有段　粘土紐巻き作り　凸面：縄タタキ→ナデ→刻印「伊」　凹面：布目【多賀城分類：ⅡＢ類】						24-3・25-10
8	礎　石	ＳＫ2073・２層	石材：砂岩　大きさ：10.4×8.2 cm以上　厚さ 5.0cm						
9	土師器・坏	ＳＫ2066・堆積土	外面：ヨコナデ　ナデ→ヘラケズリ　内面：ヘラミガキ→黒色処理	10.9	－	3.2	ほぼ完形		

第93図　ＳＫ2016・2048・2066・2073・2082土壙出土遺物

ＳＫ2073（第57・90・93図）

調査区北東隅で検出した土壙で、東半部は調査区外である。ＳＩ2033･2034と重複し、いずれよりも新しい。平面形は隅丸方形とみられ、東西が1.1m以上、南北約1.2mである。深さは0.4m残っており、底面には凹凸がみられる。壁は南から西にかけては急に立ち上がるが、北は緩やかに立ち上がる。堆積土は5層に分けられ、いずれも自然堆積である。

遺物は堆積土から比較的多量のロクロ調整の土師器の坏・甕の他に、須恵器の坏、赤焼土器の坏が少量出土している。このうち、図示できるものには土師器(第93図4)と須恵器の坏(5･6)、丸瓦(7)、砥石(8)がある。

ＳＫ2082（第57・90・93図）

調査区中央部の南壁付近で検出した土壙である。ＳＢ2108、ＳＤ2050・2053・2088・2124と重複しいずれよりも新しい。また、ＳＢ2106とも重複するが、新旧関係は捉えられない。平面形は歪んだ隅丸方形で、南北約2.5m、東西約1.5mである。深さは0.1m残っており、断面は浅い皿状を呈する。堆積土は1層で自然堆積とみられる。

遺物は堆積土から比較的多量のロクロ調整の土師器の坏･甕の他、須恵器の坏3点･長頭瓶2点が出土している。このうち図示できるものには土師器の坏（第93図3）がある。

ＳＫ2093(第51図)

調査区東半部の南寄りで検出した土壙である。平面形は歪んだ隅丸方形をなし、東西約2.2m、南北約0.8mである。深さは0.4mほど残っており、底面には凹凸がみられる。壁は緩やかに立ち上がる。堆積土は6層に分けられ、いずれも自然堆積とみられる。

遺物は図示できるものはないが、堆積土からロクロ調整の土師器と須恵器が少量出土している。

ＳＫ2116(第57・90・91図)

調査区東半部の中央で検出した土壙である。平面形は歪んだ楕円形をなし、長径約0.9m、短径0.6mほどである。深さは0.3m残っており、断面が逆台形を呈する。堆積土は1層で自然堆積とみられる。

遺物は堆積土から非ロクロ調整の土師器坏と甕(第91図9)が比較的多量出土している。

ＳＫ2120(第57･90･92図)

調査区東半部の中央で検出した土壙である。平面形は隅丸方形をなし、東西0.5m、南北0.3mほどである。深さは0.2m残っており、断面は逆台形を呈する。堆積土は1層で自然堆積とみられる。

遺物は堆積土から非ロクロ調整の土師器の甕(第92図8)が出土している。

⑦；溝

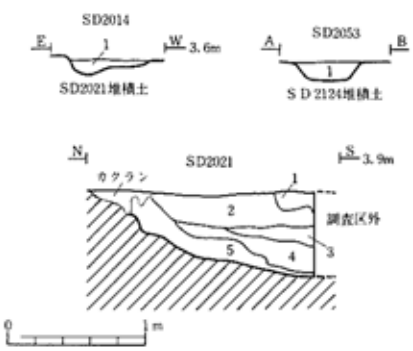
溝はⅡ区で20条検出しているが、この中で遺物が出土したり他の遺構との重複関係などからある程度年代の把握が可能なものは以下の3条である。

ＳＤ2014（第51・94・95図）

調査区南東隅で長さ約1.7m検出した南北方向の溝である。北端部は調査区内で確認しているが、南半部はさらに調査区外に続く。ＳＤ2021と重複しこれより新しい。上端幅約0.6m、底面幅約0.5mで、深さは残りのよい部分で0.1mである。底面はほぼ平坦であり、壁は緩やかに立ち上がる。堆積土は1層で自然堆積とみられる。溝の方向は心心でみると、北で約3度東に偏している。

遺物は、堆積土から非ロクロ調整とロクロ調整の土師器、須恵器が少量出土している。このうち図示できるものとしては、土師器のミニチュア土器(第95図3)がある。

ＳＤ2021(第51・94・95図)

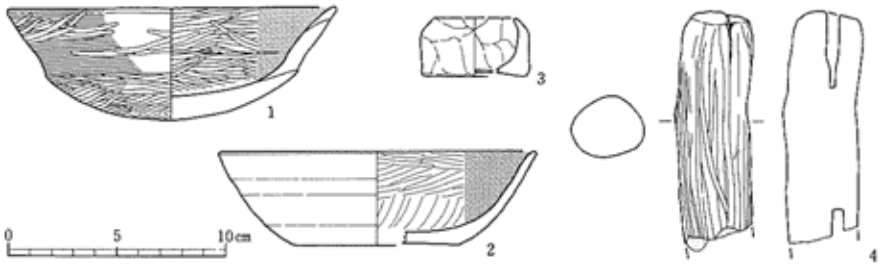


No.	土色	土性	備考
1	黒色(10YR2/1)	シルト	炭化物を含む。

No.	土色	土性	備考
1	黒褐色(10YR3/1)	シルト	

No.	土色	土性	備考
1	黒褐色(10YR3/1)	シルト	地山の土を含む。
2	褐灰色(10YR5/1)	シルト	地山の土を含む。
3	褐灰色(10YR4/3)	シルト	地山の土を含む。
4	にぶい黄橙色(10YR6/3)	シルト	
5	黄灰色(2.5Y4/1)	シルト	地山の土をやや多く含む。

第94図　Ⅱ区溝断面図



（単位：cm）

No.	種類	出土遺構・層位	特徴	口径	底径	器高	残存率	分類	写真図版
1	土師器・坏	ＳＤ2021・５層	外面：ヨコナデ、ヘラケズリ→ヘラミガキ　内面：ヘラミガキ→黒色処理	15.0	－	5.2	3/5		21-10
2	土師器・坏	ＳＤ2053・堆積土	外面：ロクロナデ　底面：回転糸切り　内面：ヘラミガキ→黒色処理	(14.6)	(7.6)	4.3	1/4		
3	土製模造品	ＳＤ2014・堆積土	内外面：ナデ　底面：木葉痕	(3.7)	(4.8)	3.7	1/4		
4	不明土製品	ＳＤ2021・堆積土	両端から盲孔　外面：ナデ、ミガキ　盲孔の径：0.5cm　盲孔の長さ：3.5cm						26-10

第95図　Ⅱ区溝出土遺物

調査区南東隅で検出した東西方向の溝で、長さ 3.0m確認しているが、東西両側はさらに調区外へ続いいる。調査区内では北側の上端部のみを検出しており、南側の上端部は調査区外である。ＳＤ2015、ＳＤ2014 と重複し、ＳＤ2015 より新しくＳＤ2014 より古い。

上端幅2.2m以上、底面幅1.5m以上で、深さは残りのよい部分で0.5mである。底面は溝の中央に向かって緩やかに傾斜しており、北壁は緩やかに立ち上がる。堆積土は5層に分けられ、いずれも自然堆積である。溝の方向は北側の上端部でみると、東で約15度北に偏している。

遺物は、堆積土から少量の非ロクロ調整の土師器と須恵器の他に棒状の土製品（第96図4)が1点出土している。土器の中で図示できるものとしては5層から出土した土師器の坏(第95図I）がある。

ＳＤ2053(第51・94・95図)

調査区中央で検出した南北方向の溝である。ＳＢ2103、ＳＥ2017、ＳＫ2016、ＳＤ2050・2054・2124、ＳＫ2082と重複し、ＳＢ2103、ＳＥ2017、ＳＫ2016、ＳＤ2050・2054・2124より新しく、ＳＫ2082より古い。長さ18.5m検出しており、上端幅約0.6m、底面幅約0.2mで、深さは残りのよい部分で0.2mほどである。断面は逆台形をなし、堆積土は1層で自然堆積である。溝の方向は心心でみると、北で約22度西に偏している。

遺物は、堆積土から比較的多量の非ロクロ調整とロクロ調整の土師器の坏・甕の他に、少量の須恵器の坏と赤焼土器の坏などが出土している。このうち図示できるものとしては、ロクロ調整の土師器の坏（第95図2）がある。

⑧；河川跡

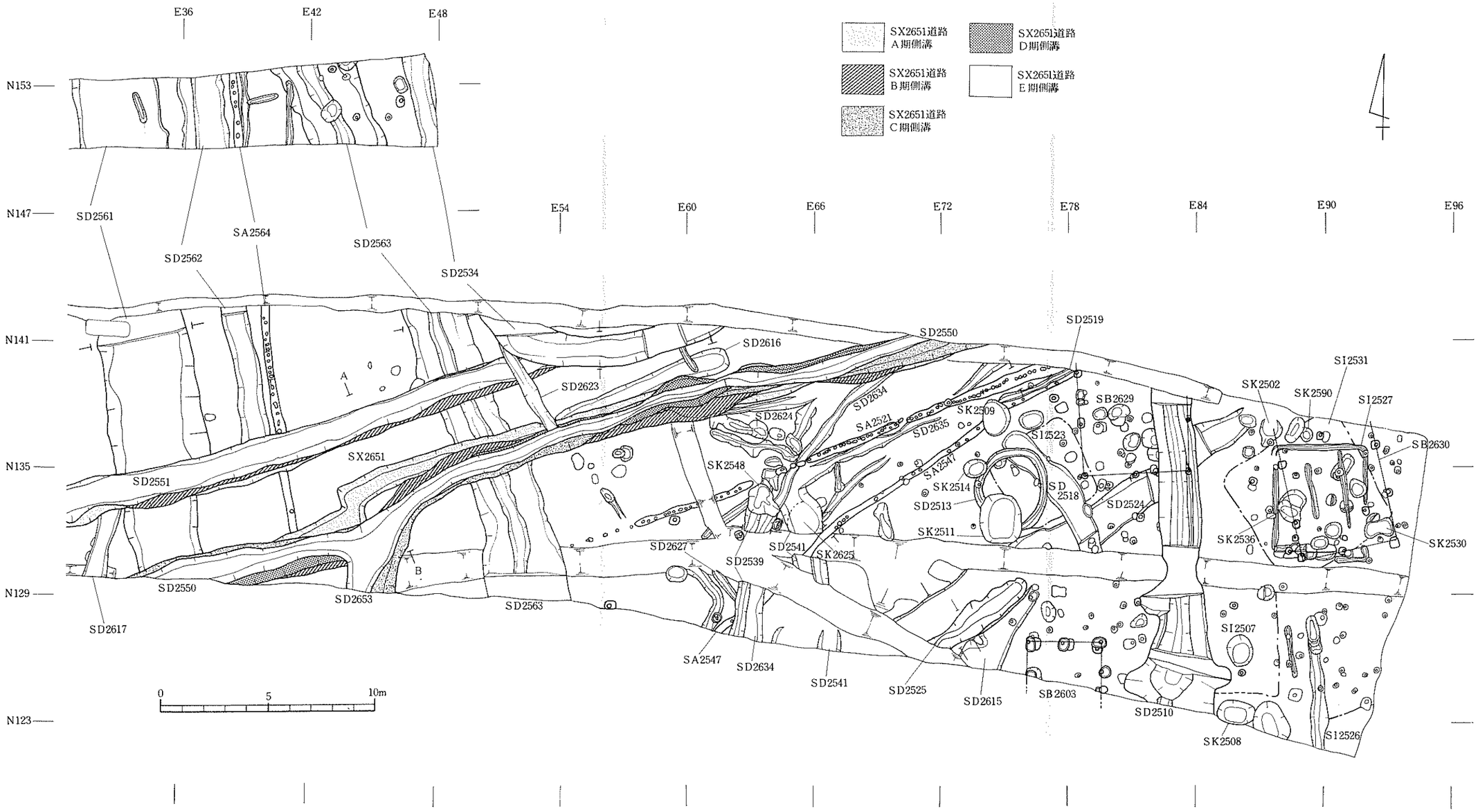
ＳＤ2050(第62・71図)

調査区中央部やや西寄りで検出した南北方向の河川跡で、長さ24.0m確認している。本河川跡の堆積土は、古墳時代後期とそれ以前の2時期(Ａ→Ｂ)に大きく分けられる。両時期の河川跡とも調査区外の南北両側へさらに続き、本調査区の南側に位置する仙塩道路関係調査区で検出されているＳＤ555およびＳＤ100・420・800（宮城県教育委員会：1992）と一連のものとみられる。

ＳＢ2102・2103・2106・2108・2109、ＳＥ2017、ＳＫ2016・2052・2082、ＳＤ2053・2054・2086・2088・2124と重複しいずれよりも古い。

古墳時代後期以前のＳＤ2050Ａは、断ち割り調査で確認しているだけであるが、上端部が30～40mほどで、深さは約2.2m残っている。堆積層は粘土層、砂・小砂利層、砂質土を主体とする層に大別できる。遺物は摩滅した弥生土器が数点出土しているだけである。

古墳時代後期にあたるＳＤ2050Ｂは、上端幅7.2m、底面幅3.0mで、深さは約2.0m残



第96図　Ⅲ・Ⅳ区東半部の検出遺構

っている。底面は部分的に凹凸がみられるが概ね平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。堆積土はスクモと粘土を主体とする層と砂や粗砂を主体とし粘土を含む層が交互に堆積しており、8層に分けられる。

遺物は、堆積土から多量の非ロクロ調整の土師器と少量の須恵器をはじめとして、多種多様の木製品・骨角器が多量に出土している。またこれらの他に、土製品、石製品や動植物遺体、種子なども出土している。

なお、本河川跡については、前述したように古墳時代後期のＳＤ2050Ｂから多種多様の遺物が多量に出土しているため、遺物を中心とした詳細な報告は来年度以降に行う予定である。

3、Ⅲ・Ⅳ区で発見した遺構と遺物

検出した主な遺構には竪穴住居跡5軒、掘立柱建物跡3棟、塀跡1条、区画施設2条、道路跡3条、土壙57基、溝66条、水田跡などがある。

①；竪穴住居跡

竪穴住居跡は全般的に遺存状況が悪く床面の残っているものはなく、いずれも掘り方埋土、主柱穴などを検出しているだけである。

ＳＩ2531(第97図)

Ⅲ区東端部の北壁際で検出した住居跡である。掘り方埋土・主柱穴・壁材痕だけを検出しており、北東隅は調査区外である。ＳＩ2527、ＳB2630、ＳK2501・2530・2532・2536・2543・2544・2545・2546・2590・2613・2614・2638・2639、ＳD2528・2529と重複し、ＳK2614より新しいが、それ以外のものよりは古い。

規模は掘り方埋土でみると、東西・南北とも約6.2mで、平面形は隅丸方形をなす。

主柱穴は対角線上の4箇所で検出しており、一辺30～40㎝ほどの不整方形で、深さは25～50㎝残っている。

周溝・貯蔵穴・カマドは検出できなかったが、西辺の一部で深さ2㎝ほどの壁材痕を検出している。住居跡の方向は、掘り方の東辺でみると、北で約31度西へ偏している。

掘り方埋土は周辺の深い部分のみ残存しており、1層である。

遺物は、掘り方埋土から非ロクロ調整の土師器の破片が比較的多量に出土しており、その中には内黒で体部外面に段を持つ坏がみられる。

ＳＩ2527(第97図)

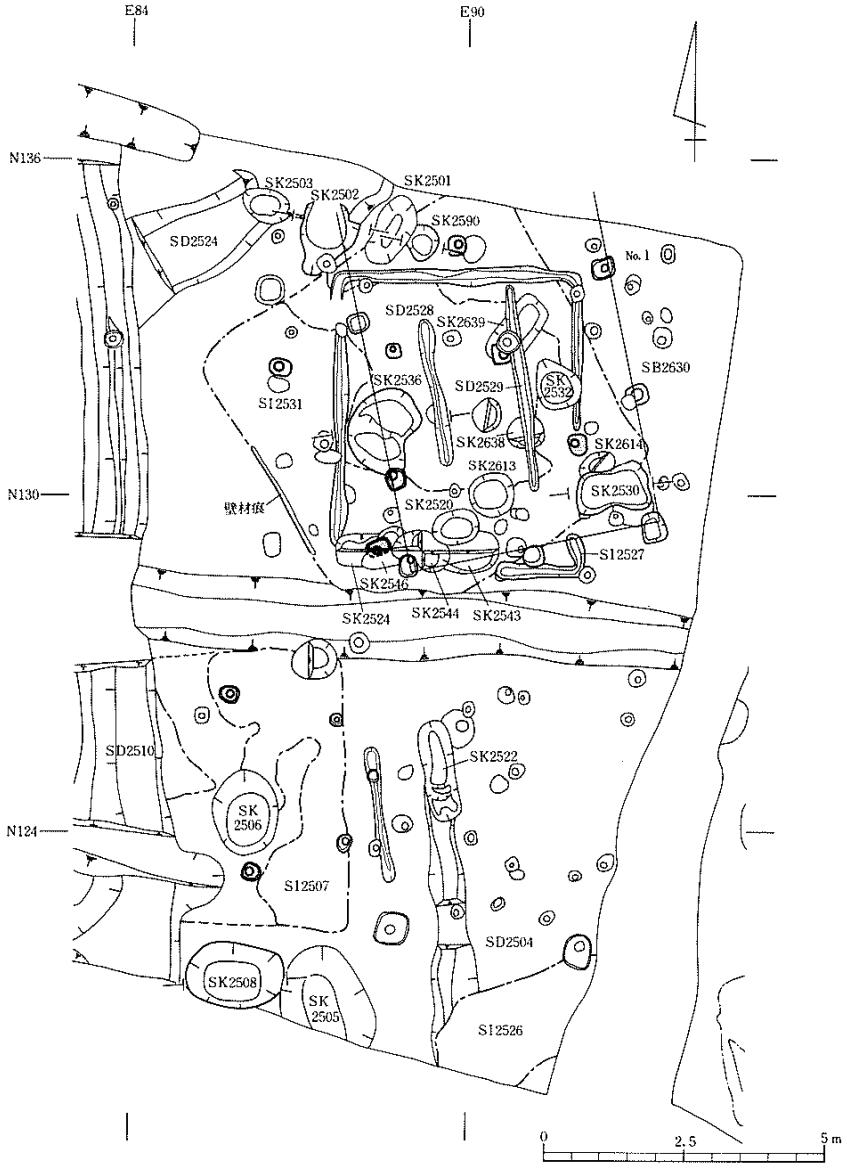
Ⅲ区東端部の北寄りで、周溝と主柱穴を検出した住居跡である。ＳＩ2531、ＳB2630、ＳK2520・2532・2544・2545・2546・2639、ＳD2529と重複し、ＳＩ2531より新しく、ＳB2630、ＳK2520・2532・2544・2545・2546・2639、ＳD2529より古い。またＳK2543・2536・2613、

ＳＤ2528とも重複しているが、新旧関係は不明である。

規模は周溝でみると、南北5.60m、東西4.35mで、平面形は隅丸方形をなす。

主柱穴は、東南を除く対角線上の3箇所で検出している。一辺25～35㎝ほどの方形をなし、深さは50㎝ほど残っている。

周溝は西辺から北辺と東辺・南辺の一部で確認しており、上端幅は10㎝～15㎝、底面幅10㎝～15



第97図　Ⅲ区東端部検出遺構

cm、深さ5～8cmで、断面は浅い皿状をなす。

住居跡の方向は、周溝の西辺でみるとほぼ真北である。

遺物は周溝の埋土から非ロクロ調整の土師器の破片が若干出土している。

ＳＩ2507(第97図)

Ⅲ区東東端部の南寄りで、堀り方埋土と主柱穴・壁柱穴を検出した住居跡である。ＳD2510、ＳK2506と重複し、いずれよりも古い。

規模は、北辺と西半部が現代の溝とＳD2510にそれぞれ壊されているため不明であるが、掘り方埋土の残存範囲は南北約4.9m、東西約3.3mで平面形は隅丸方形とみられる。

主柱穴は東半部の2箇所で検出しており、径27～32cmの楕円形をなし、深さは35cmほど残っていた。壁柱穴は東辺の2箇所で検出しており、一辺25cmの隅丸方形をなし、深さは40cmほどである。

住居跡の方向は、掘り方の東辺でみると北で約2度西へ偏している。

掘り方埋土は1層で、東辺と部分的に深いところのみ残存していた。

遺物は、掘り方埋土と主柱穴埋土から非ロクロ調整の土師器坏・高坏の破片が少量と数点の須恵器の破片が出土している。

ＳＩ2526(第97図)

Ⅲ区東南隅で、掘り方埋土のみ検出した住居跡で、南半部は調査区外である。東半部はⅡ区まで広がると想定されるが、Ⅱ区では後世の削平が深いため痕跡を検出することはできなかった。ＳD2504と重複し、これより古い。

規模は南北2.1m以上、東西2.7m以上で、平面形は隅丸方形である。

住居跡の方向は、掘り方の北辺でみると、東で約18度北へ偏している。

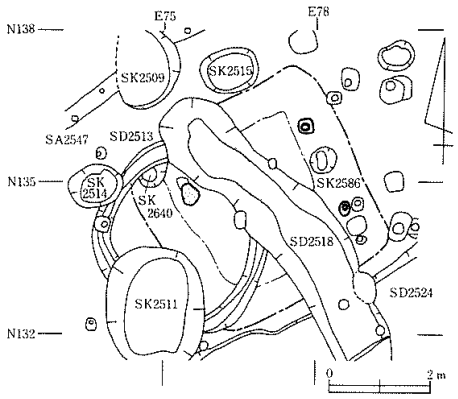
掘り方埋土は1層である。遺物は出土していない。

ＳＩ2523(第98図)

Ⅲ区東部北寄りで、掘り方埋土と主柱穴を検出した住居跡である。ＳB2629、ＳK2511・2586・2640、ＳD2513・2518と重複し、いずれよりも古い。

規模は南北約4.1m、東西約4.2mで、平面形は隅丸方形をなす。

主柱穴は西南を除く対角線上の3箇所で検出している。一辺25cm



第98図　ＳＩ2523住居跡

～40㎝の隅丸方形ないし楕円形をなし、深さは25㎝～40㎝ほど残っている。

住居跡の方向は、掘り方の東辺で、北で25度西へ偏している。

掘り方埋土は1層である。

遺物は、掘り方埋土と主柱穴から、非ロクロ調整の土師器の破片が若干出土しているだけである。

②；建物跡

建物跡はすべて掘立柱建物跡である。調査区の関係で全形を検出していないため正確な規模は不明だが、廂を持つものもなくいずれも小規模なものとみられる。

ＳＢ2630(第97･99図)

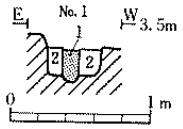
Ⅲ区東端部の北寄りで検出した南北3間以上、東西2間の南北棟建物跡である。ＳＩ2527･2531、ＳK2501・2502・2520・2530・2532・2536・2543・2544・2590・2613・2614・2637・2639、ＳD2528･2529と重複し、ＳＩ2527・2531、ＳK2502・2520・2536・2543・2544・2614・2637より新しいが、それ以外のものとは直接柱穴が重複していないため、新旧関係は捉えられない。

柱穴は8箇所で確認している。一辺が32㎝～50㎝の隅丸方形をなし、深さは6～25㎝ほどしか残っていない。埋土は地山の小ブロックを含む黒褐色シルトである。

なお、平面形では西側柱列の南端から1・3番目の柱穴を表していない。これは柱穴をＳK2536・2502堆積土上面で確認しているが、ＳK2536・2502より柱穴が浅く、ＳK2536・2502の完掘時を表現した平面図には表現できないためである。

柱痕跡は、東側柱列と南妻の4箇所で確認しており、径12～18㎝ほどの円形である。堆積土は黒褐色シルトで炭化物と地山の土を含む。また南妻棟通下の柱穴では柱が抜取られている。

柱間寸法は、桁行が東側柱列で南から約2.4m、2.3mで、梁行が南妻で東から約2.3m、2.07で、総長は約4.35mである。建物の方向は南妻でみると、東で約7度北へ偏している。



第99図　ＳＢ2630
柱穴断面図

遺物はいずれも破片であるが、柱穴埋土から土師器、須恵器が少量と赤焼土器の破片が数点出土している。土師器の中にはロクロ調整のものがみられる。

ＳB2603(第100図)

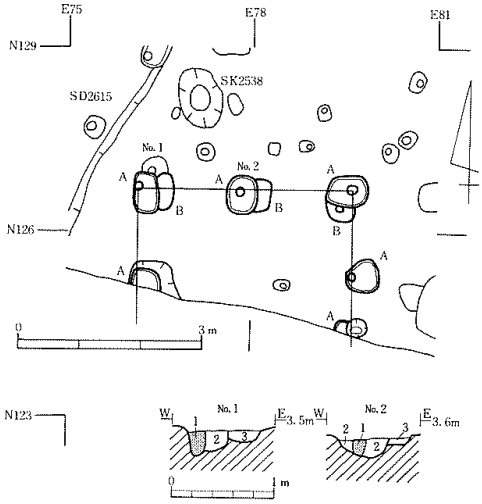
Ⅲ区東半部の南壁際で検出した建物跡で、南北2間以上、東西2間の南北棟建物跡と推定され、ほぼ同位置で一度建て替えられている(A→B)。

古いＳB2603Aでは、北妻の3箇所で柱穴を検出しており、このうち北東隅の柱穴で径15㎝の円形の柱痕跡を確認している。規模は、3箇所ともＳB2603Bに大きく壊されるため規模は不明であるが、ほぼBの柱穴と同じとみられる。平面形は隅丸方形をなすものと思

われる。深さはＳＢ2603Ｂより浅く、10～12cmほどしか残っていない。埋土は地山ブロックを多く含む黄灰色シルトで、硬くしまりがある。

柱間寸法・建物の方向は、新しいＢ建物跡と柱痕跡は1箇所しか検出されておらず、他の2箇所も柱穴全体のプランが不明のため、柱間寸法・建物の方向は測定できない。

新しいＳＢ2603Ｂでは、6箇所で柱穴を確認している。柱穴は一辺42～64mの隅丸方形で、深さは17～22cmしか残っていない。埋土は、地山のブロックを多く含む暗灰黄色シルトである。柱痕跡は4箇所で確認しており、径12～15cmの円形である。堆積土は褐灰色粘土質シルトで、地山の細粒を少量含む。また、調査区の南壁にかかる2箇所の柱穴では抜取り穴を確認している。



第100図　ＳＢ2603建物跡・柱穴断面図

柱間寸法は、桁行が東側柱列で北から1間分判明しており1.42m、梁行が北妻で東から1.81m、1.69mで、総長は3.5mである。建物の方向は、北妻でみるとほぼ真東である。

遺物は、A・Bの柱穴埋土と抜取り穴から、ともに非ロクロ調整の土師器の小破片が少量出土しているのみである。

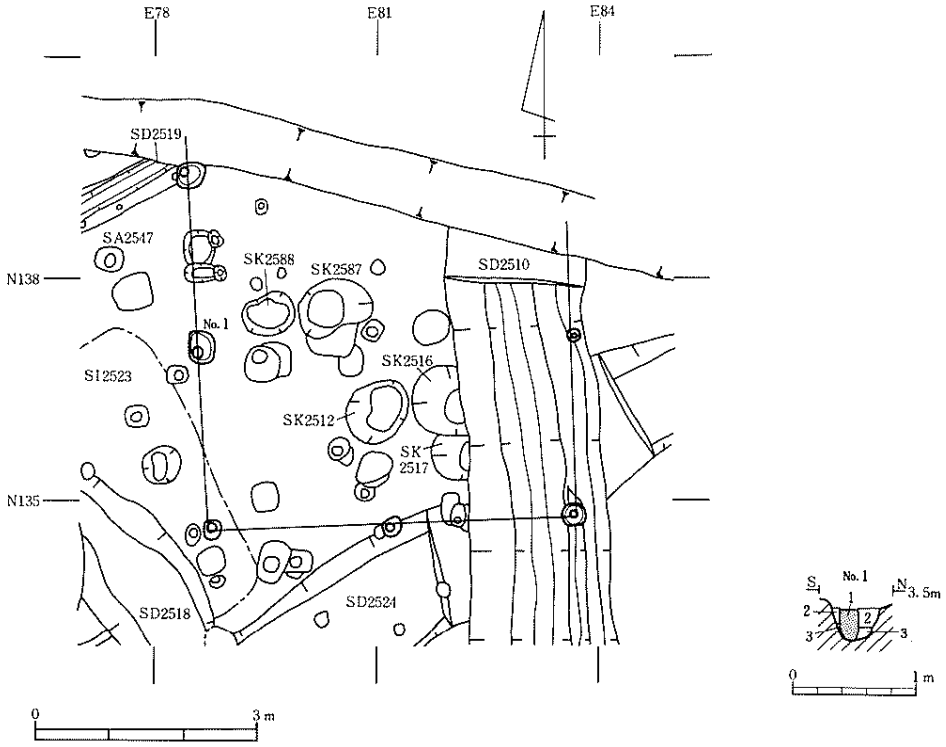
ＳＢ2629(第101図)

Ⅲ区東半部の北壁際で検出した建物跡で、南北2間以上、東西2間の南北棟建物跡と推定される。ＳＩ2523、ＳＡ2547、ＳＤ2510・2524と重複し、ＳＤ2510より古いが、それ以外のものよりは新しい。

柱穴は6箇所で検出している。柱穴は一辺22cm～44cmの隅丸方形で、深さは約40cmほど残っていた。埋土は2層に分けられ、地山のブロックを含む黒褐色シルトで、3がより多く地山ブロックを含む。柱痕跡は、全ての柱穴で確認しており、径10～15cmの円形である。堆積土は、黒褐色シルトで、灰白色火山灰を粒状に多く含む。

柱間寸法は、桁行が西側柱列で南から2.37m、2.46mである。梁行が南妻で東から2.51m、2.37mで、総長4.88mである。建物の方向は南妻でみると東で約2度北へ偏している。

遺物は、柱穴埋土からいずれも小破片であるが、非ロクロ調整の土師器と須恵器が少量出土しているのみである。



第101図　ＳＢ2629建物跡・柱穴断面図

③；区画施設

区画施設としては材木塀跡を1条、溝と材木塀で構成される区画施設を2条検出している。

ＳＡ2521材木塀跡(第96図・第102図)

Ⅲ区東半部で検出した溝状の掘り方(布掘)に丸太材を立て並べた北東～南西方向の材木塀跡である。後世の削平のため数箇所途切れ、西端部では材の痕跡が確認されるのみであるが約24m確認しており、両側ともさらに調査隊外へ続くと考えられる。ＳＤ2634・2635と重複し、いずれよりも新しい。また、E64付近に堆積している第2層よりも古い。

掘り方(布掘)は、上端幅30～64㎝、底面幅22～50㎝で西側ほどせまく、底面は概して平坦だが所々に深い部分がある。断面形はU字形をなし、側壁は垂直に立ち上がる。

深さは最も残りの良い部分で30㎝ほど残っている。遺存状況の良い東半部では、材が4・5本ずつ特に接して据えられており、その部分の掘り方が特に深くなっている。廃絶時

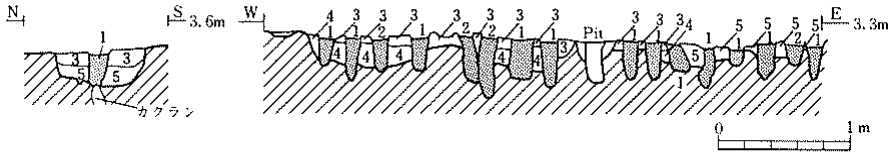
に材を抜き取った形跡は認められない。

埋土は上下に2層分けられ、上層(第102図3)が地山ブロックを多く含む黒褐色シルト、下層が地山ブロックを多く含む黒褐色シルト(5)・砂質土(4)である。

材の痕跡は全体で確認しており、径8～15cmの円形である。堆積土は、炭化物・地山の細粒を含む黒褐色粘土質シルト(1・2)である。

塀の方向は、材の痕跡を参考にすると東で約20度北に偏している。なお、本材木塀は後述するＳＸ2651東西道路跡(Ｄ期南側溝心心で、東で北に約17度)と、約4～5mの間隔をおいてほぼ平行する。

遺物は、いずれも小破片であるが、核の痕跡と掘り方埋土のいずれからも少量の非ロクロ調整の土師器と、若干の須恵器が出土しているのみである。



第102図　ＳＡ2521塀跡断面図

ＳＤ2561溝とＳＡ2564材木塀跡(第96図・第103図)

Ⅳ区東半部からⅢ区東半部にかけて検出した、平行して南地に続く溝と材木塀で、両者ともさらに調査区外へ続く。ＳＤ2561溝の東側約3.2mにＳＡ2564材木塀が位置している。双方ともＳＸ2561東西道路跡と重複し、これよりも古い。

ＳＤ2561

ＳＤ2561は上端幅4.0～4.4m、底面幅3.1～3.9mで、底面はほぼ平坦である。深さは最も残りの良いところでも11cmほどしか残っておらず、断面形は不明瞭だが、船底型をなすかと思われる。堆積層は1層のみ残っており、自然堆積である。

溝の方向は心心で、北で約7度西に偏している。遺物は出土していない。

ＳＡ2564

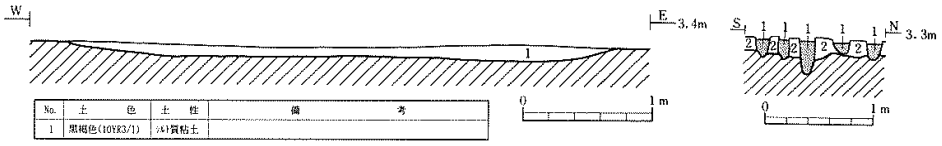
溝状の掘り方(布掘)に丸太材を立て並べた材木塀である。掘り方の上端幅27～36cm、底面幅16～27cmで、底面はほぼ平坦である。深さは20～30cmほど残っており、断面形はU字形をなす。埋土は、地山ブロックを若干含む黒褐色粘土質シルトである。

材の痕跡は径10cmほどの円形をなすが、抜取り痕とみられる楕円形のものもある。堆積土は、地山細粒を多く含む褐灰色シルトである。

塀の方向は材の痕跡を参考にすると、心心で北で約8度西に偏している。遺物は出土し

ていない。

なお、ＳＤ2561は、位置と方向からみて本調査区の南の仙塩道路関係の発掘調査（宮城県教育委員会:1992）で検出したＳＤ461の西辺の北延長線上に位置することから、本調査のⅡ区で検出しＳＤ2124とＳＡ2089・2092・2096と一連の区画施設の西辺にあたると考えられる。また、1992年度の多賀城市埋蔵文化財センターによる本調査区の南にあたる仙塩道路本線部分の調査では、ＳＤ2561とＳＤ461の中間部分にあたるとみられる溝跡とＳＡ2564の南延長とみられる塀跡がそれぞれ検出されている（未報告）。



No.	土　色	土　性	備　考
1	黒褐色(10YR3/1)	ｼﾙﾄ質粘土	

第103図　ＳＤ2561溝・ＳＡ2564塀跡断面図

ＳＤ2524溝とＳＡ2547材木塀跡(第96図・第104図)

Ⅲ区東半部で検出した北東～南西方向に平向して続く溝と材木塀で、両者ともさらに調査区外へ続く。ＳＤ2524溝の西側約5.4mにＳＡ2547材木塀が位置している。

ＳＤ2524

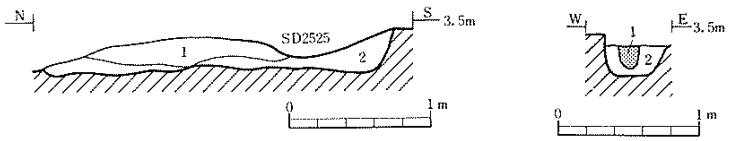
ＳＤ2524は、ＳＢ2629、ＳＫ2502・2511、ＳＤ2510・2518・2525・2615と重複し、ＳＤ2615より新しいが、それ以外のものよりは古い。

上端幅1.0～2.5m、底面幅0.7～2.3mで、概して西側ほど広くなっている。底面はほぼ平垣で、深さは8～34cmほどしか残っていないが、概して西側ほど遺存状況は良好である。壁は急角度で立ち上がり、断面は逆台形をなす。堆積層は2層確認しているが、いずれも自然堆積とみられる。溝の方向は心心で、東で約34度北に偏している。

遺物は、全て破片ではあるが、非ロクロ調整の土師器の坏・甕などが比較的多く出土している。

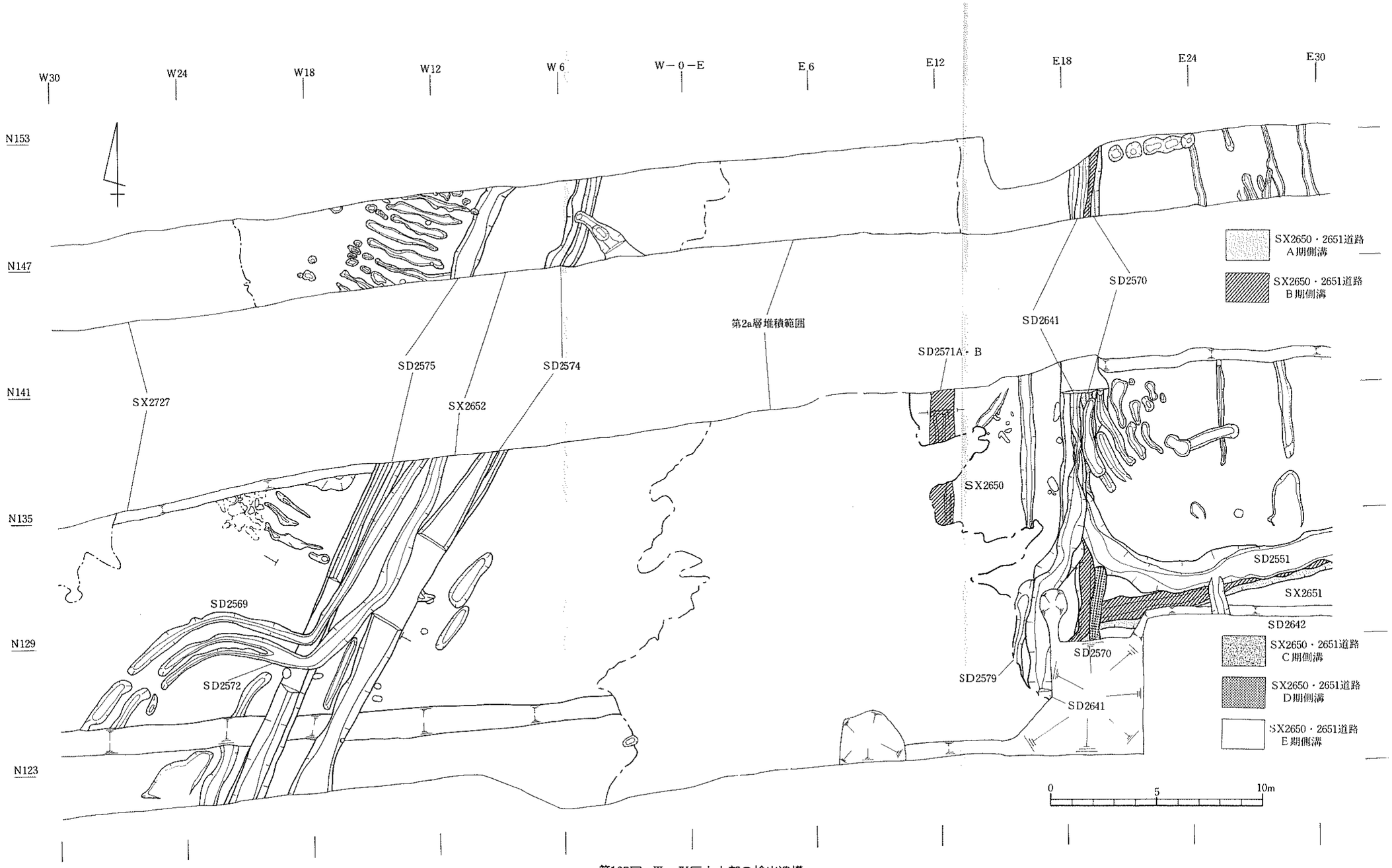
ＳＡ2547

ＳＡ2547は、溝状の掘り方（布掘）に丸太材を立て並べた材木塀で、ＳＢ2629、ＳＫ2509、



No.	土　色	土　性	備　考	No.	土　色	土　性	備　考
1	黒色(10YR2/1)	粘土質ｼﾙﾄ	地山の土をブロック状に多く含む。しまりあり。	2	暗灰黄色(2.5Y4/2)	砂質ｼﾙﾄ	地山の土や黒褐色土を多く含む。しまりややあり。

第104図　SD2524溝跡・SA2547塀跡断面図



第105図　Ⅲ・Ⅳ区中央部の検出遺構

ＳＤ2519･2539･2541･2634と重複し、いずれよりも古い。

上端幅22～43㎝、底面幅12～27㎝で、底面はほぼ平坦である。深さは4～30㎝しか残っておらず、断面はU字形をなす。埋土は地山ブロックを多く含む褐灰色粘土質シルトである。

材の痕跡はほぼ円形で径は12～20㎝ほどであるが、抜取り痕とみられる楕円形のものもみられる。堆積土は褐灰色粘土質シルトである。

塀の方向は材の痕跡を参考にすると、東で約36度北に偏している。

遺物は、掘り方埋土から非ロクロ調整の土師器の破片が数点出土しているのみである。

④；道路跡

道路跡は、素掘りの側溝を伴う南北道路跡2条と東西道路跡1条を確認している。このうちのＳＸ2650南北道路とＳＸ2651東西道路が交差している。

ＳＸ2650南北道路跡とＳＸ2651東西道路跡(第105～109図)

ＳＸ2650はIII区中央部東寄りからIV区にかけて検出した南北道路跡で、ＳＸ2651はこのＳＸ2650南北道路跡に東側から接続している東西道路跡である。ただし、ＳＸ2650南北道路の西側では東西道路が確認できないことから、ＳＸ2650南北道路跡とＳＸ2651東西道路跡は、この地点でいわゆるＴ字路を形成していたと考えられる。

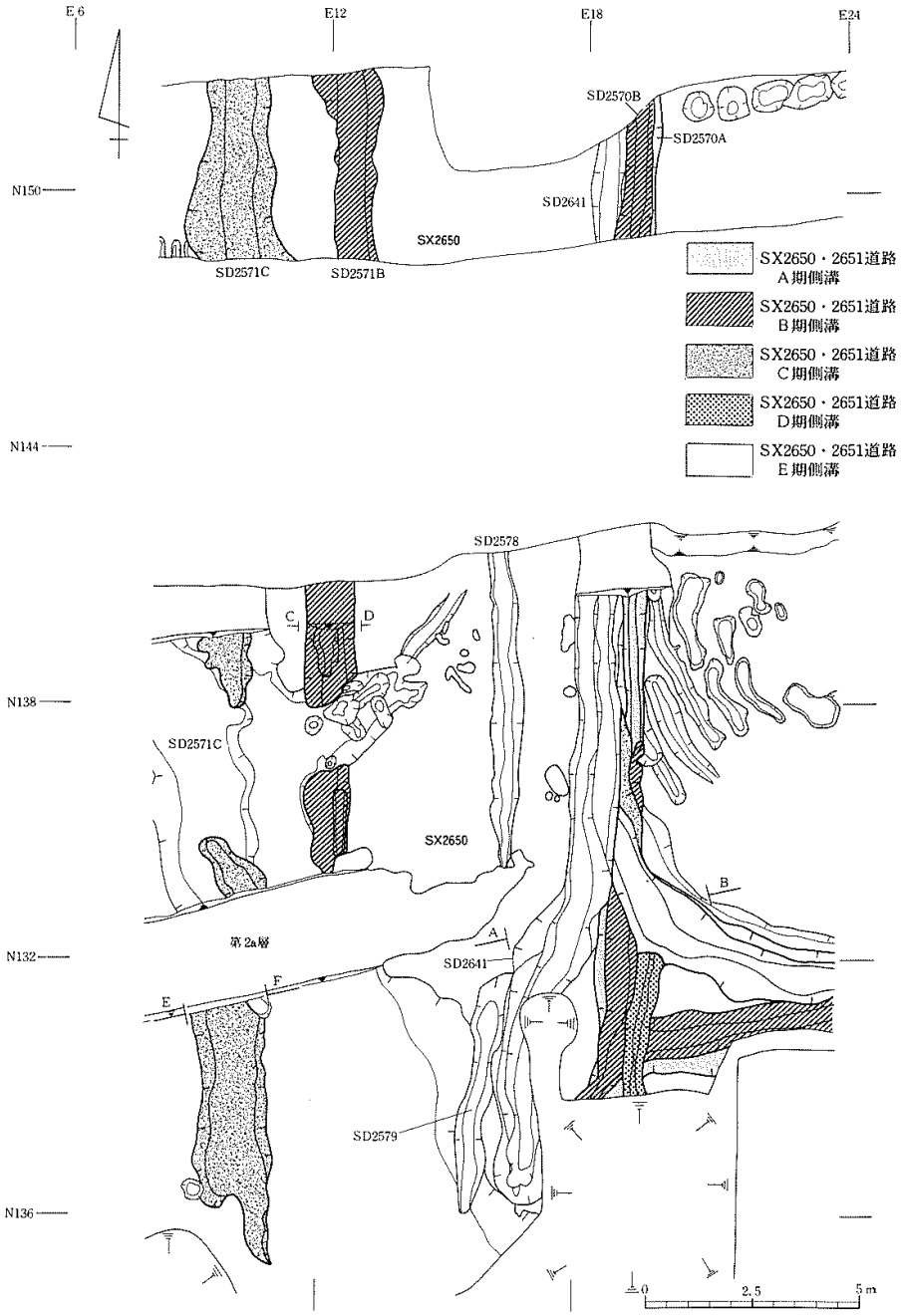
ＳＸ2650では東側溝ＳＤ2570と西側溝ＳＤ2571、および路面構築時の積み土の一部を確認したが、路面は削平のため残っていなかった。また、ＳＸ2651東西道路跡では、南側溝ＳＤ2550、北側溝ＳＤ2551、および路面構築時の積み土と路面堆積土を確認している。両道路跡は、ＳＡ2564、ＳＤ2534･2561･2562･2563･2634･2616･2617･2623･2624･2641･2642と重複し、ＳＤ2534･2623･2641･2642より古いが、それ以外のものよりは新しい。また交差点付近を中心に両道路跡とも、基本層序の第2ａ層に覆われている。

両道路跡の変遷については、ＳＸ2650南北道路の東側溝(ＳＤ2570)とこれに接続しているＳＸ2651東西道路の北側溝(ＳＤ2551)および南側溝(ＳＤ2550)の遺存状況の良い部分でそれぞれ対応するとみられる5時期(Ａ→Ｂ→Ｃ→Ｄ→Ｅ)の重複を確認している。

また、ＳＸ2650の西側溝ＳＤ2571では3時期の変遷が認められ、それぞれ東側溝のＡ・Ｂ・Ｃ期に対応するとみられる。Ａ・Ｂ期がほぼ同位置で重複し、Ｃ期はそのやや西側に移動している。Ｄ期・Ｅ期の側溝については確認できなかった。

ＳＸ2651東西道路では、Ｅ44付近で、南側溝であるＳＤ2550からこれとほぼ直交する南北方向の溝(ＳＤ2653)が分岐している。そしてこの分岐点の東西で路幅が異なっている。

なお、この南北に分枝する溝の性格については、今調査区内では区画溝になるのか、あるいは南北道路の東側溝になるのか特定できないが、昨年度の多賀城市埋蔵文化財センタ



第106図　ＳＸ2650道路跡

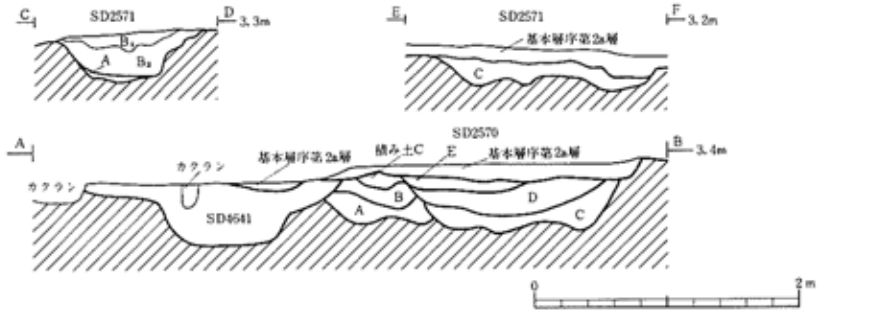
ーの仙塩道路本線部分の調査成果をみると、区画溝であることがわかる（第120図）。

各時期の道路跡について、規模・側溝の接続のあり方・方向・路幅についてみると以下

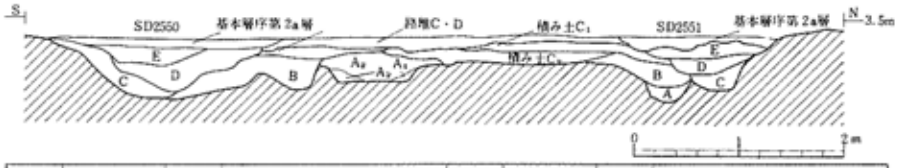
		規模					交差のあり方					道路の方向					路幅				
		A	B	C	D	E	A	B	C	D	E	A	B	C	D	E	A	B	C	D	E
南北道路	西側溝 上幅	0.0	1.2～1.4	0.8									N-1-E	N-1-W			6.8	6.8	8.8		
	底幅	0.1～0.4	0.5 0.6	0.2 0.4																	
	深さ	0.3	0.3	0.4																	
	東側溝 上幅	1.2	0.7	2.2	1.7	0.9	⊢	⊢	⊥	⊢	⊥	N-1-E	N-1-E								
	底幅	0.3 0.8	0.2 0.5	0.8 1.4	1.0	0.6															
	深さ	0.4	0.3	0.4	0.3	0.2															
東西道路	南側溝 上幅	0.9	1.6	1.0	1.9	1.5						E-14-N	E-14-N	E-15-N	E-17-N	E-17-N	東 2.7	4.7	東 4.6	東 4.0	東 4.0
	底幅	0.3 0.8	1.0	0.1 0.4	0.2 1.2	0.4 0.9															
	深さ	0.4	0.5	0.5	0.4	0.2															
	北側溝 上幅	1.1	1.5	0.9	1.7	1.2	⊢	⊢	⊥	⊢	⊥	E-18-N	E-15-N	E-14-N	E-16-N	E-16-N	西 2.7	2.7	西	西 4.7	西 4.8
	底幅	0.2 0.5	0.7 1.2	0.4	0.2 1.1	1.0															
	深さ	0.6	0.5	0.5	0.3	0.2															

＊単位は m である。
＊側溝の上端幅・底面幅・深さは最大値である。
＊路幅は側溝の心心距離である。東西道路については南側溝の分岐点の東西２箇所で計測している。
＊側溝の方向は心心による。

第１表　SX 2650南北道路、SX 2651東西道路計測表

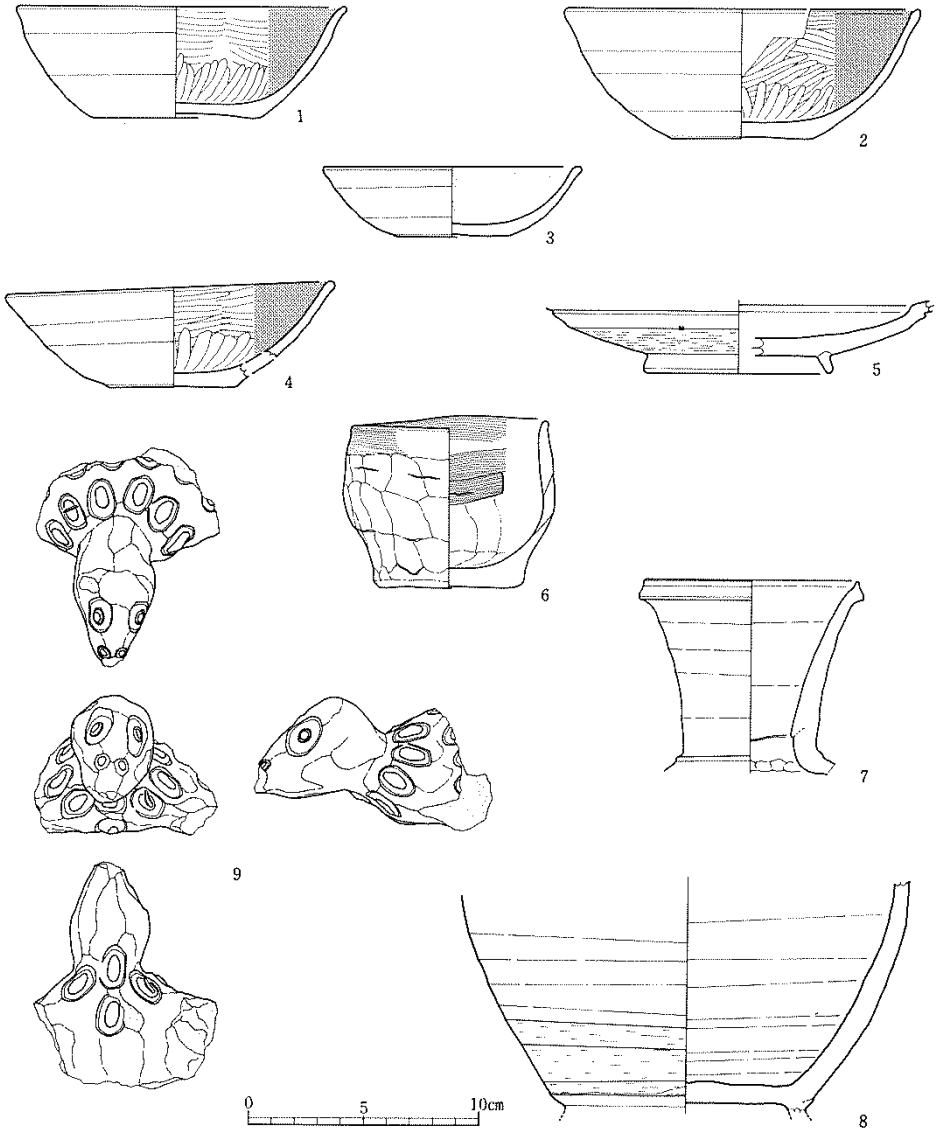


No.	土色	土性	備考	No.	土色	土性	備考
SD2570 E	黄灰色(2.5Y6/1)	粘土質(4)	灰白色火山灰をブロック状に含む。	SD2570 A	黄灰色(2.5Y5/1)	(4)質粘土	地山の土をしま状に多く含む。
SD2570 D	暗灰色(10Y4/1)	粘土質(4)	灰白色火山灰を多く含む。	SD2571 C	黒褐色(2.5Y3/1)	シルト	
SD2570 C	黒褐色(10YR3/1)	(4)質粘土		SD2571 B1	暗灰黄色(2.5Y5/2)	シルト	
積み土C	灰黄色(2.5Y6/2)	シルト	（C期路盤構築時の積み土）しまりあり。	SD2571 B2	黄灰色(2.5Y4/1)	粘土質(4)	
SD2570 B	暗灰色(10Y4/1)	粘土質(4)	黒色・暗灰黄色の粘土をしま状に多く含む。	SD2571 A	黒褐色(10YR3/1)	(4)質粘土	地山の土を多く含む。



No.	土色	土性	備考	No.	土色	土性	備考
SD2550 E	灰黄褐色(10YR5/2)	粘土質(4)	灰白色火山灰を粒状に微量含む。	積み土C1	暗灰黄色(2.5Y5/2)	砂質(4)	（C期路盤構築時の積み土）しまりあり。
SD2550 E	黄灰色(2.5Y4/1)	粘土質(4)		積み土C2	暗灰色(10YR4/1)	砂質(4)	（C期路盤構築時の波板状の圧痕）しまりあり。
SD2550 D	黄灰色(2.5Y4/1)	粘土質(4)	灰白色火山灰を粒状に微量含む。	SD2550 B	灰色(5Y5/1)	砂	地山の土をブロック状に多く含む。
SD2550 D	黄灰色(2.5Y4/1)	粘土質(4)	灰白色火山灰をブロック状に多く含む。	SD2550 B	暗灰色(10YR5/1)	粘土質(4)	
SD2550 C	灰色(2.5Y5/1)	砂質	地山の土を多く含む。	SD2550 A1	黄灰色(2.5Y5/1)	砂質(4)	
SD2550 C	黄灰色(5Y4/1)	粘土質(4)	地山の土をブロック状に若干含む。	SD2550 A2	黄灰色(2.5Y5/1)	砂質(4)	地山の土をブロック状に多く含む。
路盤C・D	にぶい黄色(2.5Y6/3)	砂質(4)	（C・D期の路盤相当土）しまりあり。	SD2551 A	黄灰色(2.5Y5/1)	粘土	地山の土を帯状に多く含む。

第107図　ＳＸ2650・2651道路跡断面図



（単位：cm）

No.	種　類	出土遺構・層位	特　徴	口　径	底　径	器　高	残存率	分　類	写真図版
1	土師器・坏	ＳＤ2550Ｃ	外面：ロクロナデ　底面：回転糸切り　内面：ヘラミガキ→黒色処理	13.6	7.2	4.9	1/2		21-12
2	土師器・坏	ＳＤ2550Ｄ	外面：ロクロナデ　底面：回転糸切り　内面：ヘラミガキ→黒色処理	(15.2)	(6.0)	5.7	一部		
3	赤焼土器・小形坏	ＳＸ2651・路址Ⅱ	内外面：ロクロナデ　底面：回転糸切り	(11.0)	5.0	3.1	1/2		
4	土師器・坏	ＳＤ2550Ｄ	外面：ロクロナデ　底面：回転糸切り　内面：ヘラミガキ→黒色処理	(14.0)	5.6	(4.4)	3/5		
5	灰釉陶器・段皿	ＳＤ2550Ｄ	外面：ロクロナデ→回転ヘラケズリ　施釉範囲：内面全面（刷毛塗り？）	－	(8.0)	－	2/5		
6	土師器・鉢	ＳＤ2551Ｅ	外面：ヨコナデ→ナデ　底面：ナデ　内面：ナデ→ヘラナデ→ヨコナデ	(8.4)	(6.0)	(7.3)	ほぼ完形		22-2
7	須恵器・長頸壺	ＳＸ2651・路址Ⅱ	内外面：ロクロナデ　部分的に自然釉付着【大戸・ＫＡ12窯式期】	9.8	－	－	一部		
8	須恵器・広口壺	ＳＤ2550Ｄ	外面：ロクロナデ→回転ヘラケズリ【大戸・ＫＡ 112窯式期】	－	11.0	－	一部		
9	亀形陶製品	ＳＤ2550Ｂ	２種類の竹管状工具により、文様を表現						27-1

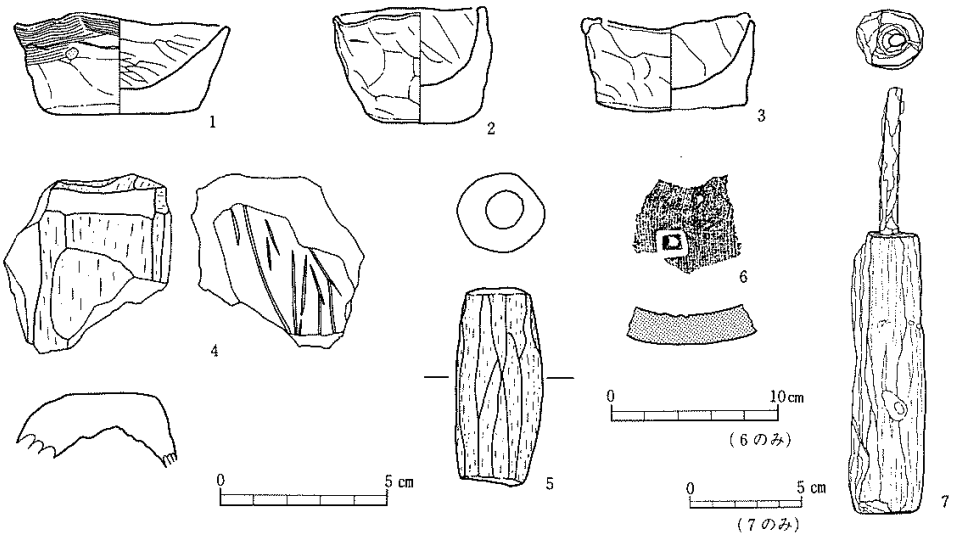
第108図　ＳＸ2650・2651道路跡・側溝出土遺物

側溝の堆積土は、ＳＤ2571Ａ・ＳＤ2550Ａが2層に細分できる以外すべて1層であり、ＳＤ2550Ｄ・2551Ｄの堆積層には灰白色火山灰層がみられる。

また、道路の路面構築時の盛土をＳＸ2650南北道路Ｃ期とＳＸ2651東西道路Ｃ期でそれぞれ確認している。また、ＳＸ2651東西道路ではＣ・Ｄ期の路面上に堆積土がみられた。この他、ＳＸ2651Ｃ期ではいわゆる波板状の圧痕も検出している。

遺物は東西道路の側溝と路面の盛土と路面上の堆積土からほとんどが破片であるが、多量の土器類と瓦などが出土している(第108・109図)。

Ｅ期の側溝からは多量のロクロ調整と非ロクロ調整の土師器、須恵器、瓦の他、少量の赤焼土器が出土しておりこの中で図示できるものとしては、非ロクロ調整の土師器の小型鉢(第108図6)がある。Ｄ期では多量のロクロ調整と非ロクロ調整の土師器と須恵器の他に灰釉陶器の段皿(第108図5)やミニチュア土器(第109図1～3)、赤焼土器と瓦が数点出土している。Ｃ期では少量のロクロ調整と非ロクロ調整の土師器、須恵器、瓦が出土しており、この中の土師器には内黒の坏（第108図1）や多賀城政庁跡遺構期第Ⅳ期の刻印を押された平瓦(第109図6)がある。Ｂ期の側溝からは少量のロクロ調整・非ロクロ調整の土師器・須恵器・瓦が出土しており、この中には須恵器の亀形製品(第108図9)が、



（単位：cm）

No.	種　類	出土遺構・層位	特　徴	口　径	底　径	器　高	残存率	分　類	写真図版
1	土製模造品	ＳＤ2561Ｄ	外面：ナデ→ヨコナデ　底面：ナデ　内面：ミガキ	6.3	4.7	2.9	1/2		22-4
2	土製模造品	ＳＤ2561Ｄ	内外面：ナデ	4.4	2.1	3.4	ほぼ完形		22-3
3	土製模造品	ＳＤ2561Ｄ	内外面：ナデ	4.9	4.4	2.5	ほぼ完形		22-5
4	不明土製品	ＳＤ2550・堆積土	外面：ヘラケズリ　内面：ナデツケ						
5	陶　錘	ＳＤ2574Ｂ	外面：ヘラケズリ、ナデ　大きさ：5.9×1.9 cm　孔径：1.2cm						26-13
6	平　瓦	ＳＤ2550Ｃ	一枚作り　凸面：縄タタキ　凹面：布目→記号刻印　【多賀城分類：ⅡＣ類】						25-9
7	鍵（クルリ鍵）	ＳＤ2570Ａ	柄の長さ：12.6cm　柄の径：3.0cm						28-8

第109図　ＳＸ2650・2651・2652道路跡側溝出土遺物

またA期ではロクロ調整と非ロクロ調整の土師器の他に少量の須恵器と瓦が数点出土している。この他、南北道路跡の東側溝であるＳＤ2570からは、A期の底面から鍵(第109図7)が出土している。

路面の盛土ではC期のものから多量のロクロ調整・非ロクロ調整の土師器と少量の須恵器の他に、赤焼土器が極少量出土している。

路面堆積土からは、多最のロクロ調整と非ロクロ調整の土師器・須恵器・瓦の他に灰釉陶器1点、砥石1点が出土している。この中で図示できるものとしては、須恵器の長頸瓶(第108図7)と赤焼土器の坏(3)がある。

ＳＸ2652道路跡(第106・109・110図)

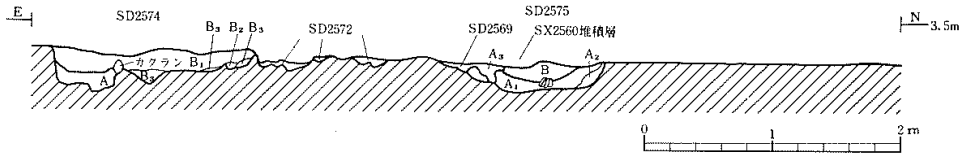
Ⅳ区中央部西寄りからⅢ区西半部にかけて検出した素掘の側溝を伴う北東～南西方向の道路跡である。ＳＤ2569・2575と重複し、いずれよりも古い。また基本層序の第2ａ層に覆われている。

路面や積み土などは確認できないが、それぞれの側溝（ＳＤ2574・2575）で2時期の変遷(A→B)を確認している。

ＳＤ2574は、新しいB期が上端幅47～170㎝、底面幅20～135㎝である。底面はほぼ平坦で、深さは20㎝程残っているが、部分的に10～15㎝程の窪みがみられる。断面はU字形をなす。方向は心心でみると、北で約25度東に偏している。堆積土は3層に細分される。遺物は出土していない。

A期は上端幅の最も広いところで85㎝以上、底面幅20～40㎝で、底面は多少凹凸があるが、ほぼ平坦である。断面はU字形をなし、深さは36㎝以上あったと考えられる。
方向は心心でみると、北で約24度東に偏している。堆積土は1層であり、その中から陶錘が1点(第109図5)出土している。

ＳＤ2575は、B期が上端幅89～120㎝、底面幅15～70㎝で、底面はほぼ平坦である。
断面は緩やかなU字形をなし、深さは17㎝程残っていた。方向は心心でみると、北で約



No.	土色	土性	備考	No.	土色	土性	備考
SD2574 B 1	黒褐色(2.5Y3/2)	粘土質シルト	地山の土を粒状に多く含む。	SD2574 A	黒褐色(2.5Y3/1)	粘土	地山の土をブロック状に多く含む。
SD2574 B 2	黒褐色(2.5Y3/1)	粘土		SD2575 A 1	黒色(2.5Y2/1)	粘土	地山の土を粒状に若干含む。
SD2574 B 3	黒褐色(2.5Y3/2)	粘土質シルト	地山の土をブロック状に多く含む。	SD2575 A 2	黒色(2.5Y2/1)	粘土質シルト	地山の土を多く含む。
SD2575 B	灰色(5Y4/1)	粘土					

第110図 SX2652道路跡断面図

23度東に偏している。堆積土は1層であり、底面から馬の歯が数本出土している。

A期は、上端幅80～145㎝、底面幅45～85㎝で、底面はほぼ平坦である。断面は逆台形をなし、深さは25㎝程残っていた。方向は心心でみると、北で約26度東に偏している。堆積土は2層に細分され、その中から墨書を施された須恵器の坏の底部の破片(写真図版25-5)が出土している。

路幅は、A期・B期とも側溝の方向に開きがあるため概して北ほど広い。B期では、Ⅳ区北際で4.05m、Ⅲ区南際で2.69mである。A期ではⅢ区北際で4.17m、Ⅲ区南際で2.42mである。

⑤；土壙

土壙はⅢ区で55基、Ⅳ区で2基検出したが、この中で遺物が出土したり、他の遺構との切り合い関係などからある程度年代の把握が可能なものは、Ⅲ区の7基である。

ＳＫ2530(第97･111･112図)

Ⅲ区東端部の北寄りで検出した土壙である。ＳＩ2531、ＳＫ2614・2637と重複し、いずれよりも新しい。東西1.3m、南北0.8mのやや不整な隅丸方形をなし、底面には多少凹凸がみられる。深さは7～10㎝ほどしか残っていないが、断面形は浅い皿状をなす。堆積土は1層で、比較的残存の良いロクロ調整の土師器の坏7点(第113図1～7)と赤焼土器の坏1点(8)が上向きで折り重なるようにして出土してい（写真図版16上）。また、4の坏には墨書がみられる。

このような土器の出土状況から、これらの土器は一括して投棄されたものとみられる。

ＳＫ2502(第97･111･112図)

Ⅲ区北東隅で検出した土壙である。北半部は後世の撹乱のため完全に壊されている。ＳＤ2524と重複し、これより新しい。またＳＢ2630も重複しているが新旧関係は不明である。

平面形はほぼ楕円形をなし、長径は1.3m以上、短径は約1.0mである。深さは23㎝ほど残っており、断面は緩やかなU字形をなす。堆積土は3層に細分され、いずれも自然堆積とみられる。

遺物は1・2層から非ロクロ調整の土師器の破片が多量と須恵器の破片が数点出土している。この中で図示できるものとしては土師器の坏3点(第112図9･11・12)と須恵器の坏1点(10)がある。

ＳＫ2508(第97・111・112図)

Ⅲ区東端部の南寄りで検出した土壙である。ＳＫ2524と重複し、これよりも古い。

平面形は楕円形をなし、長径約1.7m、短径約1.1mである。深さは40㎝ほど残って

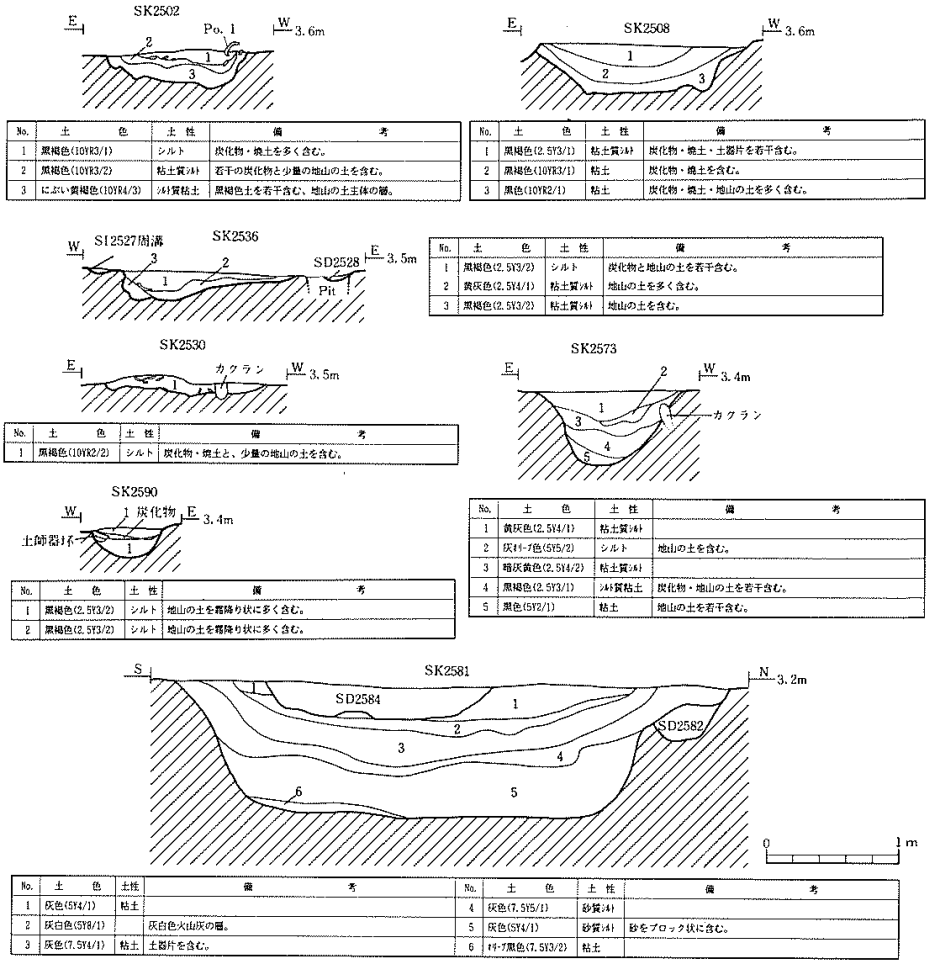
おり、断面は逆台形をなす。堆積土は3層に細分され、いずれも自然堆積である。

遺物は、多量の非ロクロ調整の土師器の破片と、少量の須恵器の破片が出土している。この中には1層から出土した漆の付着した土師器の坏1点（第112図13）がある。

ＳＫ2536(第97・111・112図)

Ⅲ区東端部の北寄りで検出した土壙である。ＳＢ2630、ＳＩ2527・2531と蟹重複し、ＢＳ2630、ＳＩ2527より古く、ＳＩ2531より新しい。

平面形はほぼ楕円形をなし、長径約1.5m、短径約1.3mである。深さは24cmほど残っており、断面は歪んだ深い皿状をなす。堆積上は3層に細分され、いずれも自然堆積である。



No.	土色	土性	備考
1	黒褐色(10YR3/1)	シルト	炭化物・焼土を多く含む。
2	黒褐色(10YR3/2)	粘土質ｼﾙﾄ	若干の炭化物と少量の地山の土を含む。
3	にぶい黄褐色(10YR4/3)	ｼﾙﾄ質粘土	黒褐色土を若干含む、地山の土主体の層。

No.	土色	土性	備考
1	黒褐色(2.5Y3/1)	粘土質ｼﾙﾄ	炭化物・焼土・土器片を若干含む。
2	黒褐色(10YR3/1)	粘土	炭化物・焼土を含む。
3	黒色(10YR2/1)	粘土	炭化物・焼土・地山の土を多く含む。

No.	土色	土性	備考
1	黒褐色(2.5Y3/2)	シルト	炭化物と地山の土を若干含む。
2	黄灰色(2.5Y4/1)	粘土質ｼﾙﾄ	地山の土を多く含む。
3	黒褐色(2.5Y3/2)	粘土質ｼﾙﾄ	地山の土を含む。

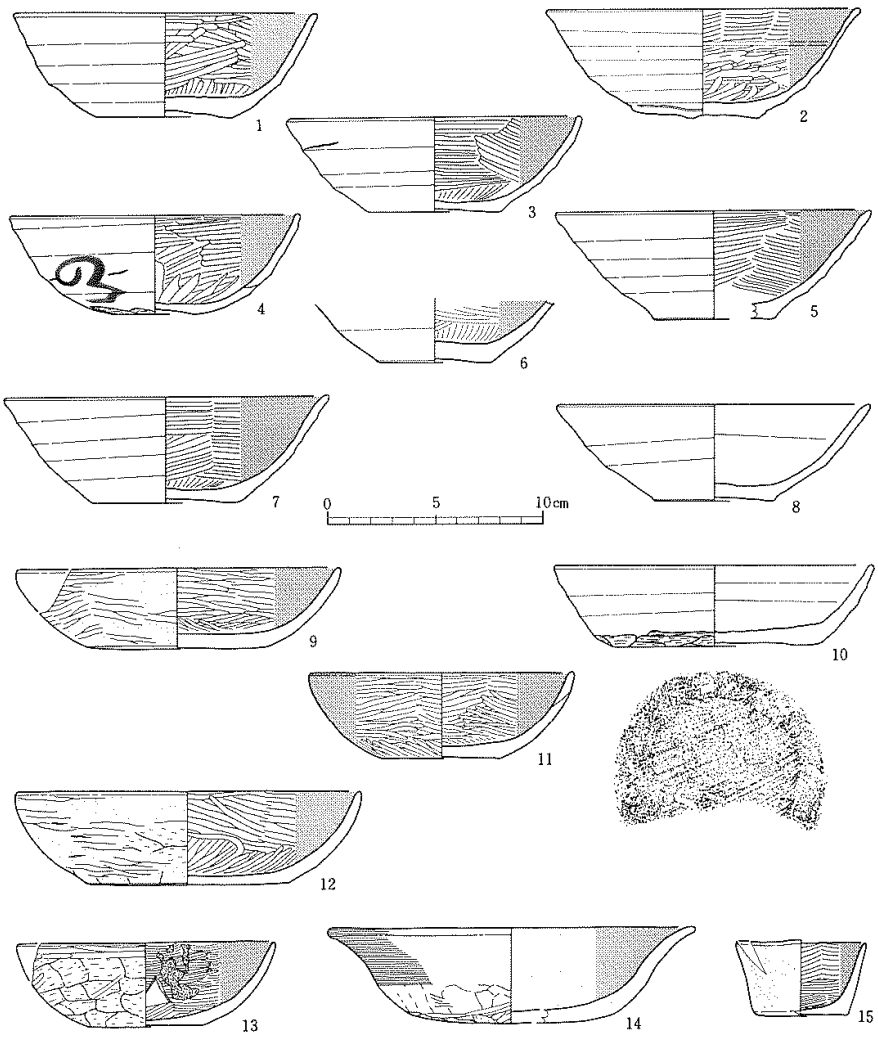
No.	土色	土性	備考
1	黒褐色(10YR2/2)	シルト	炭化物・焼土と、少量の地山の土を含む。

No.	土色	土性	備考
1	黒褐色(2.5Y3/2)	シルト	地山の土を霧降り状に多く含む。
2	黒褐色(2.5Y3/2)	シルト	地山の土を霧降り状に多く含む。

No.	土色	土性	備考
1	黄灰色(2.5Y4/1)	粘土質ｼﾙﾄ	
2	灰オリーブ色(5Y5/2)	シルト	地山の土を含む。
3	暗灰黄色(2.5Y4/2)	粘土質ｼﾙﾄ	
4	黒褐色(2.5Y3/1)	ｼﾙﾄ質粘土	炭化物・地山の土を若干含む。
5	黒色(5Y2/1)	粘土	地山の土を若干含む。

No.	土色	土性	備考	No.	土色	土性	備考
1	灰色(5Y4/1)	粘土		4	灰色(7.5Y5/1)	砂質ｼﾙﾄ	
2	灰白色(5Y8/1)		灰白色火山灰の層。	5	灰色(5Y4/1)	砂質ｼﾙﾄ	砂をブロック状に含む。
3	灰色(7.5Y4/1)	粘土	土器片を含む。	6	オリーブ黒色(7.5Y3/2)	粘土	

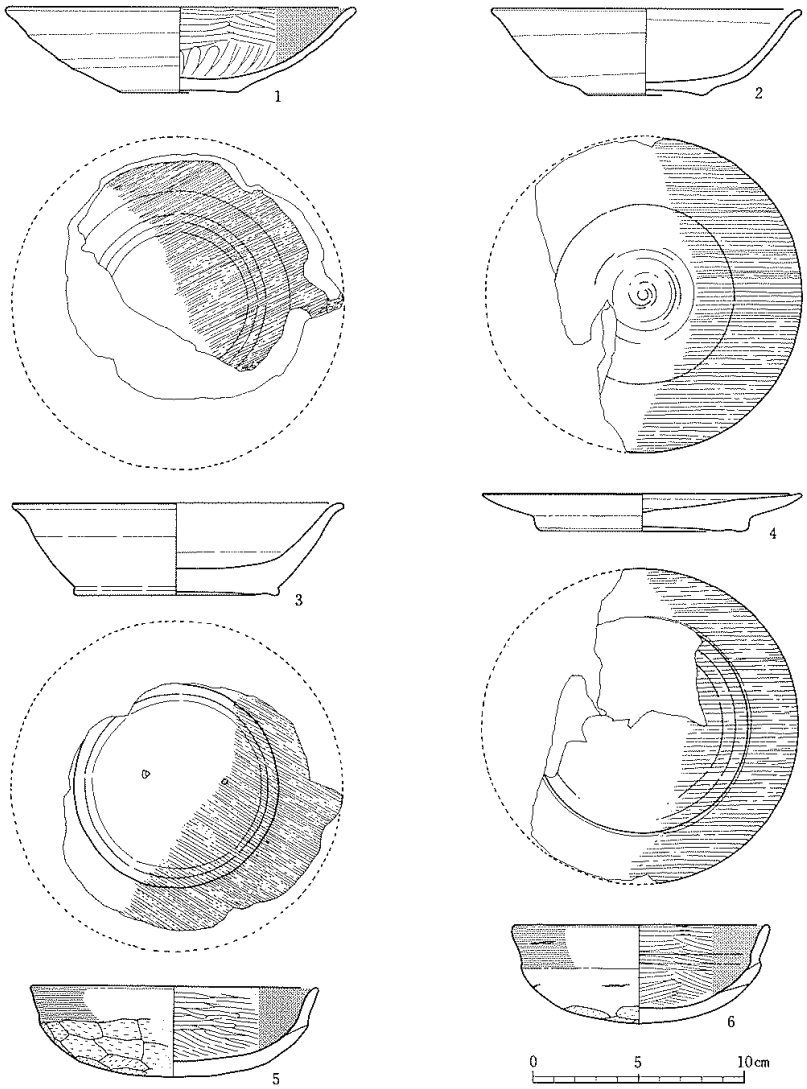
第111図　Ⅲ区土壙断面図



（単位：cm）

No.	種　類	出土遺構・層位	特　徴	口　径	底　径	器　高	残存率	分　類	写真図版
1	土師器・坏	ＳＫ2530・堆積土	外面：ロクロナデ　底面：回転糸切り　内面：ヘラミガキ→黒色処理	14.2	6.4	4.9	3/5		
2	土師器・坏	ＳＫ2530・堆積土	外面：ロクロナデ　底面：回転糸切り（離し）　内面：ヘラミガキ→黒色処理	14.6	5.6	5.3	4/5		22-8
3	土師器・坏	ＳＫ2530・堆積土	外面：ロクロナデ　底面：回転糸切り　内面：ヘラミガキ→黒色処理	13.8	6.0	4.5	ほぼ完形		22-7
4	土師器・坏	ＳＫ2530・堆積土	外面：ロクロナデ→手持ちヘラケズリ→墨書「□」　底面：回転糸切り　内面：ヘラミガキ→黒色処理	(13.6)	4.0	4.7	1/2		22-9
5	土師器・坏	ＳＫ2530・堆積土	外面：ロクロナデ　底面：ナデ　内面：ヘラミガキ→黒色処理	(14.6)	(5.6)	5.1	1/5		
6	土師器・坏	ＳＫ2530・堆積土	外面：ロクロナデ　底面：回転糸切り　内面：ヘラミガキ→黒色処理	－	5.2	－	1/3		
7	土師器・坏	ＳＫ2530・堆積土	外面：ロクロナデ　底面：回転糸切り　内面：ヘラミガキ→黒色処理	(15.2)	6.8	5.0	1/3		
8	赤焼土器・坏	ＳＫ2530・堆積土	内外面：ロクロナデ　底面：回転糸切り	(14.6)	5.6	4.5	1/3		
9	土師器・坏	ＳＫ2502・2層	外面：ヘラミガキ　底面：ケズリ→ミガキ　内面：ヘラミガキ→黒色処理	(15.0)	8.4	3.7	1/3		
10	須恵器・坏	ＳＫ2502・1層	外面：ロクロナデ→手持ちヘラケズリ　底面：静止糸切り→手持ちヘラケズリ　内面：ロクロナデ	15.0	9.7	3.8	1/2		22-6
11	土師器・坏	ＳＫ2502・2層	外面：ヨコナデ、ケズリ→ミガキ→黒色処理　内面：ミガキ→黒色処理	(12.2)	5.6	4.0	2/5		
12	土師器・坏	ＳＫ2502・1層	外面：ヨコナデ、ケズリ→ヘラミガキ　内面：ヘラミガキ→黒色処理	(16.0)	(9.4)	4.4	1/4		
13	土師器・坏	ＳＫ2508・1層	外面：ヘラケズリ→ヘラミガキ　内面：ヘラミガキ→黒色処理→煤付着	(12.2)	－	3.9	2/5		
14	土師器・坏	ＳＫ2536・1層	外面：ヨコナデ　ヘラケズリ→ヘラミガキ　内面：ヘラミガキ→黒色処理	(17.2)	－	4.5	1/4		
15	土師器・坏	ＳＫ2573・5層	外面：ロクロナデ　摩滅　底面：回転糸切り　内面：ヘラミガキ→黒色処理	6.1	4.5	4.5	4/5		22-10

第112図　ＳＫ2502・2508・2530・2536・2573土壙出土遺物



（単位：cm）

No.	種　類	出土遺構・層位	特　徴	口　径	底　径	器　高	残存率	分　類	写真図版
1	土師器・坏	ＳＫ2581・1～3層	外面：ロクロナデ　底面：回転糸切り　内面：ヘラミガキ→黒色処理	(16.4)	5.6	(4.0)	2/5		19-8
2	赤焼土器・坏	ＳＫ2581・1～3層	内外面：ロクロナデ　底面：回転糸切り	15.0	5.6	4.1	4/5		22-11
3	捩物・高台椀	ＳＫ2581・3・4層	柾目　口縁部外反　高台：三角形　ロクロの爪痕：2ヶ所　高台径：9.8cm	(15.6)	－	4.4	2/5		29-5
4	捩物・高台皿	ＳＫ2581・5・6層	柾目　口縁部内湾気味に外傾　高台径：10.2cm	15.0	－	1.8	3/4		29-6
5	土師器・坏	ＳＫ2590・堆積土	外面：ヨコナデ→ヘラケズリ　内面：ヘラミガキ→黒色処理	(13.0)	－	4.3	3/5		
6	土師器・坏	ＳＫ2590・堆積土	外面：ヨコナデ　ナデ→ヘラケズリ　内面：ヘラミガキ→黒色処理	11.9	－	4.7	4/5		22-12

第113図　ＳＫ2581・2590土壙出土遺物

遺物は１層から非ロクロ調整で内黒の土師器の坏１点（第 112 図 14）の他、非ロクロ調整の土師器の破片が若干出土しており、この中には内黒で体部外面に段を持つ坏もみられる。

ＳＸ2573(第111・112・113図)

Ⅲ区西端部の南寄りで検出した土壙で、南半部は調査区外である。

平面形は楕円形をなすとみられ、長径2m以上、短径約1.2mである。深さは55㎝ほど残っており、断面は緩やかなU字形をなす。堆積土は5層に細分され、いずれも自然堆積である。

遺物は非ロクロ調整の土師器の坏(第112図15)などが数点出土している。

ＳＫ2581(第111・113・114図)

Ⅲ区西端部で検出した土壙である。ＳＫ2589、ＳＤ2582･2583･2584と重複し、ＳＤ2584より古く、それ以外のものよりは新しい。

平面形は不整な隅丸方形をなし、長辺約6.8m、短辺約4.3mである。深さは1mほど残っており、断面は上端が開く逆台形をなす。堆積土は自然堆積で6層に細分でき、この中の2層は灰白色火山灰層である。

遺物は、比較的多量のロクロ調整の土師器と若干の赤焼土器、および平瓦の破片が1点出土している。この中で図示できるものとしては、1～3層から出土したロクロ調整の土師器の坏1点(第114図1)、赤焼土器の坏1点(2)、3･4層から出土した木製の挽物の高台椀1点(3)、5・6層から出土した木製の挽物の高台皿1点(4)がある。

ＳＫ2590(第99図･第112図･第115図)

Ⅲ区東端部の北寄りで検出した土壙であるＳＩ2531、ＳＫ2501と重複し、ＳＫ2501より古く、ＳＩ2531より新しい。また、ＳＢ2630とも重複しているが、新旧関係は不明である。

平面形はほぼ円形をなし、径約60㎝である。深さは22㎝ほど残っており、断面は緩やかなU字形をなす。堆積土は1層だが中間に炭化物の薄い層がみられる。

遺物は非ロクロ調整の土師器の坏2点(第114図5･6)などが少量出土している。

⑥；溝跡

溝跡はⅢ・Ⅳ区で66条検出しているが、この中で他の遺構との重複関係や出土遺物から時代をある程度特定できるものは以下の9条である。

ＳＤ2525(第96･115.116図)

Ⅲ区東半部で検出した東西方向の溝である。遺存状況は西側ほどよく、東端は後世の削平のため途切れている。ＳＤ2615･2524と重複し、いずれよりも新しい。

上端幅78～140㎝、底面幅16～61㎝で、底面はほぼ平坦である。深さは最も残りのよ

い部分で25㎝ほどであり、断面は浅い皿状をなす。堆積土は1層で自然堆積である。溝の方向は、心心でみると東で約36度北に偏している。

遺物は多量の非ロクロ調整の土師器と数点の須恵器の他、鉄滓2点が出土している。この中で図示できるものとしては、非ロクロ調整の土師器の坏3点（第116図1～3）、高坏1点（4）、甕2点(5・6)がある。

ＳＤ2534(第96･115･118図)

Ⅳ区東端部際からⅢ区東半部北壁際の基本層序第2層上面で検出した「L」字状の溝で、北と東はさらに調査区外に続く。ＳＸ2651、ＳＤ2623と重複し、そのいずれよりも新しい。

上端幅93～154㎝、底面幅52～84㎝で、底面には若干の凹凸がみられる。断面はほぼ逆台形をなし、深さは20～40㎝残っていた。堆積土は3層に細分され、いずれも自然堆積である。溝の方向は心心でみると、Ⅲ区直線部分が東で約5度北に偏し、Ⅳ区にかかる部分が北で約11度西に偏している。

遺物は多量のロクロ調整と非ロクロ調整の土師器と少量の須恵器、数点の瓦と赤焼土器の他、円面硯2点、土製カマド1点(第118図8)が出土している。須恵器の中は福島県大戸窯産のものがみられる。

ＳＤ2539(第96・115・116図)

Ⅲ区東半部中央で検出した南北方向の溝で、南側はさらに調査区外に続く。ＳＡ2547、ＳＫ2548、ＳＤ2627・2634・2635と重複し、ＳＫ2548より古いが、それ以外のものよりは新しい。また北側は、ＳＸ2651道路跡付近で途切れており、その上に基本層序の第2層が堆積している。

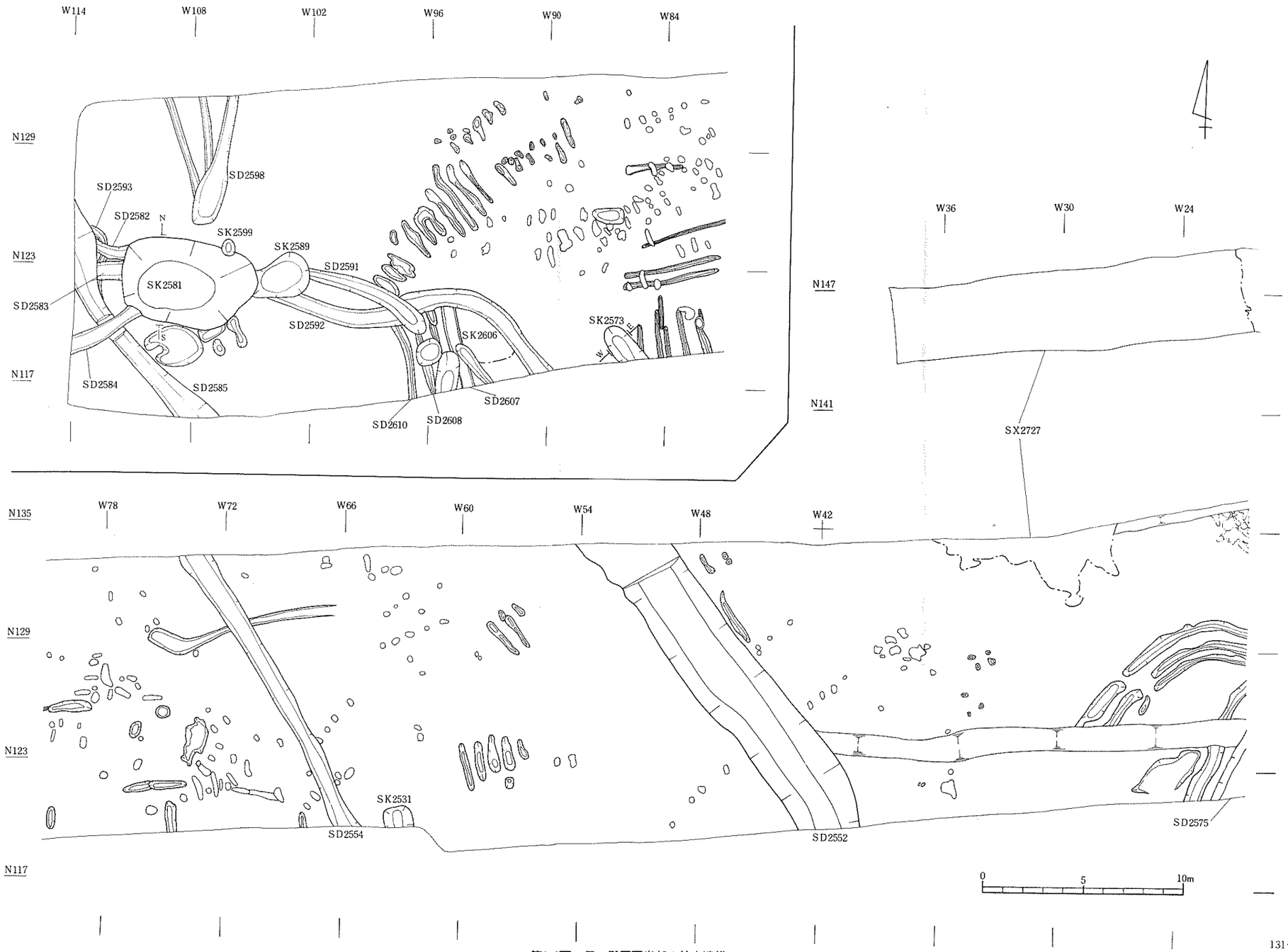
上端幅42～78㎝、底面幅16～21㎝で、底面はほぼ平坦である。断面はU字形をなし、深さは25～40㎝残っていた。堆積土は1層で、自然堆積である。溝の方向は、N130付近の撹乱の南北で異なり、撹乱より南で検出した部分は心心でみると北で約9度東に偏している。撹乱より北で検出した部分は北で約28度東に偏している。

遺物は多量の非ロクロ調整の土師器と少量の須恵器が出土しており、この中で図示できるものには須恵器の坏(第116図9)がある。

ＳＤ2634(第96・115・118図)

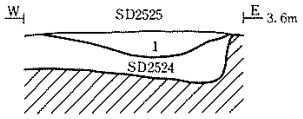
Ⅲ区東半部で検出した西側に張り出しながら緩やかな弧を描いて南北方向に続く溝で、南北両側ともさらに調査区外へ続く。ＳＡ2521・2547、ＳＸ2548、ＳＸ2651道路跡・ＳＤ2539と重複し、ＳＡ2547より新しいが、それ以外のものより古い。また、ＳＸ2651道路跡付近に堆積している基本層序の第2ａ層よりも古い。

上端幅は最も広いところで82㎝以上、底面幅18～50㎝で、底面はほぼ平坦である。

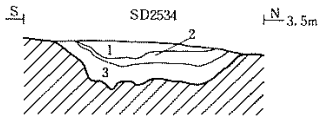


131・132

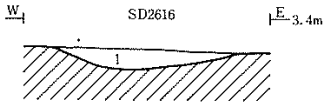
第114図　Ⅲ・Ⅳ区西半部の検出遺構



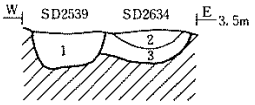
No.	土　色	土性	備　考
1	褐灰色(7.5Y4/1)	粘土	若干の炭化物・地山の土と、多量の土器片を含む。



No.	土　色	土　性	備　考
1	黒褐色(10YR3/1)	粘土質シルト	
2	黒色(10YR2/1)	粘土	
3	黒褐色(10YR3/1)	粘土	

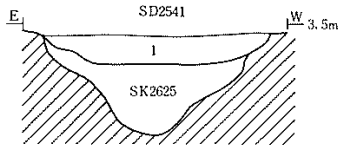


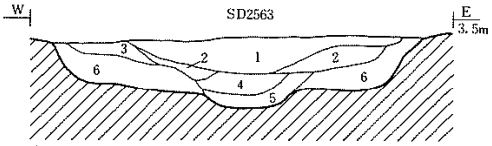
No.	土　色	土　性	備　考
1	黒褐色(10YR3/1)	粘土質シルト	地山の土を多く含む。



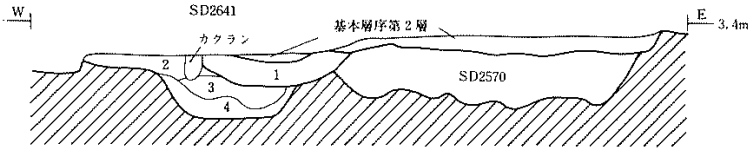
No.	土　色	土性	備　考
1	黄灰色(2.5Y4/1)	粘土	〈SD2539堆積土〉地山の土を粒状又は帯状に多く含む。
2	黒褐色(10YR3/1)	粘土	〈SD2634堆積土〉炭化物を多く含む。
3	褐灰色(10YR4/1)	粘土	〈SD2634堆積土〉炭化物・地山の土を多く含む。

No.	土　色	土性	備　考
1	褐灰色(10YR4/1)	粘土	

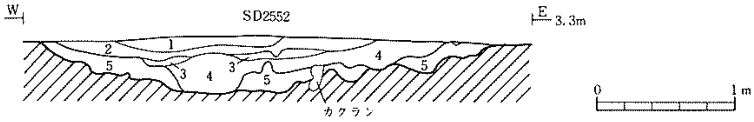




No.	土　色	土　性	備　考
1	黒褐色(10YR2/2)	シルト	炭化物を微量含む。
2	褐灰色(10YR4/1)	粘土質シルト	
3	黄灰色(2.5Y5/1)	粘土質シルト	
4	黒褐色(10YR3/1)	粘土	
5	褐灰色(10YR4/1)	粘土	地山の土をブロック状に少量含む。
6	黄灰色(2.5Y4/1)	粘土	地山の土を帯状に多く含む。



No.	土　色	土　性	備　考	No.	土　色	土　性	備　考
1	灰黄色(2.5Y6/2)	砂質シルト	〈B期堆積土〉	3	褐灰色(10YR5/1)	シルト質粘土	〈A期堆積土〉地山の土を多く含む。
2	黄灰色(2.5Y5/1)	粘土質シルト	〈A期堆積土〉	4	褐灰色(10YR5/1)	シルト質粘土	〈A期堆積土〉地山の土を帯状に含む。



No.	土　色	土　性	備　考	No.	土　色	土　性	備　考
1	褐灰色(5Y4/1)	シルト質粘土		4	灰黄褐色(10YR4/2)	シルト質粘土	(7.5Y6/2)灰黄色砂質土を含む。
2	黒褐色(10YR3/1)	シルト質粘土	(7.5Y6/2)灰黄色砂質土を含む。	5	褐灰色(10YR5/1)	シルト質粘土	地山の土を含む。
3	褐灰色(10YR4/2)	シルト質粘土					

第115図　Ⅲ・Ⅳ区溝断面図

断面は緩やかなU字形をなし、深さは25～34㎝残っていた。堆積土は2層に細分され、自然堆積である。

遺物は多量の非ロクロ調整の土師器の破片と管状土製品が1点(第118図7)出土している。

ＳＤ2541（第96・1I5・116図）

III区東半部で検出した南北方向の溝で、南側はさらに調査区外へ続く。ＳＡ2547・ＳＫ2625・ＳＤ2636と重複し、いずれよりも新しい。また、ＳＸ2651道路跡付近に堆積している基本層序の第2層よりも古い。

上端幅104～170㎝、底面幅67～126㎝で、底面はほぼ平坦である。断面は幅の広いU字形をなし、深さは10～20㎝残っていた。堆積土は1層で、自然堆積である。溝の方向は心心でみると、北で約14度西に偏している。

遺物は堆積土中から少量の非ロクロ調整の土師器、ミニチュア土器1点(第116図8)、平瓦1点が出土している。

ＳＤ2552（第113・115図）

III区西半部で検出した南北方向の溝で・南北両側はさらに調査区外へ続く。

上端幅3.2～3.5m、底面幅1.2～1.9mで、底面は多少の凹凸があるがほぼ平坦である。壁の立ち上がりは緩やかで、深さは48㎝程残っていた。堆積土は5層に分けられ、いずれも自然堆積である。中央の4層の深まりは、5層堆積後の通水によるものとみられる。溝の方向は、心心でみると、北で約39度西に偏している。

遺物は非ロクロ調整の土師器の破片が1点出土しただけである。

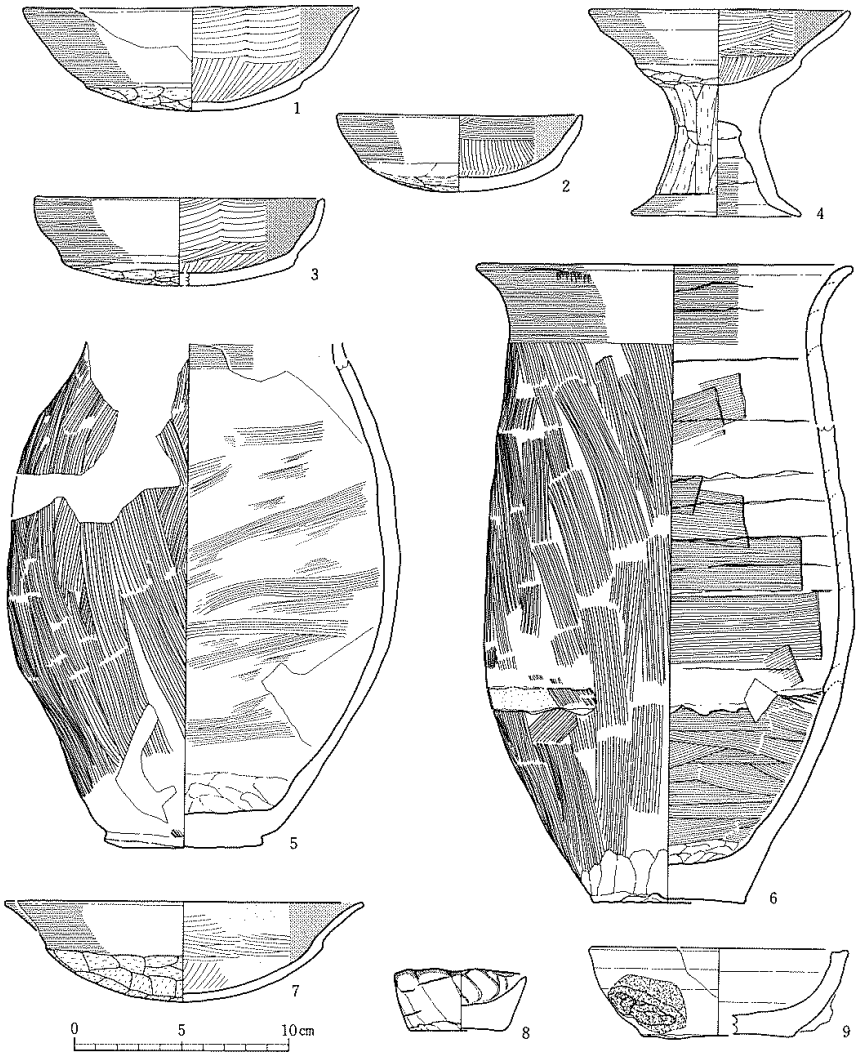
なお、水溝は位置・方向が合うことと断面形が類似することから、本調査区の南の仙塩道路建設関係八幡地区の調査(宮城県教育委員会・多賀城市教育委員会:1990)で検出されている古墳時代後期から奈良時代にかけての溝跡ＳＤ180の北延長と考えられる。

ＳＤ2563(第96・115・117・118図)

IV区東端部からIII区東半部で検出した南北方向の溝で、南北面側はさらに調査区外へ続く。ＳＸ2651道路跡と重複し、これよりも古い。

上端幅2.7～3.5m、底面幅2.0～2.7mで、深さは30～45㎝残っている。底面は中央部がさらに幅34～56㎝で10～20㎝ほど掘り込まれている。堆積土は6層に別れ、すべて自然堆積である。溝の方向は心心でみると、北で約25度西に偏している。

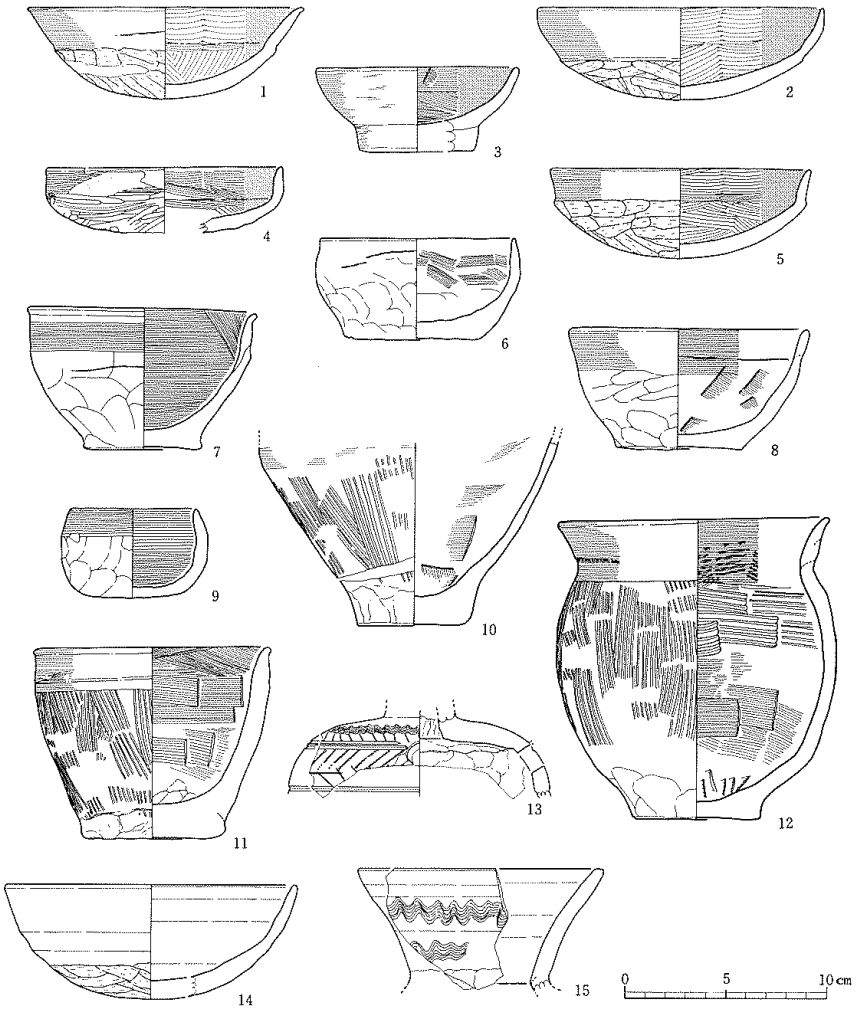
遺物は、2層および2層上面と1層から多量の非ロクロ調整の土師器、須恵器が出土しており、土師器には坏・鉢・甕・の他ミニチュア土器が、また須恵器には坏・甕・　平瓦などがある。この中で図示できるものとしては、2層上面出土の土師器の坏（第117図3



（単位：cm）

No.	種　類	出土遺構・層位	特　　徴	口　径	底　径	器　高	残存率	分　類	写真図版
1	土師器・坏	ＳＤ2525・堆積土	外面：ヨコナデ→ヘラケズリ　内面：ヘラケズリ→黒色処理	15.7	－	4.9	3/4		22-14
2	土師器・坏	ＳＤ2525・堆積土	外面：ヨコナデ、ヘラケズリ→ナデ　内面：ヘラケズリ→黒色処理	11.3	－	3.6	ほぼ完形		22-13
3	土師器・坏	ＳＤ2525・堆積土	外面：ヨコナデ　ナデ→ヘラケズリ　内面：ヘラケズリ→黒色処理	(13.6)	－	4.1	1/5		
4	土師器・高坏	ＳＤ2525・堆積土	坏部外面：ヨコナデ　ナデ→ヘラケズリ　坏部内面：ヘラミガキ→黒色処理　脚部外面：ヘラケズリ→ヨコナデ	(12.2)	－	9.7	1/2		
5	土師器・甕	ＳＤ2525・堆積土	外面：ハケメ　ナデ　底部：木葉痕　内面：ヘラナデ　ナデ	－	7.4	－	3/5		
6	土師器・甕	ＳＤ2525・堆積土	外面：ハケメ→ヨコナデ、ナデ　内面：ナデ→ヘラナデ→ヨコナデ	17.6	7.1	29.9	ほぼ完形		23-1
7	土師器・坏	ＳＤ2616・堆積土	外面：ヨコナデ→ヘラケズリ　内面：ヘラケズリ→黒色処理	(16.8)	－	4.7	2/5		
8	土製模造品	ＳＤ2541・堆積土	外面：指ナデ→ナデ　内面：指ナデ	6.3	4.3	2.9	ほぼ完形		23-8
9	須恵器・坏	ＳＤ2539・堆積土	焼台の転用品　内外面：ロクロナデ　底面：？→ナデ	(12.0)	(7.0)	4.1	一部		

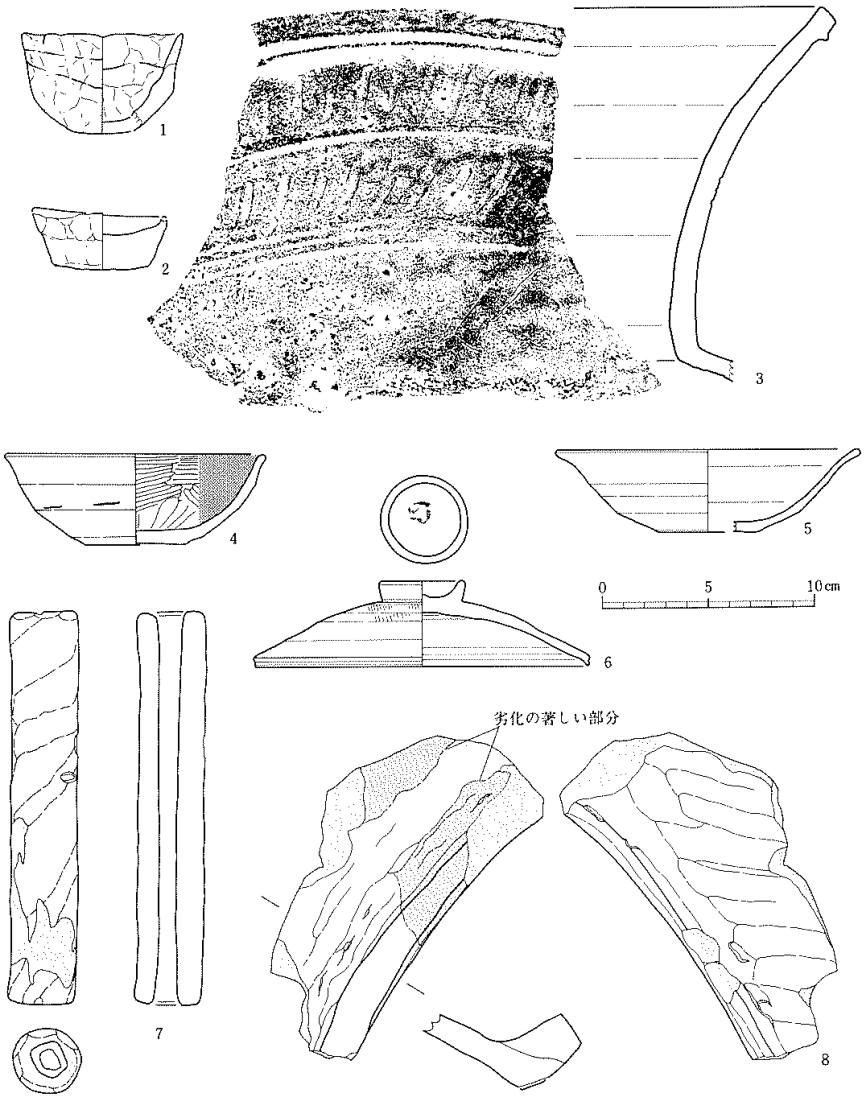
第116図　ＳＤ2525・2539・2541・2616溝出土遺物



（単位：cm）

No.	種　類	層　位	特　徴	口　径	底　径	器　高	残存率	分　類	写真図版
1	土師器・坏	1　層	外面：ヨコナデ、ナデ→ヘラケズリ　内面：ヘラミガキ→黒色処理	(13.8)	－	4.6	2/5		
2	土師器・坏	1　層	外面：ヨコナデ→ヘラケズリ　内面：ヘラミガキ→黒色処理	14.2	－	4.5	4/5		23-7
3	土師器・小形坏	2層上面	外面：ヨコナデ　内面：ヘラナデ→ヨコナデ	(10.0)	(5.7)	4.2	1/4		
4	土師器・坏	2層上面	外面：ハケメ→ヨコナデ→ミガキ　内面：ヘラミガキ→黒色処理	(11.6)	－	－	1/4		
5	土師器・坏	2層上面	外面：ヨコナデ→ヘラケズリ　内面：ヘラミガキ→黒色処理	(13.0)	－	4.5	3/5		
6	土師器・坏	2層上面	内外面：ナデ　底面：木葉痕	9.6	6.0	5.1	4/5		23-6
7	土師器・鉢	2層上面	外面：ナデ→ヨコナデ　内面：ヘラナデ→ヨコナデ	11.2	5.4	7.1	3/4		23-3
8	土師器・鉢	6　層	外面：ナデ→ヨコナデ　底面：木葉痕　内面：ヘラナデ→ヨコナデ	(13.0)	6.3	6.1	1/2		
9	土製模造品	2　層	外面：ナデ→ヨコナデ　底面：木葉痕→ナデ　内面：ヘラナデ→ヨコナデ	6.2	(4.5)	4.5	1/2		24-1
10	土師器・甕	6　層	外面：ハケメ→ナデ　底面：ナデ　内面：ヘラナデ	－	5.3	－	一　部		
11	土師器・甕	2　層	外面：ハケメ→ヨコナデ、ナデ　内面：ヘラナデ→ヨコナデ、ナデ	11.8	7.2	9.6	1/2		
12	土師器・甕	底　面	外面：ハケメ→ヨコナデ、ナデ　底面：ナデ　内面：ハケメ→ヨコナデ、ナデ	13.6	6.3	15.1	完　形		23-4
13	須恵器・瓶	2層上面	外面：綾杉状櫛描列点文→平行沈線、櫛描波状文　内面：ナデ　シボリ目	－	－	－	一　部		
14	須恵器・坏	2層上面	九底　第54図2と同器形・同法量　外面：ロクロナデ→手持ちヘラケズリ　内面：ロクロナデ	(14.6)	－	(5.8)	1/4		
15	須恵器・平瓶	2層上面	外面：ロクロナデ→櫛描波状文　内面：ロクロナデ	(12.2)	－	－	一　部		

第117図　ＳＤ2563溝出土遺物



（単位：cm）

No.	種　類	出土遺構・層位	特　徴	口　径	底　径	器　高	残存率	分　類	写真図版
1	土製模造品	ＳＤ2563・５層	内外面：ナデ	(7.6)	－	(4.8)	1/4		
2	土製模造品	ＳＤ2563・底面	内外面：ナデ	(6.4)	(4.6)	(2.8)	4/5		23-5
3	須恵器・甕	ＳＤ2563・１層	外面：ロクロナデ→平行沈線→波状文　内面：ロクロナデ	(39.5)	－	－	一　部		
4	土師器・坏	ＳＤ2641Ｂ	外面：ロクロナデ　底面：回転糸切り　内面：ヘラミガキ→黒色処理	(14.2)	(7.8)	3.7	1/2		21-11
5	赤焼土器・坏	ＳＤ2641Ｂ	内外面：ロクロナデ（内面のロクロ目が不明瞭）　底面：回転糸切り	(14.7)	8.2	3.6	3/5		
6	須恵器・蓋	ＳＤ2641Ｂ	外面：ロクロナデ→回転ヘラケズリ→ロクロナデ　つまみ内部：墨書「日」	(15.8)	(8.8)	4.0	1/4		25-6
7	管状土製品	ＳＤ2634・堆積土	外面：ナデ（斜位）　長さ：18.7cm　幅：3.4cm　孔径：1.0cm						27-4
8	土製カマド	ＳＤ2534・堆積土	縁に隆帯　再加熱を受け、両面とも劣化　本体両面：ナデ　隆帯部：ヘラケズリ→ナデ						27-5

第118図　ＳＤ2534・2563・2634・2641溝出土遺物

～6)・鉢(7)と須恵器の坏（14）・ 瑯（13）・平瓦(15)・2層出土の土師器の甕(11)、ミニチュア土器(9)、5層出土のミニチュア土器(第118図1)、6層出土の土師器の鉢(第117図8)・甕(10)、底面出土の土師器の甕(12)・ミニチュア土器（第119図2）がある。

ＳＤ2616(第9・115・115図)

Ⅲ区東半部の、ＳＸ2651遠路跡の積み土の下から検出した東西方向の溝である。

上端幅は最も広い部分で128㎝、底面幅58～70㎝で、底面は平坦である。深さは残りの良い部分で約20㎝である。断面は浅い皿状をなす。堆積土は1層で、自然堆積である。溝の方向は心心でみると、東で約20度北に偏している。

遺物は比較的多量の非ロクロ調整の土師器の破片と須恵器の破片が1点出土しており、この中の土師器には内黒で体部外面に段を有する坏(第116図7)がみられる。

ＳＤ2641(第105・106・115・118図)

Ⅳ区中央部からⅢ区中央部にかけて検出した南北方向の溝である。N131付近一度東へ屈折している。ＳＸ2650道路跡、ＳＤ2579と重複し、いずれよりも新しい。また、基本層序の第2ａ層に覆われる。

2時期(Ａ→Ｂ)の変遷がみられ、新しいＳＤ2641Ｂは上端幅が最も広い部分で110㎝、底面幅8～64㎝で、底面は平坦である。断面は緩やかなU字形をなし、深さは10～25㎝ほど残っている。堆積土は1層で、自然堆積である。溝の方向は心心でみると、N131以南の部分が北で約4度東へ、N131～I35の部分が北で約21度東へ、N135以北の部分が約3度東へ偏している。

遺物は比較的多量のロクロ調整の土師器と少量の須恵器および赤焼土器が出土しており、この中で図示できるものとしては土師器の坏(第118図4)、赤焼土器の(5)、墨書のみられる須恵器の蓋1点(6)がある。

ＳＤ2641Ａは、上端幅が最も広い部分で140㎝、底面幅22～54㎝で、底面は平坦である。断面は上端が開くU字形をなす。深さは15～50㎝ほど残っている。堆積土は3層に細分でき、いずれも自然堆積である。溝の方向は心心でみると、N130以南が北で約2度東へ、N130～135が北で約12度東へ、N135以北が約3度東へ偏している。

遺物は非ロクロ調整とロクロ調整の土師器が少量と、須恵器・赤焼土器・瓦の破片がそれぞれ数点出土している。

⑦；その他の遺構

その他の遺構としては、ウマ検出遺構、水田跡などがある。

ＳＸ2565ウマ検出遺構

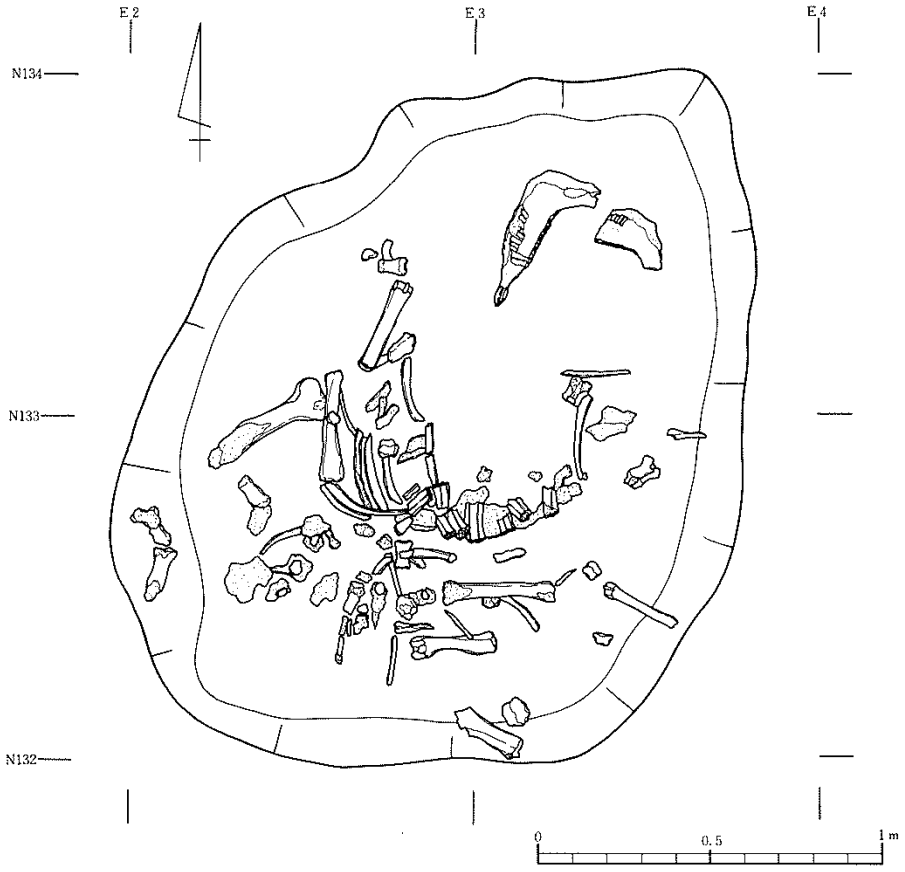
Ⅲ区中央部やや東寄りの、ＳＸ2651東西道路跡とＳＸ2650南北道路跡の交差点の北西側で検出した土壙状の浅いくぼみから、ウマ一個体分の骨がまとまって出土している。基本層序の第2層に覆われる。

土壙状のくぼみは、長径約2.0m、短径約1.8m、深さ約10cmの不整円形をなし、堆積土は1層で自然堆積とみられ、人為的に埋められたような痕跡は認められなかった。

ウマは雌の個体とみられ、削平により左半身の大半を失っているが、おおよそ南東向きに横たわる状態で検出された。下顎骨は外れて、上顎骨と離れた位置関係にあるものの、頭骨の方向や頸椎の位置からみて、首は弧を描くように後方に曲げられ、頭は脊柱位の上に乗るようなかたちをとっていたものとみられる。前・後肢は各関節部で強く曲げられており・それぞれ前後に突き出すような状態にあったと推測される。

部位	計測値	
上腕骨R	遠位端幅	71.7mm
中手骨R	最大長	244.4mm
	遠位端幅	42.2mm
大腿骨R	遠位端幅	80.4mm
中足骨R	最大長	249.6mm
	近位端幅	42.7mm
	近位端径	38.8mm
	遠位端幅	48.8mm

第２表　ウマ計測表



第119図　ＳＸ2565ウマ検出遺構

各部位骨の計測値は第2表に示したとおりで、これらの計測値から推定される体高は120～130㎝あり、この期としては平均的な小型ないし中型馬に属する大きさのものである(西中川他；1991)。なお、各部位骨の保存状況が悪いため、解体痕等の痕後については確認することができなかった。

ＳＸ2727水田跡、畝状遺構

Ⅳ区中央部以西およびⅢ区西半部にかけて検出した水田跡である。

珪畔は確認できず全体の規模を捉えられないが、下層の土を激しく巻き上げている水田の耕作土を確認している。水田耕作土は最も深いところで40㎝ほど残っており、灰白色火山灰は認められない。遺物は、土師器と須恵器の小破片が数点出土したのみである。

その他、Ⅳ区中央部西寄りとⅢ区の中央部以西で、いわゆる畝状遺構といわれる小溝群を検出している。これらの溝は長さが0.4～4mとまちまちであるが、幅は40～50㎝ほどである。底面はかなり凹凸がみられ、深さは残りの良いものが40㎝ほどで、壁は比較的急角度で立ち上がる。方向は、およそ北で西に偏する南北方向のもの(Ａ)と、東で南へ偏する東西方向のもの（Ｂ）にまとめられる。

堆積土は、Ａが灰白色火山灰を含む黄灰色粘土質シルト、Ｂがオリーブ黒色粘土である。

遺物はＡの小溝群から土師器・須恵器・赤焼土器・瓦の破片が、またＢの小溝群から土師器・須恵器の破片がそれぞれ少量出土している。

Ⅳ.考察

今回の調査では、本地区で新たに弥生時代・古墳時代前期の遺物包含層を本地区で新たに検出した以外に、古墳時代後期から中世にわたる以遺構・遺物を発見している。検出した主な遺構には、竪穴住居跡37軒、掘立柱建物跡30棟、井戸4基、道路跡4条、区画施設7条、河川跡などがあり、この他には多数の土壙、溝、ピットも検出している。

遺物はこれらの遺構を中心に、弥生時代の土器、石器、古墳時代の土器・石器・石製品・木製品・骨角器、奈良・平安時代の土器・瓦・木製品、漆紙、中世の銭貨などが出土しており、この中では古墳時代から平安時代にかけての土器の出土量が最も多い。

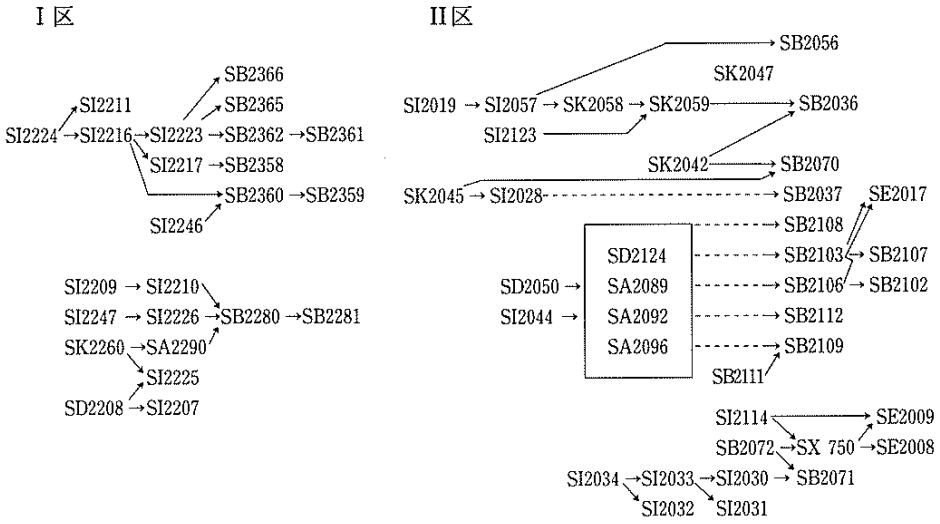
以下では、最初に重複関係と年代の検討から今回の調査で検出した遺構の変遷を捉え、これとこれまでの調査成果との比較検討を通して本遺跡八幡地区全体における遺構期の設定と遺構期ごとの概要をまとめることにする。そして最後に注目される遺構・遺物について検討することにしたい。

なお、今回の調査で検出した遺構は全体的に遺存状況が悪く、遺物も出土量は多いが個々の遺構でまとまって出土しているものは少ない。このためここでは土器の全体的な分類は行わず、遺構出土の土器についてはこれまでの土器研究の成果に基づいて個別的に記述することにする。

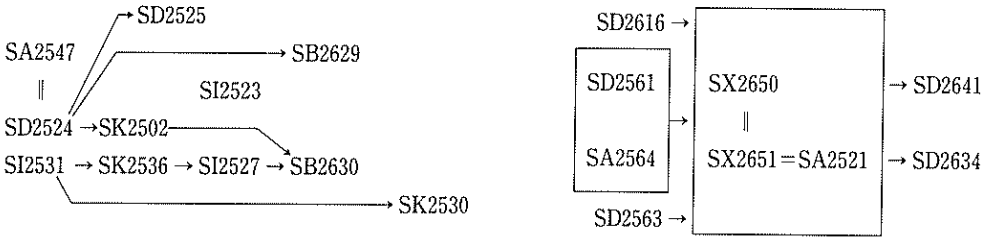
1、遺構期の設定と概要

(1)、重複関係

遺構の重複関係を地区ごとに整理すると次のようになる。



III区



以上の重複関係からは次のことが把握できる。

ａ、掘立柱建物跡と竪穴住居跡が重複する場合にはいずれも建物跡が新しいことから、全体として竪穴住居跡→掘立柱建物跡といった変遷が読み取れる。

B、掘立柱建物跡と区画施設ＳＤ2124とＳＡ2089・2092・2096が重複する場合は、いずれも建物跡が新しい。

C、遺跡跡と掘立柱建物跡では重複するのがＳＢ2071だけであり、ＳＢ2071は道路跡より古い。

D、区画施設ＳＤ2561とＳＡ2564、区画溝ＳＤ2563は道路跡より古い。

E、竪穴住居跡と道路跡が重複する場合は、類例は少ないが道路跡が新しい。

(2)、各遺構の年代

次に各遺構のなかで出土遺物から年代・時期の把握が可能なものについて検討する。

Ａ竪穴住住居跡

竪穴住居跡は、1区で16軒、II区で16軒、III区で5軒検出しているが、遺物から年代が検討できるものは以下の10軒である。

ＳＩ2246

1区で検出した竪穴住居跡である。遺物は、床面を直接覆う第5層の上面から非ロクロ調整の土師器の坏・甕・台付甕と須恵器の坏がまとまって出土している。第5層は、住居の廃絶後さほど隔たらない時期に堆積したとみられることから、これらの土器の年代は概ね住居の廃絶時を示しているとみられる。

土師器には坏と甕があり、坏はいずれも外面の口縁部と体部の境に段あるいは屈曲がみられ、口縁部には外反するもの、内湾するもの、直線的なものがある。甕では外面の頚部と体部の境に段を有するものが多く、体部外面はハケ目調整が主体をしめている。このような特徴を持つ土師器の坏･甕は、これまでの土器研究の成果によれば、古墳時代後期の栗囲式(氏家：1957)の土器の範疇に含まれるとみられる。

須恵器の坏は器壁が厚く、作りが粗雑である。底部には丸底とやや丸底気味の平底のものがみられ、体部から口縁部までは内湾して立ち上がり、口縁端部が断ち切られるように

終わっている。このような特徴を持つ類例は、福島県善光寺遺跡出土の須恵器の坏の中に求められる。

善光寺遺跡では8基の窯跡から出土した須恵器を層位関係にもとずいて4型式に分類しており、この中の善光寺1型式にみられる坏Ｂが本住居跡出土の須恵器の坏と類似した特徴を持っている。また、1型式と較べて小型化し偏平な1型式の系統を引くとみられる坏Ｂが3型式にも存在しているが、これは本住居跡出土の坏とは特徴が異なっている。

善光寺1型式の年代については、近畿地方の各編年案との検討により7世紀前半でも古い段階、また3型式は650～670年代とされている（福島:1988）。したがって本住居跡の時期は、廃絶が650～670年代より古い7世紀前半の古い段階以降と捉えられることから、7世紀前半頃と考えられる。

ＳＩ2211・2216・2247

Ｉ区で検出した住居跡である。ＳＩ2211では床面と貯蔵穴から、ＳＩ2216では掘り方埋土から、ＳＩ2247では床面からそれぞれ非ロクロ調整の土師器の坏が出土している。大きさや器高に違いはみられるが、いずれも外面の体部と口縁部の境が強く屈曲して段をなし、口縁部が外反するといった共通する特徴を有している。このような特徴を持つものは、仙台市栗遺跡(工藤：1982)や名取市清水遺跡(丹羽：1981)出土の栗囲式期の土師器の坏にみられる。

この他にＩ・Ⅱ区で検出したＳＩ2225・2034・2044から、それぞれ非ロクロ調整の土師器の坏･甕、高坏、甕が出土している。これらの土器の特徴はいずれも栗遺跡出土の栗囲式期の土器の範疇で捉えることができる。したがって、ＳＩ2225･2034･2044も粟囲式期の竪穴住居跡と考えられる。

ＳＩ2210・2049

ＳＩ2210はI区で検出した住居跡で、床面から非ロクロ調整の土師器の坏と甑が出土している。坏は丸底で浅く、外面の口縁部と体部の境が軽く屈曲して沈線状になり、口縁部が内湾気味に立ち上がるものである。またＳＩ2049はⅡ区で検出した住居跡で、貯蔵穴から非ロクロ調整の坏が2点出土している。坏は丸底で、屈曲することなく内湾気味に立ち上がるものである。

このような特徴を持つ土師器の坏は、これまでの調査で発見されているＳD180Ｂ溝出土器(千葉･石本：1991)の中に類例がみられる。そしてＳD180Ｂ溝出土土器の年代は、土器の出土した層から年代が740～749年と763年と考えられる漆紙文書が出出していることから、740年前後から760年代を中心とした8世紀中頃とみられる(千葉：1992)。

また、ＳＩ2210出土の坏の類例は、多賀城跡第53･54次調査で検出しているＳＩ1791住

居跡出土土器の中にみられ、ＳＩ1791住居跡の年代は、8世紀前葉頃に位置付けられている(丹羽:1989)。以上からＳＩ2210･2049住居跡の年代は、8世紀前葉頃から8世紀中頃のものと考えられる。

ＳＩ2226

1区で検出した焼失住居跡である。遺物は床面から非ロクロ調整の土師器の鉢の他に須恵器の坏などが、また堆積層からは非ロクロ調整の土師器の坏が出土している。須恵器の坏は小破片であるが、底部切り離し技法がヘラ切りでナデ調整のものであり、年代は8世紀後半頃のものとみられる。

また、堆積土出土の土師器の坏は丸底で内湾しながら口縁部まで立ち上がるもので、外面に沈線が巡り、内面がナデ調整のものである。このような器形で外面に沈線のみられる坏の類例は、ＳＤ180Ｂ溝出土の土器群の中や志波姫町糠塚遺跡第16号住居跡出土の土器(小井川･手塚:1978)にみられる。しかしＳＤ180Ｂ溝出土の坏は、内面の調整がいずれもミガキ調整の内黒のものであるのに対して、本住居跡出土の坏がナデ調整で黒色処理されていないといった違いがある。

ところで、内面の調整がナデ調整の土師器の坏は、県内では7世紀後半から8世紀前半にかけて志波姫町御駒堂遺跡(小井川・小川：1982)や仙台市郡山遺跡の南西外郭大溝出土土器(木村他：1981)、名取市清水遺跡第Ⅴ群土器(丹羽他：1981)などでみられる関東地方の土師器と共通した特徴をもっているが、これまで本住居跡出土のような器形で珍線の巡るものはみられない。したがってこの土師器の坏の年代の正確な位置付けは現在のところできないが、ここでは類似する器形のみられるＳＤ180溝出土土器およびの糠塚遺跡第16号住居跡出土の土器から、8世紀中頃を中心とした奈良時代と捉えておくことにする。

以上より竪穴住居跡では、7世紀代の栗囲式期のもの(ＳＩ2034・2044・2211･2216･2225･2246･2247)、8世紀前葉から8世紀中頃を中心とした時期のもの(ＳＩ2210･2049)、8世紀中頃を中心とした奈良時代のもの(ＳＩ2226)がみられる。

Ｂ.掘立柱建物跡

掘主柱建物跡は、Ⅰ区で13棟、Ⅱ区で14棟、Ⅲ区で3棟の会計30棟検出している。いずれの建物跡でも出土した遺物から確実に年代を特定できるものはない。

Ｃ.区画施設

Ⅰ区で可能性のあるものも含めて材木塀2条と一本柱列の塀跡1条、区画溝3条、Ⅱ区で溝と材木塀の区画施設1条、Ⅲ区で溝と材木塀区画施設2条、区画溝2条、材木塀1条を検出している。この中で年代･時期がある程度把握できるものは次のものである。

ＳＤ2563

Ⅲ区・Ⅳ区で検出した区画溝で、非ロクロ調整の土師器の坏･鉢･甕などと須恵器の坏･甕･ 平瓶が出土している。この中の土師器は、坏や甕の特徴から粟囲式の土器とみられる。年代については、出土した須恵器の坏(本来的には蓋とされているが、ここでは蓋とした場合の坏がないことから一応坏とした)の特徴が、陶邑窯跡編年のＴＫ-209～217型式（田辺：1970）にみられるものに類似することから、概ね7世紀前半頃と考えられる。

ＳＤ2524・ＳＡ2547

Ⅲ区で検出した区画溝と材木塀である。ＳＤ2524から非ロクロ調整の土師器が出土しており、それらの特徴は、栗囲式の土器の範疇に含まれるとみられる。

この他、Ⅰ区ではＳＤ2208を検出しており、時期は粟囲式期とみられるＳＩ2225住居跡より古いことから、古墳時代後期以前の区画溝と考えられる。　ＳＡ2089･2092･2096塀跡とＳＤ2124溝

Ⅱ区で検出したＳＡ2089･2092･2096塀跡とＳＤ2124溝は一連の区画施設であり、遺物はＳＤ2124溝から土師器と須恵器などが多量に出土している。土師器では非ロクロ調整のものとロクロ調整のものがあり、前者が主体を占める。非ロクロ調整の土師器には坏･椀･甕があり、この中の坏では平底で浅く、口縁部まで内湾しながら立ち上がるものが主体を占める。ロクロ調整のものには坏･椀があり、坏は底部が大きく浅いものが多い。このようにロクロ調整と非ロクロ調整の土師器が共伴する土器群については、多賀城跡出土の土器変遷の中のＢ群土器に相当し、年代は8世紀後半頃と考えられている(白鳥:1980)。したがって、ＳＤ2124溝は8世紀後半頃を中心した時期のものと考えられる。

ＳＤ2220・2230

Ⅰ区で検出した区画溝で全形を検出していないが、ともに方形に巡る区画溝と考えられる。ＳＤ2220からは永楽通寶が、ＳＤ2230からは元祐通寶、元豊通寶、皇宋通寶が出土していることから、ＳＤ2220は15世紀以降、ＳＤ2230は11世紀以降で、近世の遺物が出土していないことから、いずれも近世の武家屋敷跡の周囲を巡る区画溝と考えられる。

以上区画施設には、年代･時期の特定できたものとして古墳時代後期の区画施設であるＳＤ2524とＳＡ2521、ＳＤ2563区画溝、8世紀後半頃で道路建設以前の区画施設であるＳＤ2124とＳＡ2089・2092・2096、中世の武家屋敷跡の周囲を巡る区画溝とみられるＳＤ2220・2230がある。

Ｄ.道路跡

Ⅱ区でＳＸ750南北道路跡、Ⅲ・Ⅳ区でＳＸ2650南北道路跡、Ⅲ区でＳＸ2651東西道路跡およびその交差点、さらにⅢ・Ⅳ区西半部でＳＸ2652南北道路跡を検出している。

ＳＸ750は、遺存状況が極めて悪いが、側溝で2時期の重複が認められる。新しい時期の側溝からロクロ調整の土師器、須恵器、赤焼土器の他、灰釉陶器の碗が出土している。出土した土器は、土師器・須恵器の特徴と赤焼土器では坏だけがみられることから、多賀城跡出土の土器変遷の中のＥ群土器に相当するとみられ、Ｅ群土器の年代は、灰白色火山灰(註1)と多賀城政庁跡の遺構変遷の検討から10世紀前半以降と想定されている。(白鳥:1980・1982)。したがってＳＸ750の廃絶年代は、10世紀前半以降と捉えられる。

ＳＸ2650・2651では、5時期の重複がみられる側溝の新しい方から2番目（Ｄ期）の堆積層に灰白色火山灰が認められることから、灰白色火山灰の降下した10世紀前半頃前後に道路が機能していたことがわかる。廃絶時期については正確に特定できないが、灰白色火山灰の降下以降に側溝が一度改修されていることからみれば、10世紀前半からさほど隔たらない10世紀中頃と考えて大きな間違いは無いとみられる。

ＳＸ2562は、灰白色火山灰層である基本層序の第2ｂ層に覆われている。したがってＳＸ2562は、10世紀前半頃以前に機能しており、10世紀前半頃には廃絶した道路である。

以上から道路跡の年代については、9世紀代から10世紀前半頃を中心に機能していたと考えられる。

Ｅ.井戸

ＳＥ2017では、掘り方埋土から土師器・須恵器他に赤焼土器の坏が、また廃絶時の抜取り穴からは土師器・須恵器の他に少量の赤焼土器の坏、灰釉燭器と緑釉陶器の碗がそれぞれ出土している。また、抜取り穴の堆積層には灰白色火山灰の小ブロックが多くみられる。以上よりＳＥ2017の廃絶年代は10世紀前半頃をさほど下らない時期と推定される。

ＳＥ2043では、井戸の機能時の堆積層から少量のロクロ調整の土師器が、廃絶時の抜取り穴からは土師器・須恵器の他に少量の赤焼土器の坏、灰釉陶器の碗、平瓦がそれぞれ出土している。また抜取り穴の堆積層には灰白色火山灰小ブロックがみられる。

県内ではロクロ調整の土師器は8世紀中頃に出現し(宮城県教育委員会:1987)、多賀城跡では非ロクロ調整の土師器が消滅しロクロ調整の土師器で占められるＣ群土器の年代が9紀前半頃を中心とした時期と考えられている(白鳥：1980)。

抜取り穴から出土した平瓦は、多賀城跡の平瓦の分類ではⅡＣ類にあたり、多賀城政庁遺構時期では869年以降の第Ⅳ期の瓦群にみられるものであり、土器は多賀城出土の土器変遷の中のＥ群時に相当するとみられる。以上のことからＳＥ2043は、構築年代が9世紀代で、廃絶が10世紀前半頃をさほど下らない時期と考えられる。

ＳＥ2008・2009は、ともにＳＸ750道路路面を壊して構築されていることから、その構築年代は、ＳＸ750道路の廃絶した10世紀前半以降と考えられる。

Ｆ.土壙

ＳＫ2042・2045・2240・2260

出土した土師器の坏の特徴から栗囲式期の土壙とみられる。

ＳＫ2038・2214・2502

出土した土師器の坏などの特徴が本地区のこれまでの調査で検出されていＳＤ180Ｂ溝出土土器群(千葉・石本：1991)に類似していることから、年代が8世紀中頃と考えられる。

ＳＫ2213

ＳＫ2213からはロクロ調整の土師器の坏･甕、須恵器の坏が出土している。この中で土師器の坏には底部の切り離し技法が回転糸切りで無調整のものと切り離し技法が不明で手持ちヘラ削り調整のものがみられ、須恵器の坏は底部の切り離し技法が回転糸切りで無調整のものである。このような土器の特徴は、多賀城跡出土の土器変遷の中ではD群土器の特徴と共通しており、D群土器の年代は9世紀後半頃と考えられている（白鳥：1980）。

ＳＫ2530

出土した土師器の坏の特徴と赤焼土器では坏が出土し小皿が出土しておらず、土器の特徴が多賀城跡における土器変遷の中のＥ群土器に類似していることから、年代は10世紀前半頃を中心とした時期考えられる。

ＳＫ2212

ＳＫ2212からはロクロ調整の土師器、須恵器の他、漆紙文書が出土している。この中で漆紙文議は、記載内容から上限年代が815(弘仁6)年と考えられる。また堆積層の1層に灰白色火山灰粒が少量みられる。以上のことから土壙の年代は、10世紀前半以降と考えられる。

ＳＫ2010

出土している土師器と赤焼土器の坏の特徴が、10世紀中頃以降と考えられている多賀城跡第61次調査における鴻の池第7層出土土器群(柳沢:1992)にみられるものと共通していることから、年代は10世紀中頃以降と考えられる。

土壙には、栗囲式期のもの、8世紀中頃のもの、9世紀代のもの、10世紀代のものがみられる。

Ｇ.溝

ＳＤ2525

ＳＤ2525は、出土した土師器の坏・高坏・甕の特徴からは栗囲式期の溝と考えられる。

(3)、遺構の変遷

前述の重複関係と年代･時期の検討の結果に基づいて各遺構の変遷をまとめてみたい。出土遺物より年代･時期を特定できた遺構としては、古墳時代後期の栗囲式期の竪穴住居跡、8世紀前葉から前半頃を中心とした時期の竪穴住居跡、8世紀後半頃の区画施設、9世紀代から10世紀前半頃の道路跡･井戸、10世紀前半以降の井戸、中世の区画溝がある。

ところで、掘立柱建物跡については遺物から年代･時期を特定できなかったが、その方向をみると、A群：北で東へ偏するもの、B群：ほぼ真北方向のもの、C群:北で西へ偏するものに大別できる。また、A群とC群はさらに2つに細分され以下のようになる。

A群:北で東へ偏するもの

Ａ 1:5～10度偏するもの　ＳＢ2280・2359・2365・2102・2108・2107・2036・2356・2361・2362・2281

Ａ 2:26～38度偏するもの　ＳＢ2355・2354・2366

B群：ほぼ真北方向のもの　ＳＢ2603・2071・2358・2629・2072

C群:北で西へ偏するもの

Ｃ 1：4～7度偏するもの　B2103・2111・2360・2630

Ｃ 2：9～20度偏するもの　ＳＢ2106・2364・2056・2109・2037・2070・2112

この建物跡の方向による分類と重複関係をみると、C1群のＳＢ2111→C2群のＳＢ2109、C1群のＳＢ2103→A1群のＳＢ2107およびC1群のＳＢ2360→A1群のＳＢ2359、C2群のＳＢ2106→A1群のＳＢ2102となり、類例は少ないが建物跡ではC1群→C2群→A1群といった変遷が想定される。

これらC1･C2･A1群の建物跡では、C1群のＳＢ2103とC2群の2106が8世紀後半代の区画施設であるＳＤ2114とＳＡ2089・2092・2096と重複してこれらより新しく、10世紀前葉頃からさほど下らない時期に廃絶したと考えられるＳＥ2017･2043井戸より古い。したがってC1群とC2群の建物跡は、年代が8世紀後半以降で10世紀前葉頃とみられ、概ね道路の機能していた時期のものと捉えられる。

A1群の建物跡はC2群の建物跡より新しい。またＳＢ2108はやはり8世紀後半代の区画施設であるＳＤ2114とＳＡ2089・2092・2096と重複しこれより新しいことから、年代が8世紀後半以降としか捉えられないが、道路跡と重複するものがないことから道路存続期の建物跡の可能性が高い。

この他にA2群とB群の建物跡がある。B群の建物跡では、ＳＢ2071が栗囲式期のＳＩ2034より新しい。またＳＢ2072は、ＳＸ750道路跡と重複してこれより古い。このことから、B群の建物跡は古墳時代後期以降で道路建設以前のものとみられるが、ＳＢ2072より

新しいＳＢ2071も存在することから一部の建物跡は、道路が機能していた時期に含まれる可能性も考えられる。

Ａ2群の建物跡については、古墳時代後期以降としか捉えられない。

以上の掘立柱建物跡の他に、遺物からは年代を特定できないが、遺構のあり方からある程度年代を想定できるものとしてⅢ区で検出したＳＡ2521材木塀跡がある。ＳＡ2521は、ＳＸ2651東西道路跡南側溝の南側2mほどに位置してこれに平行していることから、時期が道路存続期である可能性が考えられる。

以上の重複関係と年代･時期より今回の調査で検出した遺構の変遷は次のようにまとめられる。

1：弥生時代の包含層
↓（基本層序の第5層の堆積）
2:古墳時代前期の包含層
↓(基本層序の第3層の堆積)
3：古墳時代後期（栗囲式期）　竪穴住居跡：ＳＩ2211・2216・2223・2246・2247・2225・2034・2044
区画施設：ＳＤ2524とＳＡ2521、ＳＤ2563
↓　土壙・溝：ＳＫ2042・2045・2240・2260、ＳＤ2525
4：道路建設以前の8世紀代　竪穴住居跡：ＳＩ2049･2226･2210
(奈良時代)　掘立柱建物跡：ＳＢ2072(Ｂ群)
↓　区画施設：ＳＤ2124とＳＡ2089･2092･2096
土壙：ＳＫ2038・2214・2502
5：遺跡機能時の平安時代　掘立柱建物跡：ＳＢ2036・2102・2107・2108・2280・2281・2359・2365・2356・2361・2362(Ａ1群)
ＳＢ2103・2111・2360・2630（Ｃ1群）、
ＳＢ2037・2956・2070・2106・2109・2112・2364(Ｃ2群)
井戸：ＳＥ2017・2043
土壙：ＳＫ2213・2530
↓(基本層序の第2ｃ層の堆積→灰白色火山灰の降下→基本層序の第2ａ層の堆積)
6：道路廃絶後　井 戸：ＳＥ2008・2009
↓　土 壌：ＳＫ2010・2212
7：中世　武家屋敷に伴う方形に巡る区画溝：ＳＤ2220・2230

（4）、これまでの調査成果

山王遺跡の本地区については、仙塩道路の「多賀城インター」建設に係わる発掘調査が昭和63年度以降、宮城県教委委員会と多賀城市埋蔵文化財センターによって実施されてきている（註2）。これらの調査では、竪穴住居跡・掘立柱建物跡・溝と材木塀の区画施設・井戸・素掘りの側溝を伴う道路跡・方形に巡る溝などの他、遺物包含層・湖川跡などが発見されており、時代は古墳時代、古代、中世の3時期に分けて捉えられている。

古墳時代は中期と後期に分けられ、中期では竪穴住居跡と遺物包含層、後期では多数の竪穴住居跡と溝・材木塀からなる区画施設、河川跡などが検出されている。

古代の平安時代には、本遺跡も含めた多賀城の南全面一帯に、城柵であり陸奥国府でもある多賀城を中心とした南北・東西道路による方格地割の存在が明らかになっている。そして古代の遺構は、道路建設を画期としてその以前と道路機能時、道路廃絶後に分けて捉えられている。道路跡の年代は、東西大路については8世紀後半に遡る可能性も指摘されているが

(菅原:1993)、その他のものは概ね9世紀から10世紀前半頃と考えられている。検出された主な遺構としては、道路建設以前には竪穴住居跡、掘立柱建物跡、井戸、ウマ集積遺構、溝と材木塀からなる区画施設など、道路機能時には多数の掘立柱建物跡、塀跡、区画溝、井戸、土器埋設遺構など、道路廃絶後には土壙などがある。

中世の遺構としては、16世紀頃とみられる武家屋敷を方形に区画する溝跡とその内部にみられる掘立柱建物跡、井戸、土壙が検出されている。年代は、土壙から出土した中国産の磁器から16世紀頃とみられる(赤澤:1990)。

この他、近世墓が発見されている。

(5)、遺構期の設定

今回の調査で把握した遺構の変遷とこれまでの本地区の調査成果における遺構変遷を比較して本地区全体における遺構期の設定と変遷をまとめてみたい。

まず最初に今回の調査で発見した遺構についてみると、以下の遺構がこれまでの調査で発見されている遺構と一連のものである。

ａ、III区で検出したＳD2552は、その位置関係や方向からこれまでの調査で検出されており、東側にＳA5226材木塀(註3)を伴うＳD180(佐藤・菅原:1991)と一連の区画溝と考えられる。年代については、古墳時代後期の栗囲式期以降に掘削され、8世紀の中頃を中心とした時期にほぼ埋没している(千葉:1992)ことから、8世紀前半頃を中心に機能していたものと考えられる。なお、ＳD2552で東側に材木塀が認められないのは、ＳA5226の遺存状況からみて後世に完全に削平されたためと思われる。このＳD180・ＳA5226は、直接接合部を検出していないが、昨年度調査した伏石地区の調査で検出している

東西方向の溝およびその内側に近接して溝と平行する材木塀と一連の区画施設と考えられている(柱4)。
ｂ、Ⅱ区で検出したＳＤ2124とＳＡ2089・2092・2096、Ⅲ区で検出しＳＤ2561とＳＡ2564は、これまでの調査で検出しているＳＤ461(佐藤・菅原:1991)と一連の区画施設で、本地区を方形に区画する区画溝とその内側に伴う材木塀である。
ｃ、ＳＸ750・2650・22651・2652道路跡は、これまでの調査で判明している多賀城周辺で発見されていた東西・南北道路跡と一連のものである。
以上の関係を考慮し、今回の調査およびこれまでの調査成果に基づくと本地区の遺構期の変遷は次のようにまとめられる。
〔Ⅰ期〕：弥生時代
今回の調査では、これまで本遺跡で検出されていない弥生時代中期の枡形囲式期と書古墳時代前期の包含層を新たに発見している。枡形囲式期の包含層はⅡ区を中心に比較的広範囲に認められ、遺物の密度が南側ほど濃くなることから、集落などの遺構の存在は調査区の南側に想定される。
〔Ⅱ期〕：古墳時代
Ａ：前期
包含層の一部を確認しているだけであるカが、今回の調査区周辺に集落などの存在が推定される。
Ｂ:中期
今回の調査では古墳時代中期の遺物は発見していないが、これまでの調査では古墳時代中期の南小泉式期の竪穴住居跡と西から東へ流れる河川跡の南岸に形成された遺物包含層が発見されている(佐藤・菅原：1991)。竪穴住居跡・河川跡から出土した土器は、南小泉式のなかでも古い段階に位置付けられている（吾妻・菅原：1994）。
河川跡は、今回の調査で検出した北から南へ流れるＳＤ2050Ａと西から東へ流れるＳＤ777(吾妻・菅原:1993)の2条を検出しており、調査区外の南東部で合流してさらに東へ続いている。そして竪穴住居跡が東西方向の河川跡の南側だけで発見されていることから、この時期の集落は調査区の位置する本地区の北側ではなく南側を中心に展開していることが明らかになった。
Ｃ:後期
今回の調査も含めたこれまでの調査で多数の竪穴住居跡、区画施設、区画溝、河川跡などを検出している。時期は、出土した土器から7世紀前半以降の栗囲式期のものである。竪穴住居跡は、東西方角のＳＤ100河川跡の北側で南北方向のＳＤ2050Ｂ河川跡の東西両

側の2箇所に分布しており、中期の南小泉式期の集落とは立地が全く異なっている。集落は竪穴住居跡にかなり重複するものがみられることから、長期間にわたって営まれていたことが知れる。また今回の調査では、新たに材木塀を伴う区画溝などを3条検出している。

〔III期〕:隣接する多賀城跡の創建前後以降の古代

発見した遺構は道路の建設以前の8世紀代と道路が機能していた9世紀から10世期前葉頃、道路廃絶後の3小期に分けられる。

A:道路建設以前の8世紀竪穴住居跡、掘立柱建物跡、井戸、区画施設の他ウマ集積遺構などがある。竪穴住居跡は、古墳時代後期に較べ極端に減少して全体的に散在する程度で、代わって掘立柱建物跡が多くみられる。

区画施設にはともに材木塀を伴う区画溝が2条ある。ＳD2552=ＳD180区画溝は東側に材木塀を伴い、8世紀前半頃を中心に機能していたと考えられる。また、ＳD2124とＳA2089・2092・2096=ＳD2561とＳA2564=ＳD461は、8世紀後半頃の本地区を方形に区画する溝とその内側に伴う材木塀である。したがってこの時期の区画施設にはＳD2552溝=ＳD180からＳD2124とＳA2089・2092・2096=ＳD2561・ＳA2561・ＳD461への変遷がみられる。

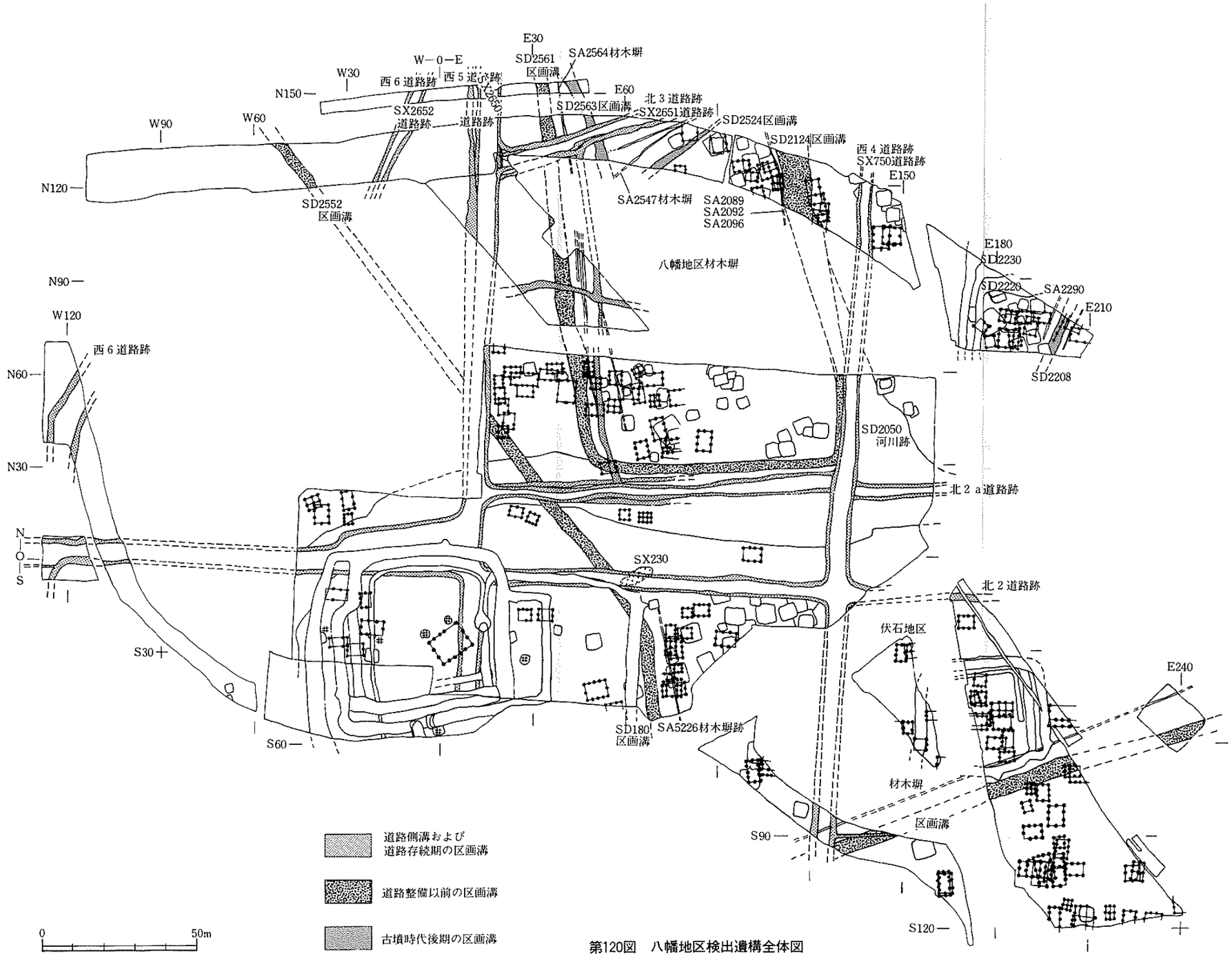
B：道路機能時の9世紀代から10世紀前半頃

主な遺構としては多数の掘立柱建物跡、塀跡、井戸、区画溝、土器埋設遺構などがある。

道路跡は、南北道路跡を9条、東西道路跡を6条を検出している(第1図)。これらの道路跡の中で、多賀城政庁南門と外郭南門の南延長線上に位置する南北通路跡が路幅約23m、また多賀城の外郭南辺と平行しこれから約550m南に位置する東西道路跡が路幅約12mとその他の道路跡に較べて路幅の規模が格段に大きいことから当時の重要な道路であったことが想定され、特にこの南北道路跡を南北大路、東西道路跡を東西大路としている。この他の道路跡の路幅は、南北道路が約4～8m、東西遺路が4～7mである。

道路跡の方向は南北道路がほぼ真北であり、東西道路は南1・2、北1道路が東西大路とほぼ同じ方向、北2・2a道路がほぼ南北道路と直交している。道路跡の間隔は、南北道路間で110～130m、東西道路の場合がほぼ平行する北1道路以南で100～120mとかなりバラツキがみられる。道路の機能していた年代は、平安時代の9世紀から10世紀前半頃と考えられる。

このように多賀城跡の南前面一帯では、東西約1.1km、南北約0.8kmの範囲に多賀城跡を中心として建設された南北・東西道路による地割りの存在が明らかになり、それぞれの地割り内の様子も次第に究明されてきている。例えば東西大路に面した地割りには国守



第120図　八幡地区検出遺構全体図

の館(相沢・石川:1991)や国司クラスの官人の館(宮城県教育委員会:1993)の存在が想定されている。一方東西大路から北側へ離れた本地区は、現在のところ竪穴住居跡は全く認められておらず、すべて小規模な建物跡で構成されており、出土遺物に漆紙(註5)や漆壷(石本・千葉:1991)などが出土していることから、漆を扱う作業がおこなわれた地区と考えられている。なお、東西大路の南側に離れた地割りにあたる多賀前地区C・D区は、小規模な建物跡や竪穴住居跡で構成されていることから本地区と同様に国府多賀城に関連した作業の行われた場所と考えられている。またその南側のE・F区では水田跡が検出されている。

この他、本地区では初めて道路によって区画される方格地割り内部のＳD2653区画溝を検出している。また塀跡は、出土遺物は出土していないが、その方向が道路跡にほぼ平行して道路に近接していることからこの時期の塀跡と考えられる。

Ｃ：道路廃絶後

遺構としては井戸、土壙などがあるが、その他のことについては不明である。

〔Ⅳ期〕:中世

遺構としては屋敷の周囲を方形に巡る溝、掘立柱建物跡、井戸、土壙を検出している。出土遺物が少ないため確実な年代の確定はできないが、溝から出土した中国の年代が15世紀、土壙から出土した磁器の年代が16世紀

(赤澤:1990)であることから、15から16世紀にかけての頃には、本地区に武家屋敷跡が存在していたと想定される。

なお、この他に遺存状況が悪く遺物がほとんど出土していない竪穴住居跡が27軒ある。これらの住居跡について方向をみると、ほぼ真北方向のものと東西に偏する2通りのものがみられる。年代・時期を検討した竪穴住居跡についてみると、方向が8世紀前葉頃とみられるＳＩ2210ではほぼ真北であるが、古墳時代後期の栗囲式期ものは一定せず西へ偏している。また、竪穴住居跡についてはこれまでの調査成果によれば、奈良時代のものはほぼ真北方向をとることが指摘されている(赤澤：1990)。このことからみれば、年代の特定が遺物からできなかった竪穴住居跡については、方向がほぼ真北のものは8世紀代のもの、東西に偏するものが栗囲式期のものである可能性が考えられる。

2、道路跡と地割り、区画施設、漆紙文書ついて

(1) 道路跡と地割りについて

今回の調査では、ＳX750・2650・2652南北道路跡、ＳX2651東西道路跡およびＳX2650南北道路跡とＳX2651東西道路跡の交差点を検出している。これらの道路跡が、本遺跡も含めた多賀城跡の南前面一帯を対象としたこれまでの調査で発見されている西4・西5・西6南北道路跡と、存在が想定されていた北3東西道路跡にそれぞれ対応することは**前途**

のとおりである(第1・120図)。そしてこれらの道路跡の年代は、9世紀代から10世紀前半頃を中心と考えられる。このなかのＳＸ2651(北3)東西道路跡は、方向が東で北へ16～17度偏している。これは他の東西道路跡が東で南へ約8度備するもの(北1・東西大路・南1・南2道路跡)とほぼ真東方向のもの（北2・北2ａ道路跡）であることからみれば、全く方向が異なっていることになる。またＳＸ2651は、ＳＸ2650(西5)南北道路跡と東からだけ接続するＴ字状の交差点をなしている。このことは他の東西道路跡と南北道路跡の交差点が、北2ａ東北道路跡とＳＸ2650(西5)南北道路跡の場合を除きすべて十字路であることからすれば、明らかに変則的なあり方をしている。

ところで、今回の調査区のすぐ北側には砂押川が西から東へ流れており、平安時時代にも現在とほぼ同じところを河川（旧砂押川）が流れていたと推定される。そしてこの砂押川の北側には中谷地地区が位置している(第1図)。中谷地地区でも発掘調査を実施しているが道路跡は発見されていない(註6)。したがって、道路跡は旧砂押川を越えては建設されておらず、本調査区一帯が道路の建設された地域、すなわち地割りの北縁部にあたり、東西道路跡ではＳＸ2651(北3)道路跡が最も北のものと考えられる。

一方、ＳＸ2652(西6)南北道路跡は、他の南北道路跡がすべてほぼ真北方向をとるのに対して、北2東西道路以北で方向が北で23～26度東へ偏している。そしてその方向を延長すると、本調査区の北側33mほどでＳＸ2650(西5)南北道路跡と西側から交差すると想定され、ここでは南北道路跡同士が交差するといった極めて特異なあり方をしていることになる。

また、ＳＸ2652(西6)道路跡の西側では、東西大路以北の南北道路跡としては西9道路跡が検出されている(相沢:1990)。しかし、本調査区の西延長線上で南北道路跡の存在が想定される地区を中心に試掘調査を実施しているが、そこでは南北道路跡は検出されていない（註7）。このことからＳＸ2552より西側の地域では、南北道路が北2東西道路跡より北には建設されていない可能性が高いと考えられる。そしてＳＸ2651(北3)東西道路跡がＳＸ2650(西5)南北道路跡より西側へ続かないことは前述したとおりである。したがって、方向が大きく偏するＳＸ2652(西6)南北道路は、北2東西道路跡以北では東側の地割りの施行された地域とそうでない西側との境界をなしている。

以上のように今回の調査では、地割りを形成する南北・東西道路跡の北縁部における実態を把握できた。すなわち、多賀城跡周辺の道路跡については、方向が他の道路跡と大きく異なるＳＸ2652(西6)南北道路跡とＳＸ2651(北3)東西道路跡を境として、それぞれの西と北には道路が建設されておらず、したがって地割りのあり方もここでは変則的な終わり方をしているが明らかになった。

なお、地割りは南北大路の西側を中心に発見されているが、北2東西道路跡が南北大路と交差しさらにその東まで続いていることから、南北大路以東にも地割りの存在が想定される。ただし、南北大路と北2道路の交差点では、北2道路は東西でほぼ道路1本分ずれている(千葉：1993・1994b)。

ところで、このような多賀城跡の南前面における発掘調査の進展は、地方官衙周辺の実態、すなわち地方都市の成立に関わるものとして全国的にも注目されている(註8)が発見された地割りについては、都城で想定されている条坊ように整然としたもの(井上：:1988、山中:1992)ではなく、全体が当初から不規則なあり方をしている。すなわち、ほぼ真北方向の南道路跡に対して、東西遺路には直交する北2・2a道路と東で南へ偏する東西大路・北1・南2・3道路跡といった2つの異なる方向のもの同時に存在しているため、地割りには方格になるものと平行四辺形・台形になる2つの異なるあり方が並存しているのである。

方向が東で南へ偏している東西大路については、方向が多賀城跡の外郭南辺とほぼ平行することから、これに合わせて建設された可能性も考えらている。しかし、東西大路は地割りの西の境である西9南北道路跡でとどまらず、その西側の新田遺跡寿福寺地区で方向を南へ変えてさらに続いている(千葉:1990)。このような状況から東西大路は、地割りの施行される以前の道路をほぼ利用して建設された可能性が高いとみられる。したがって、多賀城周辺の地割りが変則的なあり方をしているのは、東道路の施行に際して、東で南へ偏する古道を利用した東西大路と、南北道路にほぼ直交するといった2つの基準が存在していたことによると考えられる。そして、道路の施行に際しても基準になっていると考えられ、当時においても最も重要な道路である南北大路と東西大路が直交していないことからみれば、多賀城跡の南前面における地割りでは、南北道路と東西道路が直交しない場合の方が基本的なあり方であったと捉えることもできる。

このように多賀城跡の南前面一帯で発見されている地割りは、都城のように整然とした方格地割りの施行が大規模な造成を実施することで貫徹されたものではなく、古道を利用して東西大路が建設されているとみられるなど、自然の地形をあまり変えることなく施行された結果、全体が当初から不規則なあり方をしていると想定される。このことは、南北・東西道路を建設することで他と区別される一定の区域、すなわち地割りを成立させようとする意図は認められるが、その意図が最後まで遂行されていないことを意味している。したがって、今国の調査で検出したＳＸ2651・2652道路跡の変則的なあり方についても、地割り全体において規則的に道路を建設するといった意図が完遂されていないこと前提にあり、直接的にはすぐ北側を旧砂押川が流れているといった地形的に制約されたためと考

えられる。

なお、この北縁部の道路跡と地割りのあり方については、可能性としては地割りの縁辺部であることから、まだその存在は確認されていないが、条里のあり方とも関係している可能性も考えられる。しかし明らかに水田地帯と隣接する南縁部では、道路跡に変則的な状況は認められないことから、その可能性は低いとみられる。

以上のような多賀城跡周辺の地割りついては、一般の集落跡との出土遺物のあり方や遺構の構成の比較、祭祀遺物の検討などから、一般集落とは異なる都市的な空間として捉えられることが指摘されている（菅原：1993）。そしてこのような地方官衙周辺における地割りの成立やその実態の把握を積み重ねてゆくことで、地方都市の成立といった重要な問題が明らかになってゆくと考えられる。そのためには個々の地割内部の実態や国府多賀城跡との関係の把握などさらに究明しなければならない。また、多賀城跡と同様に道路跡や地割りの発見されている太宰府(狭川：1990)や下野国府周辺(木村:1993)といった他遺跡や都城の条坊のあり方もとの比較検討も必要と思われるが、今回は以上のようなことについては検討することができなかった。これらの問題については、他遺跡の成果を含めた今後の資料の蓄積をまってあらためて検討してゆくことにしたい。

(2)、区画施設について

区画施設はこれまでみてきたように、ⅡC期のＳD2524・ＳA2521とＳD2563、ⅢA期のＳD2552=ＳD180・ＳA5226とＳD2124・ＳA2089・2092・2096=ＳD2561・ＳA2564=ＳD461、ⅢB期のＳX2561・ⅢB期のＳX2651東西道路跡南側溝(ＳD2550)から南へ分岐する区画溝、Ⅳ期の中世の武家屋敷跡の周囲を巡る方形の区画溝がある。ここでは今回の調査で規模がある程度明らかになったⅢA期のＳD2552=ＳD180・ＳA5226とＳD2124・ＳA2089・2092・2096=ＳD2561・ＳA2564=ＳD461についてまとめておきたい。

ａ:ＳD2552=ＳD180・ＳA5226

これまでの調査では、途中で一度西側へ屈折しているが西辺(ＳD180)を約117m、南辺を約125m(佐藤(憲):1993)検出している。今回の調査でＳD2552を検出したことから、西辺がさらに北へ117m以上続くことが明らかになり、区画溝と材木塀からなる本区画施設は東西180m以上、南北300m以上の範囲を区画していることが明らかになった。区画溝は、出土遺物から古墳時代後期の栗囲式期以降で8世紀前半頃を中心に機能していたと考えられる。

ｂ：ＳD2124・ＳA2089・2092・2096=ＳD2561・ＳA2564=ＳD461

これまでの調査では南辺にあたるＳD461西辺南半部の一部だけを確認しているが、今回の調査で東西約92m、南北130m以上の範囲を溝とその内側の材木塀によって方形

に区画していることが判明した。年代は、溝の出土遺物から8世紀後半頃とみられる。

以上の2条の区画施設は、その関係を分布状況からは明確には捉えられないが、ＳＤ2552=ＳＤ180・ＳＡ5226が竪穴住居跡、掘立柱建物跡、井戸など、またＳＤ2124・ＳＡ2089・2092・2096=ＳＤ2561・ＳＡ2564=ＳＤ451が竪穴住居跡、掘立柱建物跡、井戸などをそれぞれ区画していたと考えられる。

以上のことは、これまでほとんど不明であった古墳時代の終末から道路跡の建設による地割りの施行される以前の奈良時代における多賀城周辺の様子を明らかにしてゆく上えで重要な調査成果と考えらる。

(3)、ＳＫ2212土壙出土の漆紙文書について

本漆紙文郭書は、1本の横の押界線を境にして上下に文字が記載されている。5行14文字が確認されており、釈文は第40図のとおりである。

語句の意味についてみると、1行目下段の「健士」は、弘仁6年（815）に陸奥国司の要請によって陸奥国司に新たに置かれた兵士の名称である。健士は勲位者から採用され、鎮守将軍の指揮下で胆沢城と玉造塞に配置された(註9)。

2～4行目下段の「兵士」は、陸奥国をはじめとして諸国に置かれた軍団兵士のことである。軍団兵士は、全国的に延暦11年(792)に廃止されたが、陸奥・出羽・佐渡及び大宰府管内の西海道諸国では辺要のため例外とされた。そして陸奥国では9～10世紀にかけて存続が確認される。

5行目上段の「口福継年□」は、「口福継」が人名で、「年口」が年齢の記載とみて間違いないと思われる。

本文書は、界線を境にしてその上下に記載がなされるという様式をとっており、1～4行目では界線の下に、4・5行目では界線の上に文字が認められた。上役に記載された文書の内容は、4行目では1文字分の墨痕が認められただけであるが、5行目には人名・年齢が記載されている。一方下段には界線に書き出しをそろえて「兵士」・「健士」が列記されており、上段と下段の記載内容は全く異なっている。

文字の認めらない1～3行目の上段と5行目の下段については、4行目で上段と下段に文字が認められることから、本来的には文字が存在し、上段には人名と年齢が、下段にはその人物の「兵士」・「健士」などの別が記載されていたと考えられる。すなわち本文書は上段に人名・年齢が、下段に「兵士」・「健士」などの別がそれぞれ列記された軍事関係の歴名簿とみられる。

ところで軍事関係の歴名簿については、養老軍防令に兵士歴名簿の規定がみえる。同令兵士以上条によると、兵士については配備先と貧富の程度を記歴名簿二通を作り、一

通は国に留め、一通は毎年朝集使に附して兵部省に送付すること、また国司が軍団の兵士を上番させたり、征討に発する時には国に留めた歴名簿をもとに差発することが定められている（註10）。これらの歴名簿の実例は今のところないが、中央に上進された歴名簿の存在は、天平6年出雲国計会帳(註11)に「兵士歴名簿四巻」がみえることや平城宮跡出土木簡(註12)から確認できる。

さて本漆紙文書は、前述のように軍事関係の歴名簿と考えられ、名前、年齢、兵士・健士の別などが記載されている。本文書と養老軍防令にみえる兵士歴名簿の記載内容とを比較してみると(註13)、令規定の歴名簿には年齢や兵士・健士の別といった記載は認められない(註14)。また、本文書の界線は押界であるが、令規定の兵士歴名簿は正式なものであるからたとえ国に留められた案であっても、界線は本文書のような押界とは考えにくい。したがって本文書は、令規定にみえる兵士歴名簿にあたる可能性は低いと考えられる。軍事関係の歴名簿については他に類例がほとんどなく(註15)、これ以上の比較検討ができない。そこで、あくまで本文書に依拠してその性格の考察をすすめる。

本文書の内容で注目されるのは「健士」の記載があることである。健士は前述したように胆沢城と玉造塞に配備され、鎮守将軍の指揮下に属した。これまでの史料で多賀城に配備された形跡はみいだせない。したがって「健士」の記載のみられる本文警が陸奥国府多賀城近辺の本遺跡から出土したことは注意すべきである。このことは健士が本来的には鎮守将軍の指揮下にあるとはいえ、国司とも没交渉ではなく何らかの関わりを持っていたことを示していると思われる。そもそも弘仁6年の健士の配置・配備は陸奥国司の要請により実施されたものである。また胆沢城出土漆紙文書18号では健士が同城に上番できない旨を国司指揮下の主帳(郡司か軍団の主帳か不明確だが共に国司の下におかれている)が届出ている。これらのことからすると、健士の徴発・上番には国司以下が関与していた可能性が強いと考えられる。このように健士と国司の関係をみた場合、本文書の性格としては兵士や健士を徴発するために使用された名簿の可能性が想定される。

この他にも本文書については、国司が作成する兵士歴名簿や健士歴名簿の草稿の一つ、胆沢城・玉造塞に上番している兵士・健士の名簿といった様々な段階の軍事関係の歴名簿の可能性が想定される。しかし本文書が断片であること、現段階はこれ以上本文書の性格を特定する明確な根拠は見いだし得ない。

なお、本文書の年代は、「健士」の記載から上限年代を815年（弘仁6年）に限定できる。下限年代については、土壙の堆積土にみられる灰白色火山灰粒の存在から、火山灰降下後の10世紀前学頃を中心とした時期と考えられる。

註1：灰白色火山灰の降灰年代については、『日本紀略』』にみられる陸奥国分寺の焼失記事より934年を下限年代として、当初は10世紀前半頃（白鳥：1980）とされていたが、最近は10世紀前葉頃(柳沢：1992)とされている。

2 :山王遺跡の発掘調査は1979(昭和54年)以来断続的に実施してきており、1988年からは仙道路路の仮称「多賀城インター」の建設に伴う発掘調査を多賀城市教育委員会と宮城県教育委員会が協力して継続して実施してきている。また1992年からは県道泉塩釜線の建設に伴う発掘調査も宮城県教育委員会が継続して実施してきている。

3 ：ＳＡ5226は多賀城市埋蔵文化財調査センターによる調査で検出された材木塀である（千葉：1992）。ＳＤ180（佐藤・菅原:1991）区画溝の東側約5mに位置してこれと平行して続くことからＳＤ180とＳＡ5226は一連の区画施設と考えられる。遺存状況は極めて悪く、調査区北端部でほとんど途切れている。

4 ：本地区の伏石を対象とした昨年度の発掘調査は、宮城県教育委員会と多賀城市埋蔵文化財調査センターによって2地点で実施しており、両地点で東西方向の瀧とその北側でこれと平行して続く材木塀を検出している。溝の規模はＳＤ180と類似し、また材木塀を伴うことから、直接接続部分を検出してい在いが、両溝・材木塀は一連の区画施設と考えられる（佐藤（憲）：1993）。なお、伏石地区の発掘調査の報告は、来年度以降に行う予定である。

5 :本地区からは以下の漆紙文書が出土している。
山王遺跡第12次調査（多賀城市理蔵文化財センター：1992）で2点、1992年度の山王遺跡第17次調査（多賀城市埋蔵文化財センター：未報告）で5点、山王遺跡第4次調査（宮城県教育委員会：1992）で1点出土している。

6 :中谷地地区の発掘調査は、1992年11月と1992年11月と1993年3・4月に実施しており、南端部で平安時代の溝1条とそれ以北で平安時代の水田跡を検出しただけである。報告は山王遺跡八幡地区における仙塩道路関係の報告とあわせて行う予定である。

7 :県道泉塩釜線の建設に係わる調査対象地は、本調査区画西側にさらに続いており、その部分については、1992・1993年度に南北道路の存在が想定される部分を中心に試掘調査を実施している。その結果、本調査区西端部の西側で、古墳時代前期とみられる溝と土師器を発見したが、道路跡は発見されなかった。なお、この試掘調撞の報告は、来年度以降に実施する本調査区以西の調査の報告とあわせて行う予定である。

8 ：1994年2月26日の古代城柵官衙遺跡検討会のシンポジウムで「多賀城周辺の方格地割の成立」をテーマとしたシンポジウムが開催されている。

9 ：『類聚三代格』弘仁6年（815）8月23日太政官符。なお、健士の資料は少なく、胆沢城跡出土漆紙第18号(『胆沢城跡－昭和58年度発掘調査概報』)を含めて4例にすぎず、本文書が5例目である。

10：『令義解』軍防令兵士以上条

11：竹内理三編『奈良遺文』上巻　P328

12：「平城宮跡出土木簡概報18」P8（1990:奈良国立文化財研究所）に、題籤軸の木口面に「肥後国第三益城軍団養老兵七年士歴名帳」と記載されたものがみえる。

13：令規定にみえる配備先と貧富の程度については、本文書が断片であり兵士の下にさらに文字が続く可能性があるから比較の対象にはならない。

14：会規定の歴名簿は本来的に軍団兵士のものであるから、兵士・健士の別といった記載がないのは当然であるが、健士も置かれた陸奥国では、特例としてこうした記載を盛り込んだ兵士歴名簿を作成・上進していたとみる可能性も考えられる。しかし、天平六年出雲国計台帳には「兵士歴名簿」とならん

で「儲士歴名簿」（儲士とは奈良時代に置かれた軍団兵士とは異なる兵士である）がみえている。このように軍団兵士と異なる兵士については、巻を別にして上進するのが順当だったとみられるから、上述の可能性はありえない。

15：軍事関係の歴名簿の可能性が指摘されているものとしては、胆沢城跡出土漆紙第43号がある。

<引用・参考文献>

相沢清利　1990「山王遺跡－第8次発掘調査報告書」『多賀城市文化財調査報告書』第22集　多賀城市埋蔵文化財調査センター

赤澤靖章　1990「山王遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第138集　宮城県教育委員会

吾妻俊典・菅原弘樹　1994「山王遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第161集　宮城県教育委員会・東北地方建設局仙台工事事務所

石川俊英　1990「市川橋遺跡調査報告書－平成元年度発掘調査報告書」『多賀城市文化財調査報告書』第21集多賀城市埋蔵文化財調査センター

石川俊英・相沢清利　1991「山王遺跡－第9次発掘調査報告書－」『多賀城市文化財調査報告書』第26集　多賀城市埋蔵文化財調査センター

石川俊英・相沢清利　1992「山王遺跡ほか」『多賀城市文化財調査報告書』第29集　多賀城市埋蔵文化センター

石松好雄　1983「太宰府庁域考」『太宰府古文化論叢』上巻

石本敬・相沢清利　1986「山王遺跡－昭和60年度発掘調査報告書Ⅰ－」『多賀城市文化財調査報告書』第9集　多賀城市教育委員会

石本敬・千葉孝弥　1991「山王遺跡－第10次発掘調査概報－」『多賀城市文化財調査報告書』第27集　多賀城市埋蔵文化財調査センター

石本敬・相沢清利他　1993「山王遺跡ほか」『多賀城市文化財調査報告書』第34集　多賀城市埋蔵文化調査センター

伊東信雄　1957「古代史」『宮城県史』第1巻

伊東信雄　1960「東北北部の弥生式土器」『文化』第24巻第1号

井上和人　1988「都城の定型化」『特集古代の都城－季刊考古学』第22号

今泉隆雄　1988「多賀城の時代」『図説　宮城県の歴史』

氏家和典　「東北土師器の型式分類とその編年」『歴史』第14輯　東北史学会

小笠原好彦・阿部義平　1968「宮城県新田遺跡出土の土師器」『考古学雑誌』第52巻第2号　日本考古学会

岡田茂弘・桑原滋郎　1974「多賀城周辺における古代坏形土器の変遷」『研究紀要Ⅰ』宮城県多賀城跡調査研究所

小川淳一　1980「塩沢北遺跡－東北自動車道遺跡調査報告書Ⅲ－」『宮城県文化財調査報告書』第69集　宮城県教育委員会

加藤道男　1989「宮城県における土師器研究の現状」『考古学論叢Ⅱ』芹沢長介先生還暦記念論文集刊行会

加藤道男　1993「宮城県の土器様相」『北日本における律令期の土器様相』

木全敬蔵　1988「条坊制と条里制」『特集古代の都城－季刊考古学』第22号

木村浩二・青沼一民他　1981「郡山遺跡Ⅰ」『仙台市文化財調査報告書』第29集　仙台市教育委員会

木村浩二　1982「郡山遺跡Ⅱ」『仙台市文化財調査報告書』第38集　仙台市教育委員会

木村浩二他　1983「郡山遺跡Ⅲ」『仙台市文化財調査報告書』第46集　仙台市教委員会

木村浩二他　1985「郡山遺跡Ⅴ」『仙台市文化財調査報告書』第74集　仙台市教育委員会

工藤哲司　1982「栗遺跡」『仙台市文化財調査報告書』第43集　仙台市教育委員会

小井川和夫　1981「上新田遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第78集　宮城県教育委員会

小井川和夫・小川淳一　1982「御駒堂遺跡－東北自動車道遺跡調査報告書Ⅳ－」『宮城県文化財調査報告書』第83集　宮城県教育委員会

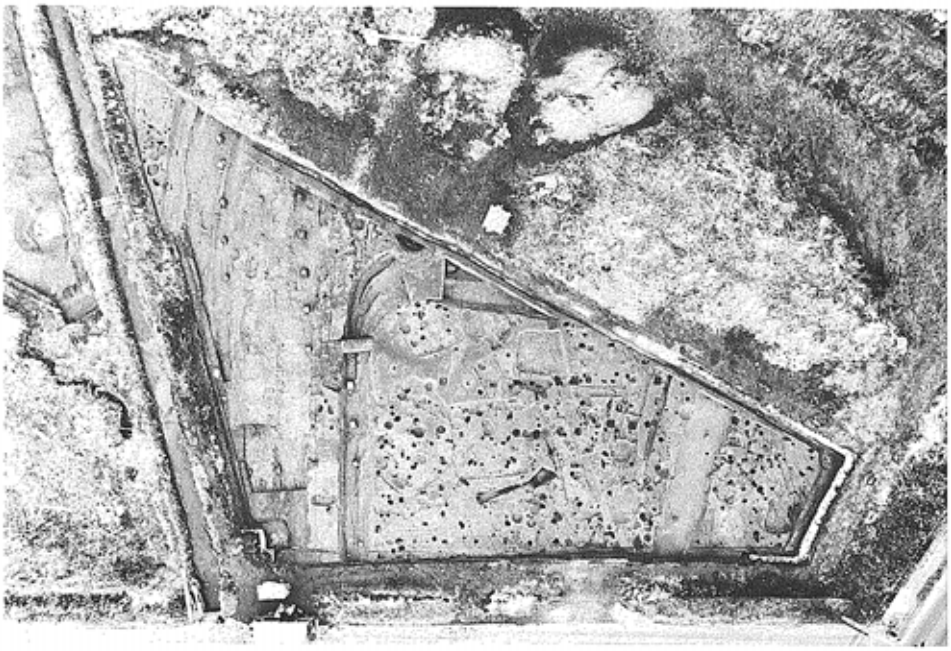
小井川和夫・手塚均　1987「糠塚遺跡－宮城県文化財発掘調査報告概報（昭和52年度分）－」『宮城県文化財調査報告書』第53集　宮城県教育委員会

狭川真一　1990「太宰府条坊の復原」『条里研究』第6号
狭川真一　1994「太宰府における街区の成立と展開」 第20回古代城柵官衙遺跡検討会
佐藤則之・菅原弘樹　1991「山王遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第141集　宮城県教育委員会
佐藤憲幸　1993「多賀城市山王遺跡」『平成5年度宮城県遺跡調査成果発表会発表要旨』
庄子敦　1988「八幡崎Ｂ遺跡」『利府町文化財調査報告書』第4集　利府町教育委員会
自鳥良一　1980「多賀城跡出土土器の変遷」『研究紀要Ⅶ』宮城県多賀城跡調査研究所
白鳥良一　1981「第37次調査」『多賀城跡－宮城県多賀城跡調査研究所年報』1980　宮城県多賀城調査研究会
白鳥良一　1982「土器」『多賀城跡　政庁跡本文編』　宮城県多賀城跡調査研究会
白鳥良一・古川一明　1991「2　土師器の編年　8東北」『古墳時代の研究－6土師器と須恵器』雄山閣
菅原弘樹　1992「山王遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第147集　宮城県教育委員会
菅原弘樹　1993「多賀城周辺の様子」『日本歴史』1993年9月号
菅原弘樹　1994「方格地割りと遺跡の性格」『古代都市の成立とその様相－第20回古代城柵官衙遺跡検討会資料』　古代城柵官衙遺跡検討会
須藤　隆　1990「東北地方における弥生文化」『考古学古代史論攷』伊東信雄先生追悼論文集刊行会
高倉敏明　1980「館前遺跡－昭和54年度発掘調査報告－」『多賀城市文化財調査報告書』第1集　多賀城市教育委員会
高倉敏明他　1981「山王・高崎遺跡発掘調査概報」『多賀城市文化財調査報告書』第2集　多賀城市教育委員会
高倉敏明他　1982「高崎・市川橋遺跡調査報告書－昭和56年度発掘調査報告書－」『多賀城市文化財調査報告書　第3集　多賀城市教育委員会
高倉敏明・滝口卓・石本敬　1983「市川橋遺跡調査報告書－昭和57年度発掘調査報告書－」第4集　多賀城市教育委員会
高倉敏明他　1984「市川橋遺跡調査報告書－昭和58年度発掘調査報告書－」『多賀城市文化財調査報告書』第5集　多賀城市教育委員会
高倉敏明・滝口卓・相沢清利　1985 「市川橋遺跡－昭和59年度発掘調査報告書－『多賀城市文化財調査報告書』第8集　多賀城市教育委員会
高倉敏明・石川俊英・千葉孝弥　1986「山王道跡調査報告書－昭和60年度発掘調査報告書Ⅱ－」『多賀城市文化財調査報告書』第8集　多賀教育委員会
多賀城市史編纂委員会　1991『多賀城市史』第4巻　考古資料　多賀城市
高野芳宏　1974「第22次調査」『多賀城跡－宮城県多賀城跡調査研究所年報』1980　宮城県多賀城跡調査研究所
高橋栄一　1994『高田Ｂ遺跡－第2次・3次調査』『宮城県文化財調査報告書』第164集　宮城県教育委員会
田辺昭三　1966『陶邑古窯跡群』平安学園考古学研究クラブ
田辺昭三　1981『須恵器大成』
千葉孝弥　1990「新田遺跡」『多賀城市文化財調査報告書』第23集　多賀城市埋蔵文化財調査センター
千葉孝弥　1992「山王遺跡－第12次発掘調査概報－」『多賀城市文化財調査報告書』第30集　多賀城市埋蔵文化財調査センター
千葉孝弥　1993「多賀城市市川橋遺跡」『平成5年度宮城県遺跡調査成果発表会発表要旨』
千葉孝弥　1994ａ「多賀城周辺の道路遺構－特集古代の道と考古学」『季刊　考古学』第46集
千葉孝弥　1994ｂ「城外の道路跡と方格地割り」『古代都市の成立とその様相－第20回古代城柵官衙遺跡検討会資料』　古代城柵官衙遺跡検討会
千葉孝弥　1994c「市川橋遺跡第11次調査」『多賀城埋蔵文化財調査センター年報』第7号　多賀城市埋蔵文化財調査センター

奈良国立文化財研究所　1990『平城宮跡出土木簡概報18』
西中川駿・本田道輝・松元光春1991『古代遺跡出土骨からみたわが国の牛、馬の渡来時期とその経路に関する研究』鹿児島大学農学部獣医学科
丹羽　茂・小野寺祥一郎・阿部博志　1981「清水遺跡－東北新幹線関係遺跡調査報告書Ⅴ」『宮城県文化財調査報告書』第77集　宮城県教育委員会・日本国有鉄道仙台新幹線工事局
平川南　1984「Ⅳ　胆沢城跡第43次調査出土漆紙文書」『胆沢城－昭和58年度発掘調査報報』岩手県水沢市教育委員会
福島県教育委員会・財団法人福島県文化センター　1988「善光寺遺跡－国道113号バイパス遺跡調査報告Ⅳ－」『福島県文化財調査報告書』第192集
古川一明　1983「色麻古墳群－宮城県圃場整備等関連詳細分布調査報告書（昭和57年度）」『宮城県文化財調査報告書』第95集
古川一明　1984「色麻古墳群－遺跡詳細分布調査報告書（昭和58年度）」『宮城県文化財調査報告書』第100集
前川要　1989Ｂ「平安時代における施釉陶磁器の様式論的研究(上・下)」『古代文化』第41巻8・1号
宮城県教育委員会・多賀城町1960　『多賀城跡調査報告書Ⅰ－多賀城廃寺跡－』
宮城県教育委員会1987　「硯沢・大沢遺跡ほか」『宮城県文化財調査報告書』第116集
宮城県教育委員会1993　「山王遺跡－多賀地前区第1次調査－」『宮城県文化財調査報告書』第153集
宮城県教育委員会1994　「藤田新田遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第163集
宮城県多賀城跡調査研究所・宮城県教育委員会1982　『多賀城跡－政庁跡本文編－』
村田晃一　1992「多賀城周辺における奈良・平安時代の須恵器生産」『東日本における古代・中世窯業の諸問題』
村田晃一　1994ａ「土器からみた官衙の終末」『古代官衙の終末をめぐる諸問題』第3回東日本埋蔵文化財研究会資料
森貢喜　1982「水入遺跡発掘調査報告書」『宮城県文化財調査報告書』第84集　宮城県教育委員会
山中章　1992「古代条坊制論」『考古学研究』第38巻第4号
柳沢和明　1992「第61次調査」『宮城県多賀城跡調査研究所年報』1991　宮城県多賀城跡調査研究所

写　真　図　版

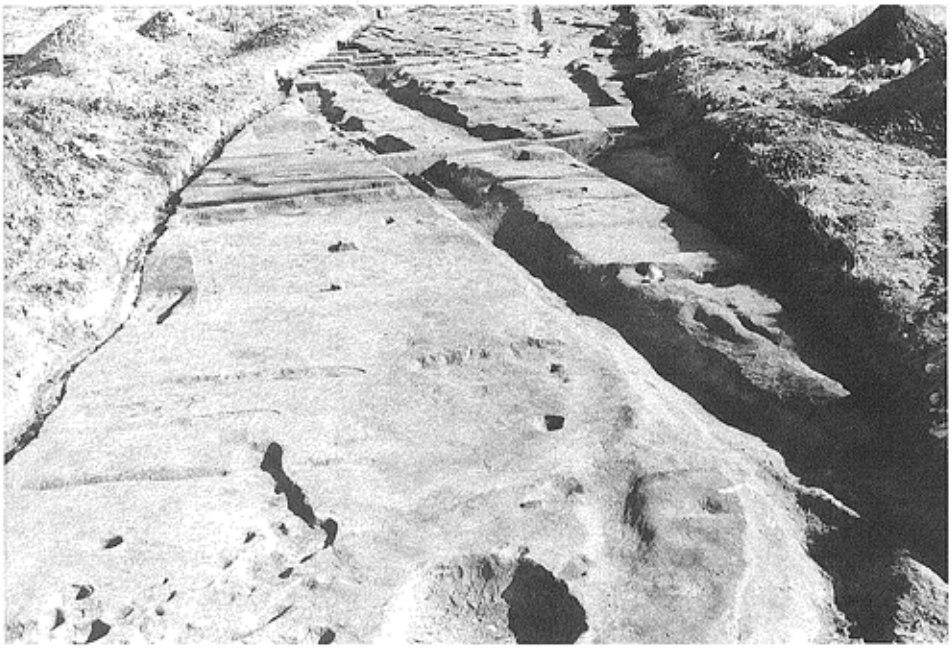
遺跡遠景（東より）



Ⅰ区全景（上が北）

図版1

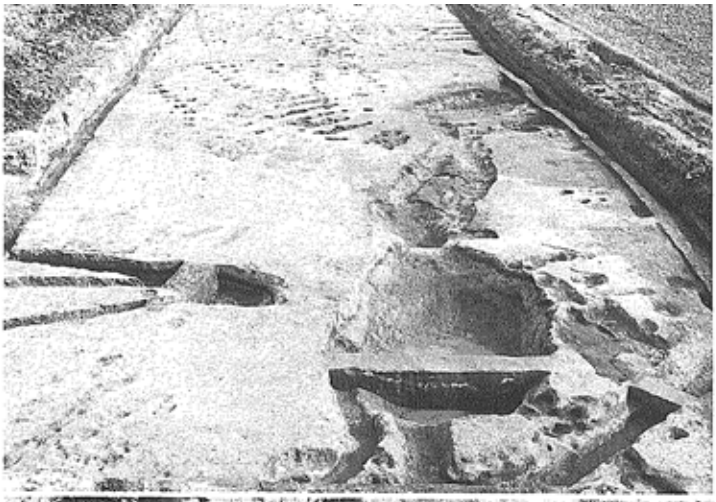
Ⅱ区全景（上が北）



Ⅲ区東半部（西より）

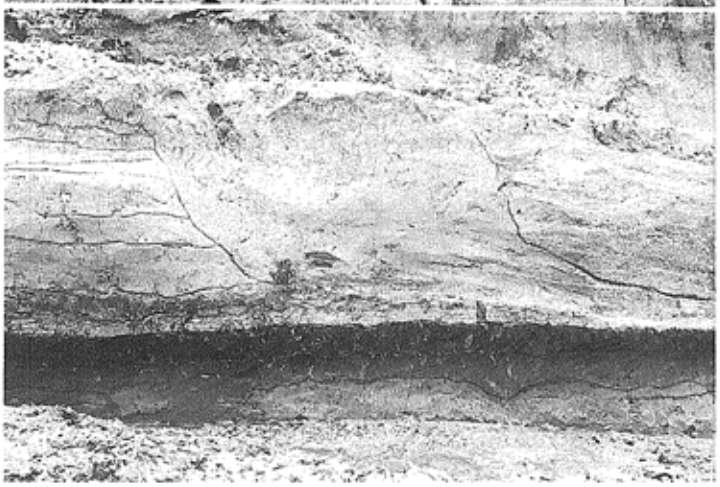
図版 2

Ⅲ区西半部
（西より）

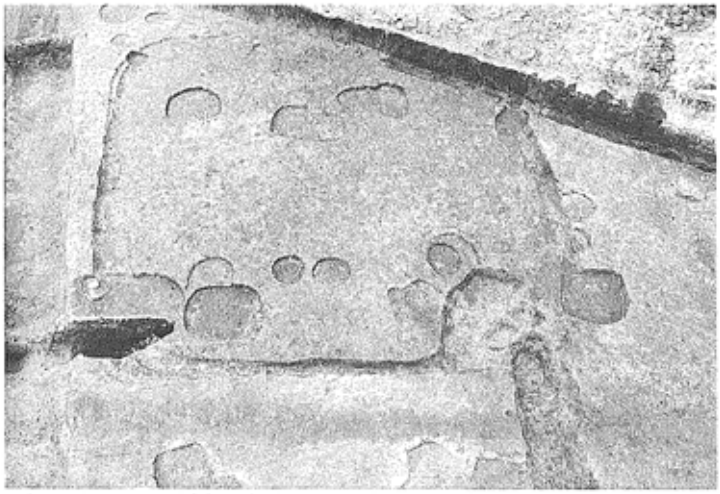


右・Ⅳ区西半部
（西より）
左・Ⅳ区東半部
（東より）

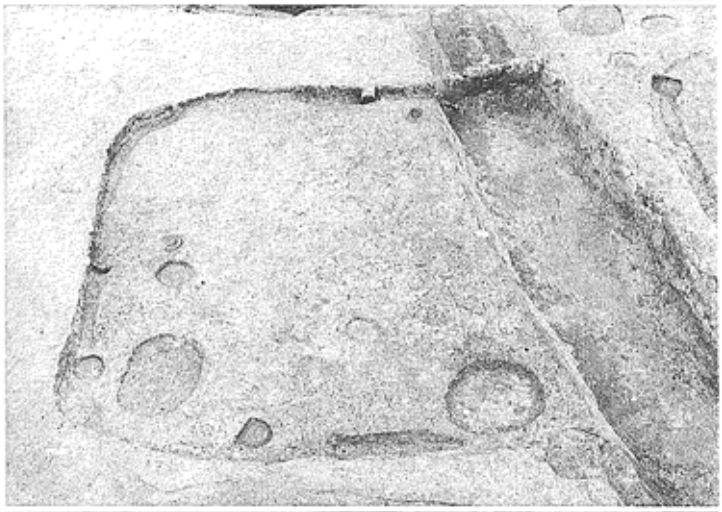
ＳＤ2050Ａ・Ｂ
基本層序第６層
断面



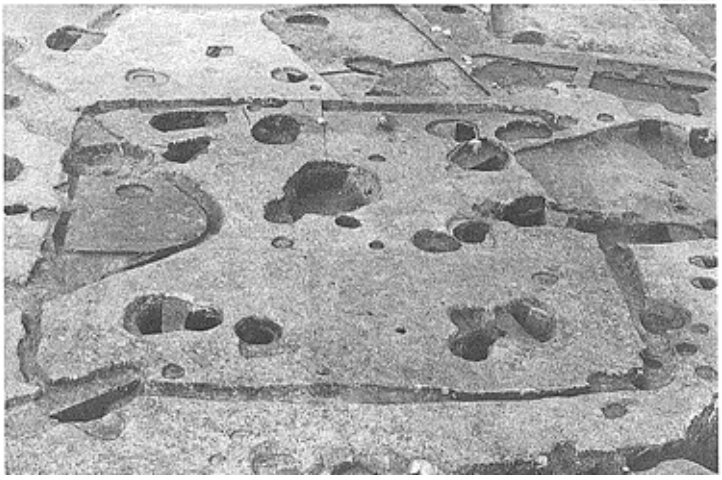
図版３



Ⅰ区ＳＩ2210住居跡
（南より）



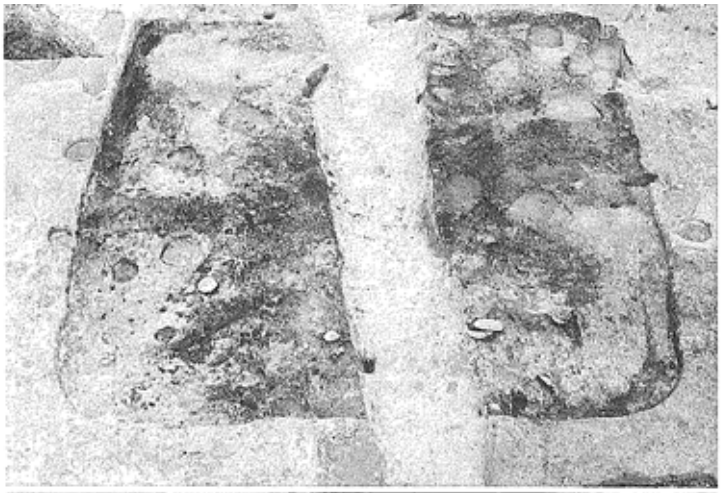
Ⅰ区ＳＩ2211住居跡
（南より）



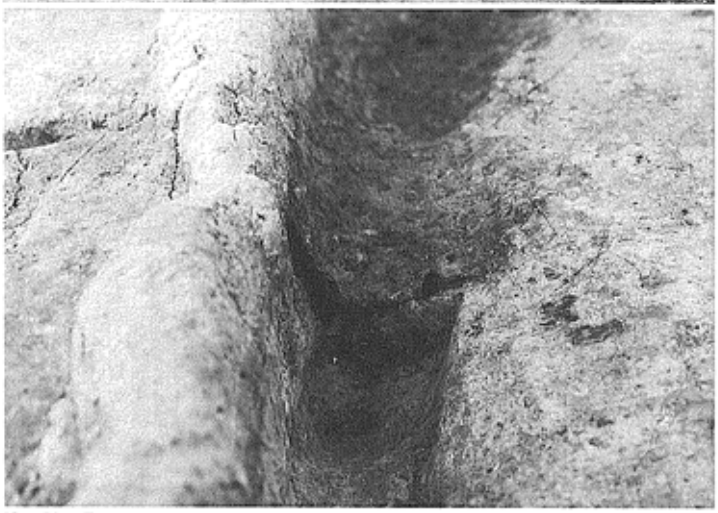
Ⅰ区ＳＩ2216住居跡
（南より）

図版４

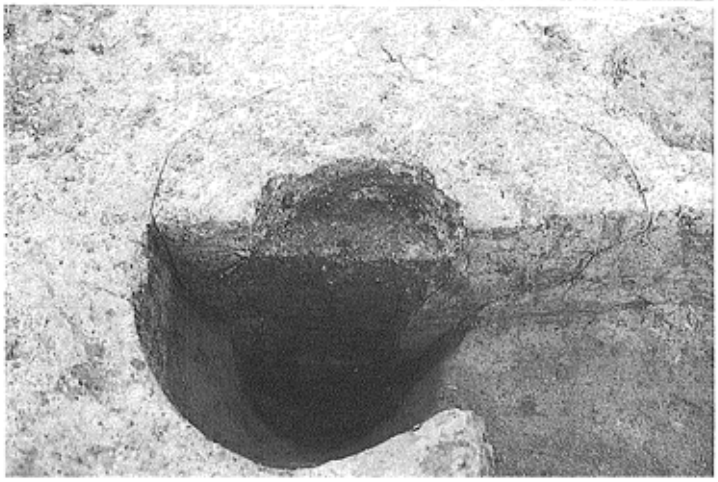
Ⅰ区ＳＩ2226住居跡
床面直上の炭化物出土状況
（南より）



Ⅰ区ＳＩ2226住居跡
北西部 周溝上の炭化物
（南より）



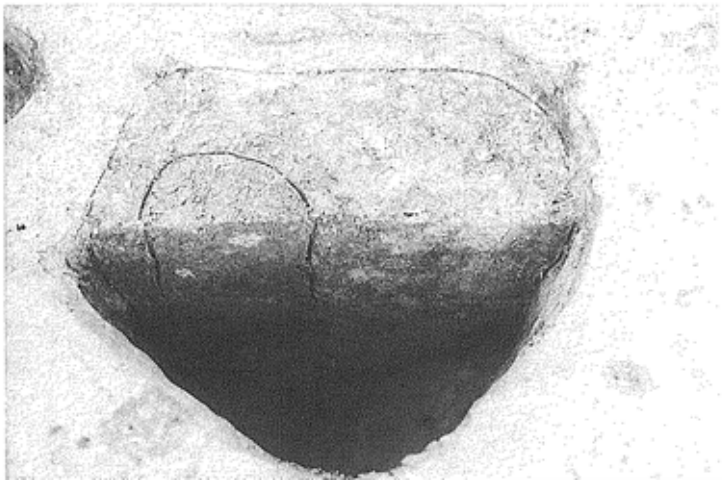
Ⅰ区ＳＩ2226住居跡
北西主柱穴断面
（南より）



図版５

Ⅰ区ＳＩ2246住居跡
（南より）

Ⅰ区ＳＩ2246住居跡
貯蔵穴上面遺物出土状況
（南西より）

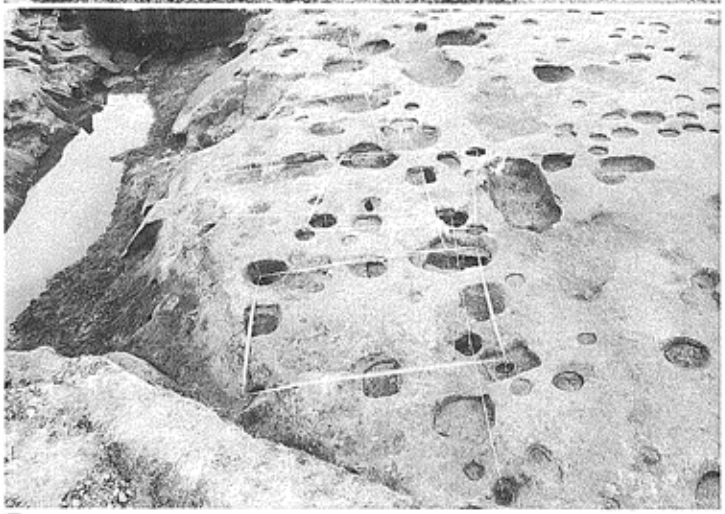


Ⅰ区ＳＩ2246住居跡
南東主柱穴断面
（西より）

図版６

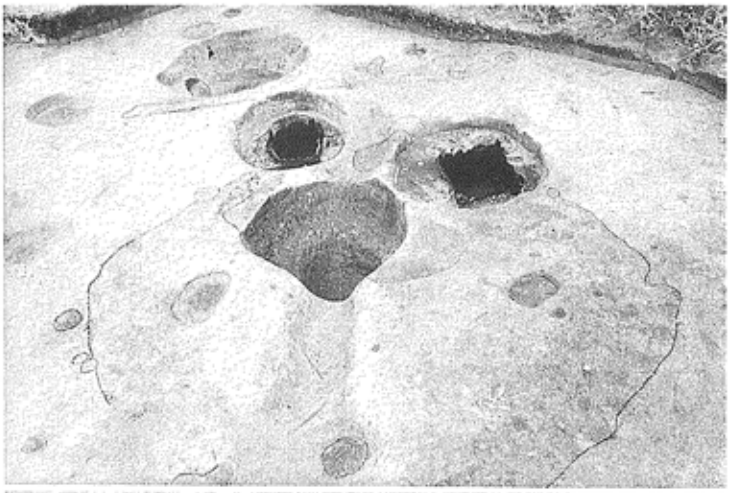
Ⅲ区ＳＩ2527住居跡
ＳＩ2531住居跡
ＳＢ2630建物跡
（北より）

Ⅱ区ＳＤ2050
東側建物跡群
（南より）

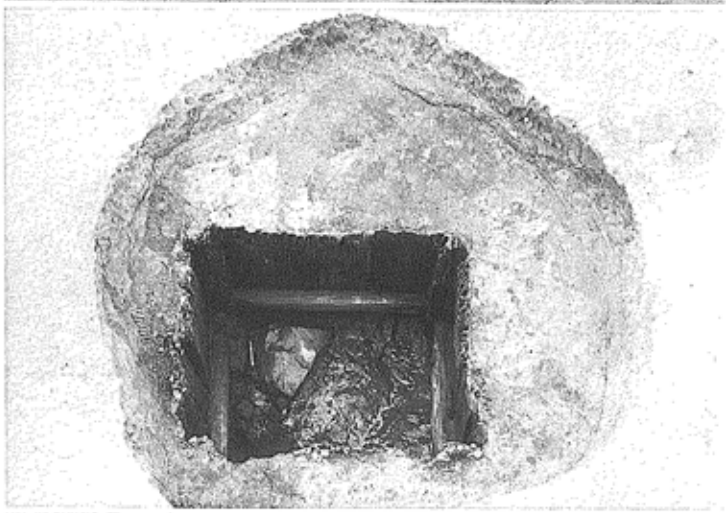


Ⅰ区ＳＫ2292土壙
ＳＢ2358建物跡
柱穴断面
（南より）

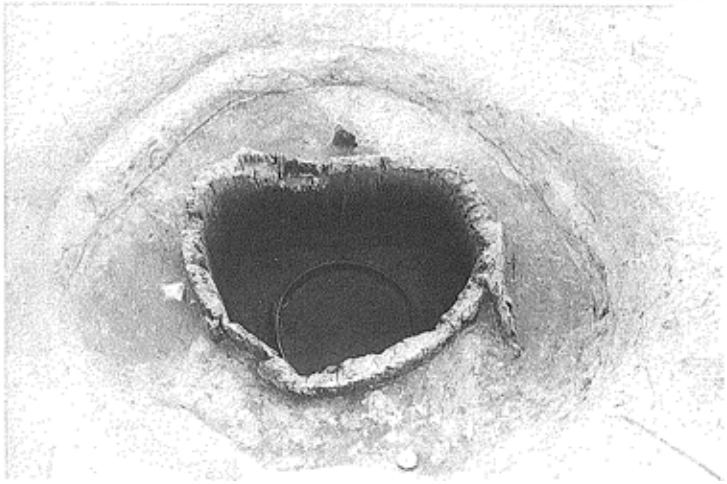
図版７



Ⅱ区ＳＩ2114住居跡
ＳＥ2008井戸跡
ＳＥ2009井戸跡
（南より）



Ⅱ区ＳＥ2008井戸跡
（東より）



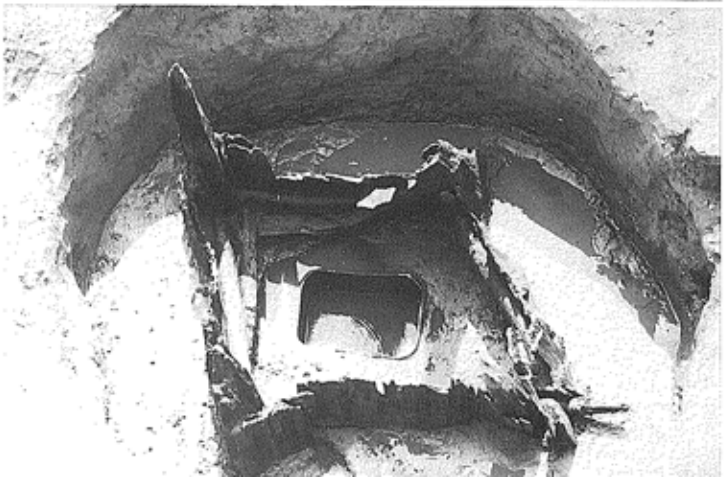
Ⅱ区ＳＥ2009井戸跡
（西より）

図版８

Ⅱ区ＳＥ2017井戸跡
（南より）

Ⅱ区ＳＥ2017井戸跡
下駄出土状況
（南より）

Ⅱ区ＳＥ2043井戸跡
（東より）



図版９

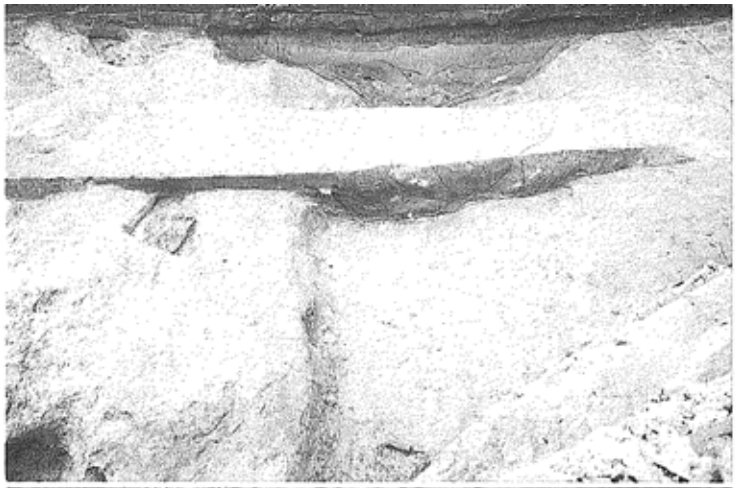
Ⅱ区 S X750
道路跡
（南より）

Ⅲ区 S X2650
道路跡
（南より）

Ⅲ区 S X2652
道路跡
（南より）

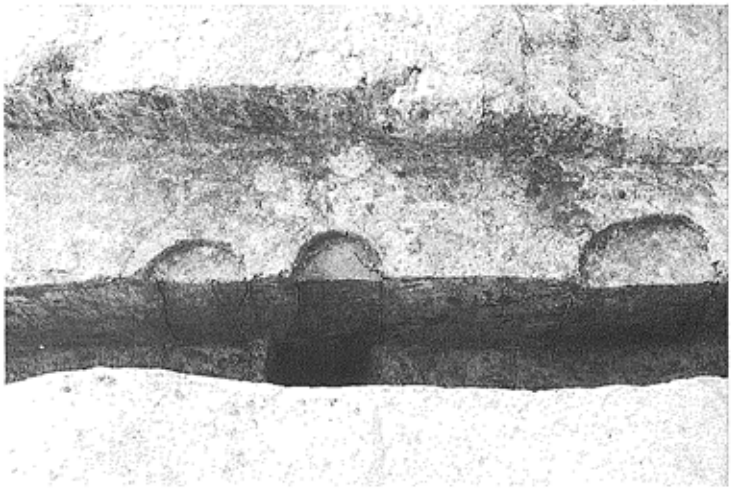
図版10

Ⅳ区ＳＸ2650
道路跡東側溝
（北より）

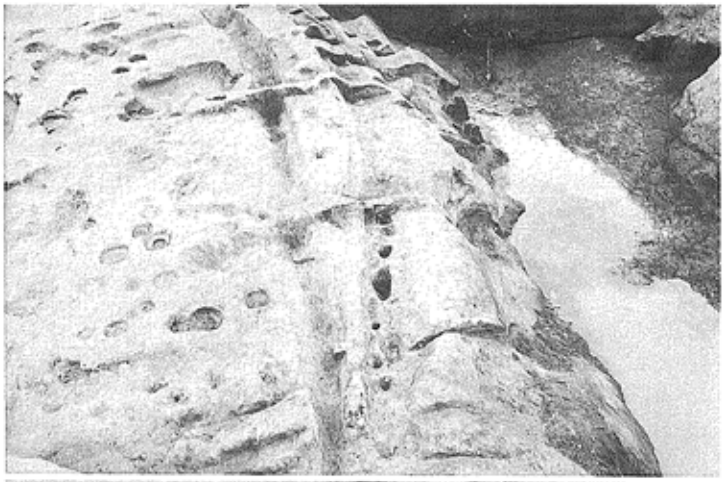


Ⅳ区ＳＸ2650
道路跡東側溝
鍵出土状況
（南より）

Ⅰ区ＳＡ2290
塀跡 断面
（東より）

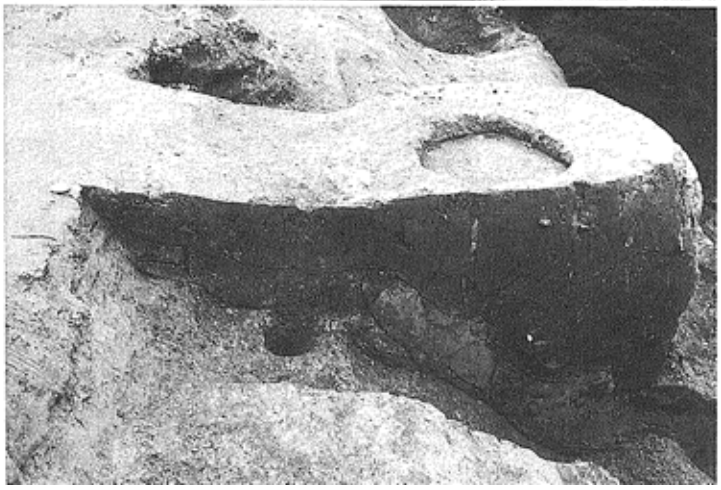


図版11



Ⅱ区 SA2089
SA2096
堀跡
（南より）

Ⅱ区 SA2089
堀跡 断面
（北から）

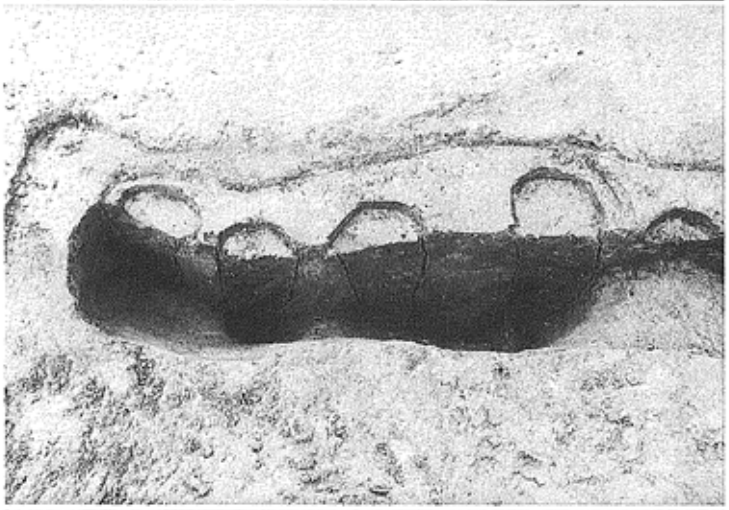


Ⅱ区 SA2096
SA2092堀跡
断面
（南より）

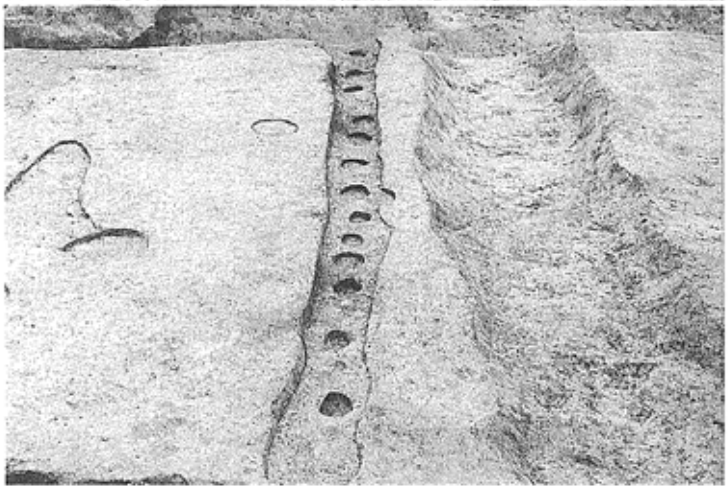
図版12

Ⅲ区ＳＡ2521
ＳＡ2547塀跡
（北東から）

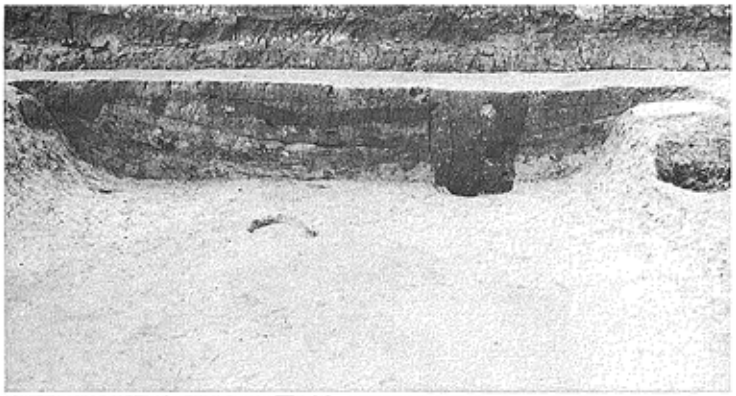
Ⅲ区ＳＡ2521塀跡
断面　（南より）



Ⅲ区ＳＡ2564塀跡
（北より）



図版13



Ⅰ区ＳＤ2208溝跡
断面
（南より）

Ⅱ区ＳＤ2050河川跡
ＳＤ2124溝跡
断面
（北西より）

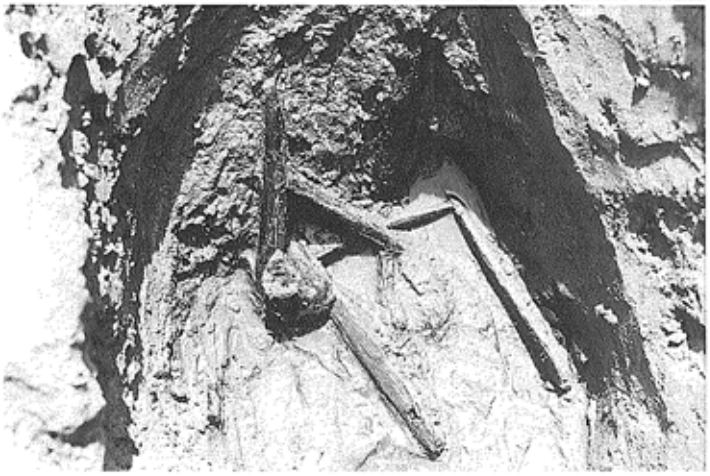
Ⅲ区ＳＤ2563溝跡
（南より）

図版14

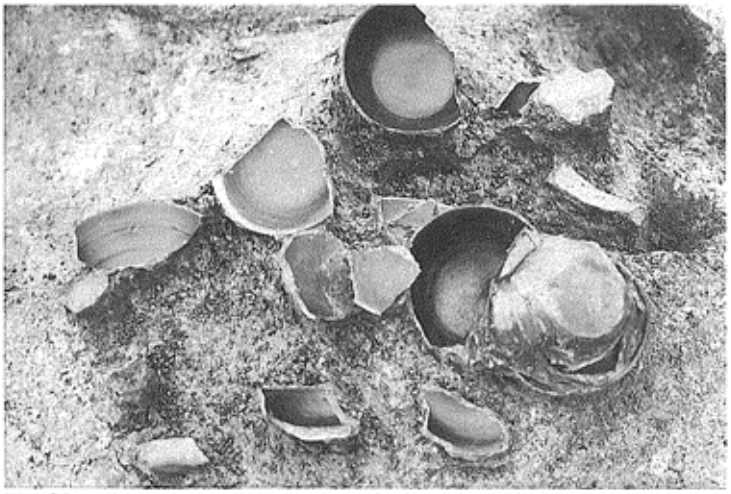
Ⅲ区ＳＤ2525溝跡
遺物出土状況
（南西より）

Ⅰ区ＳＫ2214土壙
遺物出土状況
（南より）

Ⅱ区ＳＫ2058土壙
糸巻出土状況
（東より）



図版15

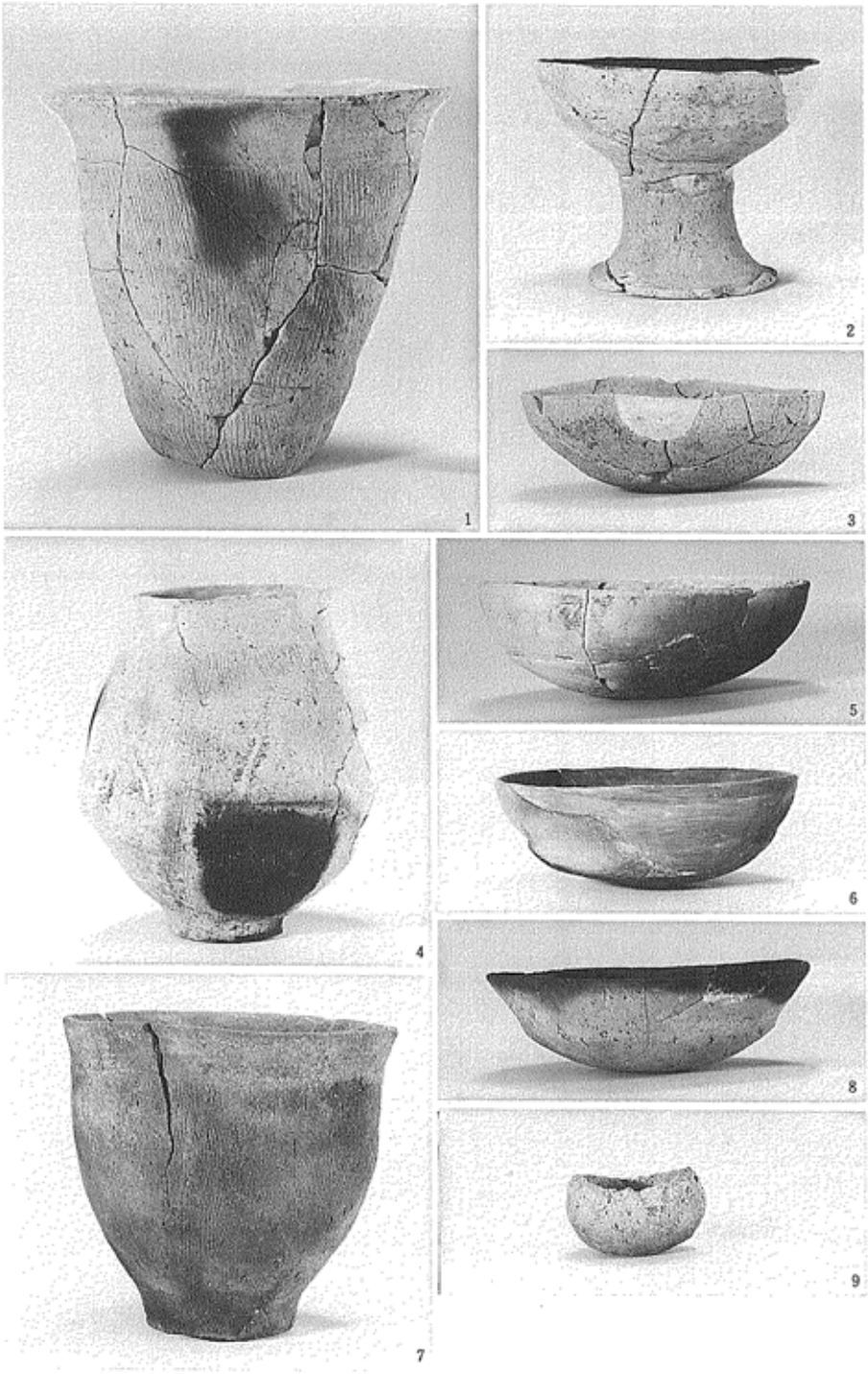


Ⅲ区ＳＫ2530
土器溜め
遺物出土状況
（南より）

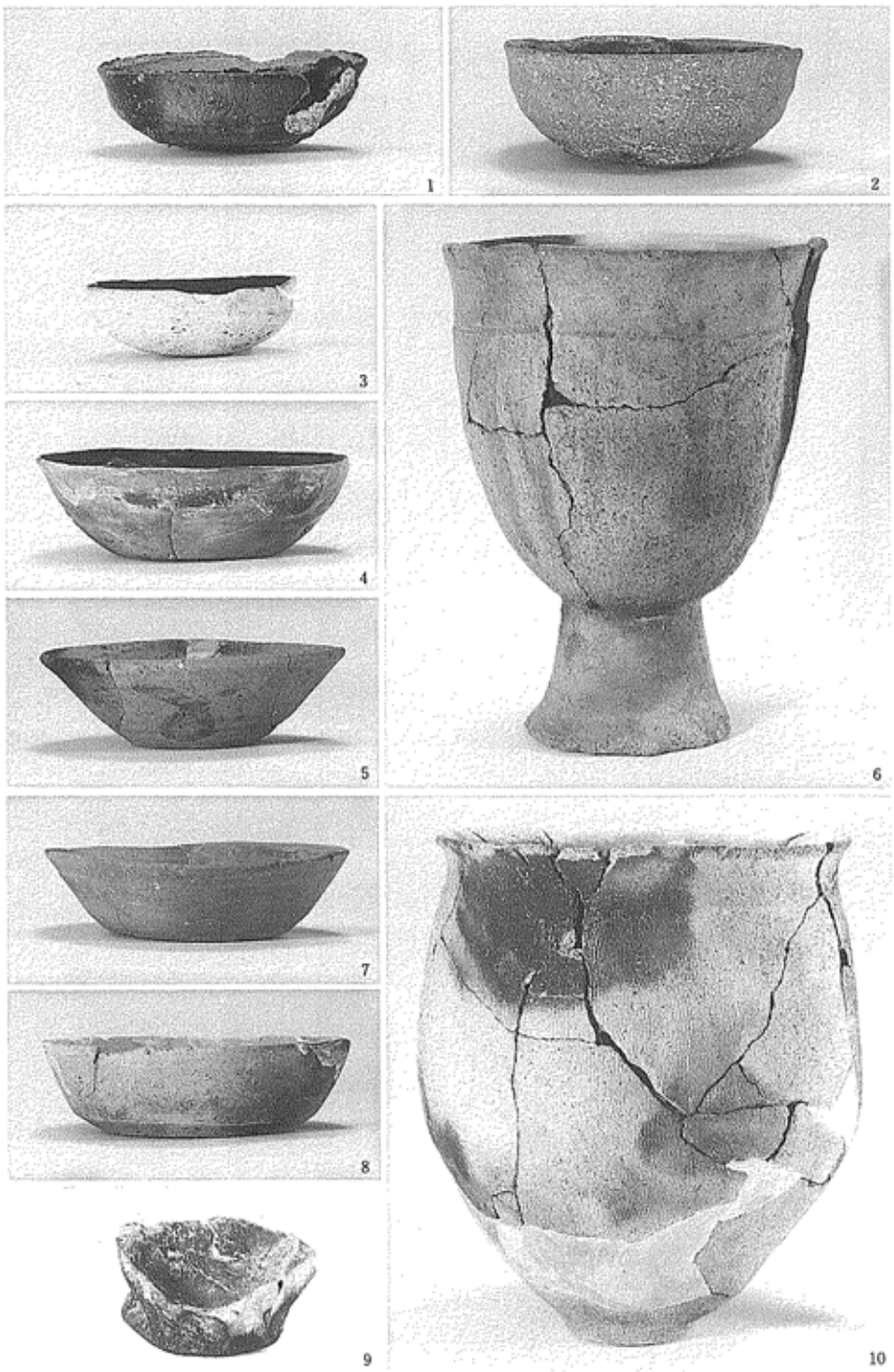
左・Ⅰ区ＳＫ2212土壙
漆紙出土状況
（西より）
右・Ⅲ区ＳＫ2581土壙
木皿出土状況
（北より）

Ⅲ区ＳＸ2665
馬骨出土状況
（北より）

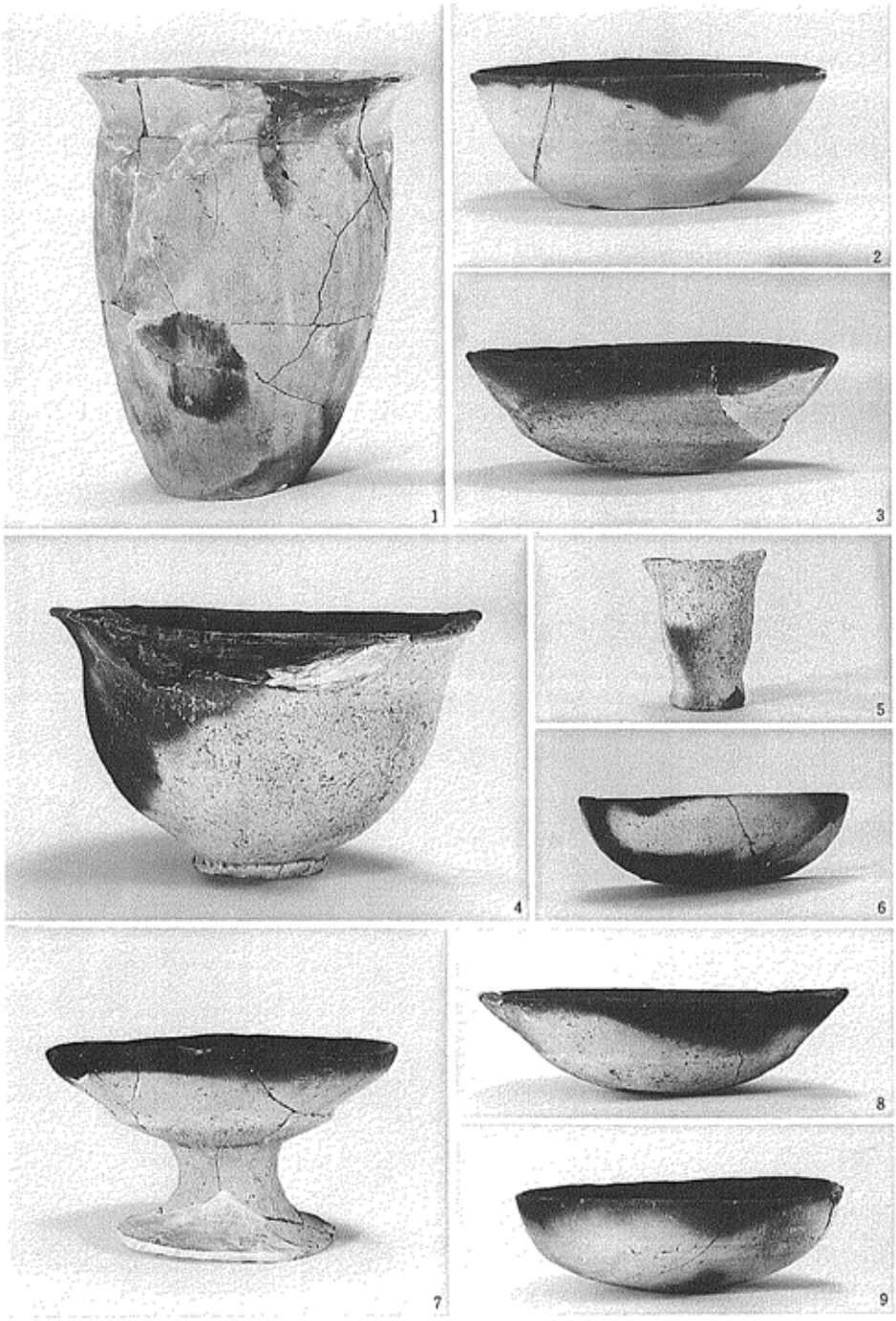
図版16



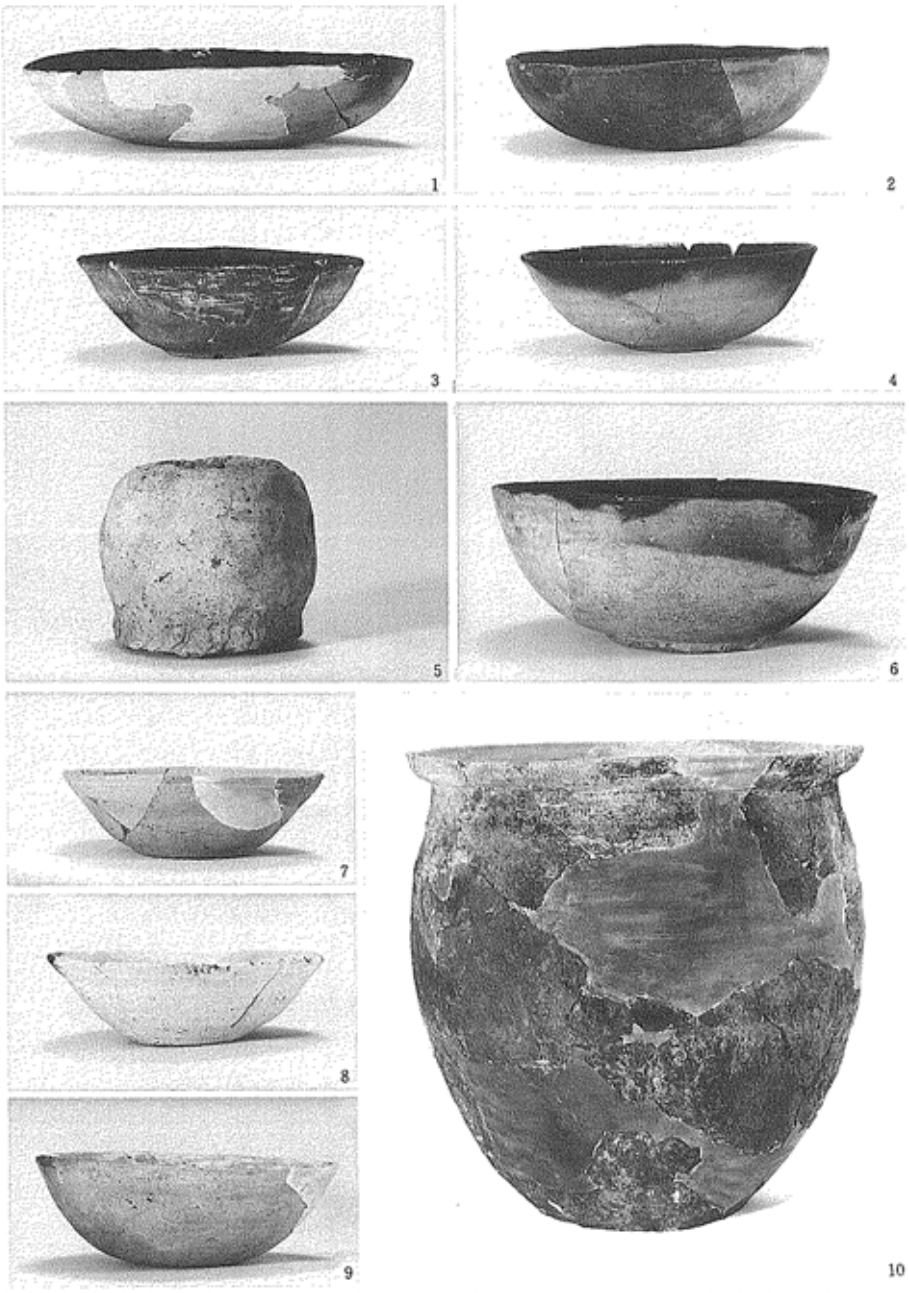
図版17　出土遺物　Ⅰ区住居跡出土土器



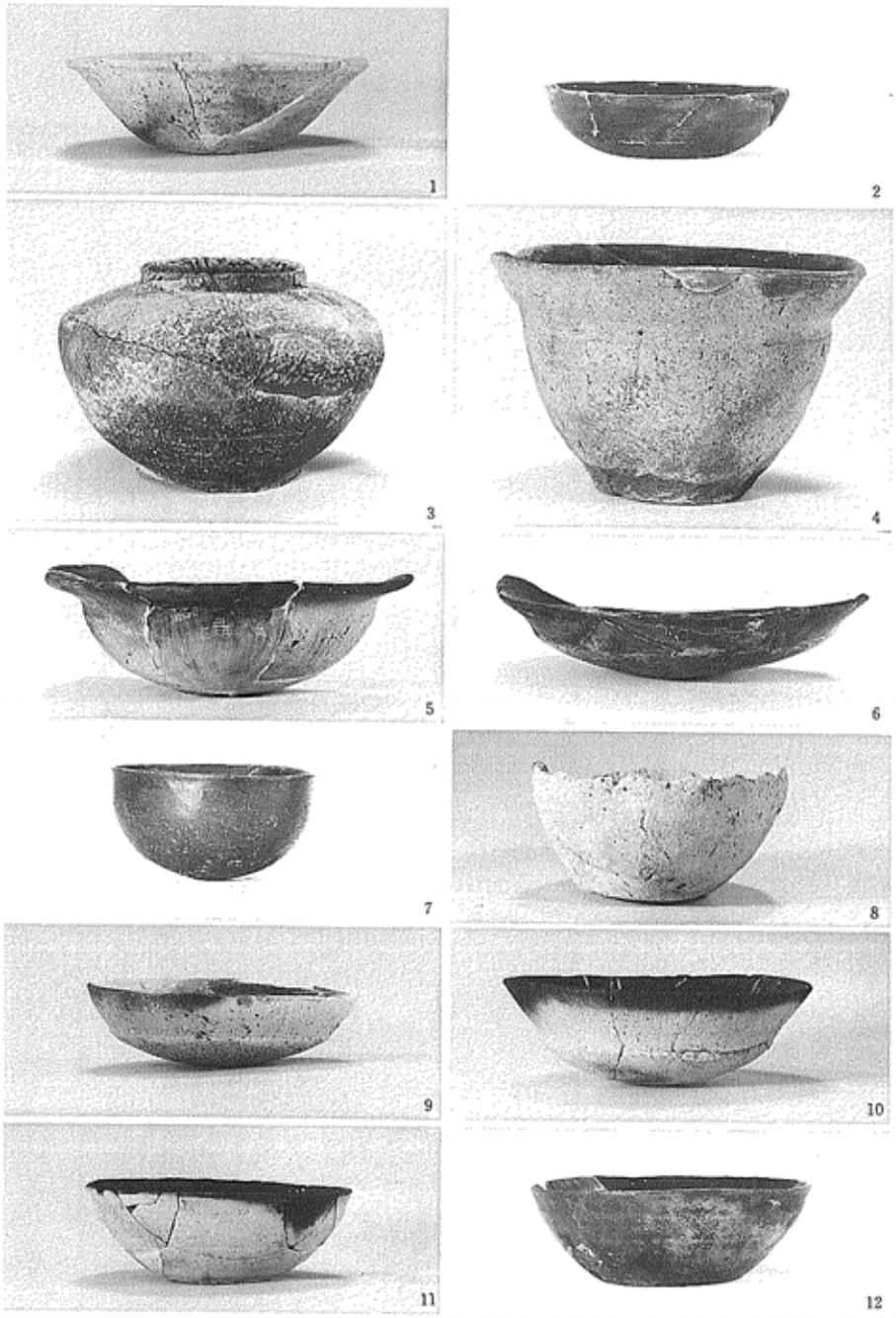
図版18　出土遺物 Ⅰ区住居跡・土壙出土土器



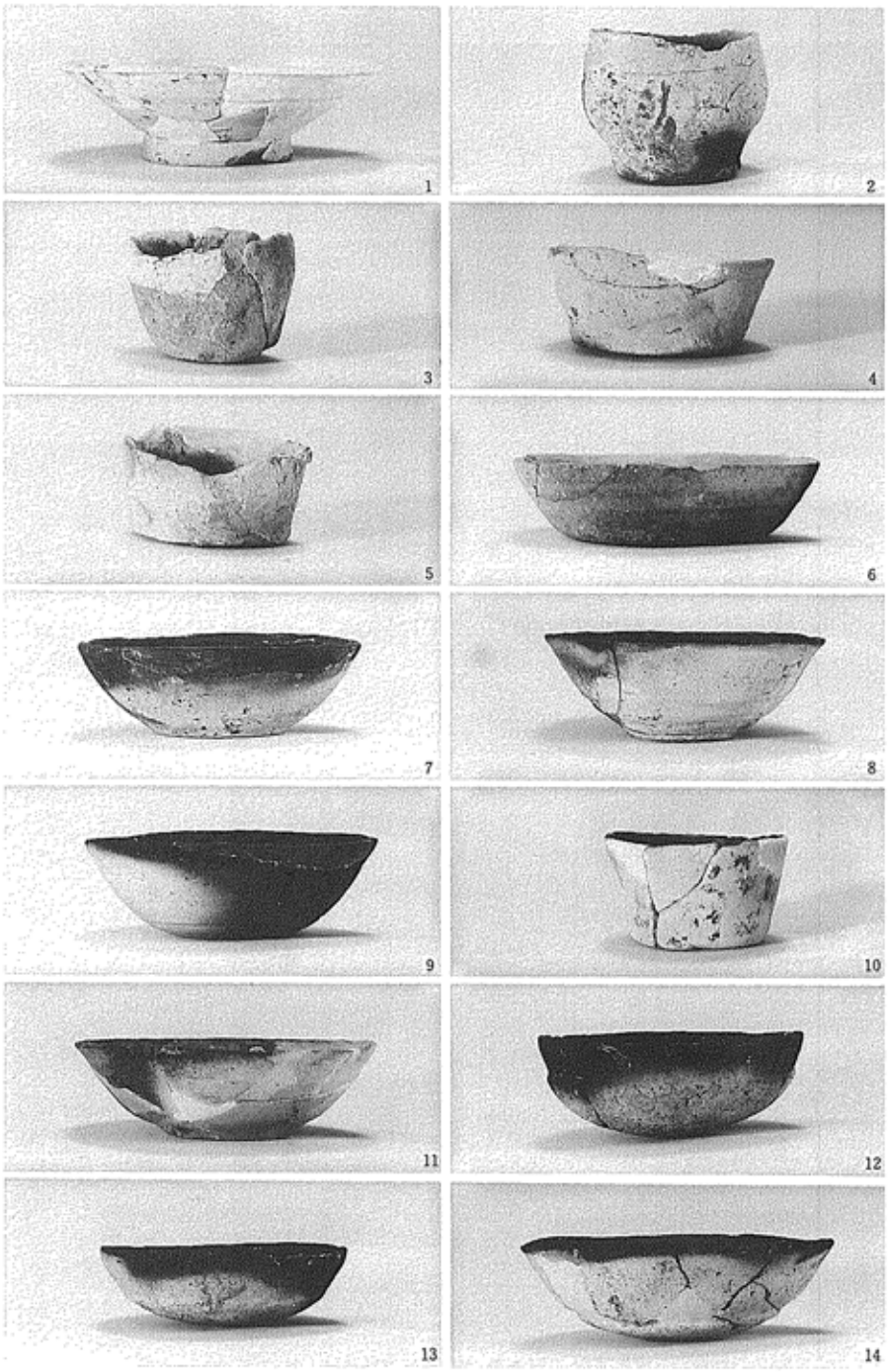
図版19　出土遺物 Ⅰ区土壙・溝、Ⅱ区住居跡出土土器



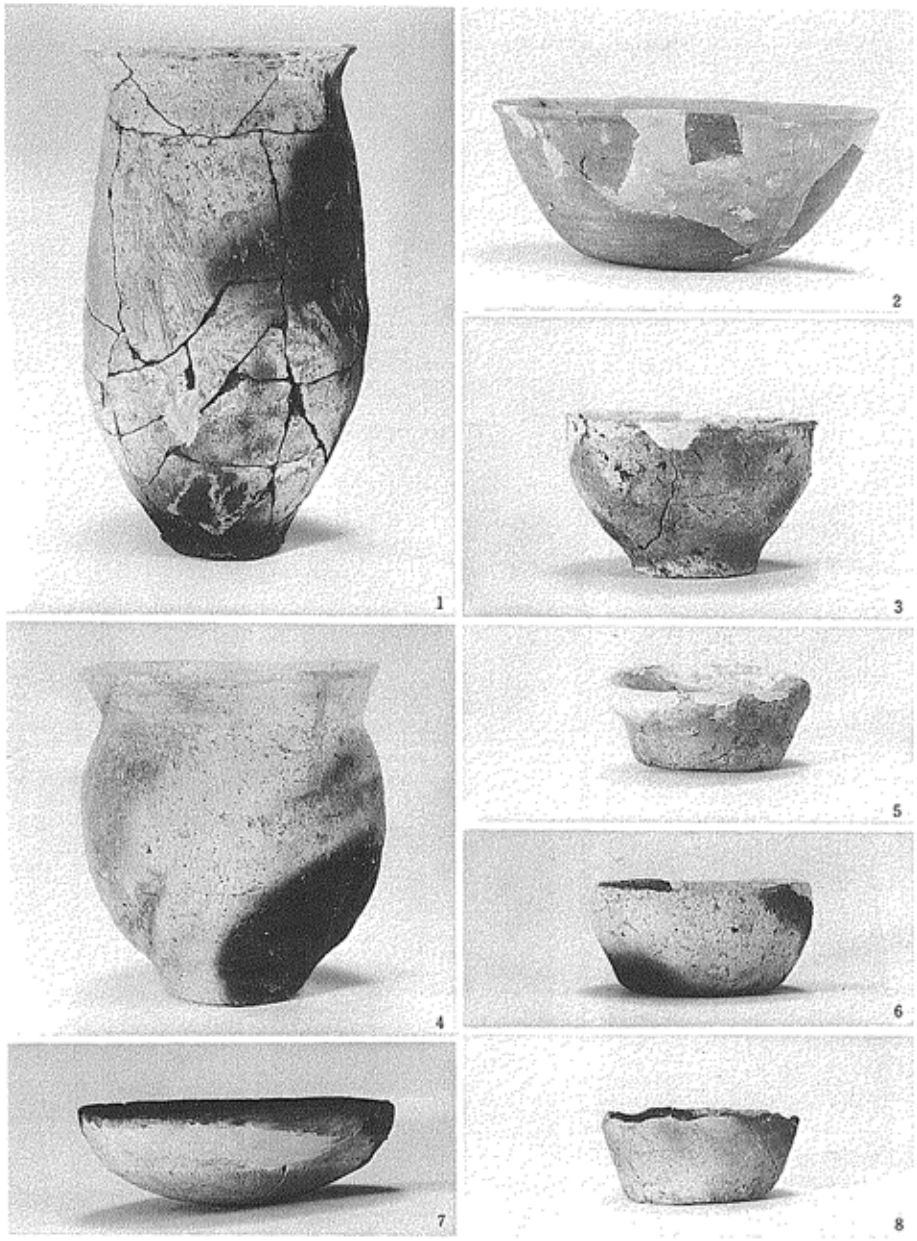
図版20　出土遺物 Ⅱ区井戸・土壙・溝出土土器



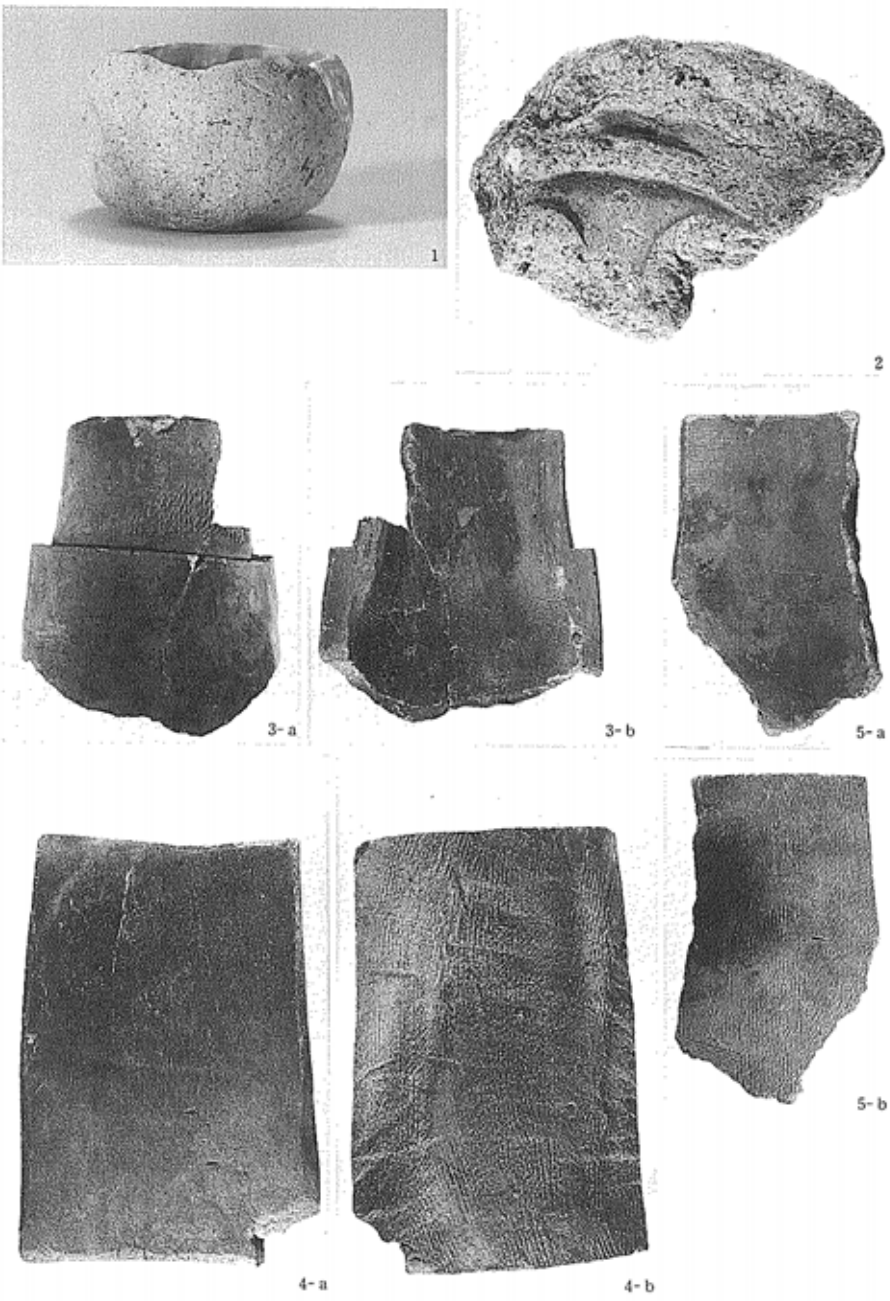
図版21　出土遺物 Ⅱ区土壙・溝、Ⅲ区道路側溝、Ⅲ・Ⅳ区溝出土土器



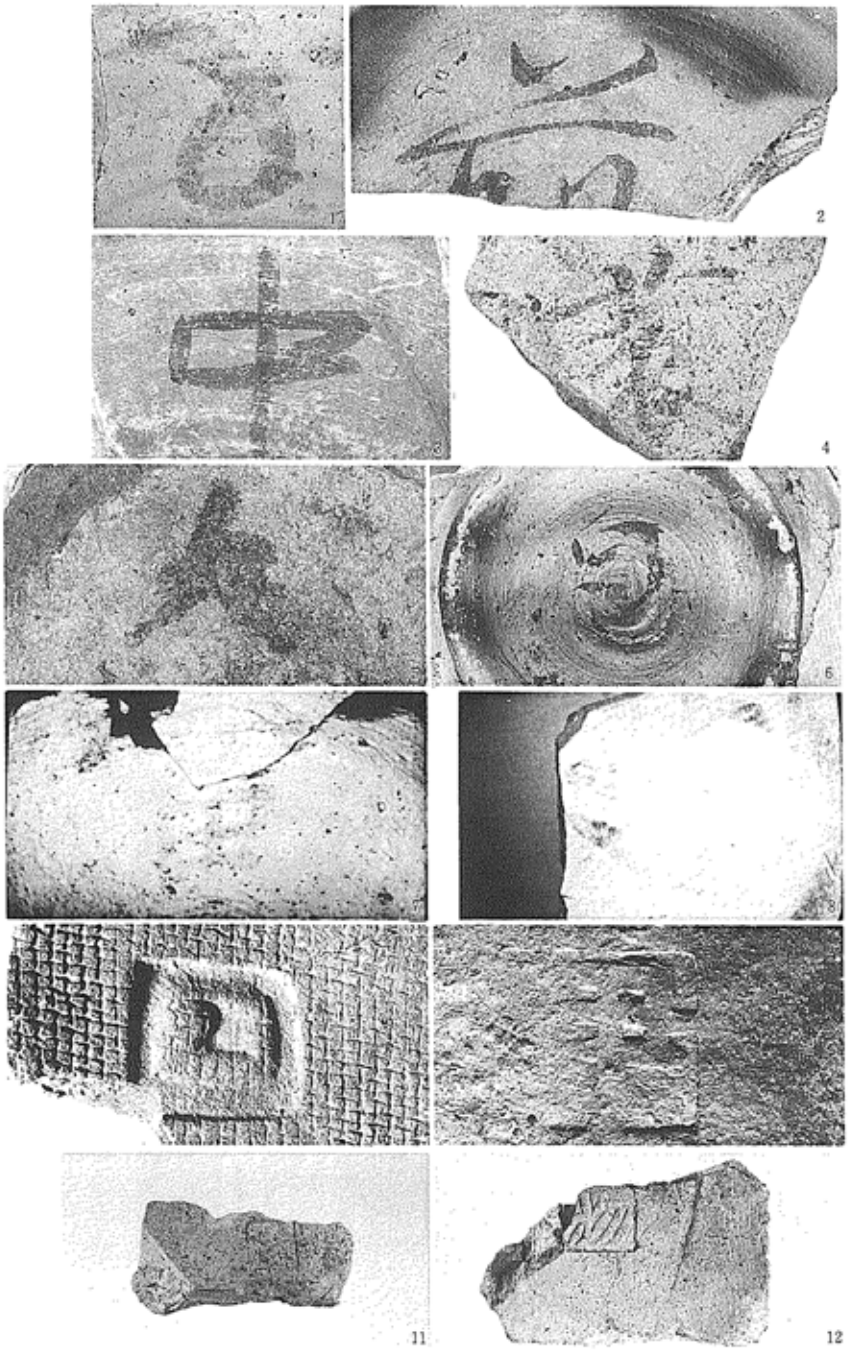
図版22　出土遺物　Ⅲ・Ⅳ区溝出土土器



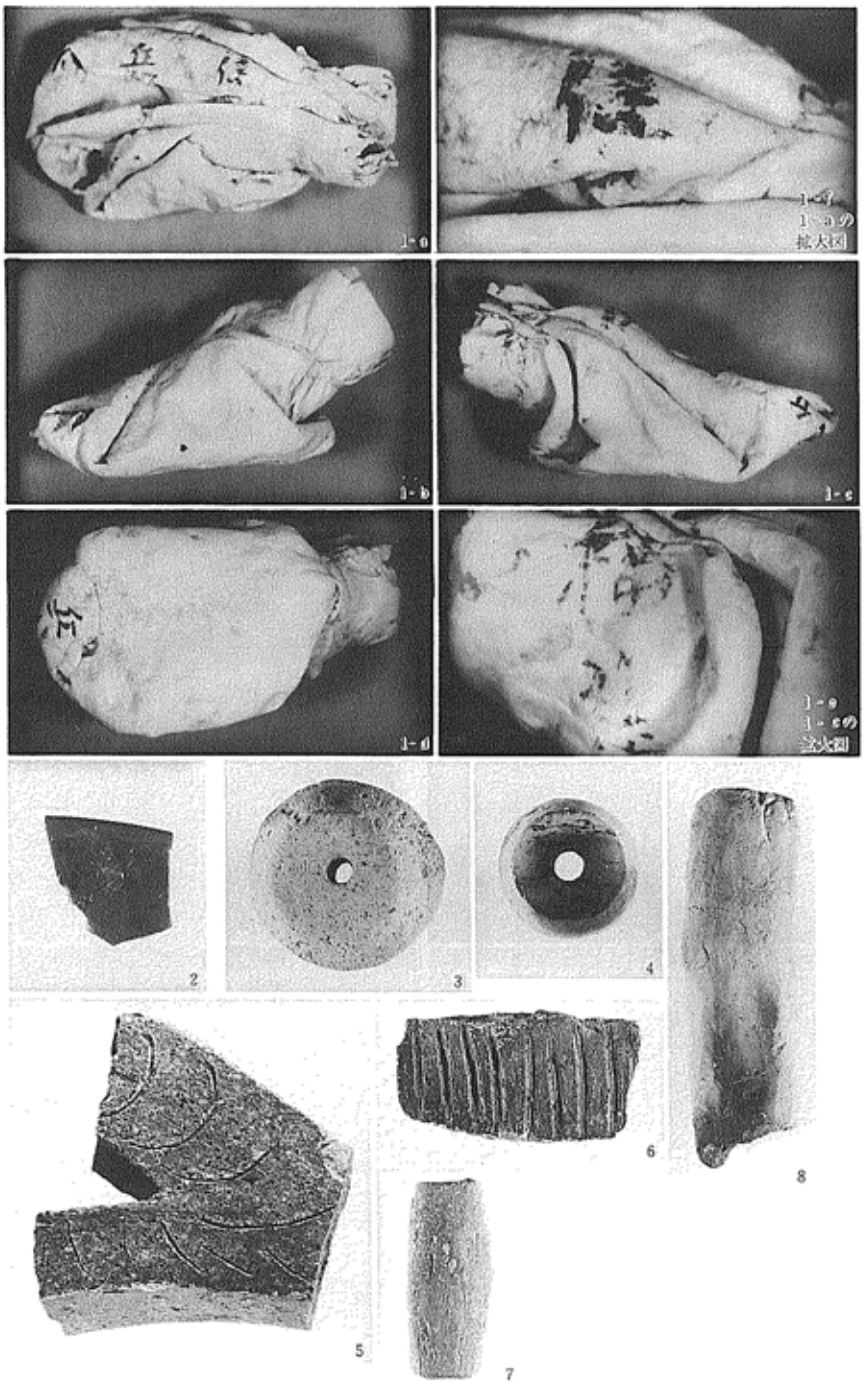
図版23　出土遺物　Ⅲ・Ⅳ区溝出土土器



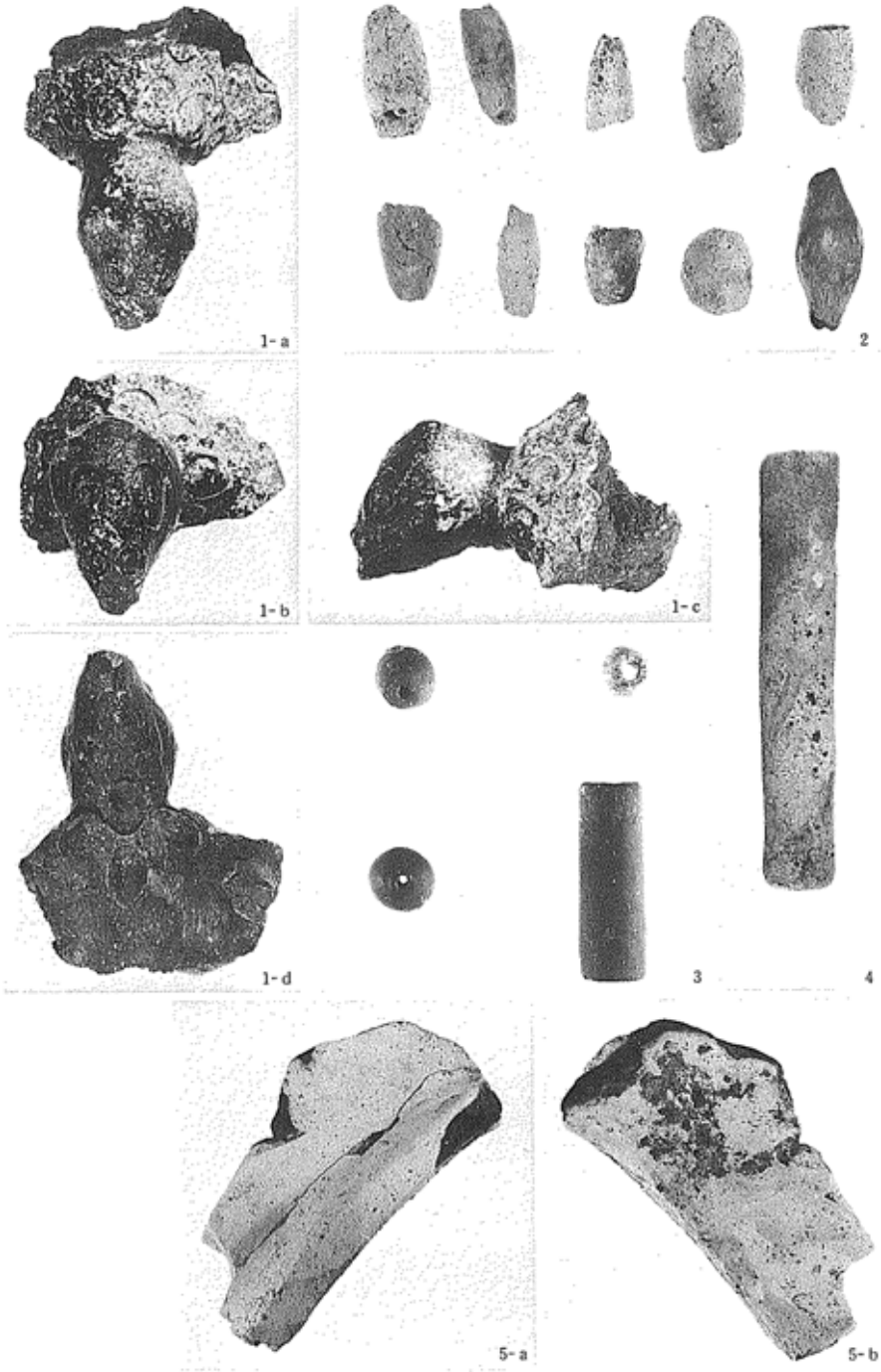
図版24　出土遺物 Ⅲ・Ⅳ区ＳＤ2563出土土器、Ⅱ区ＳＥ2009・2043・ＳＫ2073出土瓦



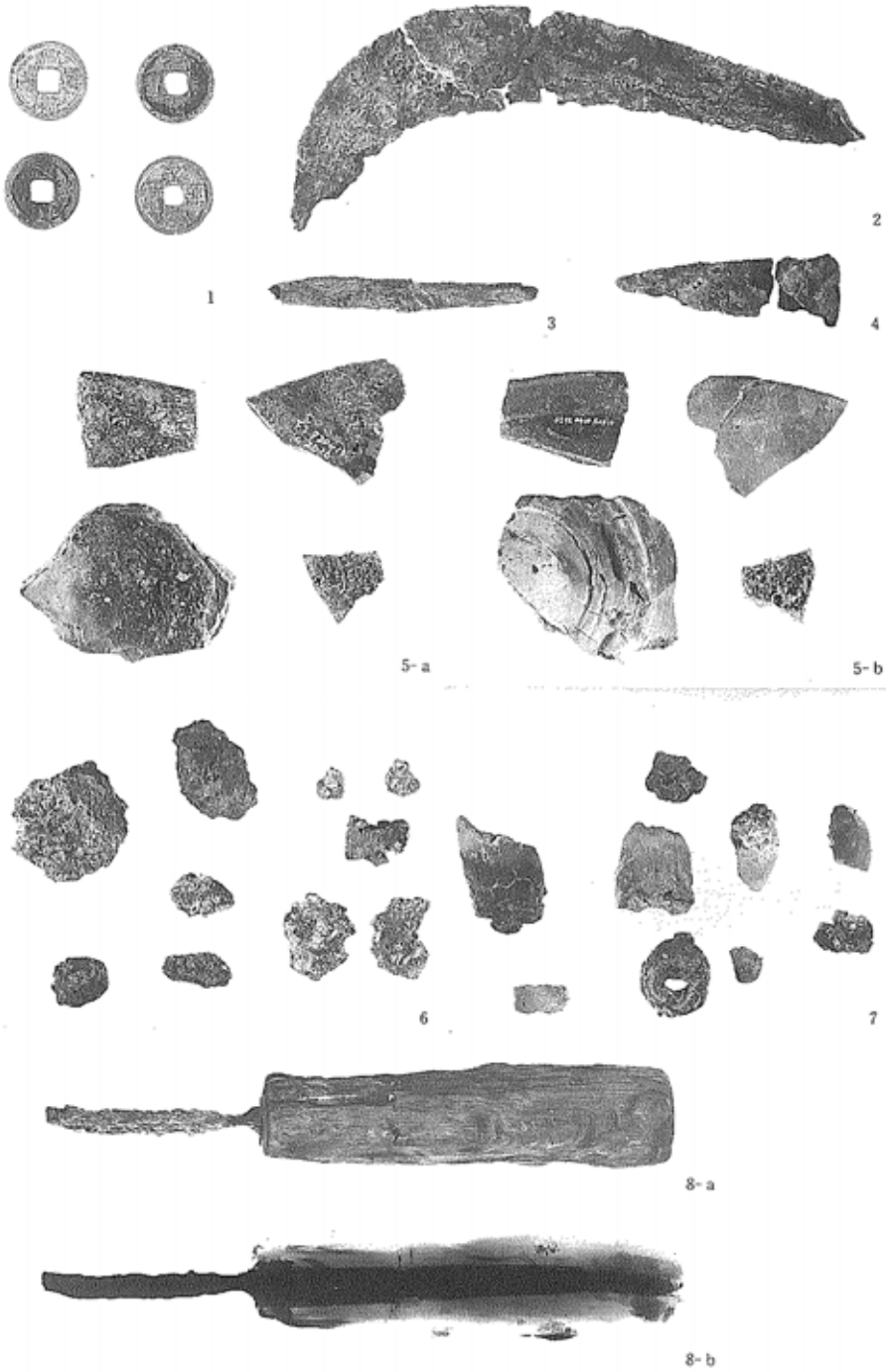
図版25　出土遺物　墨書土器・刻印瓦



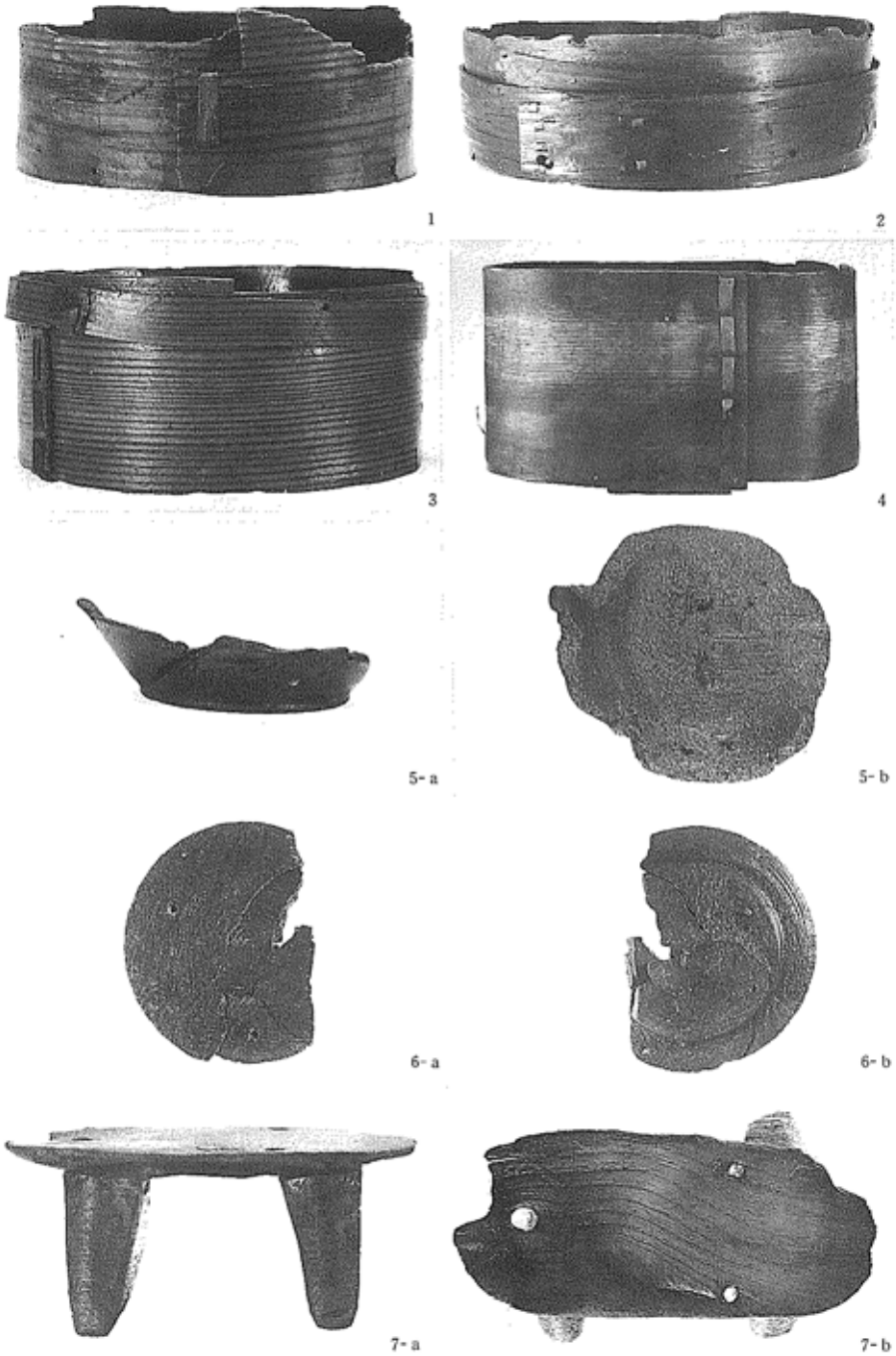
図版26　出土遺物　漆紙文書・土製品他



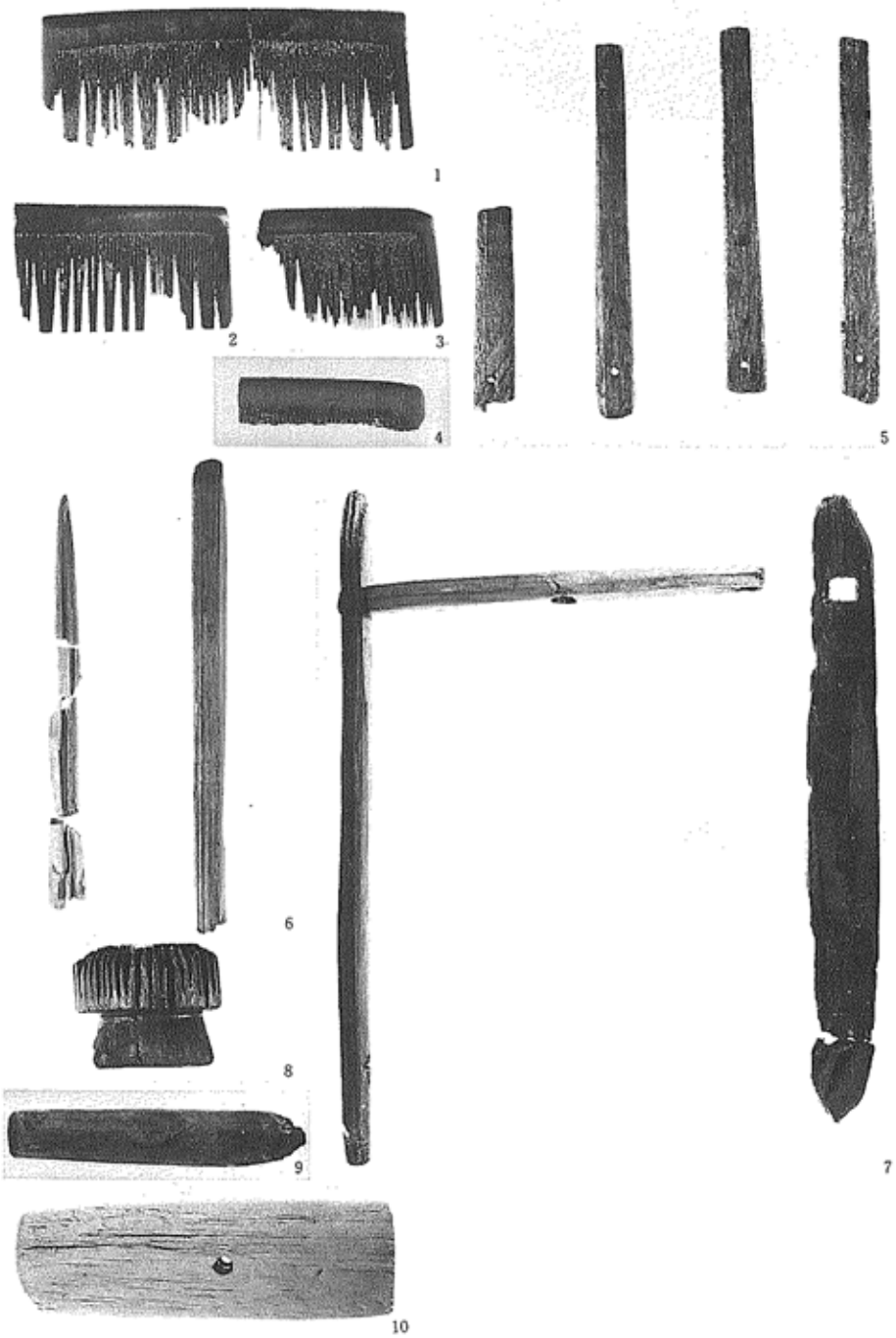
図版27　出土遺物　土製品・土製カマド



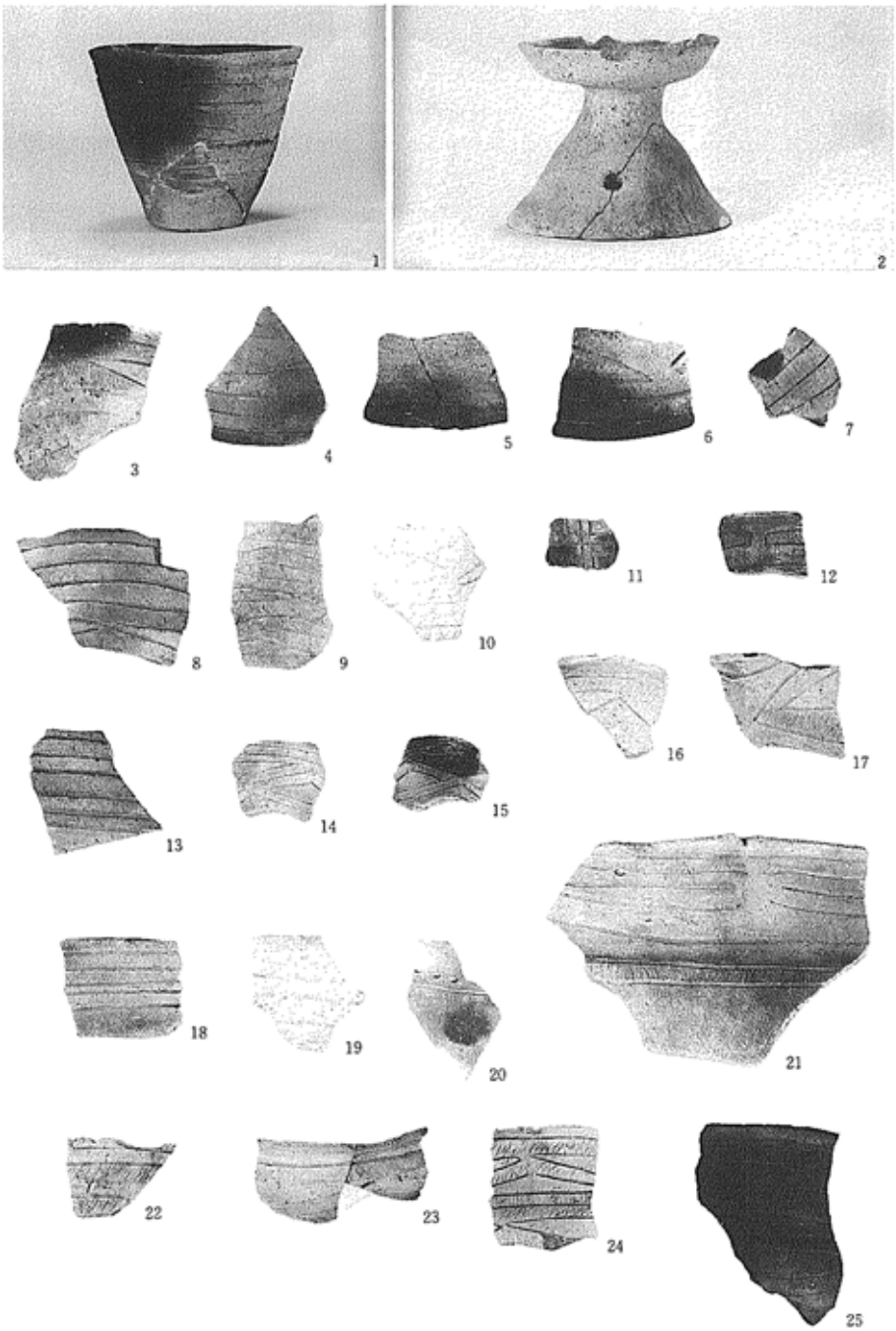
図版28　出土遺物　硯・鍵・古銭・鉄製品



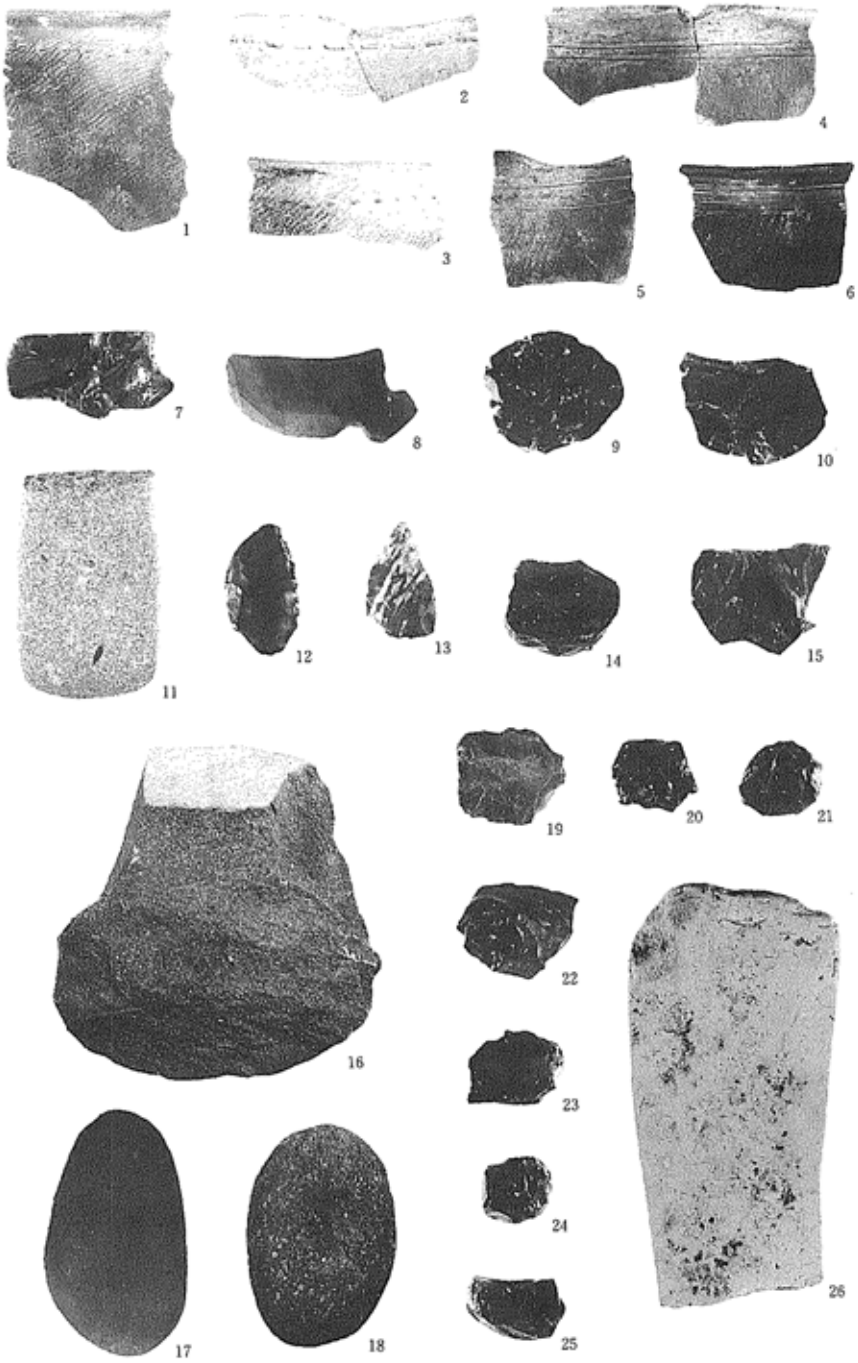
図版29　出土遺物　木製品



図版30　出土遺物　木製品



図版31　出土遺物　第６層出土の弥生土器、第４層出土の土師器



図版32　出土遺物　第６層出土の弥生土器・石器、各層出土の石器